

是時。近江朝聞大皇弟入東國。其群臣悉愕。京内震動。或遁欲入東國。或退將匿山澤。爰大友皇子謂群臣曰。將何計。一臣進曰。遲謀將後。不如急聚驍騎乘跡而逐之。皇子不從。則以韋那公磐楯。書直藥。忍坂直大摩侶。遣于東國。以穗積臣百足。及弟百枝物部首日向。遣于倭京。且遣佐伯連男於筑紫。遣樟使主磐手於吉備國。並悉令興兵。仍謂男與磐手曰。其筑紫大宰栗隈王。與吉備國守當摩公廣島二人。元有隸大皇弟。疑有反敷。若不服色。即殺之。於是磐手到備國。授符之曰。給廣島令解刀。磐手乃拔刀以殺也。男至筑紫。時栗隈王承符對曰。筑紫國者元成邊賊之難也。其峻城深隄臨海守者。豈爲内賊耶。今畏命而發軍。則國空矣。若不意之外。有倉卒之事。頓社稷傾之。然後雖百殺臣。何益焉。豈敢背德耶。輒不動兵者。其是緣也。時栗隈王之二子三野王。武家王。佩劍立于側而無退。於是男按劍欲進。還恐見亡。故不能成事而空還之。東方驛使磐楯等將及不破。磐楯獨疑山中有兵。以後之緩之行。時伏兵自山出。遮藥等之後。磐楯見之知藥等見捕。則返逃走僅得脫。

とあるに依りて吉備の國が夙に倭京・東國・筑紫と共に近江京に對して一大敵國の觀ありしこと。特に吉備郡が吉備の中心地たることを知るなり。

### 第十八章 墓制の變遷と下道氏の墳墓

元祿十二年十一月小田郡三谷村大字東三成字谷川内の小丘より銅製の骨藏器を發掘せり。今、同村大字東三成・國勝寺の所藏に係り、大正六年四月國寶に指定せらる。器は身と蓋の二部より成る。全高五寸七分、直徑身部六寸八分七厘五毛、蓋部七寸八分、總量目壹貫五十匁、容量壹升九合、蓋の表面外圈内に。

以下和銅元年歲次戊申十一月廿七日乙酉上成。

また其の内圈を周りて

銘、下道國勝弟國依朝臣右二人母夫人之骨藏器故知後人不可移破

すべて四十七字を刻せり。今尙ほ其遺骨を存す。遺骨の主の子、國勝・國依兄弟の中、國勝は有名なる吉備眞備の父なり。故に此の器は眞備祖母夫人の骨藏器として著名なり。而して谷川内の小丘が下道氏の墳墓なることも明かなり。應神天皇の朝、稻速別が吉備國川島縣に封ぜられて下道臣の祖となりてより子孫其の地に蕃衍し次で天武の朝、下道朝臣の姓を賜はり眞備亦下道朝臣と稱せしが天平十三年十一月特に吉備朝臣の姓を賜はりたり。

抑も火葬は文武天皇四年三月僧道照を以て嚆矢とし道照の歿後九年目の和銅元年には吉備に於て火葬實行せられ其遺骨の取扱なきも此骨藏器に依て闡明せられたり。特に下道氏が逸早く此の葬法を採用せるのみならず其の銘文と云ひ文字と云ひ實に見事なるものにして吉備氏の家風の尋常ならざること。やがて眞備の出づる偶然ならざるを知るべく。同時に岡山縣の誇りとするに足るものなり。

尙ほ火葬の行はれたる年代等に就ては前章古墳の初に於て之を詳説したれば今此に贅せず。

左に梅原氏の實地調査に基ける「下道氏の墳墓」の全文を録す。



備中國小田郡に於ける下道氏の墳墓

(梅原末治)

(一) 緒言

備中國小田郡東三成村の地より元祿十二年に發見したる、和銅元年所造の下道國勝等母夫人の骨藏器は、現に同地國勝寺に藏して、其の遺蹟今猶示指すべきものあり。大正四年一月上旬余は本學(京大文科)の内藤教授・富岡講師の厚意に依りて、實地に臨み是が調査をなす機會を得て、更に多く世に知られざる遺物を見、奈其朝の墓制を徵すべき興味深き研究を遂ぐるを得たり。されば、茲に此の一編を草して骨藏器其他に關する金石學上の調査を述ぶるに共に主として此の行に於て得たる墳墓の構造を記して「上古に於ける墓誌を藏せる墳墓の研究」の一と名さんとす。

(二) 骨藏器に關する研究の沿革

地勢を論じ、墳墓の構造、骨藏器の形狀を記するに先ち、余が知れる從來これに關して試みられたる先人の研究の概要を紹介して、敬意を表し讀者の參考に供ふべし。

抑此の骨藏器の發掘せられしは、徳川の盛時元祿年間事に屬し、既に當時世に傳はれるが如く伊藤東涯の「輪軒小録」に備中古墓之事なる條ありて、

備中國某郡に惠良村と云處あり、二里程東に八田村とてあり、其所に吉備大臣の廟あり、二十年ばかり前に八田村より一里西に東三成村と云所あり、其村の百姓古き塚を掘り鐵器を出しぬ、其銘に下道氏國勝國頼夫人の骨和銅元年とあり、其器は所の地藏院に安置せり、領主、伊藤伊豆國勝の社建立の心にて、地藏院を改め國勝寺と號せらる、骨器の銘二十餘も有由、中國筋より書付來る、國勝と云は吉備大臣の御親父也。

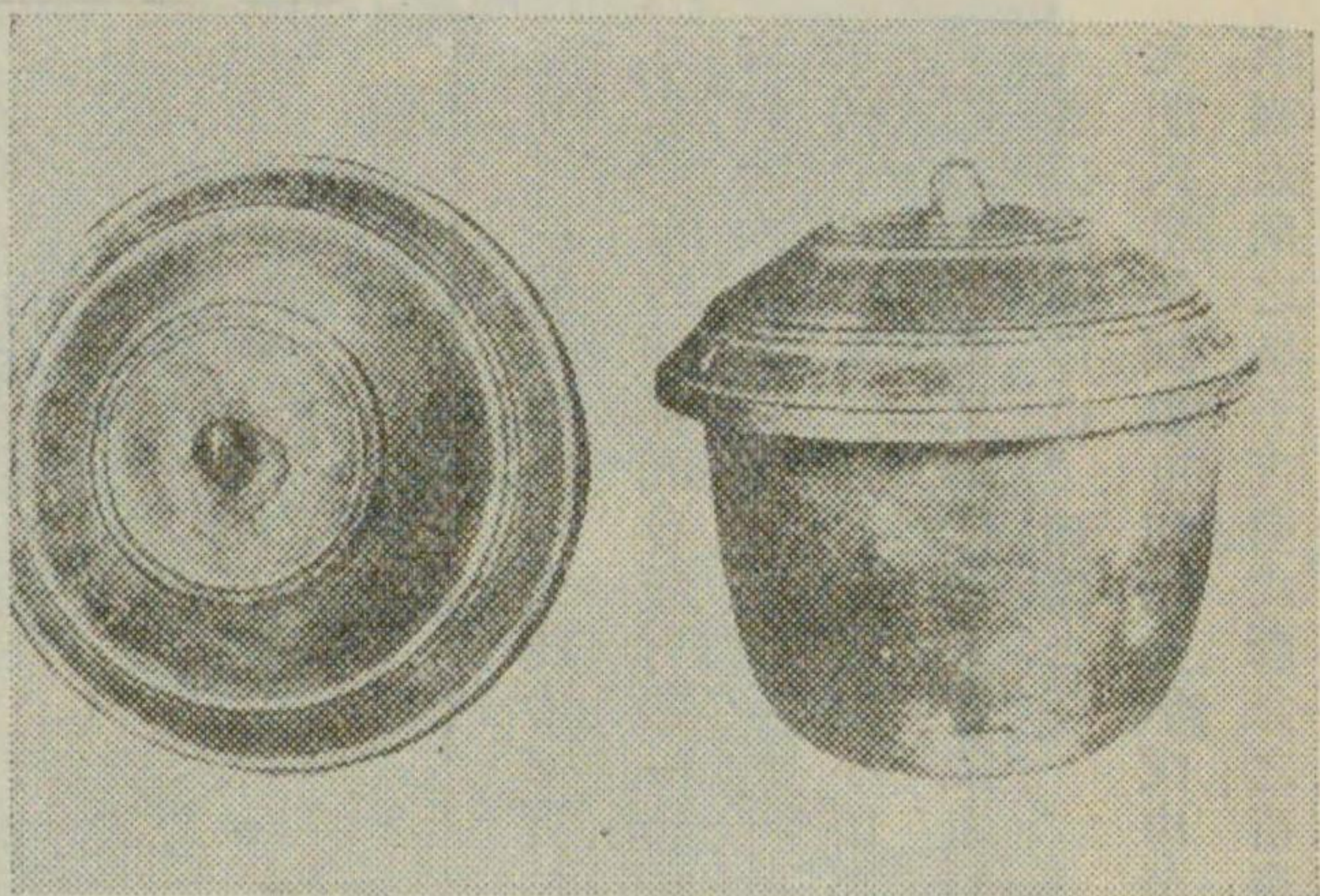
上記するに依りて知らる。たゞ其の地が中國に僻在し、加ふるに享保十二年領主、その遺骨を元光助靈神として同地國勝寺内に社殿を營みて嚴かに祀り殆んど觀覽を許さざりしを以て、化政時代考證學の大に興り金石學の盛なりし際にも都人に忘れられて、狩谷掖齋の「古京遺文」にも漏れ、「西山雜錄」に其の銘を詳記せる以外には、僅に中山柳東の「墳墓考」に  
備中下道郡なる下道國勝・國依二人の母の墓……下道郡の墓は、元祿十年、野人墳をあげきて、骨をいれたる銅器を得たり、其銘に

以和銅元年歲戊申十一月二十五日己酉銘下道國勝。弟國依朝臣、右二人母夫人骨藏器故知後人不可移破とあり。

と見え古川古松軒の「吉備のした道」に

按に小田郡東三成村にて、吉備國勝公母君の墳を發きたる御骨藏の器に銘ありと傳ふるのみに過ぎざりき。

蓋し此の遺物が廣く世に知らるゝに至れるは、明治三十三年故文學博士重野安禪先生が備中國笹田村なる吉備公保廟會の囑に依りて、同地に臨み吉備公の墓と傳ふるものを實査し、序を以て國勝寺に詣りて骨藏器を觀て、貴重なる靈寶なるを其著「右大臣吉備公傳纂釋」に詳記せられしに始まる茲に於てその土地の人また博士の懇懇に従ひ此の遺蹟の表彰を計畫し吉備保光會なるものを組織して、同年九月墓域の再調査をなす所あり。故文學博士原秀四郎氏當時東京帝國大學の囑託を受けて是に参加し更に多くの興味ある遺物を獲て、ます、此のこゝ世に傳へられ、漸次學者の實地を訪ふもの多きを加へ、藏器が我が國金石學上の主要なる位置を占むるものなると共に、其の遺蹟が考古學上重要なものなるを認めらるゝこととなり。而も不幸にして、原博士は僅に「吉備公遺蹟繪葉書帖」の説明書に其の調査の一端を示されたるのみにして、遺蹟の存せる東三成(古くは東實成と作る)村は今小田郡三谷村の大字にして郡の東端に位し、東は直ちに下道郡に接す。此の邊一帶延々として起伏せる山脈の中を通せる中國街道に沿ひ小田川の流域稍開けて西南に平地を見るべき河北の山麓にあり。東一里にして吉備寺及び吉備公の廟と稱するものと存せる笹田に通じ、西方は矢掛に接し、交通上の好位置を占む。遺物を發掘したるは同村の字谷川内に



三谷村國勝寺

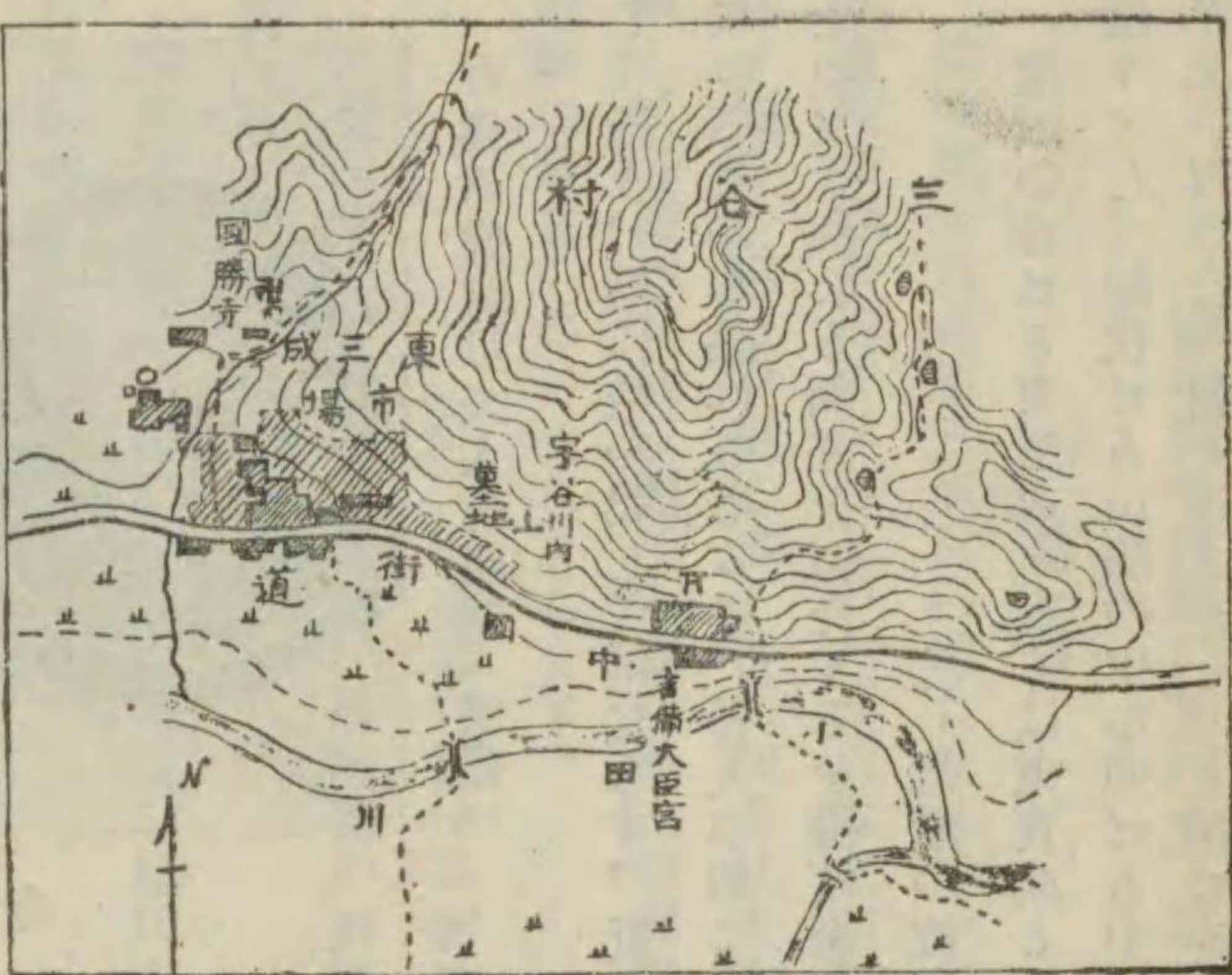
吉備眞備祖母夫人骨藏器(國寶)

して逝き、爲に是を記して精ならず、近く出でたる山田孝雄・香取秀眞兩氏の「續古京遺文」に載する所、藏器の銘文に誤あり、遺蹟所在の郡名等を誤れるあるは、吾人の切に遺憾とするところなり。今此の小篇幸にその一般を傳へ從來の誤を訂し遺蹟の状態を記して故博士のなされたる調査を紹介するを得ば余の幸福之に過ぐるなし。

(三) 遺蹟の位置と地勢

遺蹟の存せる東三成(古くは東實成と作る)村は今小田郡三谷村の大字にして郡の東端に位し、東は直ちに下道郡に接す。此の邊一帶延々として起伏せる山脈の中を通せる中國街道に沿ひ小田川の流域稍開けて西南に平地を見るべき河北の山麓にあり。東一里にして吉備寺及び吉備公の廟と稱するものと存せる笹田に通じ、西方は矢掛に接し、交通上の好位置を占む。遺物を發掘したるは同村の字谷川内に





して村落の東端にあり。北方に高く聳ゆる鷲峯山より南に延びたる脈の尾の上に當れり。その地勢後方遠く高山を負ひ、東西には同様の緩なる丘陵平行す。實地に臨みて眺望すれば前面遙照山に對し小田川其の間を流れ、西南眼界開けて横谷・山田の諸村を俯下し實に重野博士の「土地高燥にして山水の景あり」と云はれし言に合し、山城國高野に於ける小野毛人の墓の位置と似て、吾人はこゝにも朝日照り夕日輝く墳墓營造の好適地なるを繰返すもの、附近に占據せる下道氏が此の地に墓を營める故なきに非ざる也(挿繪其一参照)

(四) 骨藏器發掘の顛末と墳墓の構造

上記の地より團勝團依母夫人の骨藏器の發掘したる顛末を記せしものとしては、先づ領主板倉氏が享保十二年社殿を設けて遺骨を安置して翌十三年九月二十四日京都吉田家より元光助靈神(明治維新後神佛分離の際改稱して今光照菩薩と云ふ)なる尊號を授けられし事のありし際、本多光風に命じて撰せしめし「吉備公太夫人古冢記」を擧ぐべし。板倉家は此の骨藏器の發掘されしと聞くや、貴重なる遺物なるを知り、時の領主越中守重喬その外椽を作らんとして果さず、嗣主讚岐守昌信父の意を繼ぎ更にかく社殿を團勝寺内に設けしなり。(前掲東涯の文此の事實を記せる條誤れり。これを以て訂すべし)骨藏器の今日に至るまで完存せしは此の昌信に負ふ所頗る大なる也。今吉備保光會發行之「吉備公遺蹟調査書」載する所に依り繁を厭はず、其の全文を掲げんに

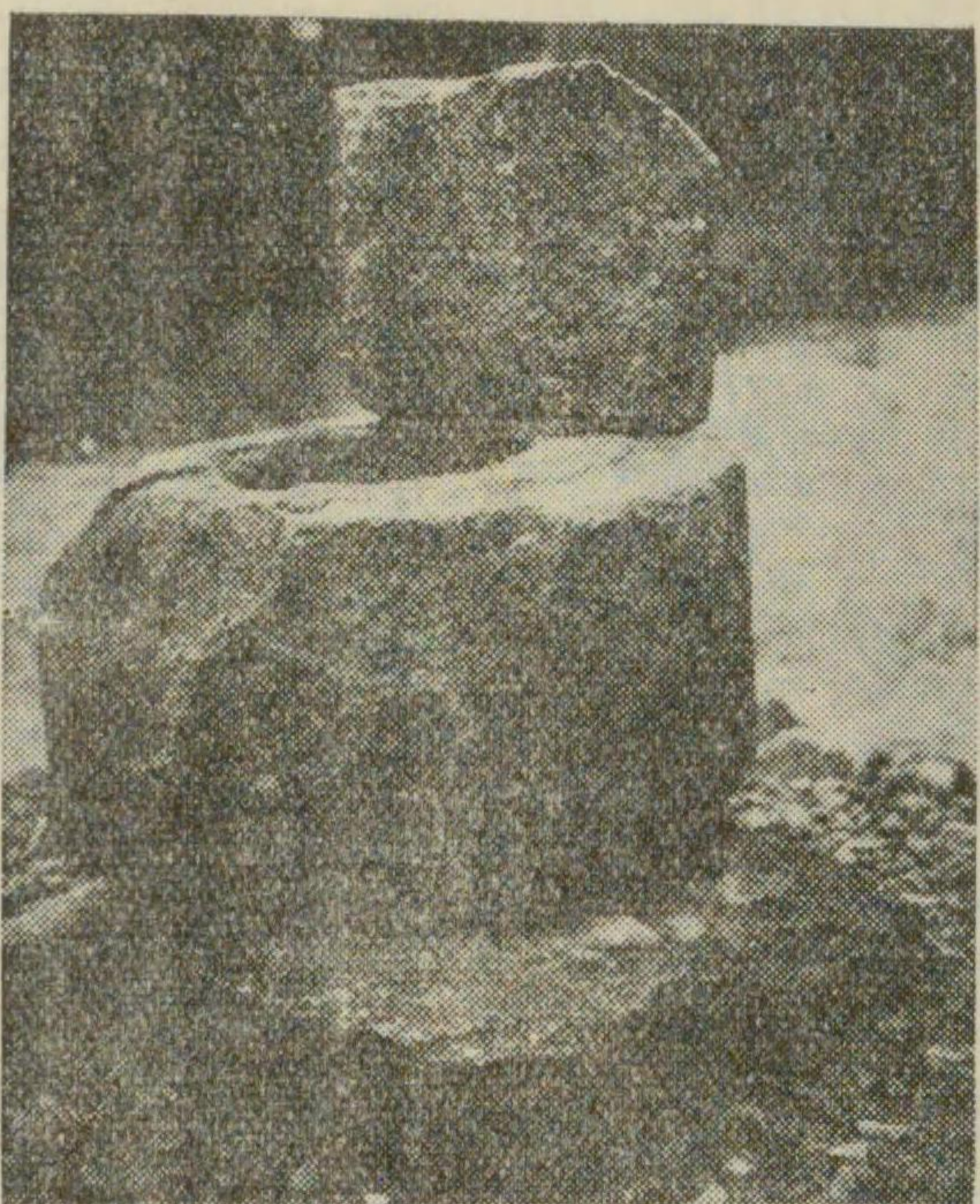
吉備公太夫人古冢記

元祿十二年十一月六日備中小田郡東實成村民欲犁山徑以闢田圃入地數尺鏗鏘有韻堀之得一銅器中盛枯骨外無木椁復無碑石直刻其器曰、下道團勝團依兄弟母夫人骨藏器時和銅元年戊申也、今竊稽之下道者蓋吉備公之舊姓也、團勝者公之父名也、團依者公之叔父名也、母夫人者公之祖母也、和銅者

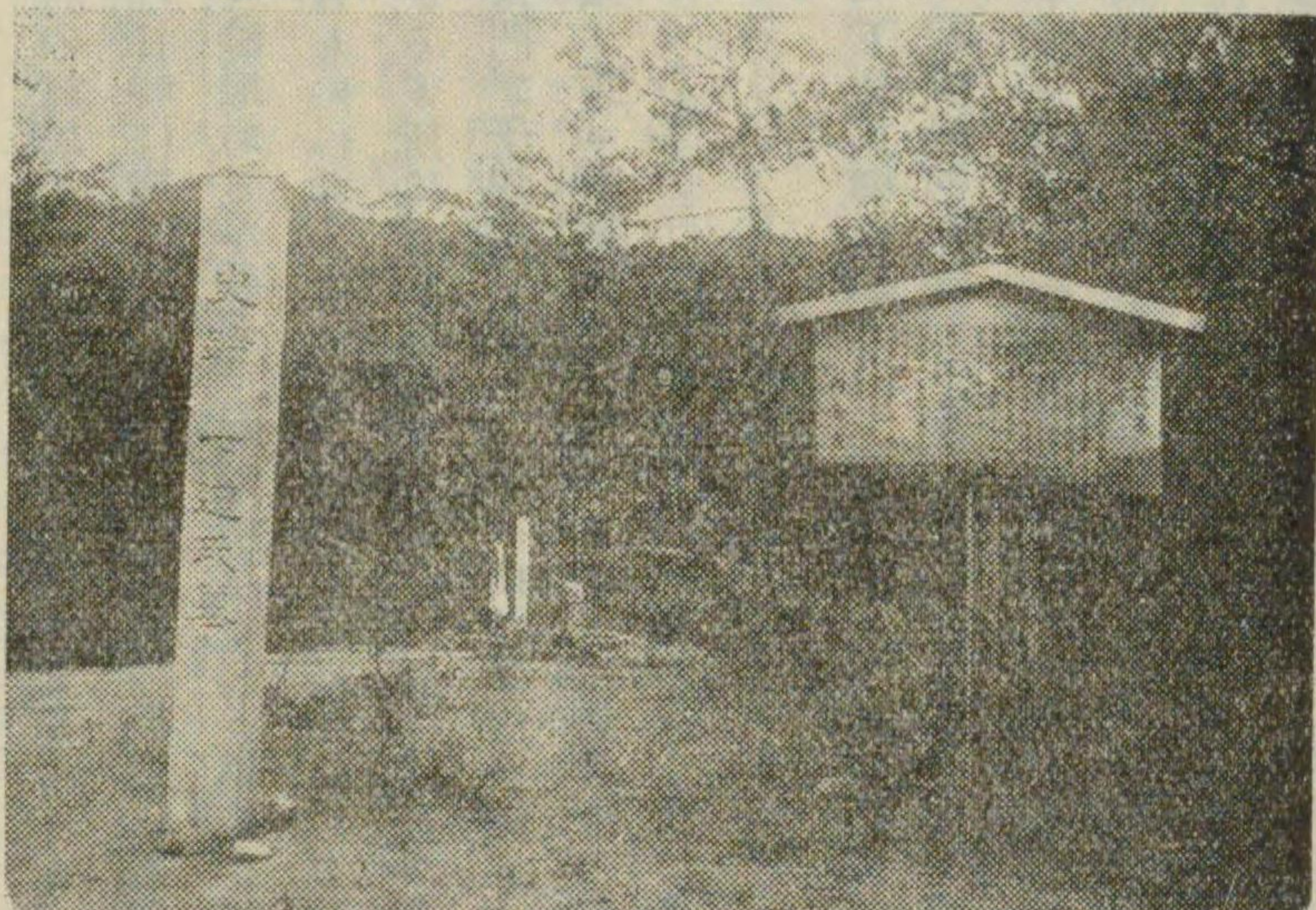
元明天皇年號也自和銅元年戊申至元祿十二年己卯其間相距凡九百八十二年也恭惟夫吉備公者

孝靈天皇之皇子吉備武彥命之苗裔也、武彥命則吉備津宮所祭之神是也、而山城御靈堂所祭之神八所、吉備公具其一座焉、公之始稱號下

(上圖) 下道氏墓 石盒



(下圖) 下道氏墓 (小田郡三谷村東三成)



道朝臣眞備

元正天皇靈龜二年八月從遣唐使多治比真人縣守等留學唐研究經史該涉衆藝

聖武天皇天平五年從遣唐使多治比真人廣成等歸朝當唐玄宗開元年中在唐凡十八年矣同七年獻大唐禮樂文章器物文武書籍調度若干種同十八年更姓賜、吉備朝臣其後屢轉進

稱德天皇天平勝寶四年以從三位圖書頭爲遣唐副使同六年與遣唐副使大伴宿禰古麻呂相共歸朝當唐玄宗天寶年中爾來累昇任右大臣是以天下古今皆悉稱之號、吉備大臣也斯邁、公之英望駿聲載于中華扶桑之國史粗如此而達之於郡廳正方此辰庭瀨領主板倉

越中守源重喬朝臣聞之慕崇吉備公之學德振乎本朝。勳功輝乎異域、且亦追悼其所掘出之銅器即實爲公之祖母夫人之遺骸、嘗欲使爲造之椁以下宅兆措之而猶未遂成焉、維享保十二年六月六日、嗣主、板倉讚岐守源昌信朝臣嚴命于家宰佐野十郎左衛門朝啓宮田政右衛門將敏使以改窆之就復使愚臣某書斯記詳善繼先君欲爲之志善述先君殷勤之事即是古賢君達孝之大道也、豈可不以舉此而唱之哉因茲敬筆其本以貽之於後世云爾

享保十二年丁未八月穀旦本多光風撰



跋曰

右玉軸裝潢之文壹卷奉庭瀨當主 板倉讚岐守源昌信朝臣之嘉命 整齋端肅以寄附焉

家長 佐野十郎左衛門朝啓

家長 宮田 政右衛門 將敏

享保十三祀戊申二月仲旬 宿潔齋漱繕寫成就畢矣

書紀主事本多助之進拜題

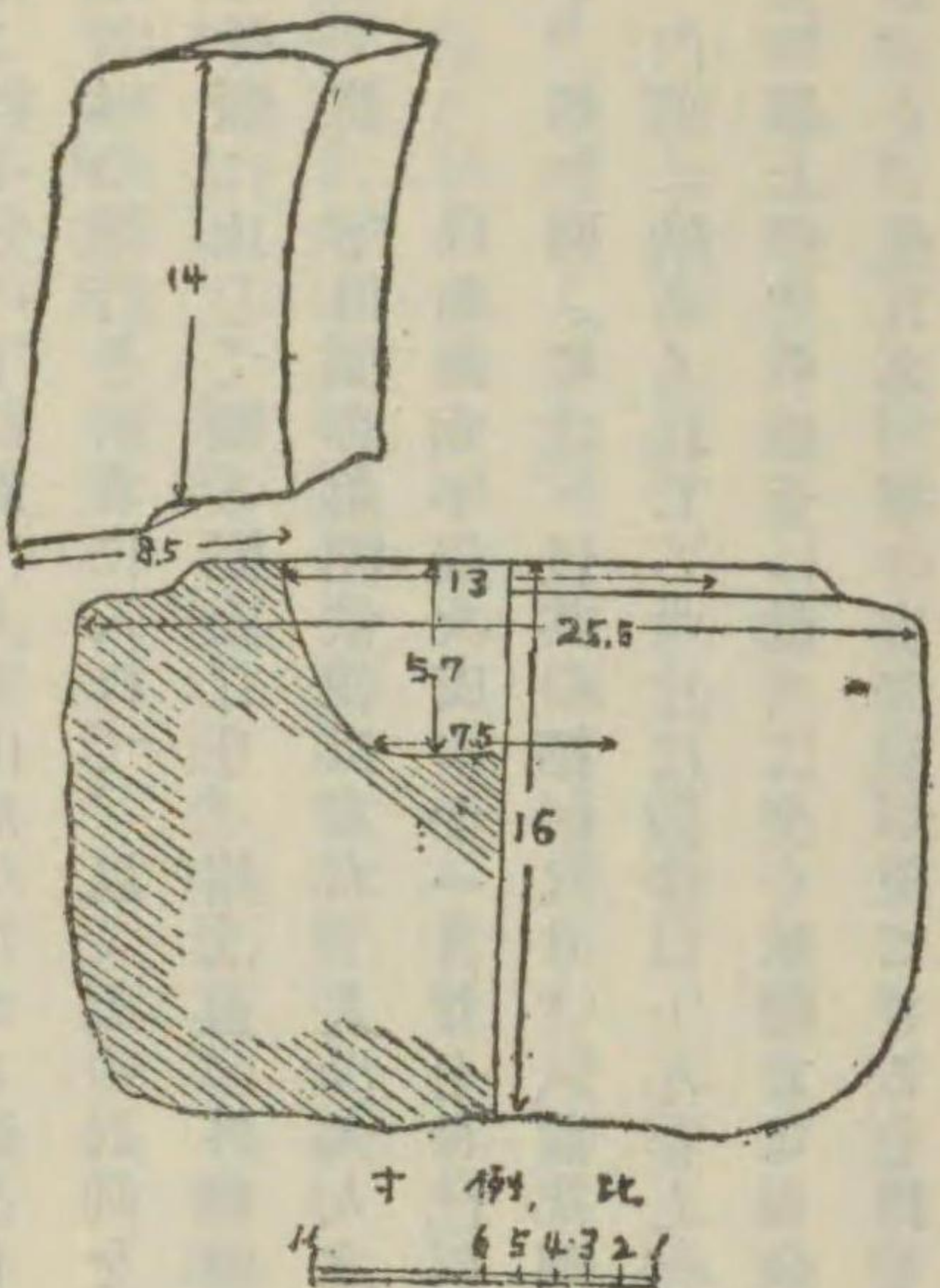
と、これに據れば器は元祿十二年十一月六日東實成村の村民が山徑を犁して田圃をなさんとし、地下數尺にして掘り得たるものに係り、木椀なく又碑石なかりしを記して詳なり。その發掘の日時は據るべきが如きも内部の構造に關する記載は器が完存して何等の欠損なきより考へ直ちに土中にありとする此の記事は疑を容るゝ餘地あるを覺え、當時明なるべき銘文をすら變ぜるよりして稍文飾の爲に事實を枉げたるに非ざるかと思はる。果して未だ實を傳へたるものに非ずせば内部の構造は如何なる状態なりしか。吾人は是を徵すべき二條の古傳あるを重野博士の「右大臣吉備公傳纂釋」に引かるゝ所により知り。共に國勝寺に存する書付に屬し、一は

元祿十二年十一月十一日、東三成村字折坂、彌左衛門ガ子連夜ノ夢ニヨリ、山道ノ中ヲ掘レバ土瓶アリ、下ニ又一ツ有り、其中ニ石灰ニテ詰メ赤銅金二升五合程入瓶ニ骨八合程アリ、瓶ノ蓋ニ取手アリ、筋二ツツ、二通アリ、其上筋ニ和銅元年戊申十一月二十七日トアリ、下ノ筋ニ銘下道國勝云アリト云フ

とあり。他は

備中東三成村ノ内ニ下坂トテ山道アリ、此所往古ハ下道氏御墳墓ノ地ト見ヘタリ、此所霖雨ニクツレテ人ノ通フ道トナリタリ、其道ニ石一ツカメノフタナリ アツテ、上ヲフメバ下ニヒキアリ、里人アヤシクヲモヒ、石ヲカヘシケレバ、其下ニ一字不知道テ 蓋ヲ破リ見ルニ内ニ銅ノ器アリ、中ニ彼ノ尊骨アリ、享保年中ニ光助靈神ト尊號ヲ勅許アツテ、御骨器ハ椀ヲ作りテ奉レ納社建立可ニ奉祭ニ由先御領主様ヨリ被ニ仰出ニ 地藏院ト申ス寺ヲ國勝寺ト自仁和尚寺ニ御改名遊バサレシナリ、本文里人ノ書シマ (全文重野博士に依る)

と記す。前條文中土瓶とある形明ならざるが、思ふに甕の如きものなること略想像するを得べく、是に依れば器は土瓶の内に石灰に詰め

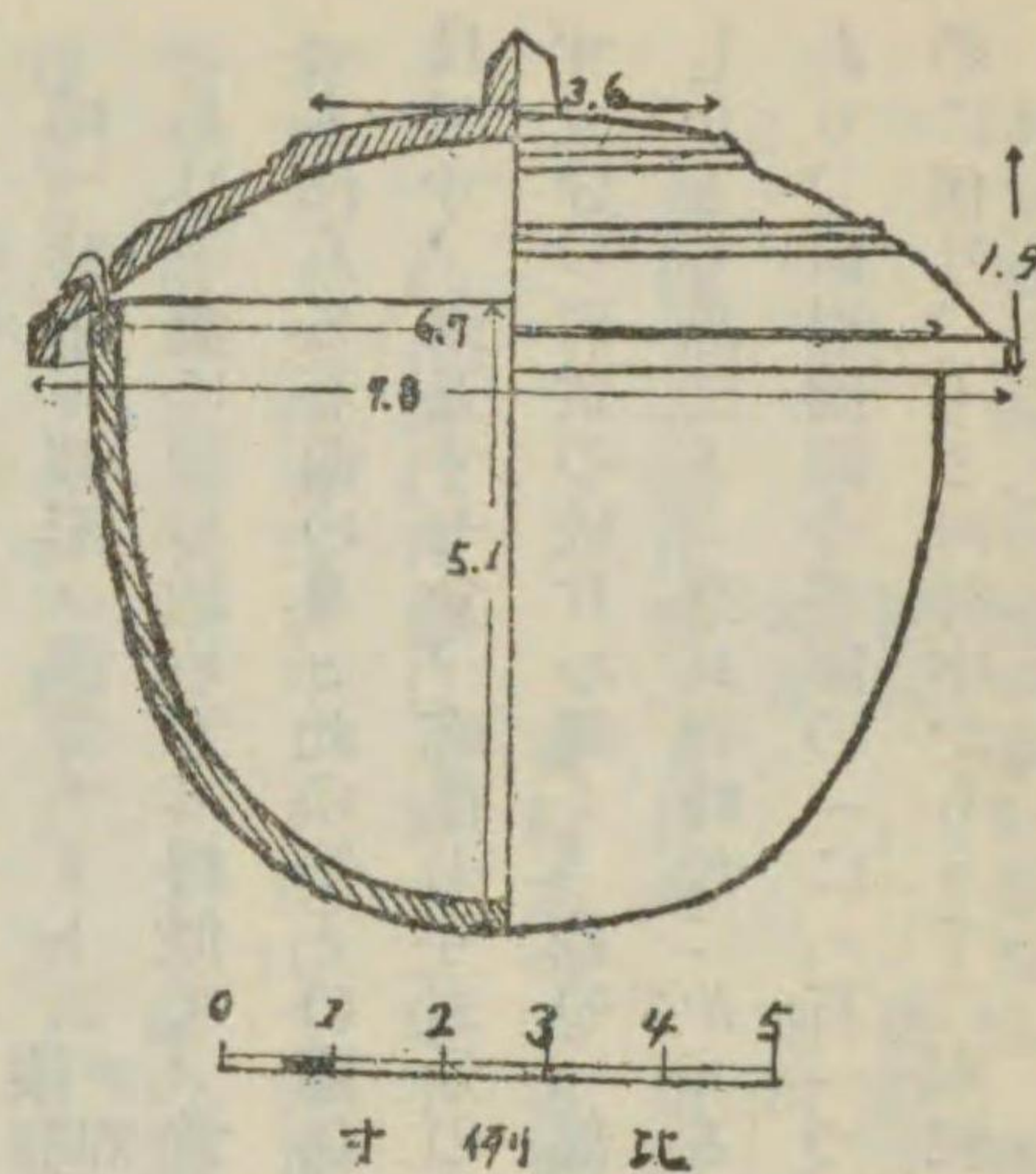


て從來吾人の明に年代の知り得たるものに此の器に先つ一年即慶雲四年に營まれ威奈真人大村の墓あり、その詳細に至りては稿を改めて論ずべきが浪華木孔恭驗の書せる「威奈大村墓誌銅器來由私記」に

近年可考和州葛下郡穴蟲袖馬場村ノ農夫地ヲ掘リテ大甕ヲ得タリ、甕破碎トシテ中ニ一銅器アリ、形大ナル椀ノ如ク蓋身ヲ兩分ス(中略)此中ニ圓形ノ漆器アリト云テ知ラズ

とあり。甕に器を納めし事相似て、當時かゝる墓制の行はれたるを知るなり。たゞ茲に一顧すべき要あるは、今現に谷川内の墓所に安置せられある石函の身と此の器との關係なり。該函は堅緻なる凝灰岩製にて、圓形をなし徑二尺五寸五分、高一尺六寸あり。中央に口徑一尺三寸、深五寸七分、底徑七寸五分の穴を穿ち、口邊に石蓋を施すべき凸縁を設けたり。(挿繪其二參照)その側の高さ一尺四寸、幅八寸五分の同質の破片を置く。蓋の一部らし、その形状大さを通觀するに全く後述の骨藏器を納むるに適し、該器がこの内より發見せられしかとも思はる。奈良朝時代にかゝる石函を使用して骨蓋を葬りしは和銅三年の伊福吉部臣徳足の墓、天平二十一年の行基の墓に其の例あり、前引國勝寺書附の一に「石一つあり」云々見え、この推測の實らしさを増さしむるも、而も此の石函は近時こゝに持ち來りしものに係り、もと同村字からうすに奉祀せる荒神社の境内にありて吉備公の確と稱せるもの、石蓋と思はるゝは同所を距る西數町十方寺と稱する古刹の石垣の間より近時出せるものなりとの事なれば、此の骨藏器とは關係なきものと見るべく、もし上代の遺物とせば他に類似





の遺物ありしものか、此の事猶後段述ぶる所あるべし。  
 上引の書類に據り略骨藏器を納めし内部の構造を知り得たるが、その封土は如何なりしか。是れまた墓制研究上必要なる問題なり。然れ共不幸前記發掘の顛末を記せる書類は傳へて詳ならずたゞ其の一に「山道の中を掘れば云々」とあり、他には「此所霜雨にくづれて人の通ふ道となりたり、其道に石一つあつて云々」と記し、故原博士が明治三十三年の墓地調査に於て甕等の遺物が現在地表より三尺餘下にありしと云ふより推せば、甕の位置は地下にあり、その埋葬に際して封土を築きこれに葬る制に依らず、地表下を穿つ壙をなし、是に甕を納めたるもの、而して表面には之を表識する小封土を設け、また大寶令の規定に従ひ碑を立てしものならんか。

(五) 骨藏器の構造と遺骨

既に墓の構造の概要を明になすを得て興味を覺えたるが、さらに器の構造を内に納められし骨片に起逆を進めん。

器は銅製の鑄物にして蓋身の二部より成り、前掲圖版に示すが如き形状なり、身は口徑六寸九分、高五寸一分、厚二分あり、蓋に是を被さる如く作られ徑七寸八分、厚一分七厘、外側面の高さ一寸九分、その間に二重圈を置き上部略平に此の部の徑三寸六分、中央に高七分、徑七分の下部圓に上部山形をなせる鈕を有す。而して蓋の下端に近き兩側に各一個の小孔を設け身の縁にも是に對應する小孔ありてL字形の銅釘を兩者に入れて、以て蓋の異動を防ぐ装置をなせるを見る、今その釘の一を存せり、製作略同じ形式を採れる威奈真人大村の骨壺に比して頗る堅固なり。銘は蓋の外側面の中間の圈の兩側に刻され、文は四十七字より成る。即ち

銘 下道國勝弟國依朝臣右二人母夫人之骨藏器故知後人明不可移破(上側にあり、一周せり)

以和銅元年歲次戊申十一月廿七日己酉成

と、第四圖(略之)は其の拓影なり。(前掲圖版参照)

内部に納められたる骨片は猶半以上を存し、火葬になれるものなるが、大腿骨の如きまた脛骨の如きは其の原形の一部を其儘保存せり人類學上體質の調査に就ては全く無能力なる余の事として、これが研究をなす能はざりしも、嚴密なる學術上の測定をなさば裨益する所あるべく、他日専門家の實査を切望せざるを得ざるなり。かく遺骨の研究は是をなし得ざりしが、その火葬になれるものなる事はまた墓制

調査上注意するに値する事實なり。本邦古代嘗て火葬の俗あるを聞かず此の風は、佛教の渡來と共に傳へられし如く、文武天皇の四年僧道昭死して火葬の事始めて見ゆ「續日本紀」之を記して

弟子等奉遺教、火葬於栗原、天下火葬從此而始也

とあり、而して人口の増加は、佛教の隆盛と相俟ち、此の風が薄葬令の主意に合ふこととて、直ちに世に廣まりしが如く、賢くも至尊此の俗に依らせらるゝに至る。即ち大寶二年十二月甲寅、持統天皇崩じ給ふや、翌年十二月癸酉飛鳥岡に火葬しまつれる事「續紀」に載す國勝國依母夫人の墓は其後數年の營造に係れるもの、其の骨藏器の如きまた佛教に深き關係を有するものなり。既に都を去る遠き地に行はれしを以て、當時一般に開化を尙ぶ人士が此の俗に據れるを察すべく、これが本邦墳墓制に一大變革を與へたること特に吾人の留意を要する所なり。

遺骨についてなほ一言を要するものあり。そは和銅錢が共に器に納められしと傳へらるることなり。山中笑翁は「考古學雜誌」五ノ五に「本邦最初の泉貨に就て」なる論文を載せ。その末尾に

又元祿十二年十一月備中國小田郡三谷村より、下道國勝弟國依朝臣右二人母夫人之骨藏器、發掘の銅器中に靈骨と和同錢ありしと、此錢今一枚を存せり、其拓本を見るに古和同の一種なり、墓志によれば和同元年十一月に成りしものなり。

と記して、是より

古代火葬には骨器に錢を靈骨と共に納め置くならはし有しと見ゆ。

と推定せられたり。然れ共余の調査に據るに遺蹟より和同錢を出せるは、明治三十三年の事に屬し數も一枚にして此の銅器内に納めたるものに非ざる事を知れり。この事後段詳述すべきも、序を以て此の事實を附記し其の誤を訂す。

(六) 銘文の研究

器に刻せる四十七字の銘文の解釋に就ては、既に前掲「吉備公太夫人古冢記」に略要を盡し、「續古京遺文」の文また簡單ながら之を記せり。されど、前者は銘文を記し詳ならず、後文また「以」を「昔」に作り「己」を「乙」をなせる誤あり、從つて文中年月日干支各史に合せず云へるは當らず、「三正線覽」に依るに和銅元年十一月朔は己未なり、されば二十七日は乙酉にして己酉に非ず「續日本紀」また十一月己未朔ありて、右に同じ。されば銘文は明に二十七日己酉に作れるも、乙酉を正しとすべく、恐らく不用意に乙を己に誤刻



せるものならん。

下道因勝に就いては、先輩も云へる如く「續紀」卷三十三、寶龜六年冬十月壬戌の條載する所の吉備朝臣眞備傳に依り、眞備の父にして官右衛士少尉なりしを知り得る外何等傳ふる所なく、因依に至りては全く史に漏れたり。此の銘にて、眞備一家の系圖を補ふべきものなり。此の下道氏の系圖郷貫に就ては既に栗田博士の「新撰姓氏錄考證」の吉備朝臣下道朝臣の條に詳しく、重野博士の「右大臣吉備公傳纂釋」また述べられたれば之を繰返す事を避くべし。たゞ下道氏は吉備氏の一族として「和名抄」に備中國下道郡之毛豆美知の地に因れる姓にして、古くより此の地方に蕃延せしことにて、こゝに其の遺蹟を遺せるもの、その地の小田郡に屬せるは稍々解し難きも、直ちに下道郡に接せるよりすれば古く下道郡なりしやも知るべからず、重野博士は古くは兩郡が一なりしと説かれたり。

此の骨藏器の銘を讀み更に興趣を惹くものあり。當時此の地に於て位僅に右衛士少尉の身を以てかゝる壯麗なる銘を刻せる骨藏器を作り母夫人を葬れる因勝其人の文事に長じたるを偲ばしむること是なり。和銅元年は眞備十四歳の時に當る、彼が後年入唐して大に學名を擧げしは此の父の教育に負ふ所大なるを推測せしめ、後にまた母楊貴氏を葬る志を作れると思ひ合せ、一種銘文以外の或物を吾人に與ふるを覺ゆ、蓋し下道氏の一族は早くより時流に先じたる家なりしなり。

(七) 發見の墓碑と其の年代

以上詳記せる骨藏器以外に此の地より猶一の注意すべき金石學上の遺物を發見せり。重野博士が「右大臣吉備公傳纂釋」に於て近年此地ヨリ陶器ノ斷片墓志ヲ掘出セリ、「左衛士府(下闕グ)夫人下リ(下闕グ)」凡テ二行「ソ」ハ道ノ字ト見ユ、然レバ此地ハ下道氏ノ先塋ナルコト益明カナリ

と記されたる墓誌即ち是にして、明治初年、宇谷川内なる因勝等母夫人の墳墓の稍北方の高き部分に於て土人の偶然得たるものなりと云ふ。就て見るに頗る堅緻なる赤褐色の長方形の埴にして、近く河内國南河内郡山田村大字山田に在る俗に山田麻呂の墓と傳ふる石棺側より出土せるものと全然同一手法になる。今下半缺損せるは惜むべし。大き瀾三寸六分、厚一寸、長さ現存せる部分五寸二分あり。その表面の中央に二行に銘文を刻し、第一行四字、第二行三字半を存す。文に曰く。

左衛士府……夫人下……(以下闕)

第五圖(略之)は其の撮影なり。第二行の「下」の次の字半欠損せるも字劃より考ふれば正に「道」なるべく、下道氏一族の墓に納めら

れし墓誌なる事明にして、重野博士の高説の如く骨藏器と共に此の地が下道氏一族の塋域なるを證するものなり。

此誌半欠損して其の造れる年代を知らず。記載の様式大さより推測せば、單に官位を記し、何某之墓と誌せるに過ぎざるものかとも思はる。従つてその何人の志にして何代の遺物なるやを正確に定むる能はざるは遺憾とする所なるが、文中左衛士府とあれば此の志は其の官制が左衛門府と改まれる弘仁二年十一月以前のものたること勿論にして、其の書體より推し、奈良朝時代のものなること考へられ、下道因勝が右衛士少尉、吉備眞備が中衛大將たり、一族多く衛府に關係するよりせば、蓋しその近親の夫人の墓誌たるべきか。

醫學博士、井上通泰氏は、明治三十四年三月第三高等學校岡山醫學部にて此の志に就て講演して「吉備公遺蹟調査書」の記事に據る

明治ノ初、又同所ヨリ瓦ヲ以テ造レル墓誌ノ破片ヲ發見ス、瓦面二行ノ文字アリ、云ハク、左衛士府(以下字欠ケタリ)夫人下(以下欠ケタリ)下ノ字ノ下ニ二畫アリ恐ラクハ道ノ字ノ首ナルベシ、本年本月二日余此古瓦ヲ以テ偶然ソノ右縁ヨリ正月ノ二字ヲ發見ス、正月ノ上ニ四年、正月ノ下ニ廿トアルガ如シ。

と云はれたるも、而も實物に就て見るに、こは瓦面にある偶然の疵が字に近き形をなせるより後人が更に補加せるものにて、字劃小に失し、墓誌に於ける銘文記載の形式よりするも、到底當初よりかゝる所に年月を誌することあるべからざるなり。

埴製の墓誌の從來出土せるもの、天平十一年の楊貴氏の誌、寶龜七年の高屋枚人、延暦三年の紀吉繼の三誌あるが、楊貴氏の誌今傳はらざれば、本誌の如き破片なるも、また重要な遺物の一たるを失はざるなり。誌は今國勝寺に藏せり。

(八) 明治三十三年の發掘と其の遺物

明治三十三年の發掘は既に述べたるが如く、吉備保光會に於て遺蹟の表彰保存の爲に企圖せられたるものに係りて、故原博士親しく之に参加し、作業は九月十九日より二十四日に亘れり云ひ、種々の遺物の出土あり、是等は今猶國勝寺に保存せられ學者の就て調査をなし得べく、研究上頗る有益なる試なりしなり。たゞ當時遺物が如何なる状態に内部に存したりしやの詳細は、最も學術的に調査考究せし博士逝きて永久に明にし得ざるを切に憾むものなれど、幸に其の一端は氏の言として「吉備公遺蹟調査書」に載せられたれば、之に據り大要を窺ふを得べし。其の文に、

蓋シ此地ハ素ト三段ニナリテ、今ハ殆ンド山骨ヲ露出スルノミ、山骨ニ今尙ホ朱塗ノ祭器又ハ周圍數尺、深サ凡ソ三尺ノ穴アリ、其穴



ハ多クハ上段ノ部分ニ於テ規則正シク二行ニ整列セルヲ發見セリ、穴底ト覺シキ邊ニ於テマ、素焼ノ甄ノ破片アリ、中段及下段ト覺シキ部分ニハ種々異様ノ祭器和銅錢又ハ齒牙遺骨及納骨器等アリ、就中「備眞備公口骨」ノ文字アル土器ノ破片ヲ發見スル事ヲ得タルコト斯舉ノ賜ナリシナリ、眞備公ノ下ノ一字ハ殆ンド磨滅シテ讀ミ難キモ恐ラクハ納骨ナラン（下略）

ニ行文稍了解に苦む點あるも、その「此地は素と三段になりて今は殆んど山骨を露出するのみ」とあるは、余が實地に就て調査する所に依るに、丘陵が階段をなして緩く降下せるを指せるものゝ如く、右に依れば山骨の上部に朱塗の祭器あり、各段山骨に周圍數尺深さ三尺の穴を穿ち、上段には規則正しく二行にありて、穴底より素焼の甄片出で、下方と覺しき部分より土器、祭器が古錢、骨片と混じり發見せしと解せられ、ほど其狀況をば推測し得らる。而も穴の相互の位置關係の如きは、右記事にては明ならず。果して右の如くなりしとせば其山骨に穿てる穴の一に骨藏器が甄に納め埋葬せしなるべく、壘を出せるは第四に述べし墳墓の構造の舊記と相一致するものなり。而して穴の數個ありし事と遺物とより考ふればこゝに營まれし墳墓の一ならざるを容易に知ることを得べし。

當時發見の遺物は國勝寺に傳ふる所左の如し。

和銅錢 一枚 祝部土器其他の納骨器

齒牙靈骨 「備眞備公口骨」の文字ある甄、破片素焼の甄に朱彩を施したる祭器。

是等に關し、原博士は小野縫太郎外二氏宛の書翰に其の意見の一部を示されたれば、先づ之を紹介し、次に余が實物に就て得たる所を記述せん。博士曰く。

（前略）博士學士諸先生の説を一纏にして申上候はんは發掘致候土器は何れも今日まで類品なき極めて珍重なるものなるにしかも例の朱彩を施せる壘付の大形土器及波形の模様ある土器等は形狀模様及其位置等に於て今まで知られたる勾玉時代の土器と連絡の相付き候ものにてしかも勾玉時代の土器は類品多數なるも時代を定むる標準となるべきものは少くも無之候に今回發見のものは時代明知せられ居り候ゆへ之より遡り考へ候へば（紋様等の類似の度より考ふるに）從來學者の頭を悩ませし勾玉時代の古墳土器の新古を考定し従つて又古墳其物の新古を考定致され候筈にて今回の發掘品は是に對して極めて有力なる證據品と相成るべく候即今回の右各種土器の發見は斯學社會へ極めて大なる影響を及ぼし候ものと相定まり候（下略「吉備公遺蹟調査書」に依る）

余が實査せるは土器類と祭器及び和銅錢となり、一々形狀様式を述べんに、

(一) 土器類。破碎して完成を存せざるが、余の見たるものは合してほど二個の大なる壘をなすを得べき分量なり。何れも白灰色の比較的疎質の齋瓮にて、表面網目に似たる文様あり、裏には一面に渦紋を現し、口部外に開けること我が古墳時代のに甕見る所と同じ、たゞ其の破片に混じて長三寸五分、横二寸の半圓形の把手一あるは何れかの壘の肩に附せるもの、かゝる例は珍らしきことにて、前記國勝寺の骨藏器の發掘を記せる書附に土瓶とあるに思ひあはし、器を納めしものと推測さる。その土器の質及び、色の稍異なりて、現せる渦紋また大形にその形式備前國邑久郡磯上村發見の陶棺（京都文科大學藏）及び山城國西加茂村某寺廢址出土の鴉尾瓦片（高橋健自藏）にあるものと、同一手法になるは蓋し時代の相異を示すものと見るべく、原博士の云はれし如く土器研究上年代考定に注意すべき事なり。壘の大きは、明確になし難きも、破片より考ふれば少くも口徑一尺以上高さ二尺に上るものなりしなるべし。六圖（略之）はその破片の第一節なり。



(二) 祭器。果して祭器なるべきや否は明確になし難きも、暫く原博士の説に従ひ記述を進むべし。是れ又破損して完形を知る能はざるが、現存せる大部は挿繪其四の如く頗る珍奇なる土器なり。器は厚さ二分の素焼にして、赤色を塗り形筒狀をなし、上下兩端は開き、上端の外側格子狀の刻目あり、下部台の側には繩目を施す。而して胴部には齋瓮の高杯に見ゆるが如き、長一寸七分、潤二尺の透二ヶ所宛恐らく三方に存せしらく、表面全體に横線あり。形狀より推せば高坏やうの台なりと思はれ、祭器なりしかとも考へらる。現存の高さ九寸五分、下徑八寸八分あり。土器に赤色を塗る事は所謂中間土器と稱するものに例あるも而も此の器の手法頗る進歩せるを認むべく、製作近く喜田博士が越前國坂井郡東十郷村に於て發見されし土器に類似のものある以外、斯の如きは余の察聞なる未だ他に其の類例あるを知らず。其の出土せる墳墓が奈良朝初期のものなるより當時かゝる土器が存在せしを知り得て、考古學上に一新事實を加へたるものなり。

(三) 「備眞備公口骨」なる銘ある甄片、此の破片は發掘に際し原博士初め保光會員一同の最も注目せし遺物にして、前記願末に就中「備眞備公口骨」文字ある土器の破片を發見することを得たること斯舉の賜なりしなり」と云ひ、特に村民の請に依り左の覺書迄も作られたるなり。



一、土器碎片 壹個 一面ニ 備眞備公納骨ノ文字認メラル、モノ。  
 右は明治三十三年九月十九日より二十四日までの間に備中國小田郡三谷村吉備保光會の會員諸氏が同村大字東三成字谷川内の丘尾吉備公先塋地と認むべき地點を營繕の爲め地均工事を施せる際多數の土器骨片と共に發掘せるものなり、予時に東京帝國大學院の囑託を受け岡山縣下史蹟探窮の途次該村に到り右工事を利用して之れが研窮に従事せるを以て該委員の請求により其顛末をしるすこと右の如し。

明治三十三年九月廿五日

大學院學生文學士 原 秀四郎 印

(「吉備公遺蹟調査書」に依る)

就て見るに甄と稱するは厚約二分の厚手の赤焼土器片にして現存の長さ約三寸四分、下部彎曲し、其の外面の中央に□眞備公□□と淺く刻銘せるものなり。眞の上の字は備と推測し得るも公の下は二字明ならず。原博士は前記の如く納骨なりと云ひ、萩野文學博士は、今此地ヨリ發掘シタル「備眞備公□骨」ノ文字アル土器ヲ按ズルニ是レ蓋シ公ノ齒骨ヲ納メタル甄ノ破片ナルベシ、尤モ余ハ公ノ字ノ下ノ一字ノ痕跡ヲ以テ直チニ齒骨ト讀ムベシト云フニハアラズ、齒ニ關係アル或ル齒扁ノ文字ノ痕跡ナルコトハ余ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

(「吉備公遺蹟調査書」に依る)

とし、藤澤南岳翁は、

千年ノ遺跡顔面ヲ照シテ感古ノ情ニ不堪土器破片ニアル「備眞備公□骨」ノ文字ハ恐ラクハ備眞備公粉骨或ハ粹骨ナラン(同上に據る)と解せられたり。されど實際は井上(通泰)博士の、

昨年九月同所ヨリ又一土器ノ破片ニ眞備公ノ三字明ニ讀マル、モノヲ發見ス、公ノ下ノ二字磨滅シテ讀ムベカラズ、余ハ普通ノ「ルーベ」ヲ用ヒ又ツエーヘンデル、ウエスチーン二氏ノ兩眼「ルーベ」ヲ用ヒテ仔細ニ檢スルコト兩度、第一字ノ旁ハト如此ノノ扁ハ消失シ、ソノ跡ニ三個ノ小瑕アリ、第二字ノ頁ハ 如此ナレドモ横ノ一畫ノミ、モトノマ、ニテ縦ノ三畫ハ後ニ生ゼシ瑕ナリ、サレバ此二字ハ讀ムベカラズ。云云。

(明治三十四年三月第三高等學校岡山醫學部にて講演筆記抜抄上記の書に依る)

此の器に就ては斯くの如く先輩諸先生が力説せられたるが、果して學術上非常の價值あるべきものなるか。余は詳細に之を検し、不幸にも、其の銘文は全く後人の偽刻になれるものなるを信するなり。今其の理由を列舉せん、(一)貴重なる納骨器として其の器が餘りに粗末に過ぎ、(二)銘文の刻し方を檢するに其に線古からず、近く釘等にて刻しその上部を磨せるものなること、(三)土器の全體の形を推せば、器の位置が餘りに底の方に在ること、先づ疑を容るべく、之を更に刻文に就て考ふるに、(四)當時備眞備公と書する筈なく、(五)その文字拙劣到底千古の舊迹と考ふべからざるなり。思ふにこは恐らく無學の人士が不用意に吉備眞備の遺蹟をこみに得んと、古上器片に刻したるものなるべく、明治三十三年に發掘せしこを原博士の覺書の如しとせば、その以前遠からざる時の偽刻ならん。

(四)和銅錢一枚なり。山中笑翁は其の拓本より古和同の一種なりとせられたり。(考古學雜誌五ノ五)高説に従ふべく之に加ふるあるなし。たゞ貨幣を墳墓に埋葬せる事實は、墓制研究上注意を要すべきことなれば、この點に就て少しく考察せん。

抑、古錢を遺骨と共に埋むる俗は支那の葬禮に古くより行はれし飯舍の風習に基けるものと考へらる。飯舍なる禮の如何なりしかに就ては、先に足立喜六氏が本誌二ノ六の「合禭考」に於て「文獻備考」を引用して論ぜられしがその俗を更に根本に遡りて考察せん「檀弓」に、

飯用ニ米貝、弗忍虚也、不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>食道、用<sub>レ</sub>美焉爾。  
 とあり。孔穎達の疏に、

飯用至焉爾。正義曰、死者既無<sub>レ</sub>所知、所以飯用<sub>レ</sub>米貝、不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>虚<sub>レ</sub>其口、既不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>虚<sub>レ</sub>其口、所以不用<sub>レ</sub>飯食之道、以<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>之、必用<sub>レ</sub>米貝者、以<sub>レ</sub>食道養<sub>レ</sub>米貝美、尊<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>敢用<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>故用<sub>レ</sub>米貝(貝)美善焉爾、飯食人所<sub>レ</sub>造作<sub>レ</sub>細碎不<sub>レ</sub>聚、故爲<sub>レ</sub>養也、米貝天性、自然爲<sub>レ</sub>美、凡<sub>レ</sub>舍用<sub>レ</sub>米貝、案喪大記云、君沐<sub>レ</sub>梁、大夫沐<sub>レ</sub>稷、士沐<sub>レ</sub>梁、又以<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>沐<sub>レ</sub>之米<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>飯<sub>レ</sub>之、故士喪禮、祝漸<sub>レ</sub>米于堂<sub>レ</sub>又云祝受<sub>レ</sub>米奠<sub>レ</sub>于貝北<sub>レ</sub>主人左<sub>レ</sub>扱<sub>レ</sub>米、實<sub>レ</sub>于右、是飯用<sub>レ</sub>米也、則是諸侯用<sub>レ</sub>梁、大夫用<sub>レ</sub>稷、士用<sub>レ</sub>梁、士用<sub>レ</sub>梁者天子之士、諸侯之士用<sub>レ</sub>稻、故士喪禮云、稻米一豆實<sub>レ</sub>於篋<sub>レ</sub>是也、以<sub>レ</sub>次差<sub>レ</sub>之天子當<sub>レ</sub>沐<sub>レ</sub>黍與、是天子飯用<sub>レ</sub>黍也、其舍、案周禮曲禮云、大饗共飯<sub>レ</sub>玉舍<sub>レ</sub>玉鄭注云舍玉如<sub>レ</sub>璧形<sub>レ</sub>而小耳、是天子用<sub>レ</sub>璧也、又飯玉碎<sub>レ</sub>玉以<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>米也、故云共<sub>レ</sub>飯玉、雜記云舍者執<sub>レ</sub>璧將<sub>レ</sub>命、是諸侯亦舍<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>璧也、卿大夫無<sub>レ</sub>文、案成十七年、公孫嬰齊夢贈<sub>レ</sub>玫瑰<sub>レ</sub>注云食<sub>レ</sub>珠玉<sub>レ</sub>含象、則卿大夫蓋用<sub>レ</sub>珠也、案士喪禮、貝三實<sub>レ</sub>于筭<sub>レ</sub>、注云貝水物古者以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>貨、江水出焉、筭竹器名是士用<sub>レ</sub>貝三、依<sub>レ</sub>雜記則大夫當<sub>レ</sub>五、諸侯七、天子九、何休注云、公羊天子以<sub>レ</sub>珠諸侯以<sub>レ</sub>玉大夫以<sub>レ</sub>碧士以<sub>レ</sub>貝……



(中略)：此等或是異代禮非周法也。又陳三飯含沐浴之具於堂前西壁下南上。錢三實于小箱。檀弓曰、古者飯用米貝、弗忍虛也、飯用具、今用錢、猶古用具也、古禮諸侯飯七貝、大夫五、士三、大夫以上仍有珠玉、錢多既不足貴、又口所不容、珠玉則更爲盜賊之招、故但用三錢而已。と見ゆ、錢三實于小箱とあるを前者と對比せば、古錢の埋葬は貝の轉化と認むべく、支那最古の貨幣が貝なりしより考ふればその起源古し。隋唐の交通開けて支那の文物典禮の大に輸入されたる際、之を慕へる下道氏の墓域に先づ此の事實を見るは、かゝる禮に倣へるものを見るべく、而も遺骸を火葬に附して埋めたるを以て、飯舎の禮のまゝ行ふべからず、これに添へて納めしなり。殊に僅に一枚なるは多くを納めざる禮の主意と考へ合せ、又此後往々同様の風の墳墓に行はるゝ資料に接するは、興味深く、吾人はこゝにも支那の古禮の我が墓制に及べることを認むるなり。

上來記述せる遺物を通觀するに、前節の骨藏器、墓誌と相俟ちて遺蹟の内容を明にし、其の個々が考古學上の新事實を示し、また研究上の標準となるは興味あること云ふべく。彼の所謂納骨片器の有無の如きは、少しも其の遺蹟の價値を上下するものに非ざるなり。

(九) 吉備眞備朝臣の遺蹟

以上數章に亘り略東三成に於ける下道氏の墳墓をば記せしがなほ是に關聯して附記を要する遺蹟の二あるを思ふ。一は即ち吉備公の館址と傳ふるもの、現狀にして、他は吉備公の墓が此の地に在りとの説なり。此の章是を簡單に述べべし。

公の館址なりと傳ふる處は前記宇谷川内の下道氏墓域の東數町宇谷と稱する地にあり(挿繪其一參照)地は山麓にして國道に沿ひ、後方に堂ヶ丸なる小丘を負ひ、前面川を距て、猿掛山に對せり。反別三町餘の平地をなし俗にだんのうち(壇内)と云ふ。その一部分高さ數尺の台地をなし、井戸あり、中央に小祠建ち石鳥居ありて、扁額に「吉備大臣宮」と見ゆ。殘礎存せりと云へるが、余の調査せるは一月三日夜九時に近く、木間漏る月光と僅に車夫の燈火とによりしことと遂に之を見るを得ざりき。附近に布目瓦多く散在し、文様を徴すべき華瓦疏瓦も混ぜり。第八圖(略之)は今國勝寺に藏する出土の古瓦の撮影にして、實は白灰色を呈し、文様より考ふれば、奈良朝より平安朝に亘れる時代のものと思はる。

これを吉備公の館址とする確證はなきも、地名、遺物に考へ、また附近に一族の墓域あるよりせば、暫く土人の傳ふる所を保存すべく萩野文學博士に依れば、「鳥居扁額の文字は題署法とて徳川氏以前多くの公卿方の間に行はれたる書法なり、故に建設の年代恐くは三百年以前なるべし」と、果して然らば、口碑の傳ふる所も古きが如し。

吉備公の墳墓は重野博士が「公之葬。未詳在何地」と云はれたる如く今何地に在るべきや詳ならず、されど、眞備が己に母楊貴氏を大和に葬りし事より推し、また彼の地位より考へ史に何等歸葬のありしを記せざれば、其の墳墓は大和の某地に營まれたるものと見るべし。備中の下道郡箭田村に其墓と傳ふるものあり。徳川時代の初より祭祀し來り現に吉備保廟會ありて之が修理保存の道を講じつゝあるが、重野博士の高説の如く、後人の設けたる招魂墓の類ならん。然るに近時此の東三成が公の塋域の地なりとし「吉備保光會」に於て發行せる下道因勝等母夫人骨藏器等に關する諸家の説を集めたる書に「吉備公遺蹟調査書」と題し、殊に驚くべきは、宇谷川内なる下道氏の墓に荒神社より石函を移し、大なる碑を建て、吉備眞備公墳墓と大書しありしと記憶す。是れ蓋し、前掲土器片に「備眞備公□□」とあると、この吉備公の石棺と稱するもの、存せるに基けることなるべきも、その前者が學術的價値なきは既に述べたり。石棺と稱するものまた決して吉備公のものなるを示さず。棺の形狀は既に述べたる如く(挿繪其二參照)「吉備公調査書」に依るに、その地の人これを吉備公の碑と稱し、

明治三十四年四月古社寺保存會員川崎千虎君、前田健次郎等之れを視察してその周邊に文字の跡あるを發見せり。蓋し古老の口碑に由れば、此碑石は民家にあり吉備公云々の文字あるを憚り削り去りたるも、遺靈の崇まざる屢々怪事を傳ふ因て遂に荒神社へ獻納したりと。(右調査に依る。)

と。たゞこれ眞の口碑なり。もとより大和國宇陀郡松山町發見の當代の石函に墨書ありしとの事なれば、この函に骨なかりしとは斷言すべからざるも、吉備公云々ありしと云ふは疑ふべく、余は實査して何等それらしきものを見ざりき。石函は形式より推し略その上代の遺物なるべくこの地に類似遺蹟のありしを思はしむるも、而も吉備公の碑なりとの口碑は後人が己が郷土の偉人を墓ひて殘に附會せしものにて到底今に於て吉備公のものなりと決定すべからず。勿論、この地は、吉備公の先塋の地なれば、薨後こゝに歸葬せりとの想像を全く許さざるには非ざるも、右の如き二資料に依り公の墓が宇谷川内にあると、殊に其の地に全く關係なき荒神社の石函をこゝに安置するが如きは遺蹟を混同せるもの學術的見地より最も惜むべき事なり。東三成村宇谷川内は既に述べたる如く下道國勝等母夫人、及び其一



族の墓所として尊重保存すべき遺蹟なり。故意に吉備公に附會して遺物遺蹟を混同するを要せざるなり。その地の人の切に思をこみに致されん事を望まざるを得ず。

(一) 結論

本稿の記述頗る多岐に亘り、行文の要を得ざる點多かりしを私に恐るも、主として下道國勝岡依母夫人の墓の構造を論じて、是に依り我が墓制沿革考究の一標準を示し、この地の遺蹟遺物の一般を紹介して火葬の俗と古錢を埋葬する禮に關し考察を試み混同せんとしつゝある是等遺蹟の原形を辿り後の研究者に資する所あり。また其の骨藏器、墓志の記述をなして、金石學上從來の誤を訂し得たることと思ふ。

此の記述に就ては先輩の諸説に關する材料を吉備保光會發行の「吉備公遺蹟調査書」に取り、また重野博士の「右大臣吉備公傳纂釋」に負ふ所多し。一々其の條に注して出所を明になしたるが、重ねて記して是を表白す。たゞ吾人の遺憾とするは明治三十三年發掘に關して何等か記載あるべき原博士の手になる「吉備公遺蹟繪葉書帖」の説明書を遂に見るを得ざりし事なり。此日調査の上更に機會を得ば補訂をなさん事を期す。(完、大正五、九、二十三、稿)

(二) 追記

此の稿を草し終りて後「吉備保光會」より「吉備公遺蹟繪葉書」一部の寄贈を受け、原博士の説明書を熟讀する機會を得て、先に憾みせるところを滿し、本文に密接なる關係を有する二三の記事あるを知れり、即ち茲に是れを附記して本器の記述を全ふせん。

該説明書には余の期待せる明治三十三年の發掘に就ては僅に、(前略)この神聖地を研究し、適當なる保存の方法を講ぜんため數十日間數百夫役を用ゐて、この小山の表土を處々三四尺乃至五六尺宛發掘せしに、火葬土葬の骨灰、木炭、朱、大小各種形狀様々なる土器、其他累々として幾多の物品を發見せり(下略)

さあるのみにて、本文記する以上に詳細の度を加へざるは稍々失望せるも、先に推測せし所が眞なりしは之を知るを得べし。なほ同時發掘の和錢に就ては、

和銅當時鑄造のものとして疑のなき事は鑑定を経て明白となれり。是れもその時(即ち三十三年)掘り出だせしものなるも、その錢を墓地に埋めし理由は詳らかならず。後世の六道錢の如きものなるか或は墓地に齋場廟屋等を建築せしとき地鎮祭の用に埋めしものなる

かは頗る研究を要する點なり。

こせられしが、本文に於て余は是は支那の古禮の飯含の風に倣へるものなるを論じて一步研究を進め得しは私に愉快とする所なり。此の證明書に於て力説せられたるは、所謂吉備公の唐白と稱する石函にして、その火葬の骨藏器を容れたる石製の函なるを云ひ、

第三種繪はがき(第九圖) (略之)

起りしならん。其小字地名は吉備公祖母夫人の銅製骨藏器の出でし、元祿年中よりは尙以前の延寶年中の檢地帳に見ゆれば、この延寶年中より更に尙以前に既に下道氏一族の骨藏器と共に發掘せられしならむ。奈良朝時代は火葬行はれ、一家の墳墓の區域に父子兄弟夫婦のもの並べ作らるること今日に似たり。而してその骨藏器の大きさは彼は大抵似合ひのものなりしならむ。即ち現存せる吉備公祖母夫人の骨藏器の外に數多の骨藏器既に發掘せられ、又別の石製外被も發掘せられしことならん。既に記する處の瓦製墓志の斷片と後に記せる土製壺に白骨のあるもの出でたる等のごとによりて、多人數の墳墓ありしこと推斷し得べし。即ちこの事實によりて、前記の小山が奈良朝時代の下道氏即ち吉備公一家の墓地なること愈々益々明白となれり。

と記されたり。余は本文に於て、既に略その石函の古代のものたるべく、附近に類似の遺蹟の在りし事を推せるも而も博士の如く今に於て内に納められし骨藏器が下道氏のものなりとは俄に定め難く、また其の發見の場所が谷川内の吉備公祖母夫人の塋域の附近なるや否も到底明にすべからず。從て博士が次に論ぜられし吉備公祖母夫人骨藏器以外その地より更に數多の骨藏器及び石製外被が發掘せられしならんとは信する能はず、また吉備公祖母の骨はかゝる石函に納められしに非ざること、本文に詳述せる所なり。たゞ博士の高説の如く字谷川内が下道氏一族の墓地なることは各項記する所の遺物に依りて明なる事實と云ふべし。

木崎好尙氏は其の「日本金石文」(見本)の本器の條に、故原博士の説として元祿より先延寶年中の檢地帳にも骨藏器の事見ゆとありと誌せるが、思ふにこは右引用せる博士の説明書を誤解されしものにて、檢地帳に見ゆるは唐白なる地名たるなり。下道國勝寺母夫人とは何等の關係あるに非ず。筆の序に附記する事然り。(十月三十日再記)



### 第十九章 吉備郡に於ける條里の遺制

概説。大化改新より奈良朝に至る百餘年間は組織統制の最もよく行はれたる時代にして凡百の制度文物整然として一絲亂れず、都市は方五町を單位とせる條坊を區劃し。田園は方六町を單位とせる條里を區劃し、すべて碁盤の目の如く井然として整頓せられ、地名亦嘉字二字に整理せられ洵に整齊にして几帳面なる國民性の最もよく發揮せられたる時代と云ふべし。而して條里制は實に過去一千有餘年の間に開發せられたる田園の上に施されたる大規模の耕地整理に外ならず。

予は去る大正四年八月、圖らずも吉備郡阿曾村大字久米、字久米田に於いて條里の遺跡を發見し爾來、岡山・財田・瀬戸・尾張附近に於て發見を重ね昭和二年十月作州 眞壁・矢田附近に於ける最後の發見に依りて概ね縣下三國に於ける條里の遺制を彷彿し得たり。今其の概要を述べんと欲す。

孝德天皇大化の改新に當り、我が邦固有の慣行に基き、支那後魏北齊後周及隋唐均田の法を採酌して班田の法を定む。班田の法は大寶令に明かなるが其の大意は人民に公田を給授するの制にして、凡そ人生れて六歳に達すれば男子には田二段、女子には其三分二即ち一段と百歩。私人に屬する家人奴婢には其の三分一即ち二百歩を給す。かくて、班田は六年毎に人口に宛てて改めて收授分給するが故に之を口分田と稱す。

斯の如く班田收授を行ふには其の郡郷の圖を必要とす。乃ち國郡の境界を定め田籍を造りて之を政府に獻進せしむ、後又天平・勝寶・寶龜・延喜等の各時代にも諸國に命じて田圖を造らしめたるが現存のものは極めて稀なり、而して古田籍の圖を作るには實地を測量し經緯の條を以て土地を縱横に分割したる後、地圖を作る、是即ち條里にして大化改新に於ける班田收授の根本的地割法なり。

條・里・坪。條里とは經緯の代名詞にして縱を條とすれば横は里なり。地割の方法は條も里も同じく六町づゝに區劃

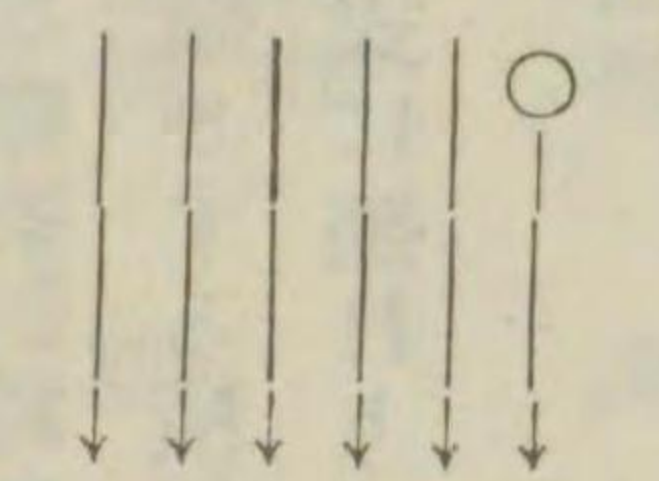
せられ、一里の面積は方六町なり。里を東西に列ねて之を條とす。方一里、六町四方の地を縱横に六分すれば方一町の地、六六、三十六區を得、此一區を一坪と稱す。此一坪を十分せるものを一段と云ふ、三百六十歩なり。班田の制、男子生れて六歳に至れば田二段を給すとある所の一段は即ち是なり。故に一坪は方一町即ち六十間四方にして其の面積は三千六百歩なり。

班田法の實施。孝德天皇大化二年正月朔日改新の四大詔の其三に於て初めて戶籍・計帳・班田收授の法を定むること見え爾來政府は滞なく班田の實行に着手し、同年八月の詔を以て田を均しく民に給せしが百七十年の後弘仁六年に至りて班田の法漸く廢し、後百二十四年天慶の亂に至りて全く絶廢せり、要するに班田は大化二年より天慶二年に至る約三百年間行はれたるなり。

坪割の種類。條里の區劃は前記の如く方六町の面積を單位とせるものにして、方里はすなはち六町四方の地を又縱横に六分して方一町のもの三十六區を得、此の一區を坪といふ。而して坪の名稱は一の坪に始り二・三・四・五・六より七八……三十六の坪と順次に計へるのであるが、此の坪名の順序は諸國區々にして一定せず。要するに一隅より始めて四種の計へ方があるが故に四隅より始むれば都合十六種とある譯なり。

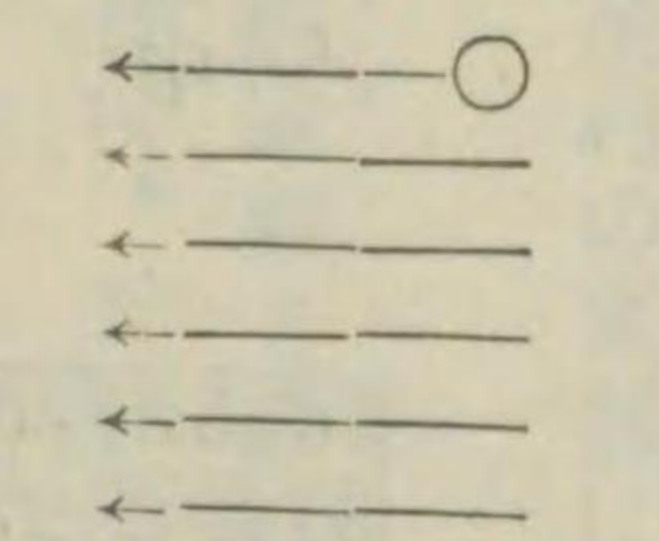
1

31	25	19	13	7	1
32	26	20	14	8	2
33	27	21	15	9	3
34	28	22	16	10	4
35	29	23	17	11	5
36	30	24	18	12	6



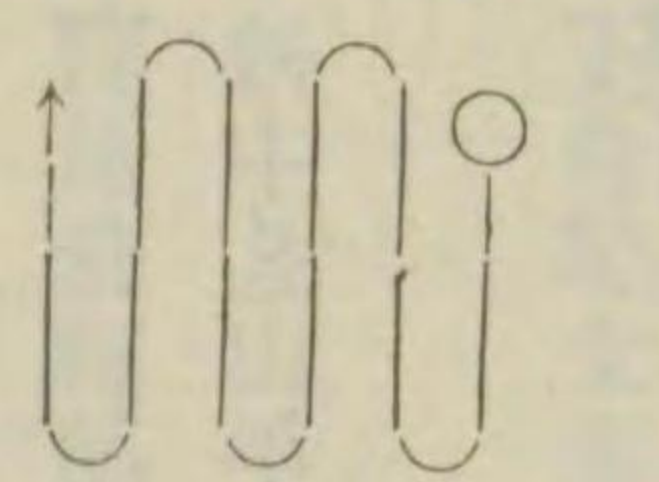
2

6	5	4	3	2	1
12	11	10	9	8	7
18	17	16	15	14	13
24	23	22	21	20	19
30	29	28	27	26	25
36	35	34	33	32	31



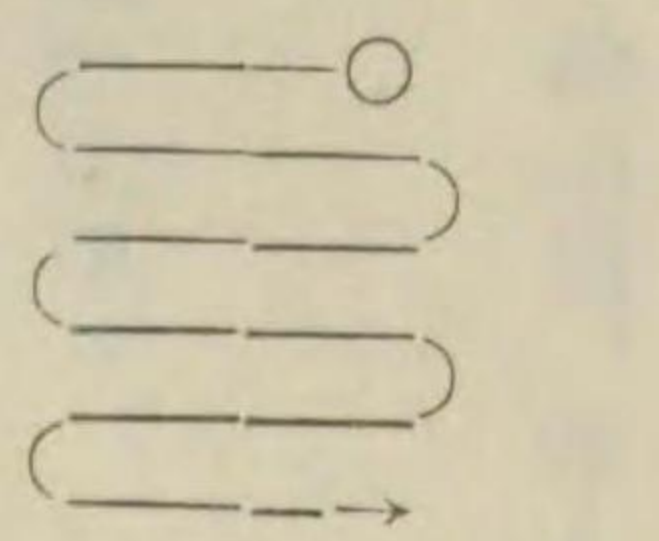
3

36	25	24	13	12	1
35	26	23	14	11	2
34	27	22	15	10	3
33	28	21	16	9	4
32	29	20	17	8	5
31	30	19	18	7	6



4

6	5	4	3	2	1
7	8	9	10	11	12
18	17	16	15	14	13
19	20	21	22	23	24
30	29	28	27	26	25
31	32	33	34	35	36



坪割の計へ方順序、凡そ條里に於ける坪割の計へ方の順序は平行式、連續式の二種より成り、更に又縱行横行の二様に分れ里の四隅を起點とするが故に通じて十六種の原型となる、前圖の如し。



圖の1及2は平行式、3及4は連続式なり。而して1は縦行平行式にして2は横行平行式なり。3は縦行連続式にして4は横行連続式なり。

吉備郡に於ける條里制坪割は

右下隅を起點とする横行平行式にして備中國一圓皆此式に據れり。

36	35	34	33	32	31
30	29	28	27	26	25
24	23	22	21	20	19
18	17	16	15	14	13
12	11	10	9	8	7
六坪	五坪	四坪	三坪	二坪	一坪
八坪	七坪				

参考、岡山縣に於ける條里制坪割六種。(吉備郡及備中國一圓を除き五種)

1. 左上隅を起點とする横行連続式。岡山附近、上道郡財田附近、瀬戸附近。
2. 右上隅を起點とする縦行連続式。和氣郡和氣附近(本庄村大字日室)山城國葛野郡、越前國足羽郡糞置村、讃岐國三豊郡高室村も此式に屬す。

3. 左下隅を起點とする縦行連続式。邑久郡尾張地方、和氣郡香登町附近。阿波國名方郡も亦此式に屬す。

4. 右上隅を起點とする縦行連続式。苫田郡郷村及眞庭郡美和村大字目木。(西作地方)

5. 左上隅を起點とする縦行連続式。勝田郡勝田村大字矢田附近。(朝作地方)

(拙著、昭和三年三月、岡山縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第七〇岡山縣ニ於ケル條里ノ遺蹟調査報告、岡山縣通史上編第二十一章岡山縣に於ける條里の遺制、参照)

第一 備中服部附近に於ける條里の遺址

位置區域 高梁川以東、吉備郡長良山を圍繞する一帶の平地にして吉備郡阿會、服部、足守、生石、眞金、惣社の各町村及都窪郡加茂、三須、山手、常盤、清音に亘る。足守川、長良川及十二郷用水の灌域に屬す。略説 和名抄所載左の郡郷に當る。

賀夜郡 阿宗郷

訓 阿會、今 阿會村、奥坂、東阿會、西阿會、久米、黒尾。

天平十一年正倉院文書、阿蘇郷、宗部里、磐原里、是は今の阿會、服部二村を合む、宗部は阿宗部の略、

同

服部郷 訓 波土利、今 服部村 窪木、南溝手、北溝手、長良、金井戸を含む。長良は大伽羅、即、阿

同

那加良の略、那加良の意か。

足守郷

訓 安之毛利、今 足守町大字上足守、下足守、上土田に分つ、應神天皇二十二年紀「葉田の葦

同

守宮」葉田 今 足守町の上土田、生石村の下土田、土田 今 ツチタと訓するも、もとハタ

同

を正しとす。天平十一年正倉院文書、足守郷、三井里、櫓見里あり今の足守、生石の地なり。

同

於保之、今 高松、生石の二町村に當る。

同

伊多久良、今 眞金村、天平十一年正倉院文書、板倉郷、板倉里、委文里見ゆ。

同

伊多倍、仁徳天皇皇后、八田皇女の御子代とす、今 總社町、總社及井手に當る。

同

於佐加倍、允恭天皇皇后 忍坂大中姫命の御子代とす、今 總社町刑部なり。

都字郡

訓 加波毛、今 加茂村の東部に當る、天平十一年正倉院文書「都字郡河面郷、神沼里、辛人里

同

見ゆ。

同

和名抄に都字郡驛家郷とあるもの、今 加茂の新庄及山手の宿に當る。

窪屋郡

訓 加留倍、今 清音村、天平十一年正倉院文書「窪屋郡輕部郷、籠簀里、菅里」見ゆ。

同

眞壁郷 今 常盤村、天平十一年正倉院文書「窪屋郡、白髮郷、川邊里」見ゆ。

同

美簀郷 今の山手、三須二村。天平十一年正倉院文書「窪屋郡御簀郷、勝部里、拜師里」見ゆ。

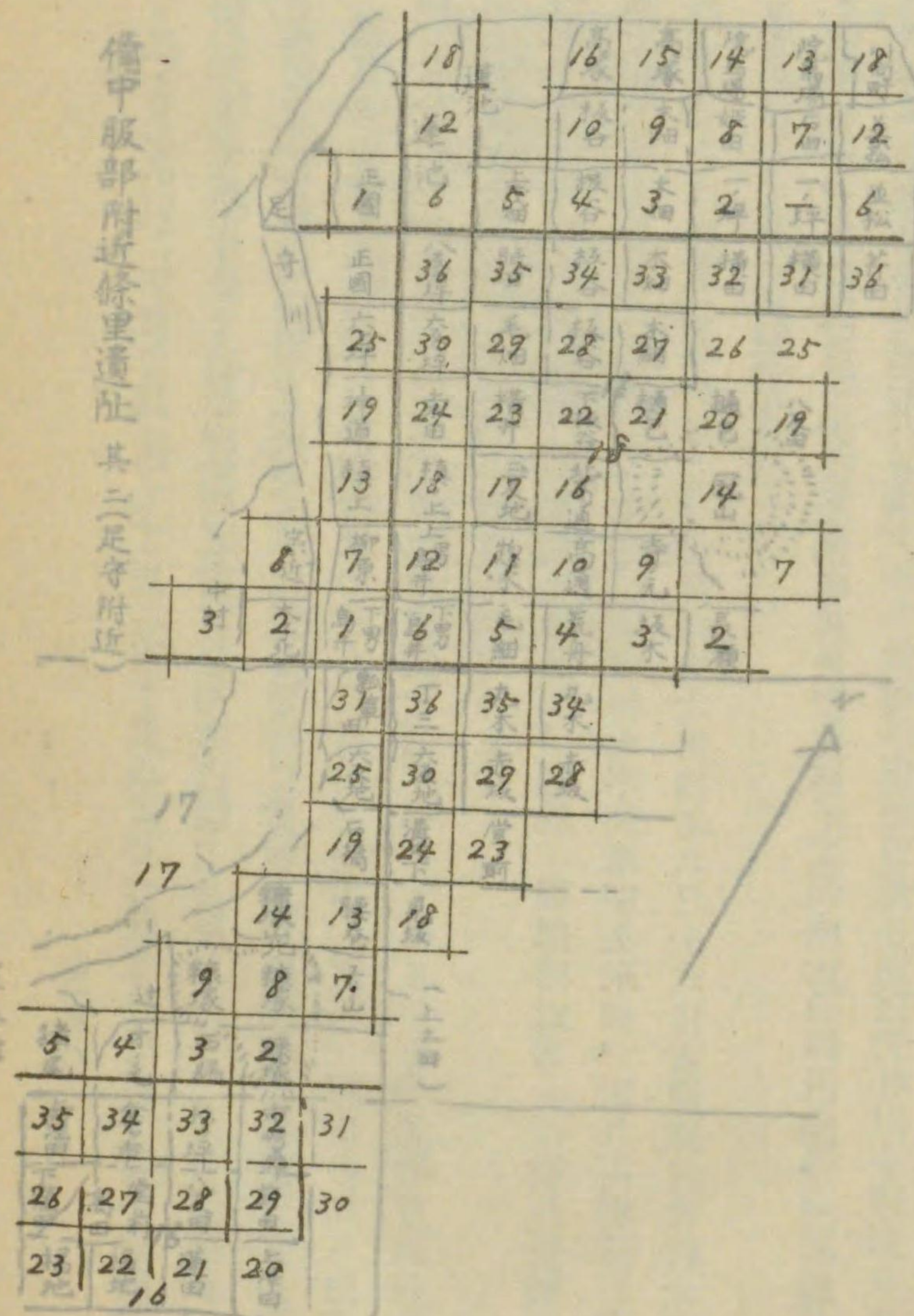
以上奈良、平安時代に於ける服部附近を大觀したり、特に服部村は備中國府遺址、賀陽郡院、賀陽軍團が當代に於ける





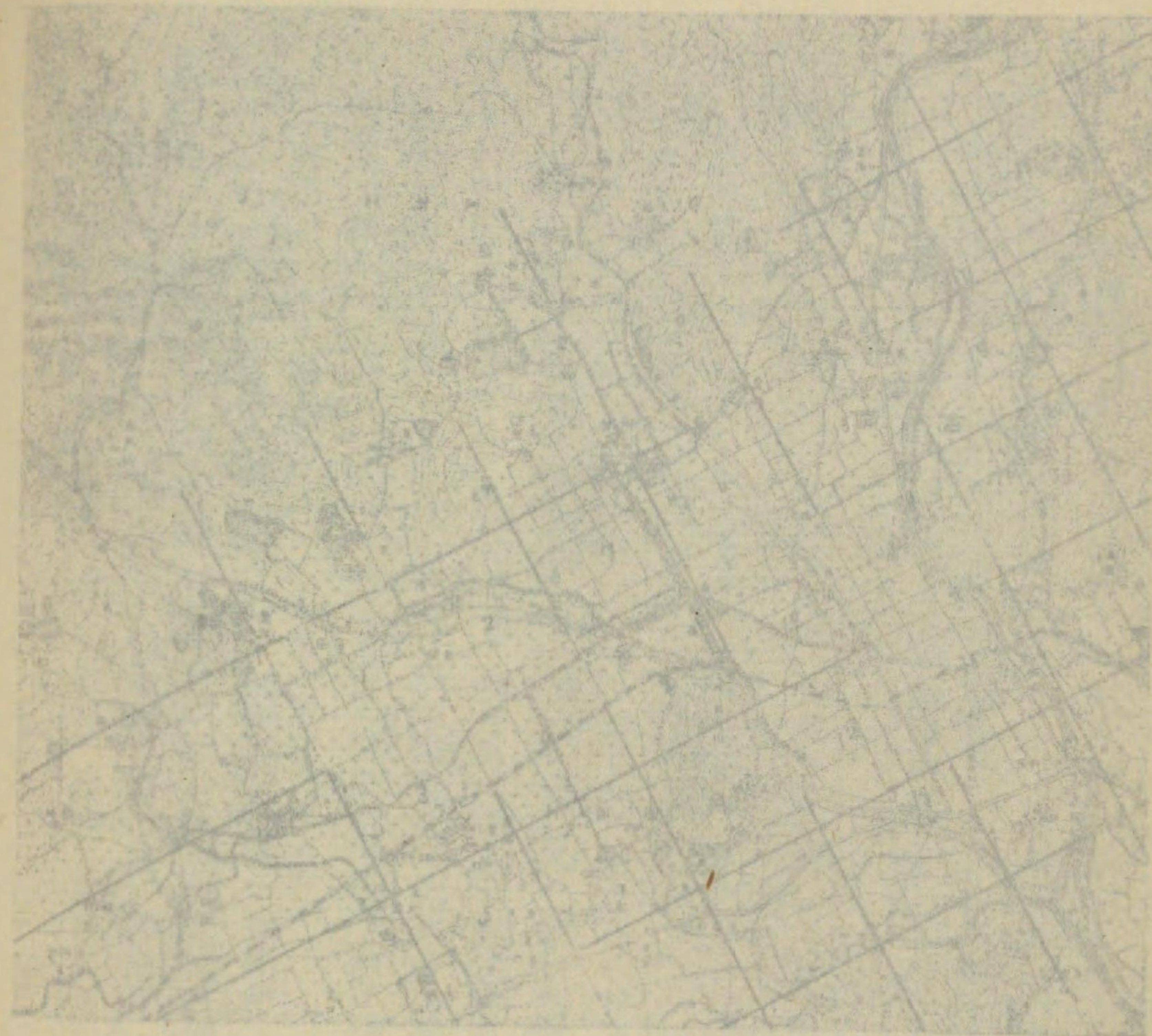


備中服部附近條里遺址 其二(足守附近)

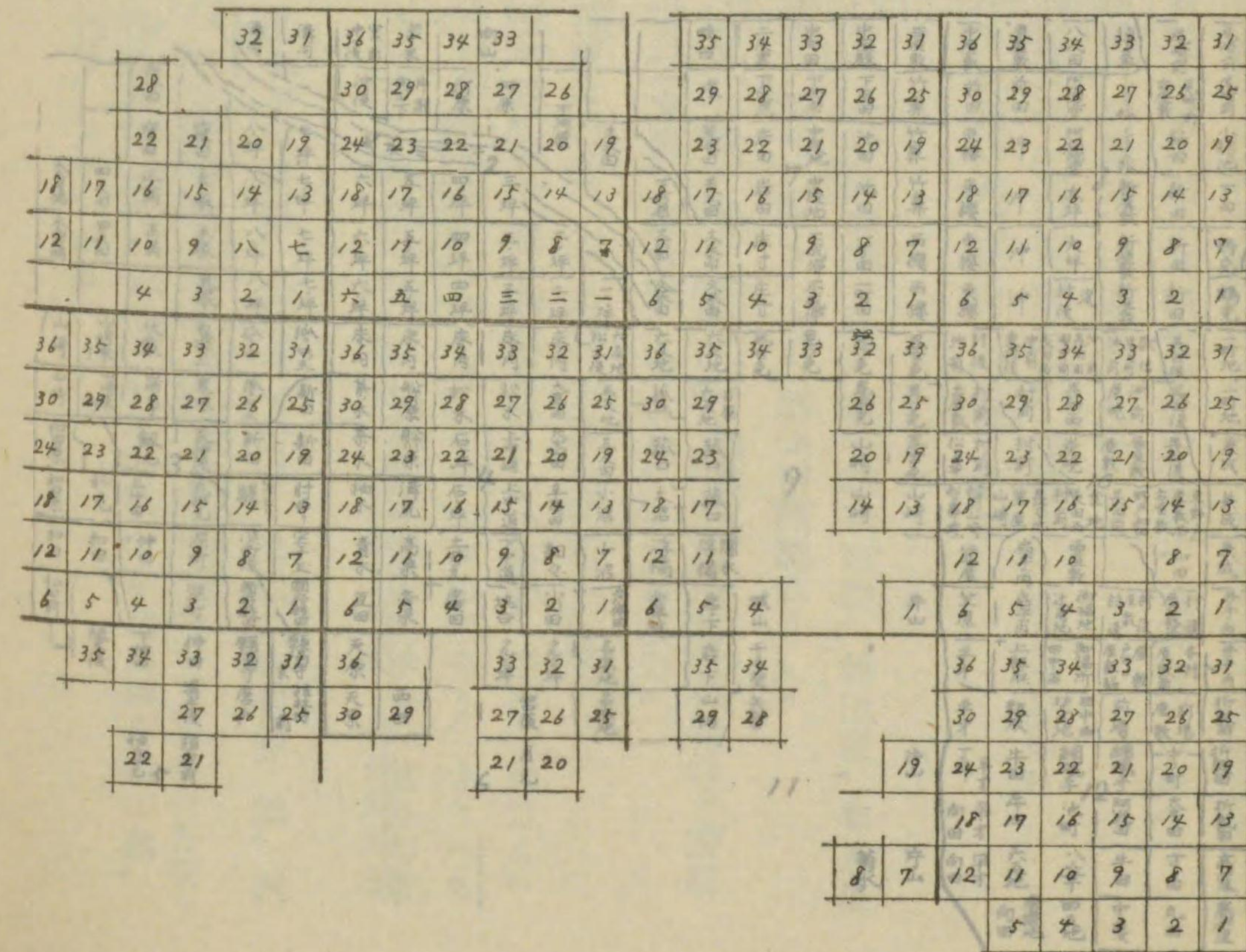


36	35	34	33	32	31
30	29	28	27	26	25
24	23	22	21	20	19
18	17	16	15	14	13
12	11	10	9	8	7
6	5	4	3	2	1
36	35	34	33	32	31
30	29	28	27	26	25
24	23	22	21	20	19
18	17	16	15	14	13
12	11	10	9	8	7
6	5	4	3	2	1
36	35	34	33	32	31
30	29	28	27	26	25
24	23	22	21	20	19
18	17	16	15	14	13
12	11	10	9	8	7
6	5	4	3	2	1

備中服部附近條里遺址 其一



備中服部附近條里遺址地形圖











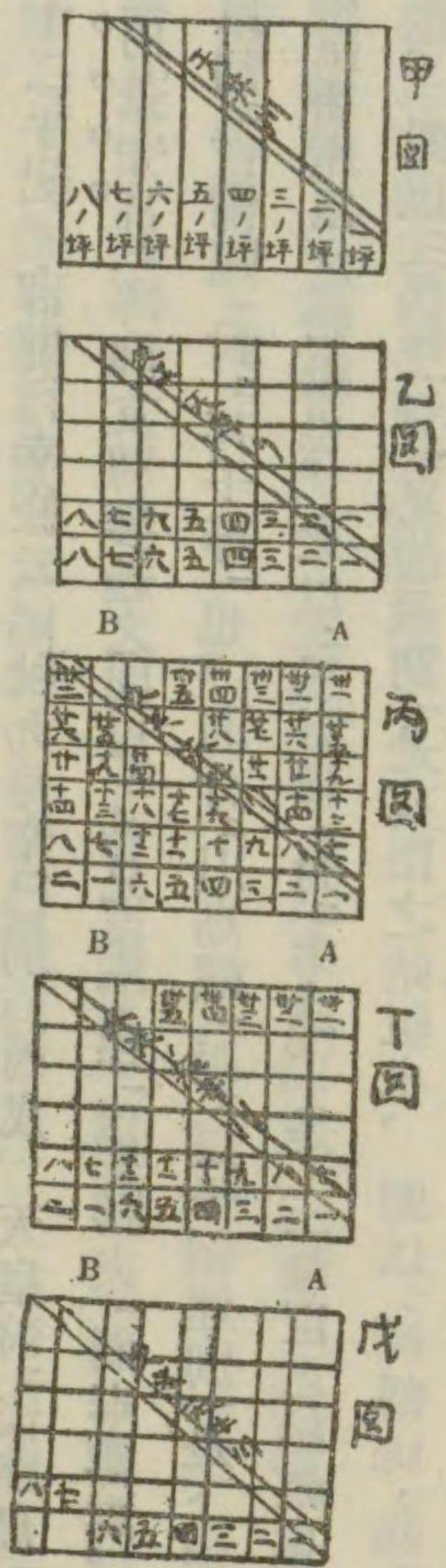


吉備の政治、經濟、軍事、文化の中心地たることを明かにしたり。而して更に古き史蹟としては加茂造山、同小造山、三須作山、蝙蝠塚、宿の寺山、坂古田堂山の如き規模宏大なる前方後圓式古墳を初め三須、加茂、山手、清音、總社、阿曾、足守、高松の各村に於て百乃至數百基の大小古墳の累累起伏せるは最も雄辯に當地方の古開化を物語るものなり。又國分二寺、津寺、矢部寺、賀夜寺、櫛見寺の如き奈良朝平地伽藍址の存在及新山、福山、廣谷、廂山の如き山上に於ける大規模の平安伽藍址の遺存は又以て當代に於ける世界的文化發達の程度を徴すべきものとして條里制實施前後の田園が如何に此等資源、供給の上に與つて力莫大なりしかを推察し得るものなりとす。

坪割 服部附近に於ける條里の坪割は「右下隅を起點とする横行平行式」に屬す。圖版 服部附近其一は概ね區劃井然たる條里の地形を現存すれ共其の坪名を存するもの甚だ稀なり、唯僅に阿曾村大字久米字久米田、天井川堤防の南に於て之を現存す、實に地方唯一の標式たり、そは圖版に明かなり、是實に去大正四年八月十六日吉備郡阿曾村大字久米に於ける予の實地調査の際發見せるものにして其の結果左の如し。

- 一、先是、予は阿曾村に於ける地名表を徵せしが、中に就きて大字久米字久米田に於て「一の坪、二の坪、三の坪、四の坪五の坪、六の坪、七の坪、八の坪」の地名を見出した。
- 二、是に依て予は同地方に於ける條里坪割の計方の順序を知るの端緒を得たるを喜び大なる期待を懷きぬ。
- 三、然るに當日同村役場に就きて切圖を一見せしに、そは甲圖の如く八個の長方形の區劃が久米の天井川堤防の南側に並列するに過ぎざり是又坪割の一例外なるかを思ひ失望せざるを得ざりき。
- 四、論より證據、實地を踏査するに如かずとし現地に就て之を検すれば其の一坪乃至八の坪は各々皆方一町の區劃を有する坪の累積なること乙圖の如くなるを見たり。
- 五、斯くて其の原形は當然に丙圖の如くA Bの二里より成るべきを推定したり。
- 六、而してA里一、七、十三、十九、廿五、卅一坪は其の傳を失ひ合して唯、一の坪に依て呼ばれ、一一、八十四、一一

- 十、廿六、卅二坪又三、九、十五、廿一、廿七、卅三坪は二の坪又三の坪、四、五、六皆同様の事情の下に四の坪、五の坪、六の坪と呼ぶ。
- 七、B里に至てはAの如く南端の一坪、二の坪を以て呼べば其Aの一坪、二の坪と混雜するの虞あるを以て南邊より第二列の七の坪、八の坪を以て呼ぶるに至りしを知る。
- 八、是に依て切圖の一坪より八の坪に至る連續は畢竟丁圖の「右下隅を起點とする横行平行式の轉して戊圖の形となりしを明かにし得たり。
- 九、要之服部附近一帶に於ける條里制、坪割の計へ方の順序、久米田を以てその標式とすべきを決定し得たり。同時に久米の天井川は最近五六十年前に於ける水源地の濫伐に依て其の流砂の堆積を致し所謂天井川を形成したるが爲に此遺制の名稱を偏陳に保存し得たること、財田附近の條里に於て幡多村大字澤田、百間川の堤防敷に於て一の坪、四、五、六の坪を現存せると同じく天の配劑妙と云ふべし。



類例 後出、神在村附近を始め備中一圓之を以て通例とすべき歟。

文 献 新山、福山、廂山等の古文書にして現存せは條里に關する幾多の文獻を得べからんも、是等は皆南北朝又は戰國の兵亂に依て一再ならず兵燹に罹りて湮滅したり今や徵すべき何等の文獻なきを遺憾とす。

備 考 足守町大字下足守に一の坪の字存す是又久米田、阿曾の延長にして全然同一の坪割に屬すること疑なし。(圖



版参照)

京都神護寺所藏、國寶嘉應元年足守莊繪圖。未甲勝示に「生石御庄塚塔田一條六丁作人永宗坪」と見ゆ。而して足守莊の平地部は縦横に井然たる條里の趾を見る(後出嘉應元年足守莊繪圖参照)

附 貴種と賢種との土着蕃衍

應神天皇二十二年紀 吉備行幸條云「秋九月辛巳朔 丙戌、天皇狩淡路島(中略)幸吉備遊于小豆島。庚寅亦移居于葉田葦守宮。時御友別參赴之則以其兄弟子孫爲膳夫而奉饗焉。天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀而有悅情因以割吉備國封其子等也。則分川島縣封長子稻速別是下道臣之始祖也。次以上道縣封中子仲彦。是上道臣香屋臣之始祖也。次以三野縣封弟彦。是三野臣之始祖也。復以波區藝縣封御友別弟鴨別是笠臣之始祖也。即以苑縣封兄浦凝別是苑臣之始祖也。即以織部縣賜兄媛是以其子孫於今在于吉備是其緣也。」と見え、葉田の葦守宮、即ち土田の足守宮に行幸を奉迎し仲彦命、上道縣を受けて香屋、即賀夜臣の始祖となることを載す、その貴種吉備、賀陽氏の蕃衍を此に見るに至る。

國造本紀「輕島豐明朝御世、上道國造同祖、元封中彦命改定賜國造」應神紀「次以上道縣封中子仲彦是上道臣、香屋臣之始祖也」香屋は蚊屋又加夜に同じく賀夜又賀陽と記す。仲彦は前條の中彦命にして御友別の子なり。香屋臣は加夜國造の氏にして上道臣より分れたることを知る。

天平十一年備中國大稅負死亡人帳(正倉院文書)に「賀夜郡八部郷美濃里戶主賀陽臣惠理麻呂、國賀陽臣路、日羽郷狹野里、戶主賀夜臣小牧」と見ゆ。

舒明紀に「天皇娶吉備國蚊屋采女、生蚊屋皇子」と見ゆ。蚊屋采女は賀夜の國造より奉りたるもの也。

天平神護元年六月(續紀)條に「備中國賀陽郡人外從五位下賀陽臣小玉女等十二人賜姓朝臣」とあり。日本後紀弘仁六年六月條に「播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年卒右京人也」と見ゆ豐年は氏人なり。三代實錄、清和天皇貞觀四

年三月條に「備中國賀夜郡人左大史正六位上賀陽朝臣宗成、從六位下備中權博士賀陽朝臣眞宗等二人隸左京職」續左丞抄第一後三條天皇延久二年十月廿八日 備中國吉備津彥社氏人等解に「請下特任先例神主賀陽貞政朝臣左京間以三氏人致貞暫被補神主代官上狀云々、氏人正六位上賀陽朝臣致貞、正六位上賀陽朝臣清任、蔭子正六位上賀陽朝臣貞經」見ゆ。

扶桑略記廿二、宇多天皇寬平八年九月廿二日條に「善家秘記云、余寬平五年出爲備中介、時有賀夜郡人賀陽良藤者云々、良藤兄大領豐仲、弟統領豐蔭、吉備津彥神宮禰宜豐恒及良藤男左兵衛志忠貞等皆豪富之人也云々」と見ゆ。今昔物語、十六の十七にも此事を載せて「今昔備中の國賀陽の郡葦守の郷に賀陽の良藤と云ふ人有けり良藤の兄大領豐仲、良藤が弟統領豐蔭、吉備津彥神宮の禰宜豐恒、良藤が子忠貞、皆家富る者共也」とある。

元亨釋書卷二に釋榮西號明庵備中之州吉備津官人其先賀陽氏と見ゆ。足守八幡宮石鳥居、銘文云。「康安元年辛丑十月二日大工沙彌妙阿。願主、神主賀陽重人。祝師僧賴澄」と見ゆ。以上貴種吉備氏賀陽氏の土着蕃衍を徵すべし。

賀夜郡も加夜國、又伽倻とも云ふ數稱あり、凡そ六伽倻、加羅、阿羅、多羅、加耶、阿耶、太耶、加羅又大加羅とも云ふ任那の別稱なり。

東國通鑑に據れば安閑天皇二年新羅文武王金官伽羅(任那)を滅して加耶郡を置き、欽明天皇廿三年新羅眞興王高靈伽羅を滅して大伽耶郡を置く、伽倻の任那の別稱なること明かなり。惟ふに吉備の伽倻は夙に歸化、任那、伽耶人の土着蕃衍せし所にして、やがて國名郡名を成すに至りしものにして單に任那人と云はず任那人を先達として任那三國秦、漢、吳等すべて半島大陸人の歸化土着蕃衍を見るに至りしことは正倉院文書天平十一年備中國大稅負死亡人帳所載、都宇、窪屋、賀夜三郡即ち爰に所云、備中服部附近の地、今の吉備郡地方、古開化の中心地に當る中に就き、都宇郡死亡八人の内西漢人一、秦人部一、赤染首一、服部首一、史戸一、計五人の歸化人。窪屋郡死亡



壹拾五人の内美和首一、輕部首一、神首一、白髮部首一、語直一、計五人。賀陽郡同三人の内漢部二、中臣忌寸一、生部首一、東漢人部一、西漢人部二、史戸一、犬甘部、計九人。通計四拾六人の内、歸化人十九人即<sup>19</sup>/<sub>46</sub> 四一%強の蕃別歸化人を含むことを知れば加夜國、後の賀陽郡は事實上、任那加耶を先達として新羅、百濟、高麗又秦、漢歸化族賢種の土着繁衍して人文發展の上に貢献したること。大和の高市、山城の葛野に比すべきものなり。

參照

都宇郡死亡人捌人。内六人、死五人、蕃別

内 建部郷岡本里 □、西漢人志卑賣

河面郷辛人里 戸主秦人稻麿。□、秦人部茅島

戸主赤染部首馬手

撫川郷鳥羽里 □、服部首八千石

戸主、史戸置島。□、史戸玉賣

死人は五人なれども。戸主史戸置島を加へて歸化人六人となる

窪屋郡死亡人壹拾伍人。内七人、死五人、蕃別

内 輕部郷籠賣里 戸主輕部首三狩、□、部首若賣

美和郷菅生里 戸主美和首廣床、戸主神首伯

白髮部郷川邊里 戸主白髮部首智麿

御簀郷勝部里 戸主語直衣

拜師里 □、私部首身賣

賀夜郡死亡人貳拾參人。内十一人、死九人、蕃別

内 庭瀬郷三宅里 戸主忍海漢部眞麿

山崎里 戸忍海漢部得島。□、忍海漢部麿

板倉郷委文里 戸中臣忌寸連鯨。□、中臣忌寸連荒鹿火

大井郷田後里 戸、生部首加都良

粟井里 戸、東漢人部刀良手

阿蘇郷宗部里 戸、西漢人部麿

磐原里 戸主史戸阿遲麻佐、□、西漢人部事无賣

多氣郷田次里 戸主、犬甘部首土方

以上の如く貴種賢種の土着蕃衍あり當地方の開化の由來舊きこと決して偶然ならざるを知るべし。

(後出、備中國加夜郡服部郷圖の章參照)

備中國府の位置に就て

國府 大化以後備中國衙即ち國司の政務を執る役所の在りし所なり。

位置 備中國府の位置は吉備郡服部村大字金井戸附近御所の内を中心として東國府、才國府、南國府、北國府一帯の地なり。

總社記によれば備中國府の地は前後三轉せりと云ふ。第一、都窪郡三須村國府屋敷と稱する地、第二、總社町大字井手字清水國府屋敷土居と稱する邊、第三、服部村大字金井戸御所と稱する邊なり。

國衙址 服部村大字金井戸御所の邊、方三町許の地にして南面し東西に通ずる直道に沿ひ東西北の三面、幅約三町間許の外渥址を繞らせり、渥外、東(長)方賀陽山門満寺あり、西方(乾)寶の宮及板屋堂あり。

以上は條里研究の結果、知り得たる所にして其の條里との關係は左の如し。















是亦此の條里制の施されたる地方が過去に發揮したる經濟上の威力を傍證するものなり。  
文獻 井山田

一、莊田三千石也

寶福寺略縁起云。四條天皇客星成崇不豫、求法救諸伽藍、無驗勅鈍菴加持。在干山承詔新築壇懇祈一七日、到于滿筵曉、客星如雷鳴墮壇前池中、病乃愈、上大悅賜莊田三千石、上津江庄、澁江庄、子位庄、刑部郷、妹尾、眞壁郷、生石郷、八田部郷、高松郷、服部郷、三和郷、永爲寺産。

因に寛文十三年立嚴和尚撰寶福寺覺に「寺領古者壹萬石餘」とあるも原據明かならず。  
天正四年十一月廿三日井山領古文書を存す。拾箇郷莊高貳百卅四貫參百卅文を記す全文左の如し。

井山領

參拾九貫四百八拾五文目	刑部郷	河	滿	存
貳拾貫文目	眞壁郷	國	隱	存
拾貫文目	八田部郷	河	滿	存
參貫文目	服部郷	井	彌	左
七貫四百文目	三和郷	同	人	存
參拾五貫貳百文目	澁江	同	人	存
七拾壹貫百六拾六文目	子位庄	同	人	存
六貫五百文目	妹尾	井	右	存
貳拾貳貫文目	生石莊	井	彌	左
拾九貫五百八拾六文目	高松郷	黨	東	存

以上貳百參拾四貫參百卅文

是者寺納之辻也

右之外境之内立除無御檢地也

貳拾壹貫文目

六貫九百文目

御究張如此也

天正四年十一月廿三日

井山御納所

清七郎

(花押)

檢使中

國松隱岐守 (花押)

報恩寺 中太分

蒼陀寺 同人分

是は天正二年十二月より翌三年六月に亘れる備中兵亂僅に靜まり翌四年十一月廿三日秋收に方り毛利氏の代官國松隱岐守井山領十ヶ莊を整理して其の納所を命じたるものなり。

而して西郡村の井山領、文書に見えず或は眞壁三和と相接近するより當時との境界變更せしか記して後考に資す。

第三 神在村附近に於ける條里の遺址

位置及區域 高梁川河西、吉備郡の中心に位し秦、久代、岡田、川邊の諸村に亘る。新本川及上原用水の灌域に屬す。

略説 此の地域は和名抄の秦原、釧代、河邊の三郷の交界點に位し河東の眞壁、輕部、二郷に對す。

下道郡 秦原郷、訓、波多八良、今の秦村、神在村の大字上原富原下原、都窪郡常盤村大字中原等に當り歸化、秦人の開發土着したる原野を意味す。

同 釧代郷、訓、久之呂、今、久代村。

同 河邊郷、訓、加波乃倍、今、河邊村、延喜式、河邊驛馬廿疋とあるもの是なり。











此附近一帯秦人の土着地にして久代、秦原、古墳地帯として著はれ、殊に久代村長砂の石棺、秦村、金子の石棺、秦原寺趾の礎石及古瓦、石壘、正木、横田、神の如き式内古社四社の存在は優に當代の開化を證するものなり。

坪割 河東の地と同じく「右下隅を起點とする横行平行式」に屬す、但、河東服部附近の條里が三十度、西郡一帯が二十一度の偏倚を有するに對し是は正しく南北の方向を取れるを異なれりとす。尙その北部上原の一區に就ては其の北邊の秦、西邊の久代との村界を地形圖に劃して字九條が九の坪、解六が六坪に相當するを以て之れが里を推定したり。

附記 「備中上原郷」に就ては 南朝延元四年 北朝曆應二年 正月十六日丙子備中國司木工頭知任東福寺をして院宣の旨に任せ同國上原郷領家職の知行を全くせしむること見ゆ。

備中國上原郷領家職事

御寄進之院宣分明之上者全知行可被致御祈禱忠候恐々敬白

(曆應二) 正月十六日

知 任

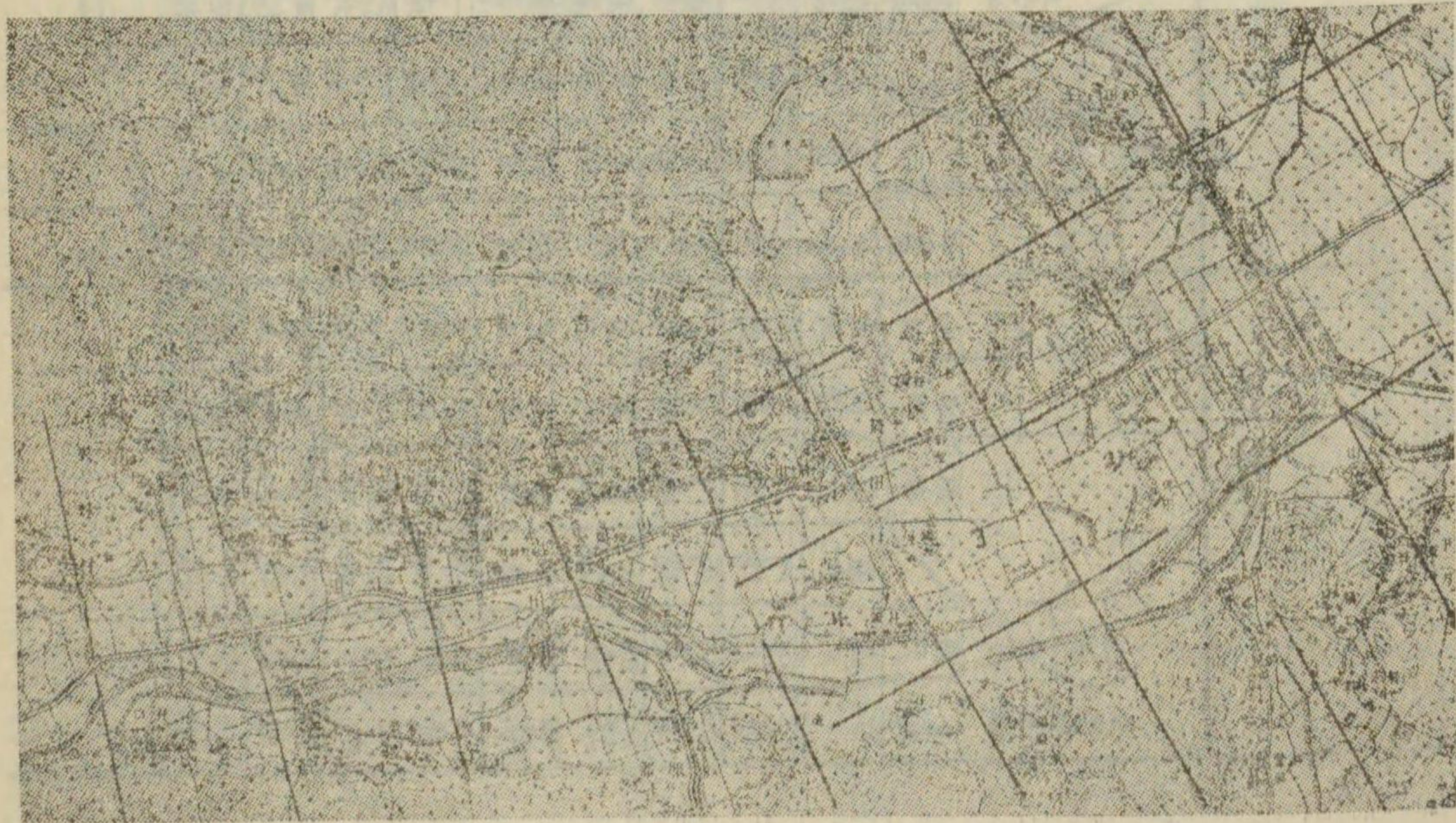
東福寺長老上人御房

(東福寺文書)

第四 菌、箭田附近に於ける條里遺趾

位置及區域 吉備郡の西部に在りて岡田、河邊、菌、二萬、箭田、穗井

吉備郡菌村及箭田村附近條里遺址地形圖

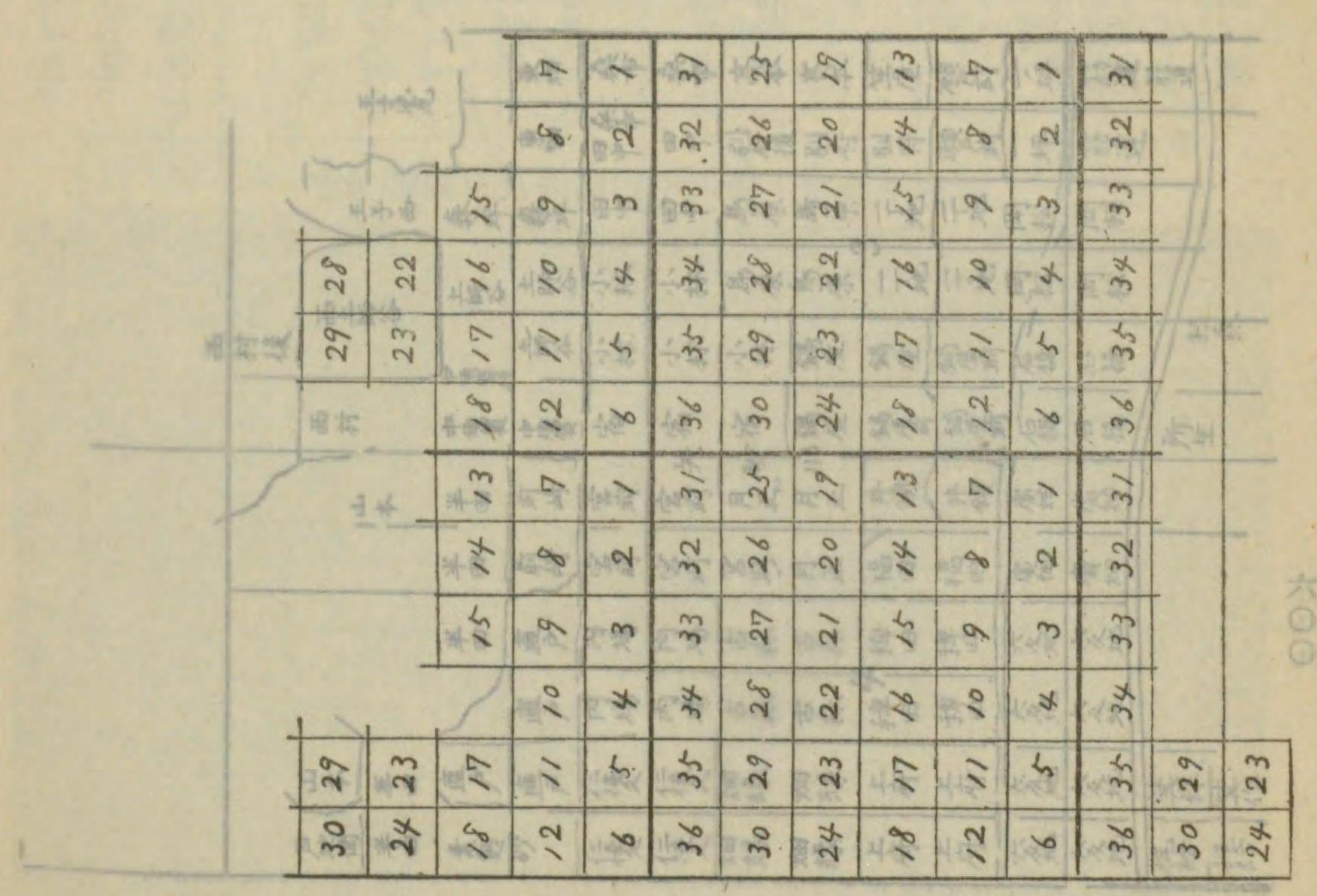
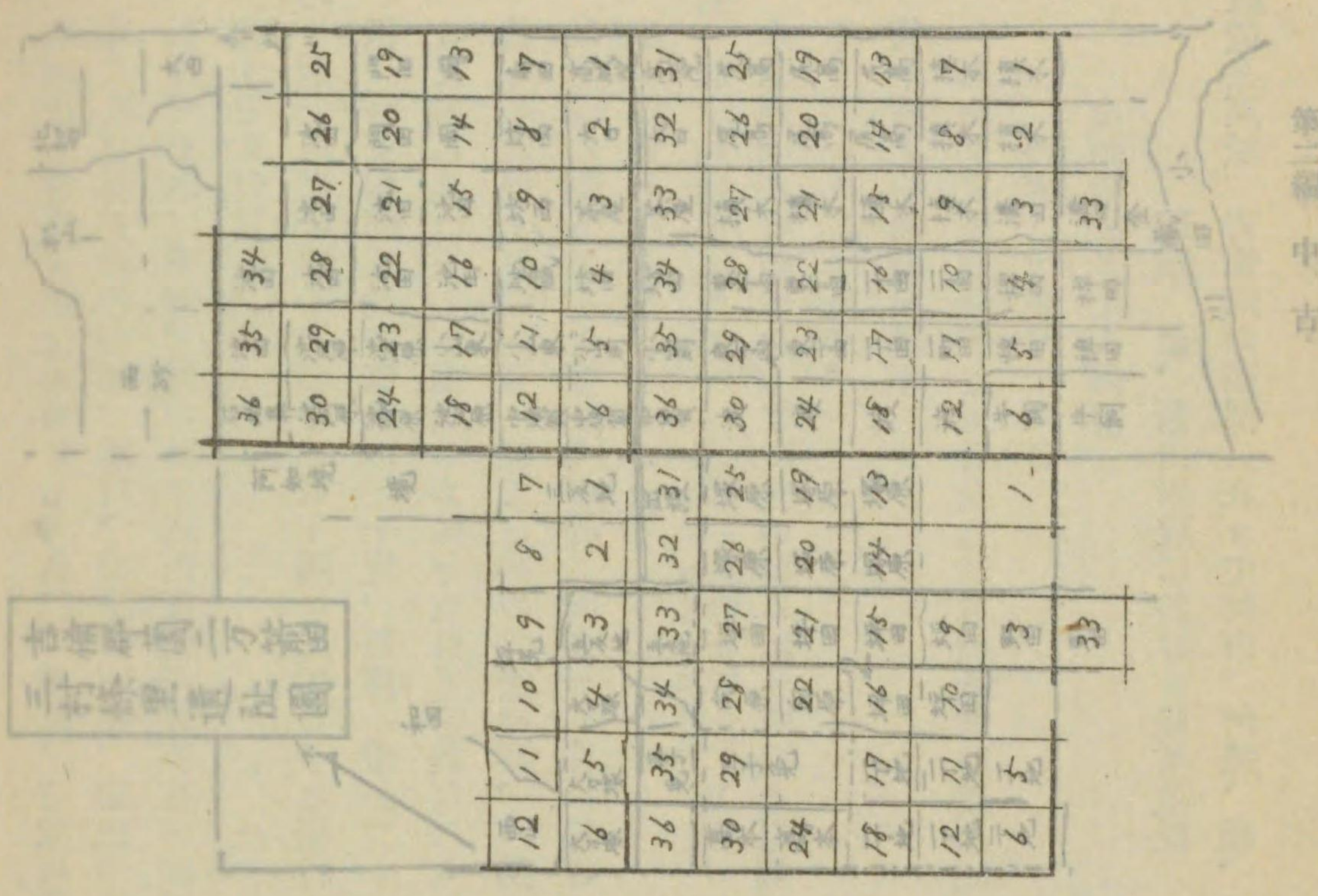


33	27	21	15	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
32	26	20	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
31	25	19	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
30	24	18	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
29	23	17	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	0
28	22	16	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	0	0
27	21	15	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	0	0	0
26	20	14	8	7	6	5	4	3	2	1	0	0	0	0	0
25	19	13	7	6	5	4	3	2	1	0	0	0	0	0	0
24	18	12	6	5	4	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0
23	17	11	5	4	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
22	16	10	4	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	15	9	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	14	8	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	13	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	12	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17	11	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16	10	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0









田、吳妹の諸村の平地を含み、小田川及末政川、上原用水の灌域に属す。  
 概説 和名抄所載左の諸郷に當る。

下道郡曾能郷 今、岡田(菌東庄)菌(菌西莊)の二村に當る。  
 同 邇磨郷 訓、邇万、今二万村、邇磨郡の土着地なり。  
 同 八田郷 訓、也田、今箭田村、仁徳天皇皇后八田皇女の御子代なり。  
 同 穂北郷 訓、保伊多、今穂井田村、大字服部あり吳織の部の住地なり。  
 同 吳妹郷 今吳妹村、吳服部の部民の居所なり。  
 以上上代御名代、部民設置の外、附近一帯古墳多く中にも南山の千壺・二万の大塚、小山の龍王塚、矢田の大塚、黒宮の大塚の如き著大なるもの。岡田の金剛寺、箭田の吉備寺、吳妹の塔ヶ原及八高堂等の平地伽藍址の存在は當代の開化を證徴するものなり。

坪割 河東及神在村のと同じく「右下隅を起點とする横行平行式」に屬す。但し神在附近の條里は正しく南北の方向を取れるに反し是は河東の廿一度乃至三十度の偏倚をなせるに同じく正に西南方三十度の偏倚を成す。  
 而して末政川、二万、菌、二村の界線矢砂川、箭田、吳妹の二村の界線黒宮東麓の堤防石田の溪流池田川大武川の九條の南北線は皆、各里(相距六町)の境界線を成し末政川より大武川に至る正に四十八町即八里を距つ。  
 尤里の南北の界線明かならず。但、圖版(3) 鍋屋の一坪を以て東南隅と推定したるものなることを告白するに止む。  
 地區又犬牙交錯を極め坪割の復舊到底困難なりとす。  
 備考 曾能郷、日本書紀、應神天皇、廿二年九月十日條「即以苑縣封三浦凝別是苑臣之始祖也」と見ゆ。  
 文政三年庚申尾崎村(吳妹村大字)醫師佐藤佐仲の家の西に在りし老松を伐りしに其の根元より古瓦一枚長一尺三寸幅七寸五分厚一寸を發掘せり。







其文に曰く

備中下道郡八田郷戸主矢田郡益足戸白驪部眺官作買之墓地以天平寶字七年癸卯十一月十六日八田部郷長矢田部益足買地券文。

吉備郡新本村橋本修吾氏所藏古瓦、豎九寸、幅四寸、銘曰、

矢田部首人足、寶龜七年定

下道ノ漢人、西漢人。

仁壽二年十二月紀云。外從五位下大學助教西漢人宗人賜姓滋善宿禰

貞觀五年正月紀云、從五位上行助教滋善宿禰宗人卒、宗人者左京人本姓西漢人備中國下道郡之所貫也云。

女石案に吳服部の所貫なる歟。

と見ゆ。

邇磨郷 和名抄 訓 爾萬

國郡志云、邇磨今二萬村相傳、齊明帝伐新羅皇太子從軍、至此、徵發軍士立得三萬人因名曰三萬郷、本朝文粹引、

備中風土記 帝王編年記 案元慶中、備前磐梨郡、課丁、一千三百餘、赤阪郡課丁一千七百餘、而邇磨一郷得勝兵二萬、頗可疑

蓋因三郷名傳會也。

女石、案に。爾麻は採鑛を業とせし邇磨部の略稱ならん歟、正倉院文書天平十一年備中國大稅負死亡人帳、窪屋郡白

髮部郷、川邊里の部に「戸主、爾麻部宇互、口、爾麻部、大坂麻呂、貳束、天平十一年五月五日死」と見ゆ。爾麻は

邇磨の省文にして爾麻部の略なり、されば邇磨部の職掌如何、石見國に邇磨郡あり、古來銀の産地を以て著はる、

備中國邇磨郷亦古坑存す、今、王公山に西金山、東金山の名存し共に舊銅坑なり。又二万村字山崎矢形附近より大

正六年重石 Tung stan を發掘せり。窪屋郡白髮部郷は今の常盤、清音、山手の各村に亘りたるが又近年重石を發

掘せり、されば今小田、下道、窪屋の各郡に亘れる彌高山（横谷の銅山、服部の金谷）王公山、福山（伊福山の略）

一帯の山脈より古來金銀銅鉛又重石を産し帶江中庄の銅山も亦此の系統に屬せるもの也、石見國邇磨郡は類聚國

史云「仁和元年邇磨郡大領伊福部安道」と、思ふに正倉院文書、類聚國史、延喜式、和名鈔等見ゆる邇磨には採鑛の

意存し、伊福（又略して福、息吹、即吹分くること）に冶金の義ありとみればその關係によりて邇磨の名義、自ら

明瞭となるべし、備前國御津郡金山の南麓に伊福郷あり是れ丹比部の土着地にして冶金に關係ある氏族なるが、清

音村福山（伊福山の略）の西麓、白髮部郷川邊里に邇磨部あり又採鑛冶金業に従事せし部民の遺址なるか。更に正

倉院文書に窪屋郡、白髮部郷（名代）川邊（地理）爾麻部（職業）の三者ありしが白髮部郷の内の川邊里は發達し

て川邊郷となり和名抄には獨立して川邊郷となり下道郡に隸屬す、川邊里の内の爾麻部も亦發達して爾麻の里とな

り爾麻の里更に發達して邇磨郷となれり採鑛冶金の盛況に因れるにや。要之三者皆陞して里又部より逐次、郷とな

りしもの也、邇磨の郷は下道、窪屋、淺口、三郡の交界地にして白髮部、阿智、二郷の相接する所に發達しその各

を分割して建置する所にかゝる。特に白髮部（名代、政治的）川邊（地理交通的）爾麻（職業的）の順序は經濟史

的發達を示すものとして頗る興味あり。

穗北郷、和名抄、訓、保伊多。國郡志、穗北按高山本、北作太其地不詳後有 穗太新編相模風土記引、

女石云、穗北、保木田、ホキタ、轉、ホイタ、穗井田、又穗田、穗太となる。

言海に「ホキ（保木）（岸險）山腹の嶮しき所也」、赤磐郡太田村に保木梅保木あり、御津郡加茂村大字下加茂に字

保木あり吉備郡池田村大字見延に保木あり吳妹村關ヶ鼻に保木嶮あり、皆岸險に據て田園を開拓し又部落を成せり。

穗北（ホキタ）保木田は小田川に近き彌高山脈の險岸に據て開拓せられたる田園、群集せる部落に因て其名起れる歟

秦漢歸化種吳織の本場なりとす。

妙顯寺文書（備中誌所引）に穗太莊見ゆ















鑄錢司を置きて和銅開珍を鑄る。(五六三—八一頁参照)  
虎關紀年録云「夏六月廿五日曆應三年上皇特賜恩詔、獨備  
中州三成郷之官租」と見ゆ當時三成郷は南禪寺領となり、光  
嚴上皇より租を免し給ひし也。

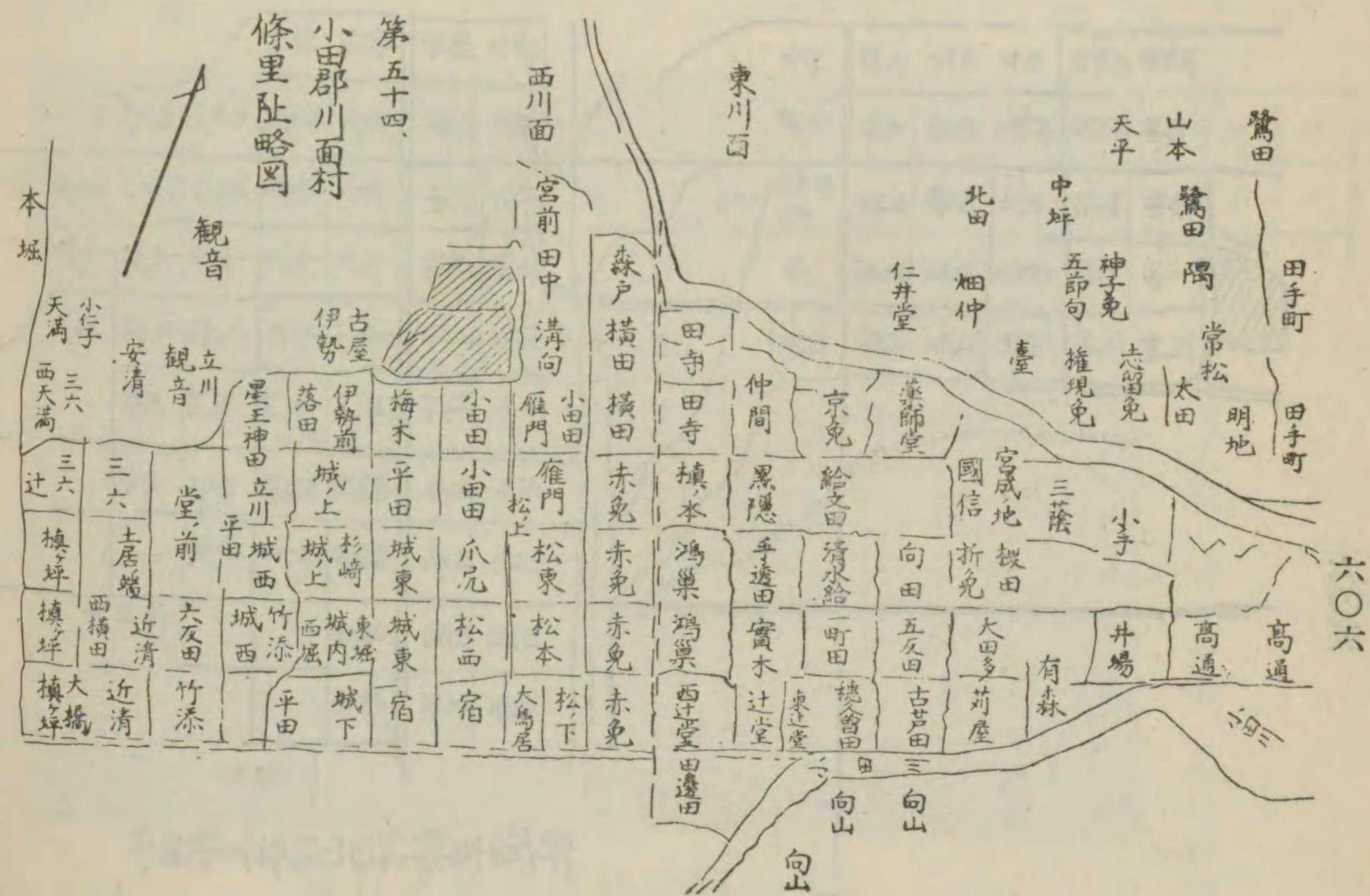
草壁郷 訓、久佐加倍、今、山田村及三谷村大字横谷なり。仁  
德天皇皇子大日本皇子の御名代とす。

太平記延元元年五月條「左馬頭直義朝臣頼浦より陸地を上り  
て備中章壁庄に着し給ふ云々」

驛家郷 今、川面矢掛の二町村に當る。延喜式小田驛馬二十疋  
とあるものは是なり。今、川面村の小田村に接する邊、毎戸の  
地名存す、蓋し馬屋戸又、馬屋所の轉訛なり。

川面村に小田郡家址及式内社鷓江神社あり。中川村大字毎戸  
に小田寺址あり。

坪 割 吉備郡吳妹村大字妹大武川堤防より西すること三十町即  
五里にして大明地に達す更に西二町にして三成川に出づ。三成  
川以東二町より以西、四町の區域を一里とす坪の區劃井然たり  
それより南小田川を越えて里山田に至る一帯の田野皆井然たる  
區劃を存すれども坪名明かならず。而して三谷山田の二村に於  
て條里の遺址は正しく南北の方向を取る。



三成川の山陽國道と會する交叉點の西、十町の點より正北方十二町、西三成字堀に達す、是より西南十二町、星田川  
の美山川に會する點を過ぎる美山川の西岸に沿へる線を東邊として西南方三里即十八町にして本堀川に達す。此、美  
山川、本堀川の間は東西川面村にして圖版に所謂川面村條里址と稱するものは是也。其の西南隅に西天滿三六坪の存す  
るに依て是も亦遠く久米田條里の延長として「右下隅を起點とする横行平行式」の一例なる事を思はしむるもの也。  
而して矢掛以西に於ては東南向約二〇度の偏倚を成すものなり。

備考 三谷、山田、川面、中川の諸村到處大小古墳累々として存す就中奥山田の大塚、西川面の正蓮寺大塚、毎戸の  
小丸山を大なるものとす、鷲峰山捧澤寺、養生山蓮嚴寺、伽藍山等は此間に於ける平安時代の巨刹とす。

【附記】 小田郡家の址

圖版第五十四、川面村條里遺址、西川面の部に字「城の内」と稱する一區あり、方一町にして古の一ヶ坪に當る、其  
の東部を東堀、西部を西堀と稱す、其の北隣を城の上、南隣を城下、東隣を城東、西隣を城西と稱す。

實地に就きて之を調査せしに「城の内」は四方、土壘、即、城壁を繞らせる地域にして奈良平安時代に於ける都城の  
制に成れるもの也、而して土壘の外は四面更に繞らすに幅四十二尺の濠を以てす、而して南方正面、中央幅四間の道  
を通す。城壁、即、土壘は南邊、幅十八尺高五尺餘を完存し、又西邊の北半部、北邊の西半部に於て其の形跡を存す  
自餘皆破壊せらる、廣袤、濠の部分共に東西三百六十四尺、南北四百二十四尺、南北に較々長し、蓋し小田郡家の址  
にして小田郡司世々の館址なり、村上天皇天曆十二月條に見ゆる小田郡大領、小田郡人小田臣遂津、同小田臣豐郷皆  
此に館す。

因に、殘存の土壘も矢掛輕便鐵道の敷設に方りて皆破壊されり。同鐵道線路は郡家址の中央を東西に過りて殆ど  
址を南北に二分せり。遺址の破壊、洵に惜しむべき限なり。

(以上、拙著岡山縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第七、參照)



## 第二十章 國府・國司・國司表

【國衙と國府】 國衙は國司の政務を執る役所を云ふ。國府は王朝以來、國衙の在りし所、當時音便にて「コフ」といひ後世は府中とも稱したり。

備中の國府は和名鈔に「國府、在賀夜郡」とありて、今、吉備郡服部村大字金井戸に在り、字御所の内を中心として東國府・才國府（西國府の義か）南國府・北國府一帯の地なり。

總社記に據れば。備中國府の地は前後三轉せりと云ふ。第一、都窪郡三須村國府屋敷と稱する地。第二、總社町大字井手字清水、國府屋敷土居と稱する邊。第三、服部村大字金井戸御所と稱する邊なり。

備中誌に。「北國府、昔の屋敷跡とて少しの岳（畠か）三反許も有へし藪なども有、また内堀などいふ字の田有古しへ國守の居賜ひし時の遺跡なるべし、里人其地を呼で御所の内と云、又溝手村に國府殿田と云名の田残り、云々」と見ゆ

國衙址。服部村大字金井戸、字御所の邊、方三町許の地にして南邊、東西に通ずる直道に沿ひ東西北の三面は幅約三十間許の外隄を繞らせり。隄外東（長）方に賀陽山門満寺あり。西（乾）方に寶ノ宮及板屋堂あり。

是は附近に於ける條里の遺制を研究したる結果知り得たる所にして其の條里との關係は左の如し。

國衙の位置。久米田ノ里の一ノ坪より正南十二町（二里）を隔てたる窪木ノ里の一ノ坪に至り。其より直西方十二町（二里）目すなはち植木ノ里と天神ノ里との境界線に達す。此の南北線は正に御所址を東西に折半すべき中軸線に當る。

斯くて御所地形の中心南北軸線及其の前面南邊東西に通ずる直道との交叉線は條里の境界線と全然一致せること。御所前面南邊を東西に通ずる道路は御所に沿へる限りに於て一直線を成せども御所の中央南北軸線との交叉點より東西各々二町許の所に於て屈折せること。

御所の中心南北軸線より東西各一町半許の縁邊に沿ひて幅約半町許の低窪地あり蓋し周隄の遺址なり。特に東邊のもの

最著しく今は宮妹川の下流をなせること。

東西に於ける低窪地の盡くる邊すなはち御所の南北中軸線より東西各二町を距る縁邊線と其南邊線との直交する地點は御所南邊東西直道路の屈折點と殆ど相一致せること。

而して東西各幅半町の外隄を除けば正に三町四方の御所敷地となり其東西北の三邊に外隄を繞らせしものなること歴々追跡し得ること。

因みに御所地形の方形長方形いづれかに就いては現存の北邊地形の判明を缺ぐが故に如何とも決定し難き所なれども姑らく平城京大内裏の方形なるに準據して方形なるものと推定して之を三町四方のものとして考定せり。

以上の理由に據りて國衙の設置は條里制施行以後に於て條里に準據して其の地形を劃せしものと考へらるること。隄外東方（長位）に賀夜山門満寺あり。鬼門の鎮護にや、西方（乾位）に寶ノ宮及板屋堂あり、天門の鎮守にや。考ふべし。（服部附近に於ける條里の遺址 参照）

## 國司

【概説】 朝廷より諸國におきたる地方官にして國衙に在りて政務を司れる四部官、即ち守介掾目の總稱なり、「クニノツカサ」ともよむ、又國宰とも書く、上古「クニノミコトモチ」と云ふ、勅を奉じて地方に至り國政を行ふを云ふ。守は一國の政務を統轄し、神社、戸口、簿帳、孕養百姓、勸課農桑、糺察所部、貢舉、孝義、田宅良賤、訴訟、租調、倉廩、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵驛、傳馬、烽候、牧城、過所、公私馬牛、闕遺雜物、寺僧尼の名籍等の事を掌る。介は守を助け、掾は國內を糺判し、文案を審署し、稽失を勾へ、非違を察す。目は事を受けて上抄し、文案を勸署し、稽失を檢出し、公文を讀申す。史生は其の下に在りて、公文を繕寫し、官人の許に行きて文案の署を取る事を掌る。此外陸奥出羽越後等の蝦夷に接する國は、饗給、征討、斥候を。壹岐・對馬・日向・薩摩・大隅等の外國に近き國は、鎮押、防守、蕃客歸化の事を兼ね。伊勢・美濃・越前の三關國にては關及び關契の事を併せ掌る。又諸國司共に大



瑞、運機、災異、疫病、境外の消息を言上し、朝集使、貢調使等の使となりて上京し、郡司軍團少毅以上の功過を録し、國守は又特に介以上の功過を録して治部に送る等の務あり。

國の大小によりて職員を増減あり、備中國は上國なるを以て、守一人、從五位下、權守介一人、從六位上、權介掾一人、從七位上、權掾目一人、從八位下、史生四人(令制三人)、守、受領とも云ふ。

權守一人正員京都に在りし時、代て事務を取扱ふ、後世には遙授の官となり、參議、二三位中將、少納言等兼任す、又殿上人の六位藏人叙爵せられし後、權守に任ずる例なり、又中納言以上貶謫の時、配所の權守に任ずる例なり、又員數も國により二人以上ありし事本朝世紀に見えたり。介一人、守居らざる時は吏務を總裁するを以て知行國の介等は守と稱する事往々あり、五位にて介となりしものを大夫介と云ふ。權介守と同じく初めは正員の代に事務を取りしが、後に遙任となりて、辨官近衛中少將等之を兼任す、員數も固一人なりしが後には二人より數人の多きに到る、此の外に揚名介あり。

掾、大小各一人、大上國には權掾あり、マツリゴトヒトとよむ、目大小あり、サクワンとよむ、史生三人、此外後世に國司代、目代、總檢校、厩別當等あり、又大帳所、稅所、田所、朝集所等の役所ありて役人あり事を取扱ふ。

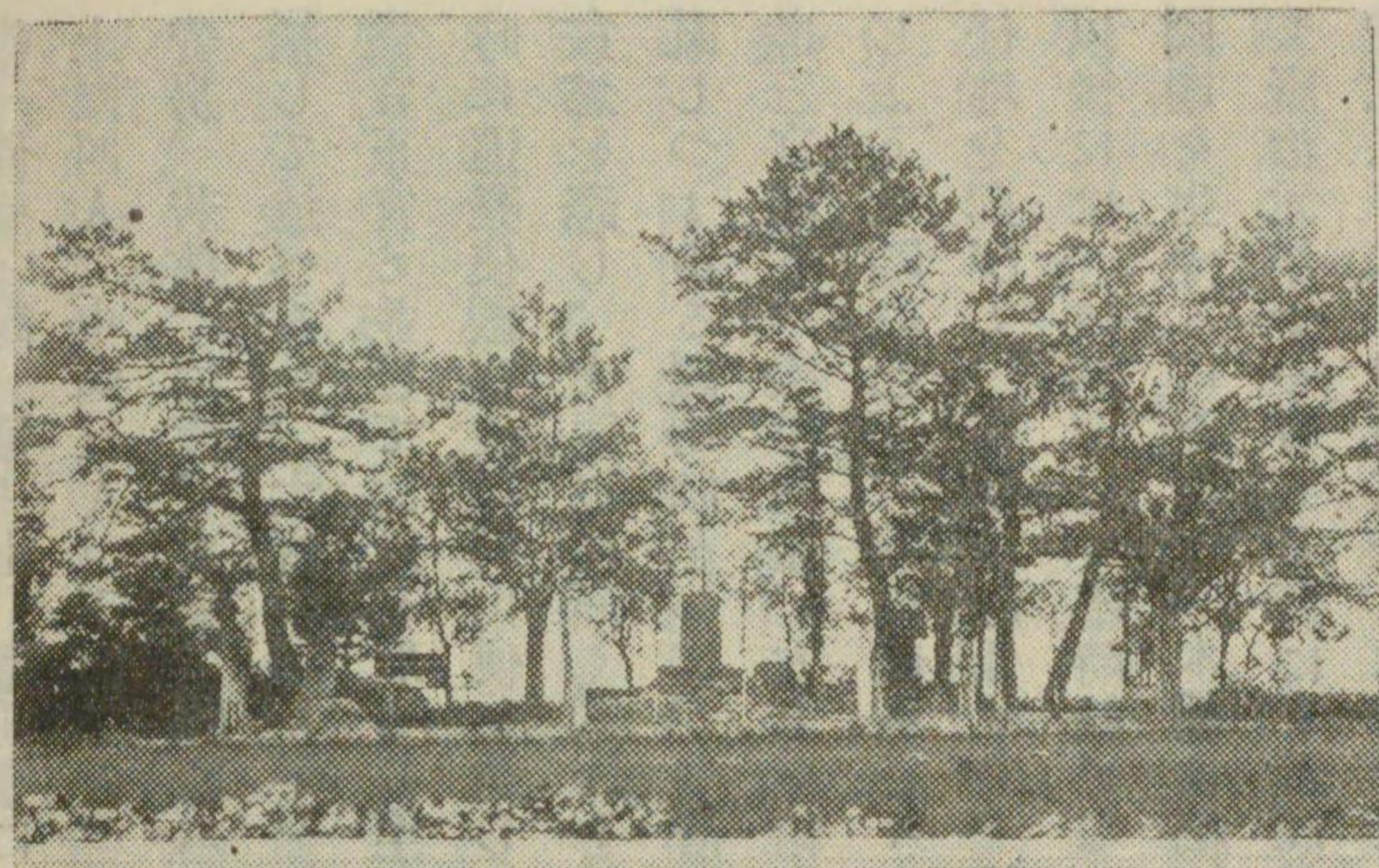
國宰の見えたるは、神功皇后元年一人を留めて新羅宰とせしを始めとす、次に仁德天皇六十二年五月の條に、遠江國司大井川流木を奏上せし事あり、國司の見ゆる始めなり。雄略天皇七年八月田狹を任那國司とし、清寧天皇紀に播磨國、崇神天皇の代、河内國司あり、聖德太子の憲法に國司國造百姓を歛する勿れとあり、皇極天皇二年十月國司に勅して、治政を慎ましめたる事あれば、大化以前に國司を置かれし事明なり、孝德天皇大化元年新に始めて國司を東國に置き、翌年之を畿内に置しより漸次諸國に置き、終に大寶に至りて其制度大に備はり職員も右に述る如く定められたり。

大寶の制史生三人なりしが、神龜五年八月大國四人、上國三人、中下國二人とし、博士は三四國に一人、醫師は毎國に補す、寶龜六年三月勢、遠、武、下總、濃、奥、越前、播、肥後等に小目を二人、參、駿、野、越中、但馬、因、伯、

作、備中、阿、豫、土、豊前等に大小目を二人とし、常陸に少掾二人少目二人を置く。寶龜十年閏五月史生大國五人、上國四人、中國三人、下國二人、博士醫師毎國に各一人を置く。其後掾目等諸國に増置ありて、貞觀七年以後には志摩安房、若狹、佐渡、大隅、薩摩六國を除く外中國にも介、下國にも掾あるに至れり。以上は専ら職員の異同なるが、概括して述べんか、大寶の制も年を経るに隨ひ漸次弊害を生じ、天平中より員外官を生じて遙任の端を開き、延曆中より權官正官と並びて國政を取るに至りて、制度漸く亂れ、國司等は地利を貪り官物を掠めて、政治を怠る、是を以て朝廷時に巡察使觀察使勸解由使を遣して、政治の當否善惡を觀察せしめたり、然れども滔々たる天下の國司等皆私利に傾き貪慾を恣し、大同以往漸く調庸を輸せず、缺員未納を填補する能はざるに至る、此の如き時に當りて、年給行はれ、紊亂しつゝある國司制をして、一層混亂ならしめたり、即ち延曆中以後親王給起り、貞觀の初め、三宮以下公卿に給ひ、准三宮起り、次で内給、太上皇給出で、長保二年中宮を置き、同じく年給を賜ひ、正曆二年東三條院に年官年爵を賜ひしより女院給起り、其の給數益々多く長徳以後は地方官の任命は大概年給によりて就任せられたり、是を以て國司等は任地を撰びて、容易に赴任せず、任符を受けず、名替國替を望むの弊を生じ、或は任符返上の害を醸したり。承保承暦以後には、成功を以て臨時給となり申任じたり、是に於て賣官賣爵起り、大寶の制全く破壊せられ、一國一時に數人の國司を生ずるに至れり。本朝世紀治曆四年十一月二十一日の條には近江守二人、掾十四人、備中守二人、掾十人あり。又康治元年十一月九日條にも近江丹波の少掾數人あり、又保元三年三月二十三日の肥前河上古文書には權介十人あり。安元二年六月の同文書には介十三人あり、其他嘉應文治建久の文書にも多く散見せり。源賴朝朝府を鎌倉に開き、諸國の公田庄園を論せず、守護地頭を置くに及び、國司の勢力頓に衰へ、終に朝廷の威令洽く行はれざるに至り、終に名國司出で揚名介等の有名無實の者となるに至れり。建武中興、醍醐天皇力を地方の政治に用ひ給ひ、國司を任命し、上總常陸下野の外、陸奥國を親王の任國とし義良親王を以て大守となされしも幾くもなくして戰亂となり、其制行はれず、南北朝時代には國司の制全く滅びて、實際其人なく作名のもの多し、例へば園大曆に山邊高松、藤井花房、山風香有、



吉野花盛とあるが如し。○年限は大寶の制六年とし、慶雲二年二月改めて四年とし、天平寶字二年令制に復し、寶龜八年四年とす、十一年九州は遠國なれば特に五年とす、大同二年又六年に復す、但史生は四年とす、弘仁六年四年とす、天長元年 介以上を六年となす、承和二年三月又四年とし、大宰府鎮守府陸奥出羽兩國官人は五年となし、以後永式となる。(令義解、三代格、延喜式、國司制變遷、年給考)



備中國府趾(村部服)

備中國府遺趾之碑 正三位勳一等大養毅題額  
延喜式云 備中國府在賀夜郡距京師行程上九日下五日海路十二日管九郡七十二鄉 郡鄉考云 今八部鄉有國府名曰北國府南國府按其間所謂御所地即古國廳趾也。趾西十餘町有總社明神祀備中國古社三百二十四蓋歷代國司所尊崇也。御所者今屬吉備郡服部村、余就而覽之方可三町南沿大遠東西北三面繞以湟幅三十間地形劃然合古條里之制焉、夫吉備者天下之雄鎮方大化改新與倭京東國筑紫竝爲四大政區而備中國府實爲其本據、天武朝有太宰石川王、文武朝有總領上野小足治焉、爾來閱年七百歷代國司無慮五百有餘咸忠良恪勤敷化施德文武盛名顯於一世矣、嗚呼不亦隆乎哉、頃鄉人胥謀欲標四至勒貞珉永彰遺蹟徵文於余乃記其梗概云爾

大正十五年孟秋

從六位 永山卯三郎撰  
桂南 大原專次郎書

備中國司表

天皇	皇紀	年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
天武	一三三	元	吉備國守	當麻公廣島			書紀	天武元年六月爲樺使主盤手被殺
文武	一三四	八	吉備太宰	石川 王			書紀	八年三月巳丑病之薨於吉備
元明	一三五	三	吉備總領	總領上野 小足 葦原已未任			續紀	
元正	一三六	和銅元	播磨守從四下	多治比吉備 三月叙			續紀	
聖武	一三七	養老三	從五下勳十二	石川 賀美 見			續紀	
孝謙	一三八	天平二	從五上	息長 名代 八月			續紀	
淳仁	一三九	寶字二	從五下	日根 諸人 天平七年見			續紀	
稱德	一四〇	神護二	從五下	粟田 馬養 十一月			續紀	
光仁	一四一	景雲二	從五下	藤原 魚名 四月			續紀	
	一四二	寶龜元	從五下	茨田 牧野 五月			續紀	
	一四三		從五上	藤原 繩麻呂 十一月			續紀	
	一四四		外從五下	道 守 王 正月			續紀	
	一四五		從五下	葛井 根主 正月			續紀	
	一四六		從五下	石川 真人 二月			續紀	
	一四七		從五下	阿倍 草麻呂 二月			續紀	
	一四八		從五下	文室 高島 八月			續紀	
	一四九		從五下	藤原 中男磨 四月			續紀	
	一五〇		從五下	大曆 中臣繼 三月			續紀	
	一五一		從五下	大神 末足 三月			續紀	



第二編 中古

天皇	皇紀年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
桓武	一四八六 天應元	外從五下	阿倍志斐東人	八月		原據	六一四
	一四八七 延曆二	從五下	藤原園人	五月		續紀	
	一四八八 延曆三	從五下	榮井道形	二月			
	一四八九 延曆四	從五下	紀安提	二月			
	一四九〇 延曆五	從五下	下毛野年繼	二月			
	一四九一 延曆六	從五下	岡田王	正月			
	一四九二 延曆七	從五下	菅原清公	正月		大系圖	菅原古人男
	一四九三 延曆八	從五下	秋篠安人	正月		後紀	
	一四九四 延曆九	從五下	藤原諸主	正月		後紀	
	一四九五 延曆十	從五下	安倍直勝	四月見		後紀	
	一四九六 延曆十一	從五下	藤原冬嗣	正月		大系圖	
	一四九七 延曆十二	從五下	藤原眞夏	九月任權官		後紀補任	
	一四九八 延曆十三	從五下	巨勢野足	十月		後紀補任	
	一四九九 延曆十四	從五下	秋篠安人	七月		後紀補任	
	一五〇〇 延曆十五	從五下	藤原眞成	正月		後紀補任	
	一五〇一 延曆十六	從五下	廣井眞成	正月		後紀補任	
	一五〇二 延曆十七	從五下	大中臣智治麻呂	正月		後紀補任	
	一五〇三 延曆十八	從五下	小野諸野	七月		後紀	
	一五〇四 延曆十九	從五下	南淵弘直	正月		後紀	
	一五〇五 延曆二十	從五下	文室弟直	五月任權官		後紀	
	一五〇六 延曆二十一	從五下	紀深江			後紀	
	一五〇七 延曆二十二	從五下	藤原常嗣			後紀	
仁明	一四九四 承和元						

天皇	皇紀年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
文德	一四九四 元	從五下	豐前王	任權官		三代實錄	
	一四九五 元	從五下	藤原春津				
	一四九六 元	從五下	大江音人				
	一四九七 元	從五下	小野千株	九月			七年八月又任
	一四九八 元	從五下	百濟河成	六月見			
	一四九九 元	從五下	紀長江	七月			尋罷
	一五〇〇 元	從五下	良岑宗貞	正月			
	一五〇一 元	從五下	春澄善繩	正月			嘉祥元年言爲守
	一五〇二 元	從五下	藤原近主	二月			二月罷
	一五〇三 元	從五下	藤原貞守	正月			
	一五〇四 元	從五下	春澄善繩	二月			
	一五〇五 元	從五下	源安	正月			仁壽三年四月卒
	一五〇六 元	從五下	源行平	正月任權官			齊衡元年言爲介
	一五〇七 元	從五下	源多	七月			
	一五〇八 元	從五下	藤原秋緒	正月			大系圖
	一五〇九 元	從五下	藤原秋緒	正月			大日本史
	一五一〇 元	從五下	源元	正月			大日本史
	一五一一 元	從五下	源元	正月			仁明皇子
	一五一二 元	從五下	源元	正月			
	一五一三 元	從五下	源元	正月			
	一五一四 元	從五下	源元	正月			
	一五一五 元	從五下	源元	正月			
	一五一六 元	從五下	源元	正月			
	一五一七 元	從五下	源元	正月			
	一五一八 元	從五下	源元	正月			
	一五一九 元	從五下	源元	正月			
	一五二〇 元	從五下	源元	正月			
	一五二一 元	從五下	源元	正月			
	一五二二 元	從五下	源元	正月			
	一五二三 元	從五下	源元	正月			
	一五二四 元	從五下	源元	正月			
	一五二五 元	從五下	源元	正月			
	一五二六 元	從五下	源元	正月			
	一五二七 元	從五下	源元	正月			
	一五二八 元	從五下	源元	正月			
	一五二九 元	從五下	源元	正月			
	一五三〇 元	從五下	源元	正月			
	一五三一 元	從五下	源元	正月			
	一五三二 元	從五下	源元	正月			
	一五三三 元	從五下	源元	正月			
	一五三四 元	從五下	源元	正月			
	一五三五 元	從五下	源元	正月			
	一五三六 元	從五下	源元	正月			
	一五三七 元	從五下	源元	正月			
	一五三八 元	從五下	源元	正月			
	一五三九 元	從五下	源元	正月			
	一五四〇 元	從五下	源元	正月			
	一五四一 元	從五下	源元	正月			
	一五四二 元	從五下	源元	正月			
	一五四三 元	從五下	源元	正月			
	一五四四 元	從五下	源元	正月			
	一五四五 元	從五下	源元	正月			
	一五四六 元	從五下	源元	正月			
	一五四七 元	從五下	源元	正月			
	一五四八 元	從五下	源元	正月			
	一五四九 元	從五下	源元	正月			
	一五五〇 元	從五下	源元	正月			
	一五五一 元	從五下	源元	正月			
	一五五二 元	從五下	源元	正月			
	一五五三 元	從五下	源元	正月			
	一五五四 元	從五下	源元	正月			
	一五五五 元	從五下	源元	正月			
	一五五六 元	從五下	源元	正月			
	一五五七 元	從五下	源元	正月			
	一五五八 元	從五下	源元	正月			
	一五五九 元	從五下	源元	正月			
	一五六〇 元	從五下	源元	正月			
	一五六一 元	從五下	源元	正月			
	一五六二 元	從五下	源元	正月			
	一五六三 元	從五下	源元	正月			
	一五六四 元	從五下	源元	正月			
	一五六五 元	從五下	源元	正月			
	一五六六 元	從五下	源元	正月			
	一五六七 元	從五下	源元	正月			
	一五六八 元	從五下	源元	正月			
	一五六九 元	從五下	源元	正月			
	一五七〇 元	從五下	源元	正月			
	一五七一 元	從五下	源元	正月			
	一五七二 元	從五下	源元	正月			
	一五七三 元	從五下	源元	正月			
	一五七四 元	從五下	源元	正月			
	一五七五 元	從五下	源元	正月			
	一五七六 元	從五下	源元	正月			
	一五七七 元	從五下	源元	正月			
	一五七八 元	從五下	源元	正月			
	一五七九 元	從五下	源元	正月			
	一五八〇 元	從五下	源元	正月			
	一五八一 元	從五下	源元	正月			
	一五八二 元	從五下	源元	正月			
	一五八三 元	從五下	源元	正月			
	一五八四 元	從五下	源元	正月			
	一五八五 元	從五下	源元	正月			
	一五八六 元	從五下	源元	正月			
	一五八七 元	從五下	源元	正月			
	一五八八 元	從五下	源元	正月			
	一五八九 元	從五下	源元	正月			
	一五九〇 元	從五下	源元	正月			
	一五九一 元	從五下	源元	正月			
	一五九二 元	從五下	源元	正月			
	一五九三 元	從五下	源元	正月			
	一五九四 元	從五下	源元	正月			
	一五九五 元	從五下	源元	正月			
	一五九六 元	從五下	源元	正月			
	一五九七 元	從五下	源元	正月			
	一五九八 元	從五下	源元	正月			
	一五九九 元	從五下	源元	正月			
	一六〇〇 元	從五下	源元	正月			
	一六〇一 元	從五下	源元	正月			
	一六〇二 元	從五下	源元	正月			
	一六〇三 元	從五下	源元	正月			
	一六〇四 元	從五下	源元	正月			
	一六〇五 元	從五下	源元	正月			
	一六〇六 元	從五下	源元	正月			
	一六〇七 元	從五下	源元	正月			
	一六〇八 元	從五下	源元	正月			
	一六〇九 元	從五下	源元	正月			
	一六一〇 元	從五下	源元	正月			
	一六一一 元	從五下	源元	正月			
	一六一二 元	從五下	源元	正月			
	一六一三 元	從五下	源元	正月			
	一六一四 元	從五下	源元	正月			
	一六一五 元	從五下	源元	正月			
	一六一六 元	從五下	源元	正月			
	一六一七 元	從五下	源元	正月			
	一六一八 元	從五下	源元	正月			
	一六一九 元	從五下	源元	正月			
	一六二〇 元	從五下	源元	正月			
	一六二一 元	從五下	源元	正月			
	一六二二 元	從五下	源元	正月			
	一六二三 元	從五下	源元	正月			
	一六二四 元	從五下	源元	正月			
	一六二五 元	從五下	源元	正月			
	一六二六 元	從五下	源元	正月			
	一六二七 元	從五下	源元	正月			
	一六二八 元	從五下	源元	正月			
	一六二九 元	從五下	源元	正月			
	一六三〇 元	從五下	源元	正月			
	一六三一 元	從五下	源元	正月			
	一六三二 元	從五下	源元	正月			
	一六三三 元	從五下	源元	正月			
	一六三四 元	從五下	源元	正月			
	一六三五 元	從五下	源元	正月			
	一六三六 元	從五下	源元	正月			
	一六三七 元	從五下	源元	正月			
	一六三八 元	從五下	源元	正月			
	一六三九 元	從五下	源元	正月			
	一六四〇 元	從五下	源元	正月			
	一六四一 元	從五下	源元	正月			
	一六四二 元	從五下	源元	正月			
	一六四三 元	從五下	源元	正月			
	一六四四 元	從五下	源元	正月			
	一六四五 元	從五下	源元	正月			
	一六四六 元	從五下	源元	正月			
	一六四七 元	從五下	源元	正月			
	一六四八 元	從五下	源元	正月			
	一六四九 元	從五下	源元	正月			
	一六五〇 元	從五下	源元	正月			
	一六五一 元	從五下	源元	正月			
	一六五二 元	從五下	源元	正月			
	一六五三 元	從五下	源元	正月			
	一六五四 元	從五下	源元	正月			
	一六五五 元	從五下	源元	正月			
	一六五六 元	從五下	源元	正月			
	一六五七 元	從五下	源元	正月			
	一六五八 元	從五下	源元	正月			
	一六五九 元	從五					







天皇

皇紀 年號 官位

等 氏 名

任命月日

轉免月日

原據

六一八 考

朱雀

一五九〇 延長八  
一六〇一 天慶四  
一六〇三 天慶五

葛井清明 七月十六日  
小野好古 七月十六日  
藤原在衡 十二月  
藤原俊房 五月  
和氣兼清 七月任權官  
藤原朝成 六月見權官

符宣抄  
大系圖

村上

一六〇七 天曆元  
一六〇八 二

三統公忠 六月見權官  
藤原博古  
小野好古 閏肖任權官 天德二年罷職再任正

日本紀竟宴和歌集  
魚魯愚抄 一作兼濟  
補任

年不明

一六〇九 年不明

藤原棟利 九月  
藤原清通 九月  
藤原朝忠 正月  
藤原朝成 正月任權官

大系圖

年不明

一六〇六 年不明

藤原惟正 九月  
藤原朝成 正月任權官

大系圖

天德二

一六〇八 天德二 從四上

藤原朝成 正月任權官  
藤原朝成 正月任權官

補任

應和元

一六〇二 應和元

源重信 正月  
源延光 正月任權官

補任

年月不明

一六〇三 年月不明

藤原伊尹 正月  
藤原為雅 正月任權官

補任

康保元

一六〇四 康保元

藤原重光 正月任權官  
藤原元輔 三月任權官

大系圖

考

圓融

一六〇五 年月不明  
一六〇二 天祿二

藤原懷忠 正月任權官  
藤原助信 正月  
藤原朝光 正月任權官

新撰古今和歌集別之部  
補任

年月不明

一六〇四 年月不明

藤原懷忠 正月  
藤原知光 正月

大系圖

貞元二

一六〇七 貞元二

藤原道隆 正月任權官  
藤原懷忠 正月廿八日再任

補任

天元二

一六〇九 天元二

藤原道隆 正月廿九日再任  
藤原道隆 正月廿九日再任

補任

天元三

一六〇〇 天元三

辛人公道直 任權少目  
橋道時 續詞花集

大系圖

年月不明

一六〇二 年月不明

橋輔政 三月  
藤原中清 三月

大系圖

寬和元

一六〇五 寬和元

藤原季信 任權官  
藤原忠清 正月廿八日任權官

大系圖

永延二

一六〇八 永延二

藤原為雅 正月  
藤原伊周 二月任權官

補任

永祿元

一六〇九 永祿元

藤原為雅 正月  
藤原伊周 二月任權官

大系圖

元

一六一〇 元

大春日良辰 五月見權官

補任

第二編 中古

長保中大春日遠晴長徳あり典  
藥允となる  
六一九

良兼孫武家四天王の一寛弘八  
年十二月卒又作兼雅















天皇

第二編 中古

官位

皇紀年號	年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
一七二	永久元	二	源顯圓	五月任權官			
一七三	永久元	二	藤原爲房	正月任權官	三年四月薨		
一七四	永久元	二	藤原重通	正月任權官			
一七五	永久元	二	藤原宗隆	十一月見			
一七六	永久元	二	藤原顯業	正月任權官			
一七六	永久元	四	源雅定	正月			
一七六	永久元	四	山信光	正月任大掾			
一七六	永久元	四	百濟宗光	正月任少掾			
一七六	永久元	四	秦延國	正月任少目			
一七六	永久元	四	藤井行里	正月任大掾			
一七六	永久元	五	惟宗章貞	正月見大掾			
一七八	元永元	元	藤原忠宗	正月任權官			
一七八	元永元	元	源顯雅	正月任			
一七九	元永元	二	正盛	八月見			
一八一	保安二	二	藤原通季	正月任權官			
一八一	保安二	二	藤原成通	正月廿四日			
一八一	保安二	二	平羣重光	正月任大掾			
一八一	保安二	三	上毛野助國	正月任大目			
一八三	保安二	四	藤原師時	正月任權官			
一八三	保安二	四	藤原長親	六月			
一八三	保安二	四	藤原經定	十一月			
一八三	保安二	四	藤原教長	十月任權官			

崇德

皇紀年號	年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
一八四	天治元	守	藤原敦兼	十月見			
一八六	天治元	守	藤原忠隆	十二月四日任			
一八七	天治元	掾	中原師長	正月任少掾			
一八八	天治元	守	藤原伊通	正月任權官			
一八八	天治元	守	藤原宗能	正月廿四日任			
一九一	天承元	守	藤原家長	十二月			
一九二	長承元	守	藤原成通	正月廿三日任權官			
一九二	長承元	守	藤原經宗	正月			
一九五	元	守	藤原公教	正月任權官			
一九七	保延三	守	藤原經定	正月任少目			
一九七	保延三	守	藤原忠基	正月任權官			
一九七	保延三	守	藤原經忠	正月			
一九七	保延三	守	藤原爲通	正月			
一九九	五	守	藤原顯業	正月廿五日任權官			
一九九	五	守	藤原光賴	十二月			
一八〇	永治元	守	藤原定隆	十二月三日任			
一八〇	永治元	守	藤原資經	正月任權官			
一八〇	永治元	守	藤原資信	正月任權官			
一八〇	久安元	守	安部富吉	正月任少目			
一八〇	久安元	守	藤原俊通	正月廿二日			
一八五	元	守	藤原(名欠)	八月見權官			

近衛

第二編 中古

大藏卿

大治元年十二月爲但馬守

久安六年正月爲但馬守仁安元年六月又自十月職

前守伊通の弟

又作八月卅日兼任右大臣雅實二男

右大臣家忠二男

中宮大夫宗通四男

大納言經實男  
大納言忠教男

修理大夫基隆男

中宮大夫宗通男

權大納言實行男

右少辨俊信男

又作保延二年十二月廿日任權中納言顯賴男  
猶間中納言清隆男

又作七月廿三日任參議顯實男















第二編 中古

天皇 皇紀 年號 官位

龜山 一九〇〇 正元二 守 藤原顯雅 十月五日任

一九〇一 文應元 從三位 介 藤原經資 七月七日任

一九〇二 弘長三 守 藤原行有 正月見

一九〇三 文永元 守 藤原通世 正月七日任

一九〇四 守 藤原範藤 正月七日任

一九〇五 守 藤原宗氏 正月廿日

一九〇六 守 藤原雅言 二月任權官

一九〇七 守 藤原具房 正月七日任權官

一九〇八 守 藤原具房 七月任權官

一九〇九 守 藤原丹波 十一月

一九一〇 守 藤原具氏 正月七日任權官

一九一一 守 藤原俊通 正月七日任權官

一九一二 守 藤原家教 正月任權官 弘安二年三月罷

一九一三 守 藤原朝房 正月任權官

一九一四 守 藤原宗嗣 正月任權官

一九一五 守 藤原賴親 正月七日任權官 六年三月罷

一九一六 守 藤原通重 正月七日任權官 十月罷

一九一七 守 藤原教定 七月十日任

一九一八 守 藤原公尹 七月十日任

一九一九 守 藤原爲通 三月任權官 三年十二月罷

一九二〇 守 藤原爲通 七月任權官

六三四 考

原據

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

補任

轉免月日

十月五日任

七月七日任

正月見

正月七日任

正月廿日

二月任權官

正月七日任權官

七月任權官

十一月

正月七日任權官

正月七日任權官

六月三日罷

十月罷

三年十二月罷

七月十日任

七月十日任

三月任權官

七月任權官

第二編 中古

天皇 皇紀 年號 官位

永仁二 一九五四 守 藤原通嗣 正月七日任權官

一九五五 守 藤原冬房 正月七日任權官

一九五六 守 藤原忠朝 正月任權官 十二月罷

一九五七 守 藤原爲俊 十二月

一九五八 守 紀文篤 十二月

一九五九 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六〇 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六一 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六二 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六三 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六四 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六五 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六六 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六七 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六八 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九六九 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七〇 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七一 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七二 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七三 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七四 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七五 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七六 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七七 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七八 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九七九 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八〇 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八一 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八二 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八三 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八四 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八五 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八六 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八七 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八八 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九八九 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九〇 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九一 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九二 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九三 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九四 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九五 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九六 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九七 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九八 守 藤原實時 正月爲近江權守

一九九九 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇〇 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇一 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇二 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇三 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇四 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇五 守 藤原實時 正月爲近江權守

二〇〇六 守 藤原實時 正月爲近江權守

六三五



第二編 中古

天皇	皇紀	年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
	一九六	從五位下	從五位下	菅原宗長	七月見權少掾		正安大嘗會記	
	一九六	從五位下	從五位下	紀文家	七月見權少掾		正安大嘗會記	
	一九六	從五位下	從五位下	清科重資	七月見權少掾		正安大嘗會記	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原經繼	言升合任權官	三年十二月罷	補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原顯資	言升合任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原公敏	言升合任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	秦光行	春任大掾		補任	權大納言經親男
	一九六	從五位下	從五位下	平親時	言升合任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原公修	言升合任權官	四月罷	補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原氏忠	言升合任權官	元亨三年正月罷	補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原廣通	言升合任權官		補任	參議有通男
	一九六	從五位下	從五位下	道知	正月		補任	又作正中二年五月任
	一九六	從五位下	從五位下	源時通	正月任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原賴教	四月	九月罷	補任	
	一九六	從五位下	從五位下	源有賴	言升合任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原實顯	言升合任權官	十一月罷	補任	
	一九六	從五位下	從五位下	清原賴元	言升合任權官		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	藤原實繼	三月任權官	十月罷	補任	大系圖
	一九六	從五位下	從五位下	佐々木	八月見		補任	正四位下良枝男貞治六卒年七十六
	一九六	從五位下	從五位下	義直	二月見		補任	
	一九六	從五位下	從五位下	陶山高通	三月		補任	

後村上

天皇	皇紀	年號	官位	氏名	任命月日	轉免月日	原據	備考
	一九九	建武二	從五位下	陶山清房	五月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	佐々木時信	八月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	羽川時房	十一月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	武藤資時	四月見權官		補任	
	一九九	建武二	從五位下	得能通繩	五月見		補任	一作通益
	一九九	建武二	從五位下	秋月教宣	五月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	源有光			補任	
	一九九	建武二	從五位下	熊谷	二月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	藤原長光	言升合任權官	曆應三年七月罷	補任	
	一九九	建武二	從五位下	藤原雅顯	三月任權官		補任	
	一九九	建武二	從五位下	藤原忠季	言升合任權官		補任	
	一九九	建武二	從五位下	藤原宗繼	言升合任權官		補任	
	一九九	建武二	從五位下	池上藤有	正月		補任	
	一九九	建武二	從五位下	長久信	七月見		補任	
	一九九	建武二	從五位下	平重知	八月任權官		補任	
	一九九	建武二	從五位下	平末次	二月		補任	
	一九九	建武二	從五位下	三國致望	二月		補任	
	一九九	建武二	從五位下	平先商	十二月		補任	
	一九九	建武二	從五位下	藤井景成	三月任權官		補任	







第二編 中古

天皇	皇紀	年號	官位	等	氏名	任命日	轉免日	原據	備考
天智	二二五	文安二	介	藤原	定嗣	三月廿日任		補任	內大臣持忠男
	二二〇	寶德二	守	藤原	永豐	三月廿日任		補任	
	二二四	享德三	守	藤原	公澄	三月廿日任		補任	
	二二八	長祿二	守	源	敦親	三月廿日任		補任	
	二二九	三	介	藤原	實隆	三月廿日任		補任	內大臣公保男
後奈良	三九	天文八	守	藤原	永家	三月廿日任		補任	
	三〇三	一二	守	藤原	宣治	三月廿日任		補任	大納言宣秀男
	三〇九	一八	守	藤原	賴房	三月廿日任		補任	參議賴嗣男

以上五百九十三人大日本國司表を主とし更に六國史、公卿補任、大系圖、また備中誌を以て之を増補せり。是、備中國府在廳或は遙授兼任、重任の人々守介掾目の氏名概ね之を列挙したり異同混雜せるもの又多かるべし。

鎌倉の右大將頼朝が守護地頭を設置せられて後、國司は次第に衰へ守介の名も自ら空しくなりて會々其國に守たるも陪臣被官の僭號と變りぬ。されば伊勢氏二階堂氏など其はしめ一ひ此國に任せられしより遂に空名ながら代々の通稱となりたるもあり、又三村家親、庄爲資、穂井田元清などの如く其の國に居て私かに稱せしも有べし。仍て鎌倉以後武家の此國を名とせるものを列記し王朝時代の國司との區別を明かにす。

武家時代に於ける備中國司名を帶ぶる人々一覽。

官位	等	氏名	原據	備考
從五下	守	平師盛	東鑑	平重盛男
	守	平經盛	東鑑	
	守	源行家	東鑑	
	守	二階堂行有	大系圖	出羽守行義男

官位	等	氏名	原據	備考
守	佐々木時親	大系圖	備中守時重男	伊勢(平)盛定 武家評定傳 盛久の男
守	二階堂行敦	大系圖	備中守時藤男	伊勢(平)貞國 武家評定傳 貞行男
守	平朝房	大系圖	武藏守朝直男	伊勢貞親 武家評定傳 貞國男 文明五年正月卒
守	佐々木義信	大系圖	備中守時親男	伊勢貞藤 武家評定傳 貞親弟
守	二階堂景綱	大系圖	下野守賴綱男	伊勢貞宗 武家評定傳 貞親の男
守	佐々木親胤	大系圖	親信男	伊勢貞辰 武家評定傳 貞藤の子貞職男
司	二階堂貞藤	元徳二年 叡山行幸記		武家評定傳 伊勢守貞隆男
守	佐々木秀親	大系圖	備中守親胤男	
守	佐々木持綱	大系圖	備前守持信男	
守	佐々木高秋	大系圖	貞滿男	
守	木梨(平)光胤	大系圖	民部丞爲平男	
守	佐々木滿高	大系圖	尾張守氏頼男	以上 三十名

通じて六百餘名の内、九十二名に就きて一行傳を附し國司略傳として之を收載したり。是れ概ね大日本史載する所にして皆忠良恪勤化を敷き徳を施して文武盛名一世に顯はるるもの也。特に藤原園人、藤原保則、三善清行の三人は各々異彩を放てる良二千石の典型たり、仍て此章末に園人を傳し他二人は別に各一章を立つることとせり。

【附】國司略傳。(大日本史列傳に據る)

氏名 略 傳

鴨吉備鷹( ) 刑部判事たり。大寶中遣唐中使、支蕃頭、國守按察使たり。

藤原魚名(三三―四三) 房前の子、正二位左大臣に至る誠忠恪勤の人なり。

藤原繩磨(三九―四九) 豊成の子光仁天皇を擁立し薨して從二位大納言を贈らる。

藤原園人(四八―四五) 楓磨の長子從三位右大臣に至る、山科大臣と稱す特に良二千石を以て著ける。

第二編 中古



菅原清公(四三—四五) 古人の子遺唐判官、文章博士侍讀、從三位に至る、後雲文華秀麗二集を撰す。  
 秋篠安人( ) 參議に至る、弘仁中冬嗣、葛野麿、三守、常主等と勅を奉じて格式を撰す。  
 藤原冬嗣(四三—四六) 内鷹の第二子左大臣に至り、薨後正一位を贈らる、閑院大臣と稱す。  
 巨勢野足(四八—四七) 參議内鷹の孫、正三位右近衛大將中納言に至る。  
 藤原常嗣(四六—五〇) 葛野麿の子、遺唐大使に任し功を以て從三位に叙す。  
 藤原春津(四六—五九) 左大臣緒嗣の子、風姿美麗清警雅世々貴顯居宅鮮華人と爲り清廉の貴公子。  
 大江音人(四七—五七) 菅原是善に學び勅を奉じて弘帝範三卷群籍要覽四十卷を撰す、是善と貞觀格式を撰す、參議に任し三朝の侍讀たり。  
 百濟河成( ) 武藝に長し能く強弓を挽き兼て圖畫を善くす。  
 長峰宗貞(四六—五五) 安世の子仁明天皇に仕へて寵眷を蒙る、入道して僧正遍照と稱す有名の歌人なり。  
 春澄善繩(四七—五三) 幼にして敏慧、才學兼備博く經史に通じ文章博士參議從三位に至る。  
 源安(四八—五三) 嵯峨の皇子、射を善くす從四位上備中守仁壽三年四月卒す三十三。  
 在原行平(四七—五三) 阿保親王の子正三位中納言に至る、又丹青を好み畫を善くす。  
 源融(四三—五五) 嵯峨の皇子、河原左大臣と稱す又別業を宇治に置く陽成宇多朱雀の行幸あり後寺となる平等院是なり。  
 源舒( ) 嵯峨の皇孫(源明の子)貞觀元慶の間、藏人頭參議左大辨正四位下に至る。  
 藤原貞敏(四七—五七) 少壯音律を好み琵琶を善くす。三代に歷仕せしも他に才藝なし。  
 藤原有貞( ) 右大臣三守の子從四位下に叙、性剛直、權貴を以て人に矜らす。  
 源勤(四八—四四) 嵯峨の皇子、宮内卿、參議、從三位に至る。西七條宰相と稱す。  
 藤原保則(四五—五五) 右大臣繼繩の曾孫備中介、治績第一たり參議民部卿に至る。  
 藤原諸葛(四六—五五) 右大臣三守の孫、藏人從三位中納言に至る。

藤原高藤( ) 太政大臣良門の子正三位内大臣に至る、醍醐の外祖、贈正一位太政大臣。  
 源能有(四五—五五) 文徳の第五子右大臣太子傳正三位に至る。  
 源直( ) 東三條左大臣源常の子、侍從藏人頭、右中將、諸國守從三位參議民部卿に至る。  
 藤原山蔭(四八—五八) 左大臣魚名の支孫、藏人頭從三位中納言兼民部卿、庖丁に巧なり。  
 大江千里( ) 參議音人の第二子、父の業を繼ぎ文學和歌を善くす家集及句題和歌百廿首あり。  
 源光(四五—五五) 仁明天皇の皇子、正二位右大臣左近衛大將、馬逸し輕に落ちて薨す。  
 三善清行(五七—五八) 巨勢文雄に學ぶ、參議宮内卿に進む、封事十二條を上る。  
 藤原菅根(五六—五八) 經史に通じ侍讀、侍從參議贈從三、道眞の推舉を受け後之と隙あり。  
 藤原實賴(五〇—六〇) 忠平の長子、從一位太政大臣に至る、贈正一位、詩歌多し。  
 源兼忠( ) 清和第四の皇子貞元親王の長男、參議兼治部卿。  
 小野好古(五九—六八) 太宰大貳葛弦の子、純友を平けて功あり從三位參議太宰大貳。  
 藤原在衡(五三—六〇) 中納言山蔭の孫、從二位粟田左大臣又萬里小路、贈從一位。  
 藤原朝成( ) 右大臣定方の子、體貌醜肥、學を好み筆を善くす中納言に至る、伊尹と争ふ。  
 源延光(五七—六六) 醍醐の皇孫、從三位權大納言、枇杷大納言と號す。  
 源重信(五二—六五) 敦實親王の第二子、正二位左大臣、贈正一位。  
 藤原伊尹(五八—六三) 右大臣師尹の子、正二位、攝政、太政大臣、贈正一位、才貌あり和歌に巧なり。  
 藤原爲光(六二—六五) 右大臣師輔の子、從一位太政大臣、贈正一位、後一條太政大臣と稱す。  
 藤原朝光( ) 關白兼通の子、大納言左近衛大將、閑院大將と稱す。  
 藤原宜孝( ) 紫式部の夫なり。  
 藤原道隆(六七—六五) 關白兼家の子、正二位、攝政、關白、酒を嗜み朝光と相敵す。  
 平致賴( ) 勇士なり平維衡、源賴信、藤保昌と名を齊うし四天王と稱す。



藤原伊周(三〇四—三七〇) 關白道隆の第二子、正二位准大臣世に帥内大臣と稱す。  
 藤原齊信(三〇七—三九五) 太政大臣爲光の第二子、性英敏典故に通ず、正二位大納言に進み四納言の一人。  
 安倍晴明( ) 有名の天文博士なり右大臣御主人の後益材の子。  
 源成信( ) 致平親王の子朝儀に閉ひ進止詳華なり入道して園城寺に入る。  
 藤原實成(六三三—七〇四) 太政大臣公季の子、累進して中納言太宰權帥に至る。  
 菅原輔正(五五五—六三九) 道眞の曾孫、右少辨兼大學頭東宮學士文章博士侍讀、正三位參議式部卿、贈正二位北野宰相。  
 藤原賴宗(六三三—七〇五) 關白道長の子、從一位右大臣に進む、堀河右大臣と稱す。  
 藤原實資(六四一—七〇七) 右大臣實資の子、正二位大納言に進む、水眞餘流記、決戸記を著す。  
 藤原定賴(六五五—七〇五) 公任の子、恣儀美にして和歌を善くす正二位中納言、兵部卿に進む。  
 藤原明衡( ) 式部卿宇合の後、學博洽、和歌を善くす大學頭文章博士東宮學士となる、雲州往來本朝文粹本朝秀句を著す。  
 藤原兼房( ) 中納言兼隆の子、備中讃岐守正四位下、和歌を好み人丸を慕ふこと甚し。  
 藤原信長( ) 關白教通の子、太政大臣となる、世に九條太政大臣と稱す。  
 藤原長房(六九〇—七五九) 權大納言經輔の二子、正三位參議太宰大貳に至る。  
 藤原實政( ) 參議有國の孫、侍讀となる。  
 大江匡房(七〇〇—七七一) 後三條の東宮學士、正二位中納言權帥に至る、和歌詩文を善くし江家次第廿一卷を著す。  
 藤原伊房( ) 大江匡房、藤原長房と博識を以て名を齊うす世に三房といふ。  
 源俊明(七〇四—七〇四) 權大納言隆國の子、參議權大納言に至る、白河の御信任を受く。  
 源師賴(七〇三—七〇九) 左大臣俊房の子、博聞強記、才藻あり、正二位大納言に進む、小野宮と稱す。  
 源政長( ) 音律に通じ最も笛を善くす、堀河帝召して笛の師とす正四位上刑部卿たり。  
 源師時( ) 左大臣俊房の子、詩歌を善くし才名あり、正三位中納言に至る、著、所查記、長秋記あり。  
 藤原伊通(七五三—八二五) 右大臣俊家の孫、正二位太政大臣、大宮大相國又云九條相國、著、無名鈔、大槐秘鈔、人記除目鈔。

藤原爲隆(七〇〇—七九〇) 爲房の子、參議大藏卿たり、日録を永昌記と云ふ。  
 藤原爲房( ) 白河鳥羽堀河の三朝に歷仕して參議兼大藏卿たり。  
 藤原宗能( ) 右大臣宗忠の子、内大臣となり中御門内大臣と稱す。  
 藤原顯隆(七三三—七九二) 參議爲房の子、堀河鳥羽崇徳の三朝に歷仕し正三位參議中納言に進み夜闕白と云はる日録中記都記あり  
 源雅定(七四四—八三三) 太政大臣雅實の子、右大臣たり世に中院右大臣と云ふ、性戲諳を好む而も誠敬の人。  
 藤原成通(七五七—八三三) 右大臣俊家の孫、正二位權大納言に進む、精力絶倫材藝多く詩歌を善くす。  
 藤原敦長( ) 關白師實の孫、和歌、書を善くす參議正三位に進む、著、拾遺古今あり。  
 藤原敦兼( ) 性音律を好み筆策の蘊奥を究む、刑部卿たり。  
 藤原忠隆(七三三—八〇〇) 基隆の子、數國の國守を歴て從三位大藏卿に至る、性鷹犬馬を好む。  
 藤原經宗( ) 保元中正二位大納言に至る事を以て阿波に流され赦され後從一位左大臣に進む。  
 藤原公教( ) 太政大臣實行の子、正二位大納言、内大臣に進む、雅量あり。  
 藤原光賴(七六四—八三三) 權中納言顯賴の子、正二位權大納言に進み桂大納言と稱す。  
 藤原顯輔( ) 顯季の季子、堀河鳥羽崇徳近衛の四朝に仕へ正三位皇后宮亮に至る、和歌を善くし勅を奉じて詞牋和歌集を撰す。  
 藤原兼雅( ) 太政大臣忠雅の子、建久九年左大臣に進む。  
 藤原兼光(八〇五—八五六) 中納言資長の子、從二位中納言に進む、盜盜人の名裁判名高し。  
 和氣定良( ) 朝廷の醫官なり、清盛の請に因りて醫方鈔を著し養和五年五人と勅を奉じて方書を撰す。  
 藤原重家( ) 左大臣顯光の子なり、官右近衛少將に至る、入道して舜源と稱す。  
 藤原兼房( ) 關白兼實の弟、建久元年内大臣、二年太政大臣に進む、禪林寺と號す。  
 平師盛( ) 重盛の第五子、備中守たり一谷陷るの時戰歿す。  
 平經盛(八五—八五五) 忠盛の子、和歌笛を善くす、從三位參議に進む。



源 行家(一八〇) 爲義の第十子、初め義仲に依り後義經に依り、和泉に斬らる。

藤原宗頼(一八四—一八五) 正二位權大納言光頼の四男、參議成頼の養子、畫を善くす、正二位權大納言に至る。

藤原公繼(一八七—一八八) 左大臣實定の第三子、琵琶を善くす、從一位左大臣に至る。

藤原家長(一八八) 大納言忠良の子、衣笠を稱す、仁治元年内大臣となり同二年四月罷む。

藤原信能(一八八) 權中納言能保の子、參議に任ず、承久の亂後、美濃遠山に斬らる。

藤原師繼(一九〇) 忠繼の子、内大臣に進む、談天門院の父、後醍醐帝の外祖なり、花山院内大臣。

源 通重(一九〇) 土御門准大臣通頼の子、内大臣となる、後中院内大臣と稱す。

藤原園人傳(一四六—一四五)

園人は中衛大將房前の孫、大藏卿楓磨の長子なり。寶龜の末、從五位下に敘せられ。美濃介となる。天應元年備前介に遷る。延暦の初、少納言、右少辨、安藝守を経て、太宰大貳となる。既にして豊後守と爲り大和守に遷り、入て右京大夫となる皆治績を著す、良吏の名あり。百姓追思し爲めに生祠を立つ既にして治部大輔、右大辨、大藏卿に遷り。相模守を兼ね。大同元年宮内卿に轉じ權參議に拜せられ遂に正と爲り、皇太弟傳を兼ね正四位下勳五等を授けられ、山陽道觀察使となる、奏して曰く西海道は一年の間に雜使の都に上るもの其數多し爲めに常道の疲弊を來す。望らくは西海道の五位以上にして秋滿ちて任を解く者に非ざるよりは輒ち入京を聽さざらんことをと。勅して之を許す二年又奏して備前國課役の民に正税を借貸して窘乏を救助せんことを請ふ勅して之を許す。畿内七道諸國も亦之に准せしむ(奏勅兩文とも別傳に見ゆ)又上言して播磨國封戸の中春宮坊並に諸寺封五百戸を東國に移して下民運租の勞を省かんことを請ふ之を許す。三年奏して當道播磨、備中、備後、安藝、周防等五國は頻年不稔にして百姓凋弊せるを以て、二十四年來未納のものは一に穎稻を收めて正税に混合せんことを請ふ之を許す。是の歲民部卿、北陸道行事に轉じ正三位、中納言に累進す弘仁元年大納言に轉ず。奏して從來行ふ所の諸國の正税息利は延暦十四年閏七月一日の勅に依て重きを改め輕

きに從はんことを請ふ。勅して之を許す。二年奏言す夫れ郡司は初め有功の人を以て其の官に充つ突世相承け郡人の人其心を托する他に異なり、然るに延暦以降偏に手藝を取りて之に任じ永く譜第の慣習を絶つ、是れ策の得たるものに非ず、宜しく郡司を撰むに其人を譜代の内に求むべし。遂に其の人なければ後才藝あるものに及ばんことを。と詔して其請を許す。明年亦奏して郡司を詮議するは一に國定に依らんことを請ふ亦之を許す。三年右大臣となり。五年從三位に進み。九年薨す年六十三、帝甚た悼惜し使を遣はして喪事を監護せしむ正一位右大臣を贈る、山科大臣と稱す。詔を奉して萬多親王と共に姓氏録を撰す(大日本史)。

別傳は園人の爲人を明かにし旁々國司郡司選任の體と勅詔の趣を記して當時の狀態を窺ふべきものあれば重ねて收載せり。

藤原園人、中衛大將房前孫、大藏卿楓磨長子也、公卿補任寶龜末敍從五位下爲美濃介、天應元年遷備中守。延暦初歷少納言右少辨、安藝備後守、爲太宰少貳、續日本紀遷大和守、入爲右京大夫、所在著績、稱爲良吏、百姓追思、爲立生祠、稍遷治部大輔右大辨大藏卿、兼相模守大同元年轉宮内卿、拜權參議、遂爲眞、兼皇太弟傳、累授正四位下勳五等、爲山陽道觀察使、補任奏曰西海道年中上都雜使、其數繁多、而北道疲弊、異於他境、檢察其由、率緣迎送無息、不得顧私、望請西海道五位已上、自非秩滿解任者、不聽輒入京、勅許之、日本後記、類聚三代格、二年又奏曰、備前國解備、書生等言、某等白丁課役之民、而長直公事、不顧私業、或久經京下、永妨農業、或巡行部内、私費人馬、身勞不異郡司、榮祿還無所賴、伏望特告官司、借貸正税、各救窘乏、國司勘之、事有合矜、仍請使裁、使等商量、賞則招人、餌則聚魚、若不優矜、則部内公文、將託誰人、望請當道諸國、隨國大小、正税、一萬二千束已下、八千束已上、每年借貸、令自勸勉、敕宜差量給之、若有未納、令國司填之、立爲恒例、畿内七道諸國、亦宜准此、類聚三代格、又上言、播磨國內封戸巨多、運租之勞、於民爲弊、加以界近都下、雜用繁多、動用穀類、不足支用、不動之貯、只九萬斛、熟尋其原、由封戸之



數多也、伏望減省春宮坊並諸寺封五百戶、移附東國、即收其租、以為不動、然則弊民斯息、貯物自積、許之類聚、三年奏、當道播磨備中備後安藝周防等五國、去延曆四年以降、二十四年已往、庸並雜穀等未進、其數不少、良由頻年不稔、人民彫弊也、今將追辦本色、國司則或死或替、幹濟難成、百姓則且病且飢、運進太難、伏望未進之物一收、類聚、混正稅、庶於公無損、於私得便、但任觀察使以來、一依舊令辨進、許之類聚、日本後記、是歲轉民部卿、行北陸道事、公卿四年奏言、伏按去四月二十八日詔書備、大辟以下、罪無輕重、常赦所不免、咸皆赦除者、非常之恩、率土幸賴、凡厥大小、誰不霑澤、方今當道諸國、損弊年久、公途難辦、當時宰吏、或有未進雜物、檢怠則罪逢赦降、勸物則實在貧民、便付後任、還移前答、相續催煩、輸轉不絕、准之事由、元非挾情、比之枉法、輕重自分、伏望大同元年以來、調庸雜米等未進者、官用有限、支料頗乏、並須依數催進、自餘雜未納未進之類、在恩詔之前者、悉從免除、庶使窮困人民、永忘舊歲之責、見任國司、頓絕前官之意、許之、京畿並諸國准之、類聚、進正三位中納言、弘仁元年轉大納言、公卿奏言、謹按去延曆十四年閏七月一日敕減諸國出舉正稅息利、率十束收三束、由茲觀之、矜百姓之罄乏、惜萌俗之弊衰也、大同之初改張此例、更率十束、收利五束、爾來迄今、彫損滋甚、水旱疾疫、頃年相仍、僅賴今歲之豐稔、少慰先時之菜色、然而窮困之民、未得與復、備償之煩、當從輕、伏請論定公廩及雜色稻出舉息利、始自今年、一依延曆十四年敕、行之、庶令改重從輕、濟弊招益、救許之、二年奏言、夫郡司有勞之胤、奕世相承、郡中百姓、長幼託心、臨事成務、實異他人、而偏取藝業、永絕譜第、用庸材之賤下、處門地之勞上、為政則物情不從、聽訟則決斷無伏、於公難濟、於私多患、望請郡司之擬、先盡譜第、遂無其人、後及藝業、詔曰、應變設教、為政之要樞、商時制宜、濟民之本務、故堯舜異道、而天下歸仁、湯武殊治、而蒼生欣賴、朕還淳返朴之風、未覃下土、興減繼絕之思、常切中襟、夫郡領者、難波朝廷置其職、有勞之人、世序其官、逮于延曆年中、偏取才良、永廢譜第、今省大納言正三位藤原朝臣國人奏、實得其理、宜依來奏、明年又奏、夫量能授職、邦教攸先、訓俗宣風、

郡司是寄、故任當其器、則庶績咸康、委失其才、則政治自亂、加以譜第之事、既復舊例、奕世相繼、義在象賢、是以國司簡定、銓擬言上、無賴之徒、不領銓擬之例、或身在京、爭第相告、抑退國選、遂奪其位、一民之志、未有三推服、百里之任、何能可堪、臨事面墻、操刀傷錦、其之為弊、古今一揆、望請銓擬郡司、一依國定、若選非其人、政績無驗、則署帳之官、咸解見任、永不敘用、以懲將來、敕依奏、但主政帳、不在此限、類聚三年為右大臣、公卿四年奏、念舊酬勞、賢哲遺訓、重生愛命、貴賤無殊、今天下之人、各有僕隸、平生之日、既役其力、病患之時、即出路邊、無人看養、遂致餓死、此之為弊、不可勝言、伏望布告京畿、早從禁止、庶令路傍無天枉之鬼、天下多終命之人、敕宜令加禁制、猶致違犯者、五位已上、注名奏之、六位已下、不論陰贖、決杖一百、臺及職國、知而不糾、及條令防長、國郡隣保、相庇不告、並與同罪、勝示要路、分明告知、類聚五年進從二位、公卿奏去大同二年停正月一節、迄于三年、又廢三月節、大槩為省費也、今正月二節復于舊例、九月節准三月、去弘仁三年已來、更加花宴准之延曆、花宴獨剩、比之大同、四節更起、願被祿賜、庫貯罄乏、伏望九日者、不入節會之例、須臨時擇定堪下文藻者、下知所司、庶絕他人之望、省大藏之耗、又奏去延曆十年車駕幸交野、此時禁畿內國司獻物、而比年間、曾無遵行、寄言貢獻、還煩百姓、不穩之譏、相繼無息、伏望自今以後、一切禁斷、但臣下之志、私有供進者、不在禁限、類聚又奏、諸國所收官物、本倉色目、具注稅帳、而國司或非其人、有便郡稻、即充公廩、當土百姓、不得舉給、遠授他郡、徒疲往還、是以不便之處、物數有剩、至于交替、通計諸郡、名無闕失、實與帳違、積習成俗、其弊未改、出雲國最多、此類、縱令甲郡應貯而納乙處、狂賊作亂、還致失火、帳注全倉、物既灰燼、公家之損、莫過斯甚、伏望自今以後、下知諸國、依帳收納、甲乙之郡、不許通計、若本倉相違、准狀科處、令官家少損、黎民濟急、並許之、日本後紀、類聚八年奏、依太政官延曆十八年四月十三日符、○本書一作二十八日畿內五國郡司、一居內考、率由近下接都下、驅策殊甚、准於外國、不可同日、今如此輩、未出身前、相競如林、既得考後、詐告病假、非當闕



棄郡務一、誠是欺ニ犯朝章一、伏望自レ今以後、有レ斯類一者、國司勸レ實、一從レ還レ本、類聚三 九年薨年六十三、日本紀略帝  
 甚悼惜、遣レ使監レ護喪事一、日本贈正一位左大臣、日本紀略 稱三山科大臣一、公卿 嘗奉レ救與三萬多親王一、撰三姓氏錄一、姓氏  
 日本 子濱主 尊卑 分脈 從四位上安藝守 續日本 後紀 (大日本史卷第百廿六列傳第五十三)

### 第二十一章 備中國司略歴

前章、國司表の示すが如く備中國司無慮六百有餘名に上る。就中公卿に列するもの二百五人、濟々多士と謂ふべし。而して國府の所在地たる吉備郡は是等の代表的人士を通じて中央及全國各地方と政治上經濟上將た文化上に前後七百年に亘りて不斷の交渉連絡ありしこと注意すべき重大事項たり。左に公卿補任に據りて其氏名を表示し略歴を掲ぐ。

#### 第一 公卿補任に見ゆる備中國司氏名

- |          |          |          |          |           |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|----------|----------|
| 一 藤 魚名   | 二 秋篠安人   | 三 藤 園人   | 四 巨勢野足   | 五 藤 眞夏    | 六 藤 冬嗣   | 七 南淵弘貞   | 八 藤 多    |
| 九 大江音人   | 一〇 源 勤   | 一一 在原行平  | 一二 源 能有  | 一三 源 舒    | 一四 藤 諸葛  | 一五 藤 山陰  | 一六 藤 國經  |
| 一七 源 直   | 一八 源 光   | 一九 藤 保則  | 二〇 源 湛   | 二一 藤 高藤   | 二二 藤 清經  | 二三 在原友子  | 二四 藤 菅根  |
| 二五 三善清行  | 二六 藤 實賴  | 二七 藤 在衡  | 二八 平 隨時  | 二九 源 兼忠   | 三〇 小野好古  | 三一 藤 朝成  | 三二 源 重信  |
| 三三 藤 伊尹  | 三四 源 重光  | 三五 源 延光  | 三六 藤 爲光  | 三七 藤 元輔   | 三八 源 惟正  | 三九 藤 朝光  | 四〇 源 伊陟  |
| 四一 藤 道隆  | 四二 源 忠清  | 四三 藤 懷忠  | 四四 藤 安親  | 四五 藤 伊周   | 四六 源 時光  | 四七 藤 齊信  | 四八 藤 忠輔  |
| 四九 菅原輔正  | 五〇 藤 正光  | 五一 平 親信  | 五二 藤 實成  | 五三 藤 兼隆   | 五四 源 道方  | 五五 藤 賴宗  | 五六 藤 朝經  |
| 五七 源 賴定  | 五八 藤 公信  | 五九 源 朝任  | 六〇 藤 兼賴  | 六一 藤 經任   | 六二 藤 信長  | 六三 源 基平  | 六四 源 資綱  |
| 六五 源 經季  | 六六 藤 道雅  | 六七 藤 經家  | 六八 藤 師成  | 六九 藤 資仲   | 七〇 藤 能季  | 七一 藤 實季  | 七二 藤 伊房  |
| 七三 源 師忠  | 七四 源 家賢  | 七五 源 俊明  | 七六 大江匡房  | 七七 藤 能實   | 七八 藤 實政  | 七九 源 雅俊  | 八〇 藤 仲實  |
| 八一 藤 季仲  | 八二 源 師賴  | 八三 源 能俊  | 八四 源 顯雅  | 八五 藤 俊忠   | 八六 藤 爲房  | 八七 源 雅定  | 八八 藤 伊通  |
| 八九 源 師時  | 九〇 藤 忠宗  | 九一 藤 宗能  | 九二 藤 實光  | 九三 藤 成通   | 九四 藤 公教  | 九五 藤 重通  | 九六 藤 經忠  |
| 九七 藤 忠基  | 九八 藤 經定  | 九九 藤 教長  | 一〇〇 藤 顯業 | 一〇一 藤 顯輔  | 一〇二 藤 經宗 | 一〇三 藤 資信 | 一〇四 藤 朝隆 |
| 一〇五 藤 光賴 | 一〇六 藤 實長 | 一〇七 源 定房 | 一〇八 藤 公保 | 一〇九 藤 光隆  | 一一〇 源 雅賴 | 一一一 藤 實綱 | 一一二 藤 定隆 |
| 一一三 藤 重家 | 一一四 藤 兼房 | 一一五 藤 實守 | 一一六 藤 親房 | 一一七 藤 平經盛 | 一一八 藤 兼光 | 一一九 源 雅賢 | 一二〇 藤 兼忠 |
| 一二三 藤 公時 | 一二四 藤 公繼 | 一二五 藤 兼宗 | 一二六 藤 宗賴 | 一二七 藤 公國  | 一二八 源 通具 | 一二九 藤 教盛 | 一三〇 藤 仲經 |



- 一三 藤 高通 一三 藤 資賴 一三 藤 家良 一三 藤 公氏 一三 藤 國通 一三 藤 伊時 一三 藤 信能 一三 藤 源 雅清
- 一四 藤 成實 一四 藤 師季 一四 藤 淳高 一四 藤 平有親 一四 藤 實持 一四 藤 隆綱 一四 藤 隆盛 一四 藤 親季
- 一五 藤 兼高 一五 藤 實隆 一五 藤 定嗣 一五 藤 家時 一五 藤 平時高 一五 藤 惟忠 一五 藤 實任 一五 藤 實直
- 一六 藤 師繼 一六 藤 實文 一六 藤 顯雅 一六 藤 通世 一六 藤 雅言 一六 藤 忠方 一六 藤 具房 一六 藤 公寬
- 一七 藤 具氏 一七 藤 家教 一七 藤 顯名 一七 藤 源賴顯 一七 藤 公尹 一七 藤 俊通 一七 藤 範藤 一七 藤 通重
- 一八 藤 宗嗣 一八 藤 通嗣 一八 藤 宗氏 一八 藤 實時 一八 藤 實躬 一八 藤 公茂 一八 藤 經繼 一八 藤 源顯資
- 一九 藤 通顯 一九 藤 公量 一九 藤 公敏 一九 藤 俊言 一九 藤 公修 一九 藤 氏忠 一九 藤 忠朝 一九 藤 源時通
- 二〇 藤 有賴 二〇 藤 實顯 二〇 藤 有光 二〇 藤 長光 二〇 藤 忠季 二〇 藤 家賢 二〇 藤 實音 二〇 藤 源時通
- 二一 藤 行忠 二一 藤 公仲 二一 藤 公俊 二一 藤 資國 二一 藤 永行 二一 藤 實秀 二一 藤 公名 二一 藤 源時通
- 二二 藤 源持康 二二 藤 永豐 二二 藤 公澄 二二 藤 實隆 二二 藤 公兼

第二 公卿補任に見ゆる備中國司略歴。

(一) 藤原魚名(一三八一—一四四三)

贈太政大臣房前五男、母異母姉從四位片野朝臣、本系云、母兄參議清河女。或本、同清河。養老五年辛酉生、天平廿年二月七(十九日歟)日授從五位下。補侍從、天平寶字元年五月十(廿歟)日從五位上、任備中守、二年十(十一)月任上總守、三年六月正五位上、五年正月七(二續紀)日從四位下、八年從四位上、任宮內卿、天平神護元年正月七日正四位下、二年十一月五日從三位。頭書云、受領補任云、寶字元年二月任備中守。二年十一月任上總守者。神護景雲二年二月十八日任參議。三年大藏卿、同八月十九日兼左京大夫。四年八月廿八日兼但馬守、十月一日正三位、兼左京大夫。寶龜二年三月任大納言(勞六年)三年中務卿。四年中務卿兼近衛大將。五年九月日兼中務卿近衛大將。六年中務卿近衛大將。七年中務卿。八年正月七(四歟)日敘從二位、十月兼太宰師。九年三月三日任內臣、卅日有勅改號忠臣、近衛大將、帥如元。十年正月一日任內大臣、元忠臣、近衛大將、太宰帥如元。同十二年正月十日正二位。六月廿七日癸未轉左大臣、號河邊

大臣天應二年六月十四日太宰帥坐事免左大臣、配流、令赴任所、至攝津國難波、病發流連、勅聽便留別業、其男正四位下鷹取、左遷石見介、從五位下末茂土左介。延曆二年五月丁亥勅、太宰帥魚名老病相發、仍留滯中路。宜遷京託其鄉親七月勅鷹取末茂等令得入京。廿五日薨年六十三在官五年。詔別賜繩布米鹽及役夫等。又贈本官。詔曰贈以本官。酬其先功。去延曆元年六月十四日所下詔勅官符等類、皆悉燒却焉。

(二) 秋篠安人(一四一一—一四八一)

從四位下土師宇遲男、勝寶六年(二九)辛卯生、延曆三年二月少內記。六年三月轉大外記、八年正月外從五下。九年三月大內記、兼右兵衛佐。外記如元。十年正月七日從五下。二月甲辰兼大判事、外記如元。三月辛巳少納言、佐如元。後備中守。十二年正月兼丹波介。十五年正月從五位上、同月壬子丹波守、八月丁亥左少辨、十六年二月正五下(上)十七年二月丁巳左中辨、守如元、十八年二月兼中衛少將、辨守如元。十九年正月七日從四下。廿一年正月兼阿波守。廿二年五月兼勘解由長官、延曆廿二年七月十五日兼近衛少將、廿四年正月丙戌任右大辨。頭書云。辨官補任云。十六年二月叙正五位上。廿四年正月十七(四歟)日任參議右大辨、勘解由長官少將如元。廿五年四月十五日從四位上、十八日右中將、五月十九日兼春宮大夫、廿四日停參木。爲北陸道觀察使、七月十四日轉左大辨。大同二年四月十六日停參議號、八月十日兼侍從。十一月十(十四)日坐伊與親王事、左遷造西寺長官、他官皆停(左大辨、近衛中將、春宮大夫)五年九月十一日更任參議。即兼左大辨如元。同十八日任越後守、辨如元。同廿七日兼左兵衛督、左大辨如元。正月壬子兼尾張守、四月十七日兼大舍人頭。九月更任參議。弘仁二年、左大辨越後守。六月一日遷左兵衛督、七月乙卯兼備中守左大辨如元弘仁三年正月辛未兼左大辨備前守左大辨、左兵衛督等如元。三年正月七日正四下左大辨、備前守、左兵衛督。四年二月辭左大辨備前守、左兵衛督。六年正月七日已卯叙從三位、左大辨、備前守。七年左大辨。九年六月十六日參議兼備前守左大辨如元。十一年正月十一日兼近江守同廿七日上表致仕、以劇職也。十二年正月十日薨年七十。

(三) 藤原園人(一四一五—一四七八)



贈太政大臣房前孫、故參議從三位大藏卿楓麿之長子、母山階寺之人(或本内大臣良繼女)勝寶七年生、寶龜十年正月從五下(廿五)、二月美濃介、天應元年五月備中守。延曆二年二月少納言。四年正月右少辨、十月安藝守、八年正月從五位上二月備後守。十年正月豐後守、十七年二月大和守、閏五月右京大夫、守如元。皆有良吏之稱。百姓追慕、或立祠八月十六日從四下、十一月治部大輔、十八年九月右大辨、守如元。廿年七月大藏卿。廿二年正月七日從四上、兼相模守。大同元年二月十六日宮内卿、守如元。勳五等正四下、山陽道觀察使。二年四月十六日停參議號、觀察使、皇太子傅。三年勳二等、六月廿五(廿八紀)日任山陽道觀察使民部卿、皇太子傅如元。四月攝行北陸道事。四年九月十九日任中納言民部卿如元、三月叙從三位、四月十三日叙正三位。止傳、依受禪也。五年二月八日任大納言、民部卿如元。九月十三日兼皇太子傅(淳和立坊日)十二月十三日奏狀備、臣謹案、去延曆十七年三月十六日勅書備、昔難波朝廷始置諸郡領云々。弘仁三年十二月五日任右大臣。(勞三年)兼東宮傅。四年正月七日乙卯叙從二位。九年十二月九日皇太弟傅從二位右大臣、園人薨年六十三。同日贈正一位左大臣、號山階大臣。(參議二年、中納言二年、大納言三年、右大臣七年)

(四) 巨勢野足(一四〇九—一四七六)

參議從三位兵部卿野麿之孫、式部大輔、左中辨兼河内守正四下苗麿一男。天平廿一年己丑生、延曆八年十月廿三乙丑從五位下(卅一)爲鎮守府副將軍。十一年九月廿七日己卯兼陸奥介。十四年二月叙正五下(越階)十五年十月廿七日兼下野守、十九年七月兵部大輔。廿年十一月己丑從四下、廿一年四月廿五日兼内藏頭。廿二年正月兼下野守。廿五年二月任左衛門督、守如元。大同元年四月十四日遷左兵衛督、守如元。五月廿四日兼左京大夫。二年八月十四日兼侍從。三年正月廿五日、從四上、五月十四日兼近江守。督大夫如元。十一月四日兼春宮大夫。守如元。四年二月遷左近中將。四月加正四下、弘仁元年三月十日補藏人頭。(頭始也。與冬嗣並補之)八月十五日兼中務大輔。大同五年九月十一日任參議元藏人頭、左中將、中務大輔、中將大輔如元。十一月二日兼備中守、兼官如元。小野宮本云。不任參木者如何。弘仁二年六月一日叙從三位。勳三等、即兼左近大將。七月乙卯兼備前(中)守。三年正月十二日任中納言(勞三年)。右大將如元。備

前守。六年正月十日壬午兼按察使、勳三等。七年十二月一日、叙正三位。止大將。同十四日乙巳薨。年六十八。爲人好鷹犬云々。(頭勞七ヶ月、參木中將三年、大將六年、中納言五年)

(五) 藤原眞夏(一四三四—一四九〇)

弘仁元年正月廿四日(三十七)爲造平城宮使、四月廿一日叙正四下、六月丙申停觀察使。爲參議。元從四下。七月兼伊勢守。八月按察使。中將如元。九月十日解任。左降備中權守(在官六ヶ月)頭書云、弘仁十三年正月七日叙從三位。天長五年任刑部卿。七年十一月十日薨年五十七。

(六) 藤原冬嗣(一四三五—一四八六)

右大臣内麿二男、母同眞夏。寶龜六年辛卯生。延曆廿年閏正月六日任大判事。同廿一(二)年三月任左衛士大(少)尉。五月十四日任左衛士少(大)尉。大同元年五月十九日從五下。任春宮大進。二年正月廿三日春宮亮。四年正月十六日兼侍從。亮如元。四月十三日正五下(二階)十四日從四下。任左衛士督。五月五日大舍人頭。督如元。十二月庚午兼中務大輔五年十月壬子兼備中守、大輔、督等如元。三月十日藏人頭(是頭始也、野足同補之)七月十六日兼美作守。四月停官依踐祚也。二月兼右少辨、亮、侍從如元。大舍人頭、督如元。十一月自大舍人頭、遷中務大輔。弘仁元年正月兼美作守。八月十五日兼春日大夫。督守等如元。廿九日兼中務大輔。九月十日遷式部大輔、督守如元。十一月廿三日、從四上、二年正月廿八日任參議。兼官如元。弘仁二年正月廿九日任參議。元藏人頭、六月一日兼左衛門督、式部大輔美作守如元。十月停式部大輔、遷春宮大夫。三年正月辛未兼備前(美作、後紀)守督如元。十月遭喪去職。十二月五日叙正四下、遷兼左大將。元左衛門督。頭書云案國史、服解之後不任參議云々、而猶爲參木。五年四月乙巳叙從三位。兼春宮大夫、美作守如元。七年十月廿八日已未任權中納言。左近大將春宮大夫如元。元參議。八年正月十一日兼陸奥出羽按察使。二月二日壬辰轉任中納言。元權。左近大將春宮大夫按察使如元。九年六月十六日任大納言、廿(同敷)日叙正三位、按察使、左近大將如元。十二年正月九日任右大臣、左大將如元。十三年正月七日叙從二位。十四年四月廿七日叙正二位。天長二年四



月五日轉左大臣、左大將如元、上表之。兼左大將。天長三年二月日辭大將。七月廿四日薨年五十二。廿六日贈正一位、(在官六年)嘉祥三年七月十七日贈太政大臣(依文德天皇知天下也)號閑院大臣、文德外祖、立勸學院、建南圓堂。安置不空索菩薩。(參議六年或二年中納言三年、左大將十五年、大納言四年、右大臣五年)

(七) 南淵弘貞(一四三六一—一四九三)

從四位下坂田奈豆磨二男、寶龜七年丙辰生、少遊學館。涉百家、弱冠推補文章生、大同元年五月廿四日少內記。八月十六日少外記。弘仁元年十二月二日大內記、四年正月十日美作掾、廿五日式部少丞、六年正月日、補藏人。六月一日轉大丞、七年正月七日坂田朝臣弘貞、授從五下。(四下)十日但馬介。九年四月廿三日但馬守。十一年六月四日主計頭。十二年正月十日伊世介。十五日備中守。七月十三日東宮學士。(淳和銀榜之時)九月乙卯主稅頭兼備中守。十月五日右少辨。十三年正月七日從五上。二月一日左少辨、學士如元。十四年正月丙刀伊與守。止辨。四月十八日式部少輔。廿七日正五位下。九月廿七日。左(右)近權少將。十二月乙未改坂田朝臣姓賜南淵朝臣、天長元年四月九日式部大輔。守少將如元。五月廿一日叙從四下(四十八)、頭書云。辨官補任云。十一年不任者、十三年任左少辨。天長二年七月一日任參議。式部大輔如元。天長四年正月七日從四上、式部大輔。五年正月十一日(二歟)任下野守。式部大輔如元。六年正月十三日宮內卿、式部大輔、下野守。七年五月五日兼刑部卿元宮內卿、六月一日正四位下。八月四日任右兵衛督、下野守刑部卿等如元。八年正月七日癸卯叙從二位刑部卿下野守。天長十年正月十一日兼信乃守刑部卿、左兵衛督、下野守。九月十八(九歟)日薨年五十七、(在官九年)生年寶龜八年丁巳天長十年薨者五十也而五十七者謬歟。

(八) 源 多(一四九一—一五四八)

仁明天皇第一源氏、母、天長八年辛亥生、嘉祥二年正月七日叙從四上、三年正月十五日阿波守。仁壽二年正月十五日阿波守。二月任宮內卿。三年正月十六日美作守。七月一日兼備中守。卿如元。頭書云。或書云。嘉祥三年三月九日阿波守、從四上多出家者、續日本後紀云、嘉祥三年三月十九日、仁明天皇御出家日、源朝臣多出家者如何。仁壽四年八月廿

八日任參議、元宮內卿備中守。卿如元。齊衡二年正月十五日兼越前權守、宮內卿如元。四年六月十八日兼左兵衛督、止宮內卿越前權守如元。天安二年正月十六日兼信乃守。六月一日兼伊世權守。十一月十七日正四下。左兵衛督如元。貞觀三年正月十三日兼備前守。六年三月八日兼左衛門督。八年正月七日叙從三位。十年正月十六日兼近江守。十二年正月十三日任中納言十四年八月廿五日任大納言。十七年正月七日叙正三位。二月廿七日兼按察使。十九年二月廿九日兼左大將元慶三年十一月廿五日叙從二位。(朔旦)。六年正月十日任右大臣。左大將如元。仁和三年十一月十七日叙正二位(御即位日)。四年十月十六日受病、十七日薨、年五十七。在官七年。廿一日、遣參木正四下藤原諸葛、治部大輔從四位下橘朝臣休蔭爲宣命贈從一位。頭書云、續日本後紀云。仁明天皇御出家日、源多出家者如何。

(九) 大枝音人(一四七一—一五三七)

備中介正六位上大枝本主一男、母中臣氏(阿保親王侍女)、天長十年月補文章生廿三。承和四年舉秀才。五年任備中目同九年配流尾張國。同十一年秋歸京。同十二年四月十九日獻策。同十三年正月十三日少內記。十五年正月七日從五下、二月廿四日大內記。嘉祥三年十一月廿五日兼東宮學士。仁壽二年十一月一日民部少輔。學士如元。三年七月一日更大內記。少輔如元。十月改判下第。四年正月七日從五位上。齊衡三年正月十一日兼左少辨。學士如元。兼修理東大寺大佛像長官。天安二年三月十八日丹波守(止辨)十一月七日正五位下。(御即位日)四月廿五日式部少輔(止丹波守)十二月八日兼右中辨。貞觀元年十二月權左中辨。少輔如元。二年十一月十六日從四下(策勞)三年正月十三日左中辨。少輔如元。五年二月十日右大辨。頭書云、辨官補任云、不任文章生博士。而受領補任云。丹波守之日、元文章博士者如何。貞觀六年正月十六日任參議、右大辨如元。先祖本姓土師、延曆天子以外戚、改爲大枝、至音人改枝爲江左京人。同七年三月九日兼播磨權守。同八年正月七日叙從四位上。三月廿三日正四下、十月十五日改大枝爲大江朝臣。同九年正月十二日轉左大辨播磨權守。十年五月廿六日兼勘解由長官、九月日兼美乃守。十二年正月廿五日兼勘解由長官、左大辨如元。十四年二月十五(廿九歟)兼近江權守。十六年正月七日叙從三位。二月廿九日兼左衛門督。止左大辨、近江權守如元。三月七日爲使



別當。同十九年十一月三日薨、年六十七。(參議十四年、別當四年)

(c) 源 勤(一四八四—一五四一)

嵯峨天皇第十三源氏、融同母弟。承和十四年正月七日從四上、同十二日山城守。嘉祥四年正月十一日阿波守。仁壽四年九月廿三日右中將。齊衡二年正月十五日兼伊興守。中將如元。四年正月右兵衛督、天安二年七月五日宮內卿。九月十四日左兵衛督。貞觀元年正月十三日兼相模守。十一月十六日正四下、八年正月十三日兼備中權守。同十二年正月十三日任參議、右兵衛督如元。同十四年八月廿九日兼左衛門督。二月十三日兼近江守。同十七年正月七日叙從三位。右衛門督近江守。元慶二年正月十一日兼播磨權守、右衛門督如元。五年五月八日(或廿五日又十六日)薨、年五十八。號西七條宰相。(在官十二年)

(二) 在原行平(一四七八—一五五三)

奈良天皇孫、四品阿保親王三男。弘仁九年戊戌生。承和七年正月補藏人、十二月辭退。八年十一月廿日從五下。十年二月十日侍從。十三年正月七日從五上、同十三日左(右)兵衛佐。五(七)月廿七日左少將。仁壽三年正月七日正五位下。十六日兼備中權介、少將如元。四年四月十四日轉備中介。齊衡二年正月七日從四下。同十五日因幡守。四年正月十九日兼兵部大輔。守如元。四月二日任左馬頭。天安三年正月十三日播磨守。貞觀二年六月五日內匠頭。八月廿六日左京大夫。四年正月七日從四上。十三日信乃守。五年二月十日大藏大輔、守如元。六年正月十六日備前權守。三月八日左兵衛督。權守如元。八年正月七日正四下。十年五月廿六日兼備中守。頭書云天長三年親王上表云无品高丘親王男女先停王號。賜朝臣之姓。臣之子息、未預改姓。既為昆弟之子。寧異齒刻之差、於是詔仲平行平業平等賜姓在原朝臣。貞觀十二年正月十三日任參議、廿六日更兼左兵衛督備中守。等如元、為使別當。十四年八月廿九日遷左衛門督。十月十四日如元為別當。八月廿五日補藏人頭、頭書云、藏人補任云貞觀十四年八月日補藏人頭、正四位下行左兵衛(衛門)督兼備中守者。參木、藏人頭。同十五年十二月十八日任大宰權帥、叙從三位。止別當、督頭等職。同十九年十月十八日任治部卿、帥如元。元

慶三年正月十一日(六十二歲)兼備中守、治部卿如元。同四年正月十一日兼近江守、治部卿如元。同六年正月十日任中納言。八年二月廿三日叙正三位。三月九日兼民部卿。九年二月廿日兼按察使。卿如元。仁和三年四月廿三日(十三)致仕、按察使、民部卿、寬平五年七月十九日薨七十六。(參議十三年、別當四、藏人頭二、中納言六年、前參議七)

(三) 源 能有(一五〇五—一五五七)

文德天皇源氏第一皇子也。母伴氏。承和十二乙丑生。年月日賜源朝臣姓。貞觀四年正月七日從四位上。五年四月一日補次侍從。八年正月十一日加賀守。十一年二月十六日大藏卿。十二年正月廿五日兼美乃權守、卿如元。同十四年八月廿五日任參議、美乃權守如元。同廿九日兼左兵衛督。同十五年正月十三日兼美乃守。十六年二月廿九日兼備中權守、左兵衛督。十七年正月七日正四下。十八年正月十四日遷兼左中將、權守如元。元慶元年十一月廿一日叙從三位。二年正月十一日兼左衛門督。三年正月十一日兼美乃權守、四月五日為使別當。左衛門督如元。四年正月十一日兼近江權守。左衛門督別當如元。六年正月十日任中納言。仁和四年九月九日兼民部卿、辭督、別當如元。五年正月十六日兼右近大將、二月八日使別當如元、四月日兼東宮傅。寬平二年正月七日叙正三位。三年三月十九日任大納言、右大將、皇太子傅按察使如元。四年五月十日始奏辨官雜事、先例無此事。五年正月十一日兼按察使、二月廿二日轉左大將。四月十三日皇太子傅。七年八月十六日兼民部卿、十二月三日為五畿內諸國別當。八年七月十六日任右大臣、左大將、東宮傅如元。九年六月八日薨、年五十三、同月十六日贈正二位、號近院大臣。

(三) 源 舒(一四八八—一五四一)

嵯峨一世、參木正四位下刑部卿明一男、母右大臣橘氏公二女從五位下時子。承和十二年正月日補藏人(年十七)十四年二月辭退。十五年正月七日從五位下。齊衡二年正月五日美乃權介。天安二年四月二日雅樂頭。九月十四日左兵衛權佐十一月七日從五上。貞觀五年二月十日左少將。六年正月七日叙正五位下。同十六日兼備中權守。少將如元。八年正月「七日從四下同」(恐愆)十三日兼近江介、九年正月十日從四下。十年五月廿六日(正月六日)轉中將。十二年正月十三日兼



備中權守。十五年正月七日從四上。十六年二月廿九日任右大辨。中將權守如元。頭書云、貞觀十三年三月日補藏人頭。同十七年九月七日任參議、元藏人頭、右大辨、左中將大辨如元。元慶元年正月七日正四下、二月廿九日轉左大辨元慶五年二月十五日任讚岐守。(止辨)七月十六日兼右衛門督(止中將)十二月廿九日卒年五十四。(參議大辨七年)

(四) 藤原諸葛(一四八六一—一五五五)

右大臣三守孫。侍從從五下有統一男、母修理大夫從四下橘永繼女(從五下小數)承和十二年正月十一日任但馬介。正月日補藏人。仁壽三年正月七日從五下。齊衡二年正月十五日加賀權介。貞觀二年十一月十六(廿)日從五上。三年二月廿五日、中務少輔。四月九日少納言。八年三月廿三日正五位下。十三年正月七日從四位下。三月十一日兵部大輔。十五年正月十三日備中權守。十七年九月藏人頭。十八年正月七日從四上。十二月廿六日左近權中將。元慶二年正月十一日備中權守、中將如元。元慶三年十月廿三日任參議。左中將、備中權守等如元。五年十二月十三日兼左右衛門督。六年正月七日正四下。二月三日兼近江權守。右衛門督如元。仁和三年正月兼越前權守。右衛門督。二月二日兼美乃權守。五月十三日任備前權守。寬平三年三月十九日任中納言、叙從三位。七年正月上表致仕。六月廿日薨年七十。(頭五年、三木中將十三年、中納言五年)

(五) 藤原山陰(一四八四—一五四八)

參議從四上藤嗣孫、越前守從五上高房二男、母從三位眞夏女。仁壽四年正月任左馬大允。齊衡三年正月右衛門少尉。三月遷左尉。天安二年三月春宮大進。九月十四日右近權將監、十月補藏人、十一月七日從五下。權將監如元。三年三月廿二日備後權介。貞觀二年八月廿六日右近權少將、三年正月十三日兼伊與介。四年十一月補藏人。五年二月十日轉少將。六年正月七日從五上。七年十月九日禁色、九年二月廿九日兼美乃守。少將如元。十五年正月七日正五下、十六年正月十五日兼備前守。十七年正月七日(廿一)從四下。三月日藏人頭(右少將從四下兼備前守)八月十(廿)五日轉兼右近權中將、守如元。十九年二月廿九日右大辨、備前守如元。元慶三年正月七日從四上。八月十七日兼肥後權守。三年十月廿三日任

參議。元藏人頭、右大辨如元。右近權中將、肥後權守。四年正月十一日兼備中(前)守、右大辨如元。五年二月轉左大辨守如元。七月十六日播磨權守、辨如元。六年正月七日正四下。左大辨播磨權守。仁和二年六月十三日任中納言。三年五月十一日兼民部卿。四年二月四日薨。(頭勞五年、參議大辨八年、中納言三年)年六十五。

(六) 藤原國經(一四八八—一五六八)

贈太政大臣長良一男、母從五下難波淵子。清和朝天安二年十月補藏人(左衛門大尉)貞觀元年十一月廿九日從五下。三年正月十三日備後權介。四年正月十三日播磨介。五年二月十六日兼侍從。八年正月十三日右兵衛權佐。九年正月七日從五上。十三年正月十三日兼備後權介。十六年正月十五日兼播磨介。十七年正月七日正五位下。十九年正月三日從四下。同十五日左馬頭、二月補藏人頭。元慶二年五月廿八日兼中宮大夫。三年十一月廿五日從四上、六年正月爲皇太后宮大夫。同年二月三日任參議。元藏人頭、皇太后宮大夫如元。三月廿八日正四下。七年正月廿一(十一)日兼備中守。九年正月十六日兼播磨守。仁和五年二月廿八日(正月十六日)兼近江權守。皇太后宮大夫。寬平六年五月五日任權中納言、從三位、太宰權帥如元。同八日給左右近衛左右兵衛爲隨身。八年九月廿二日停皇太后宮大夫。九年六月十九日轉中納言、太宰權帥如元。延喜二年正月廿六日任大納言。三年正月七日叙正三位。七年正月十三日兼按察使。八年六月廿九日(廿八)薨年八十一。(頭六年、參議十三年、中納言九年、大納言七年)

(七) 源 直(一四九〇—一五五九)

故左大臣常公三男、仁壽四年正月七日從五下、齊衡二年八月廿三日侍從、天安元年十月廿七日中務少輔。二年五月十一日兵部少輔、十一月七日從五上。貞觀五年正月十三日(十日)山城權守。同十二月十六日兵部少輔。九年正月七日正五下。二月十一日(二日)木工頭。十年正月十六日右中辨。十二年正月廿五日左中辨。十三年正月七日從四下(四十二)十五年十二月藏人頭。(左中辨、從四下、四十四歲)十六年十二月廿九日右近權中將(止辨)十七年正月兼相模權守。二月依病解藏人頭。八月十五日改轉中將。十八年正月七日從四上。十九年正月十五日兼備中守。元慶元年十一月廿一日正四下。



五年二月十五日兼肥後守。六年二月十五日兼美乃守(受領)仁和二年六月十三日任參議。右中將美乃守如元。三年二月二日兼播磨權守。四年十一月廿五日正四上。五年二月廿八(八)日兼刑部卿。寬平二年閏九月廿日兼左大辨。十一月廿一日兼右衛門督。三年四月十一日兼民部卿、辨如元。四年三月廿三日兼越前守。二月廿一日兼右衛門督、止辨卿等。七年二月十一日兼備前權守。八年正月七日叙從三位。九年五月廿五日兼讚岐權守(去督)。昌泰二年十二月廿六日出家即日薨、年七十。(頭三年、參議十四年)

(二) 源 光(一五〇六一—一五七三)

仁明天皇第三源氏。貞觀二年十二月十六日從四上。(十五)三年五月十四日補次侍從。七年正月廿日美作守。十四年二月廿九日相模權守。十五年二月廿二日讚岐權守。十八年正月七日正四位下。同十四日左兵衛督。元慶五年二月十五日兼相模權守。六年二月二日兼播磨權守。八年四月一日任參議。左兵衛督、播磨權守如元。四年三月七日相模權守。五年正月十六日兼備前權守(四十五)寬平三年三月十九日任中納言、叙從三位(超二人)。四年二月廿一日兼民部卿。五年二月廿二日兼左衛門督、(止民部卿)三月六日爲使別當。九年六月十九日任權大納言。兼按察使。去二月停使別當。昌泰二年二月十四日轉大納言、按察使。四年正月七日叙正三位、廿五日任右大臣。延喜三年正月七日叙從二位。四年二月十日兼皇太子傅。六年八月廿五日兼右近大將。九年四月廿二日兼左近大將。十年正月七日正二位。十三年三月十二日乙卯薨、年六十八。十八日贈正一位。號後西三條右大臣(參議八年、中納言七年、別當五年、大納言五年、右大臣十三年、右大將四年、左大將五年)

(三) 藤原保則(一四八五—一五五五)

中納言從三位乙叡孫。左兵衛佐正四位(五)下貞雄男。母左中辨從四下安倍弟富女。齊衡二年三月任治部少丞、三年正月丙辰任民部大丞。天安二年任兵部少丞。貞觀元年十二月(三)廿一日轉大丞。五年二月十日任式部少丞。八年正月七日叙從五下。同月十三日任備前中權介。十三年正月七日叙從五上(治國勞)同月廿九日任備前中守。十六年正月十五日任備前權

守。十八年正月十四日任右衛門權佐。同年二月十五日任民部大輔、十九年正月十五日任右中辨。元慶二年五月四日叙正五下。同日兼出羽權守三年正月十一日轉守。五年七月十六日。兼播磨權守。六年正月七日叙從四下。二月三日兼讚岐權守。仁和三年二月二日伊與守。八月廿三日任太宰大貳。十一月十七日叙從四位上。寬平三年四月十一日任左大辨。四年四月廿八日參議。左大辨如元。五年正月十一日兼近江權守。二月廿六(廿二)日兼民部卿。(去辨)七年四月廿一日卒(在官四年)年七十一。

(四) 源 湛(一五〇五—一五七五)

左大臣融公一男、母。貞觀五年(正力)月七日叙從五下。(元無位)九年三月廿九日任備後權介。十年正月十六日任備前權介。十二年三月十四日任侍從。十六年正月十五日任土佐權守。十八年正月七日叙從五位上。十二月廿七日任左兵衛佐十九年正月十五日任左衛門佐。元慶七年二月十四日兼備前中守。九年正月十六日任左近衛少將。備前中守如元。仁和二年正月七日叙正五位下。三年閏十二月三日聽禁色雜繩。(昇殿)五年正月十六日兼讚岐介。寬平二年正月七日叙從四位下。二月廿七日兼內藏權頭、九月廿日補藏人頭。(右中將、內藏權頭)四年正月廿三日轉內藏頭。二月廿一日任左近衛中將。五年正月十一日兼備前中守。五年二月十六日任參議。備前中守如元。(後日宣旨)。八年正月七日叙從四上。二月十五日兼彈正大弼。九年正月十四日兼讚岐權守。五月廿五日兼刑部卿(止大弼)。昌泰二年正月十一日兼美乃權守。四年正月七日正四位下。延喜四年正月廿五日伊世守。七年二月廿九日兼近江權守。八年正月任中納言。九年正月十一日兼陸奧出羽按察使叙從三位。十二年十二月廿二日上狀請致仕、不許。十三年正月廿八日任大納言。十四年八月十三日致仕。同十五年五月廿一日薨、年七十一。

(五) 藤原高藤(一四九八—一五六〇)

左大臣冬嗣公孫、內舍人良門二男。母西市正高田沙彌磨女。貞觀四年正月十三日任右近將監。七年十月十九日補藏人聽禁色衣服。八年正月廿三日兼美乃權大掾。十年正月七日叙從五下。十一年二月十六日甲辰播磨權介。十三年三月十一日



丁巳任備中權介。(十八年正月七日從五上、同十四右兵衛權佐)元慶三年二月十五日尾兼張權守。七年正月十一日任左近少將。八年三月九日兼讚岐介。仁和二年二月廿七日任兵部大輔。三年二月二日兼近江權介。十(十一)月十七(七)日叙正五下。四年三月十九日聽禁色雜袍。五年六月廿八日兼伊與權介。少將如元。寬平二年正月七日叙正五位上。二月廿七日任兵部大輔、叙從四位下。三年三月九日兼伊與權守。四年正月廿三日任播磨權守(止大輔)。六年正月三日叙從三位。(超三階)播磨權守。七年十月廿六日任參議。播磨權守如元。八年正月廿六日兼近江守。九年六月十九日任中納言。七月十三日正三位。昌泰二年二月十四日任大納言。三年正月廿八日任內大臣。三月十二日薨、年六十三。三月十四日贈正一位太政大臣。號勸修寺內大臣。(三位二年、參議三年、中納言三年、大納言三年、內大臣二年)

(三) 藤原清經(一五〇六一—一五七五)

權中納言從二位長良卿六男、母、貞觀八年正月十三日左衛門少尉。同九年正月十二日轉大尉。同十一年正月七日從五下。二月十一日春宮大進。同十八年十二月廿七日右(權)少將。同十九年正月七日從五上。同十五日左權少將。四月十九日宣旨衣服禁色。(藏人歟)元慶三年正月十一日兼播磨介。同五年三月八日轉少將。七月十六日兼備中守。同六年正月七日正五位下。同七年二月十四日兼讚岐介。仁和二年正月七日從四下。同三年二月二日兼周防權守。寬平三年四月十一日右中將。同四年正月廿三日兼伊世權守。同五年二月廿一日右(權)中將。同六年正月七日從四上。同九年正月十一日兼備中守。同五月廿五日兼太皇太后宮太夫、十二月十三日兼右兵衛督。昌泰三年二月廿日任參議。(忠平朝臣辭之讓)五月止太夫、督如元。延喜八年正月十二日遷兼右衛門督。九年四月廿二日兼備前權守。十四年正月十二日兼讚岐守。十五年正月七日叙從三位。五月廿三日薨年七十。

(三) 在原友子(一五〇三一—一五七〇)

致仕中納言從三位在原行平男、母、貞觀十三年三月十一日左京少進。同十七年二月廿七日辛巳、春宮少進。同十八年十二月廿七(二)字元)日主殿權助。元慶元年正月三日從五下。閏四(一)月十九日聽衣服禁色。(藏人)同三年正月十一日

右兵衛權佐。同七年正月十日右權少將。同八年二月二十二日從五位上。仁和元年二月廿五日兼播磨權介。同二年六月十九日右(左權)少將。同四年二月十日(三月廿日)左少將。十一月廿五日正五下。寬平二、正月廿八日兼讚岐權介。同四年正月七日從四位下。二月廿一日內藏頭。同五月一日許雜色。同五年閏五月一日修理大夫。同七年十二月十日藏人頭。同八年正月廿六日兼侍從。同九年正月十一日右中將、大夫如元。六月十九日左中將。七月止頭、十一月廿三日從四上。同十年正月九日兼美乃權守。昌泰二年正月十一日兼備前守。三月廿八日還補藏人頭。三年正月廿八日任參議。二月兼修理大夫。八月三十日兼左兵衛督。四年二月十九日兼備中守。延喜七年正月十三日兼太宰大貳、止修理大夫。五月一日改任權帥。十年四月廿日卒、年六十八。(在官廿年)

(三) 藤原菅根(一五一六一—一五六八)

常陸介從五上春繼孫。從四上右兵衛督良尙朝臣四男。母從四位下菅野高年女。齊衡三丙子生。元慶八年春補文章生。(字右生)寬平二年正月任因幡掾。九月對策。同三年三月九日任少內記。同九年七月七日昇殿、十三日從五下(御即位)十六日昇殿。十七日勘解由次官。廿六日式部少輔。十一月廿三日從五上。昌泰二年二月十一日兼文章博士。同三年正月兼備中權介。廿九日藏人頭。五月十五日右少將、少輔介如元。同四年正月廿六左貳太宰大貳、今日止頭、廿七日如故昇殿。二月十九日式部少輔。廿一日如元藏人頭。三月十五日兼權左中辨。延喜二年正月七日正五位下。同三年正月七日從四下。二月廿六日式部權大輔。同四年正月廿五日兼備前守。二月兼春宮亮。同廿六日式部大輔、兼官如元。同六年十一月七日從四位上。同七年二月廿九日兼侍從。八年正月十二日任參議、侍從式部大輔如元。十月七日卒、年五十三、十七日贈從三位。

(三) 三善清行(一五〇七一—一五七八)

淡路守從五位下氏吉三男、母佐伯氏。承和十四年辛卯生。貞觀十五年春文章生(字三耀)十六年得業生。同十九年二月廿九日越前權少目。元慶四年正月十一日兼播磨權少目。同五年四月廿五日對策(不第)七年五月改判(丁第)同八年正月十一日任大學少允。仁和二年正月十六日少內記。同三年正月七日從五下。二月二日大內記。寬平三年正月廿日(卅)肥後介



同五年正月十一日備中(受領)同八年正月七日從五上。昌泰三年二月廿日兼刑部大輔。同五月十五日兼文章博士。內記如元。同三年四月十五日兼大學頭。延喜二年正月七日正五下。同三年二月廿六日式部少輔。博士、頭如元。同四年正月七日從四下。五月廿八日去大學頭。同五年正月十一日式部權大輔。同十四年四月廿二日轉正大輔。叙從四上。延喜十七年正月廿九日任參議。五月廿日兼宮內卿。十八年正月十三日兼播磨權守。十二月六日卒。又云十月廿六日卒。依浮藏加持蘇生。十二月二日遂薨(在官二年)年七十二。

(三) 藤原實賴(一五六〇—一六三〇)

攝政左大臣忠平男、母宇多天皇第一源氏順子。延喜十五年正月廿一日從五下(內宴日所叙)右大臣息(年十六)同年九月廿三日昇殿。十六年三月廿八日阿波權守。十七年五月廿四日右衛門佐。十九年正月廿八日右近權少將。廿年九月廿一日(廿一歲)兼備中權介(守)廿一年正月七日從五上(廿二)卅日兼備前介。廿二年正月卅日兼近江介。延長四(元九)年正月七日正五下(廿四)同二月廿五日藏人。五年正月十二日兼紀伊權守。六年正月七日從四位下。同十九日昇殿。同六月九日右近權中將。七年正月廿九日兼播磨守。八年九月廿五日藏人頭。九年三月十三日任參議(三十二)左中將播磨守如元。十二月十七日兼讚岐守。承平二年十一月十六日從四上。三年五月廿七日兼右衛門督、補檢非違使別當。四年十二月廿一日任中納言。八年六月廿三日兼右近大將(去別當)十二月十四日兼按察使。天慶二年八月廿七日任大納言。五年十二月四日聽侍官奏。六年正月七日正三位。七年四月九日任右大臣、右大將如元。六月十日上表。同日被返表。中使右少將藤直忠。廿三日重上表、廿五日被返之。中使左少將藤季方。廿八日重上表、同被返之。八年十一月廿五日轉左大將。九年正月七日從二位。五月四日藏人所別當。十年四月廿六日轉左大臣、左大將如元。天曆三年八月十四日服解。十二月二日復任。四年七月廿三日兼皇太子傅。八年五月十五日正二位(受領加階)九年九月十七日辭大將不許。十一年三月(三月廿日紀略)依病辭左大將。四月五日勅授帶劍。天德二年三月聽輦車。三年十二月賀六十算。四年七月五日勅授帶劍。應和四年正月七日從一位。康保四年五月廿七日宣旨、如故聽乘輦車入宮中、又諸節會不就行列直殿上者。六月廿二日詔關白左大臣。

十二月十三日任太政大臣。五年六月五日可覽官奏者、同十四日給度者卅人。依所勞也。安和二年八月十三日詔為攝政、十六日如舊聽牛車、廿八日賜隨身內舍人、左右近衛各四人。三年五月十八日薨年七十一。贈正一位、諡云清慎公、封尾張國(關白二年攝政二年)號小野宮。

(三) 藤原在衡(一五五二—一六三〇)

中納言山陰卿孫、但馬介從五下有賴一男、母讚岐守高向公輔女。實有賴舍弟、大僧都如無子云々。母備中掾良岑高見女。延喜十三年五月文章生。十七年六月廿日備前掾。十八年十二月策。十九年正月廿八日少內記。廿一年三月十三日近江權大掾。延長二年正月七日從五下(藏人)二月一日刑部少輔。同七日昇殿(服解)同四年十月廿八日大學頭(復任)侍從。同六年正月廿九日式部權少輔。七月廿五日藏人。同八年十一月廿一日從五上。同十二月十七日式部少輔。承平元年閏五月七日昇殿。同二年正月廿七日左少辨。同三年十月廿四日右中辨。四年十二月廿一日(廿日)兼式部少輔。同六年正月七日正五下。五月三日昇殿。同七年九月九日左中辨、少輔如元。同八年正月七日從四下。五月三日昇殿。天慶三年三月兼式部大輔。同三月廿八日右大辨、大輔如元。四年十二月廿五日任參議。右大辨式部大輔、如元。五年三月廿九日轉兼左大辨。式部大輔、如元。十二月十三日兼備中守。六年正月七日從四上。七年二月廿一日兼丹波權守。三月廿九日停式部大輔十年四月日任權中納言。天曆二年正月卅日轉中納言、同日兼按察使。天曆七年九月廿五日遷兼民部卿。九年十一月廿三日正三位(朔日)十年十一月五日昇殿(外孫致平親王參內日)廿五日民部卿、如元。天德四年八月廿二日任大納言、同十五日民部卿、如元。九月廿七日補造宮別當。五年十二月二日從二位(造宮賞)安和二年三月日任右大臣。三年正月廿七日任左大臣。十月十日致仕。出家入道薨年七十九。廿日贈從一位、號粟田左大臣(公卿勞卅年)

(三) 平 隨時(一五五〇—一六一三)

仁明天皇曾孫。一品式部卿本康親王孫、右馬頭從四下雅望三男。母中納言山陰女。延喜十七年正月廿九日美乃權大掾(內堅頭勞)十八年正月治部少丞(內堅別當)廿一年正月式部少丞。廿三年正月大丞。延長二年正月七日從五下(宇多院御給



判官代)二月一日遠江守。同七年正月七日從五上(治國)同廿九日備中。承平四年閏正月廿九日美乃權守。天慶元年正月防鴨河使。十二月十四日左衛門權佐。同二年正月七日正五下。同十六日次侍從。二月一日兼丹波守。同五年十二月停權佐。同四月廿五日從四下(佐勞)同六(七)正月廿二日(廿三)兼春宮權亮。同八年十月十四日兼修理大夫、亮如元。同九年四月廿一日昇殿。同廿六日補藏人頭。廿八日正四下(前坊亮)七月十七日兼內藏頭。天曆二年正月卅日任參議、修理大夫如元。三年正月廿四日兼伊與守。四年正月廿日兼太宰大貳。止修理大夫。七年十二月十八日於任所卒。年六十四(頭三年參議六年)

(元) 源 兼忠(一五六—一六一八)

清和天皇孫、四品貞元親王男。母昭宣公女。延喜十七年正月七日從五下(氏)廿一年正月卅日備中權守。延長六年正月廿九日參川權守。六月九日侍從。同八年九月廿二日昇殿。同九年三月十三日左兵衛佐。承平二年正月七日從五上。同五年二月廿三日兼大和權介。同六年三月廿四日左衛門佐。同八年正月八日正五下(中宮御給)天慶三年三月廿五日兼中宮亮。同四年正月七日從四位下。二月九日昇殿。同五年三月廿九日兼近江權守。同七年四月廿二日兼春宮亮。同八年十月(十一)四日中宮權大夫、亮如元。同九年四月廿八日正四下(前坊亮)七月十七日兼左京權大夫。九月十六日兼右京權大夫(左京大夫玉淵依有從父兄忌也)天曆五年正月卅日近江權守。八年三月十四日任參議。九年二月七日兼備前權守。十年三月廿四日兼治部卿。天德二年七月一日卒(在官五年)年五十八

(同) 小野好古(一五四—一六二八)

參議從三位行左大辨小野篁孫。太宰大貳從四上葛絃二男、母王氏。元慶八年甲辰生。延喜十二年三月廿七日讚岐權掾。十七年正月廿九日春宮權少進。廿二年正月七日從五位下(春宮御給卅九)五月廿六日右京亮。延長六年八月九日大藏少輔。同三年十月十四日中宮大進。同八年十一月十一日(十六)右衛門權佐、承平元年閏五月十一日昇殿。同二年十一月十六日從五位上(大嘗會)同五年二月廿三日兼備前權介。同六年正月廿九日兼中宮權亮。同八年三月廿六日右少將、中宮亮如元。

天慶二年正月七日正五下。二月一日兼近江權介。同三年正月兼追捕凶賊使。同四年五月七日從四下(五十八)八月十八日昇殿。同五年三月廿八日左中辨。十二月備前(權)守。同七年二月廿一日兼山城守。同八年十月十四日(四日)太宰大貳。同十年正月九日賜錢。三年十月二日復任、太宰大貳。四年二月得替。六年正月十一日兼伊與權守。七年正月七日從四上。同廿九日兼讚岐權守。九年壬九月十七日兼備中權守。天德二年正月七日正四下。閏七月廿八日兼彈正大弼。三年七月十七日兼左大辨。四年正月廿四日兼備中守。四月廿三日任太宰大貳(止辨弼等)康保四年七月七日致仕。五年二月十四日卒。生年元慶八年甲辰(見任廿二年)年八十四

(三) 藤原朝成(一五七七—一六三四)

故右大臣、從二位定方公六男、母同朝忠朝臣。延喜十七年丁丑生。延長八年十一月(八十一、廿)從五下(氏)同九年三月十三日侍從。天慶元年十二月十四日左兵衛權佐。同四年四月十三日昇殿。同五年三月廿九日右少辨。同六年正月七日從五上。二月廿七日兼近江介。同八年十一月廿五日左少將。同九年四月六日昇殿。七月十七日兼備中權介。十一月十九日正五下(主基)天曆二年正月七日從四下。二月十九日昇殿。同三年正月廿四日兼備後權守。同四年正月卅日右中將。同七年正月廿九日左中將。同八年三月十四日兼紀伊權守。同九年八月十七日藏人頭。十一月廿三日(廿二)從四上(朔旦)天德二年正月卅日兼內藏頭。天德二年後七月廿八日任參議。三年正月六日兼備中權守。七月十七日兼勸解山長官。四年八月九日兼近江守。應和二年正月七日正四下。同四年二月廿二日補法隆寺別當。康保二年十二月(十衍カ)月四日兼右衛門督。八日爲使別當。同四年九月四日兼中宮大夫(今日立后)十月十一日從三位(御即位次)安和元年十一月十四日兼伊與權守。三年正月廿七日任中納言。二月三日兼中宮大夫。天祿二年十二月十五日轉中納言、中宮大夫如元。四年七月一日兼皇太后宮大夫。天延二年四月五日薨年五十八。稱三條中納言(參木十三年、別當六年、中納言五年)

(三) 源 重信(一五八二—一六五五)

入道式部卿敦實親王四男、母同雅信朝臣、延喜廿二年壬午生。承平四年十二月廿八日聽昇殿(十三)七年正月七日從四



位下(十六)天慶三年九月十二日昇殿。同四年三月廿八日侍從。同八年十一月廿五日左馬頭。天曆二年正月卅日兼美作權守。同五年正月七日從四上。同十二月四日昇殿。同三十日右近權中將。同六年正月十一日兼美乃權守。同九年七月廿四日遷左兵衛督。十一年四月廿五(十五)日兼內藏權頭。同九月十七日兼修理大夫。天德四年八月廿二日任參議修理大夫如元。五年正月廿五日兼備中守(四十)十二月二日正四下(造宮賞)應和二年正月廿二日兼近江權守。三年正月七日從三位(造宮功多仍追加賞者)康保四年正月廿三日兼播磨權守。五年正月廿日兼播磨權守。十一月以權守讓兄雅信卿。安和二年三月廿六日停昇殿。依左大臣源高明事也。彼公掣也。三年正月廿五日兼伊與權守。廿八日兼大藏卿。天祿三年壬二月廿六日任權中納言、叙正三位。四年二月七日如舊昇殿。天延二年五月廿三日兼皇太后宮大夫。十一月十八日叙正三位(朔旦)三年正月廿六日轉中納言、皇太后宮大夫如元。貞元三年十月二日任大納言、皇太后宮大夫如元。天元二年三月廿八日勅授帶劍(行幸日於長岡頓宮賜之)四年正月七日叙從二位。二月廿日叙正二位(賀茂平野行事賞、超朝光、濟時)天元六年正月廿九日兼按察使。寬和二年七月五日兼大皇太后宮大夫、按察使、十月十一日可叙從一位。而男相方叙正四下。正曆二年九月七日任右大臣(七十)正曆五年八月廿八日轉左大臣。九月七日兼皇太子傅(三條院立坊日)正曆六年五月八日薨年七十四、同廿五日庚午參議右大辨源扶義、就六條亭、宣制云々。贈正一位也。今日薨奏。去十六日葬送。依葬送以後無警固事。先例云々、富小路右大臣顯忠。一條右大臣恒佐。三條右大臣定方等條也。號六條左大臣。

(三) 藤原伊尹(一五八四—一六三二)

故右大臣師輔公一男、母武藏守從五下藤原經邦女。贈正一位盛子。延長二年甲申生。天慶四年二月七日從五下(中宮御給、十八)同四月十二日昇殿。同五年十二月十七日侍從。同九年三月七日右兵衛佐。天曆二年正月七日從五上。同卅日左少將。同……藏人(廿五)同三年正月廿四日兼美乃介。同五年正月卅日兼紀伊權介。同六年正月七日正五下。同九年正月七日從四下(少將如元)同十七日昇殿。七月廿七日左近權中將、八月七(十七)日藏人頭。同十年二月廿四日兼春宮權亮。天德二年正月卅日兼伊與權守。同四年正月七日從四位上。八月九日兼伊與守。五月四日服解。六月廿六日復任。四年八

月廿二日任參議(卅七)元藏人頭、左中將如元。同廿五日追賜左中將伊與守等兼字。五年正月廿五日兼伊與守(一本兼紀伊權守)應和二年正月廿二日兼備中守(卅九)四年二月廿二日補雲林院別當。康保二年正月七日正四下(參木勞)四年正月廿日任權中納言。即從三位。十二月十三日任權大納言。五年十一月廿三日正三位。安和二年三月廿六日轉大納言。兼右近大將。十一月十一日轉左近大將。三年正月廿一日轉右大臣(上首二人)正月二日宣旨左大將。五月廿七日為攝政。七月廿八日辭大將。十三日從二位。天祿二年十一月二日正二位、同廿四日牛車。十一月二日任太政大臣。三年十一月一日薨、年四十九。同五日贈正一位。諡曰謙德公、封參河國。號一條攝政。去十月四日遣藏人左少將舉賢弟給度者八十人。為除病也。同廿一日上表辭攝政並官位、乞致仕、同廿三日停攝政太政大臣、隨身兵仗如元。(攝政三年)

(四) 源 重光(一五八三—一六五八)

醍醐天皇御孫。中務卿四品代明親王一男、母右大臣定方公安。延長元年癸未生。承平八年正月七日從四位下(十五)天慶五年十二月十三日侍從。同七年四月十四日昇殿。天曆四年正月卅日兼信乃權守。同七年四月廿九日左近中將。同八年三月十四日兼伊與守。同九年十一月廿二日從四位上(朔旦)天德二年閏七月廿八日左中將。同三年七月十七(十一)兼播磨守。應和元年七月三日兼左京大夫。同四年正月廿七日兼備中權守。同三月廿七日任參議、元左中將、左京大夫如元。七月廿九日兼備中權守並宮內卿(止大夫)。康保二年五月十一日兼伊勢權守。四年十月十一日正四下(御即位次)五年六月十四日兼右兵衛督。十一月十四日兼播磨權守(與弟延光朝臣相替)(止卿)十一月廿三日叙從三位(主基)天祿三年壬二月廿九日兼大藏卿。四年三月廿八日兼右衛門督、並伊與權守。天延二年二月十七日使別當(延光卿讓)三年正月廿六日轉兼左衛門督使別當如元。伊與權守。貞元二年四月廿四日任中納言。廿五日宣旨左衛門督別當如元。天元五年正月七日正三位。正曆二年九月七日任權大納言。三年八月廿八日上表辭之、但讓伊周卿云々。長德四年七月十日薨、年七十六。(參議十四年別當十八年、中納言十五年、大納言二年、前官七年)

(五) 源 延光(一五八七—一六三六)



中務卿代明親王男母、延長五年丁亥生。天慶五(四)年四月廿四日昇殿。同九年正月七日從四上(殿上勞、二十)十一(五)月日改姓賜源朝臣。天曆二年六月廿九日侍從。同八年三月十四日春宮權亮。同九年七月廿四日兼內藏頭(權亮如元)天德三(二)年正月卅日右兵衛督(頭亮如元)同四年正月七日從四上。同九月十六日藏人頭(三十四)十月九(十九)日左近權中將同五年正月廿五日兼備中權守。應和三年九月四日兼伊與權守。康保三年九月十七日任參議、右權中將如元。元藏人頭。四年正月廿日兼播磨權守。安和元年十一月十四日兼伊與權守(與兄重光卿相替)二年八月十三日兼春宮大夫。九月廿三日正四位下(御即位日)三年八月五日任權中納言(上首五人)即叙從三位、春宮大夫如元。天祿三年正月廿四任中納言。左衛門督、春宮大夫如元。四年二月廿五日爲使別當。天延三年正月日任權大納言。天延四年六月十四日依病入道。同十七日薨、年五十。號枇杷大納言。(頭七年、參議五年、中納言六年、大宰帥二年、別當二年)

(三) 藤原爲光(一六〇二—一六五二)

父右大臣師輔九男。母延喜第九皇女前齋宮四品稚子內親王。天慶五年壬寅生。天曆十一年正月七從五下。(故康子內親王給)天德二年正月三十日侍從。同三年正月廿六日右(左)兵衛權佐。同四年正月十三日昇殿。同五月四日服解。六月廿六日復任。應和二年正月七日從五上(中宮御給)同廿三日右少將。同三年正月十三日藏人。同廿八日兼伊與權介(守)康保三年正月七日正五下。同廿七日兼近江權介(守)同四年六月十日昇殿(踐祚初)同十六日藏人(新帝)九月一日東宮昇殿。十月十一日從四位下(少將勞)十四日昇殿。同五年二月十四日權(无)左中辨。少將、介如元。安和元年十一月廿七日從四上(悠紀)同十二月停少將。同二年正月廿七日兼內藏權(无)頭(或無權字)三月廿六日止昇殿(依爲中務卿爲平親王家司也)同年四月廿八日轉左中辨、頭如元。同八月十三日兼春宮權亮、十月十四日藏人頭(二十八)天祿元年十二月十六日左中將。同年十二月卅日任參議、左中將如元。二年正月廿九日兼備中守。四年正月廿八日任權中納言。天延二年二月廿五日申刻着座三年正月廿六日轉中納言、中宮大夫如元。四年正月七日正三位(不次叙之云々超一人)貞元二年三月廿六日叙從二位。四月廿四日任大納言。同廿五日宣旨、大夫如元。三年十月十七日兼按察使。天元二年六月三日停大夫。四年二月廿三日正

二位(臨時)十月四日可叙從一位而讓男從五上誠信叙正五位下。永觀二年八月十八日兼春宮權大夫。廿七止權大夫(受禪)同日立太子。又兼大夫。十月十日可叙從一位而讓男從五位下齊信、叙從五上。寬和二年六月止大夫(踐祚)七月廿日任右大臣。同廿二日可叙從一位。而男誠信叙正四下。三年十月十四日從一位(此日行幸攝政東三條之次臨時叙之)正曆二年正月日聽輦車、九月七日任太政大臣。三年六月十六日薨、年五十一。諡曰恒德公。封相模國、詔贈正一位。號後一條太政大臣。又法住寺。以建立此寺也。(左大臣六年、太政大臣二年)

(四) 藤原元輔(一五七六—一六三五)

父故右大臣顯忠公一男。母從五上藤朝見女。延喜十六丙子生。承平七年正月廿七日昇殿。天慶元十一月十四日任左兵衛少尉(昇殿勞)同六月十日昇殿。天慶三年八月廿七日遷右衛門少尉(父顯忠卿任左兵衛督之故也)同四年三月廿八日遷左近將監。同六年正月十三日藏人。同八年正月七日從五下(府馬御給)同六月十八日昇殿。十一月廿五日侍從。天曆二年正月卅日右(左)兵衛佐。同四年二月十九日昇殿。三月七日補藏人。同五年正月卅日右少將。同六年正月七日從五上。同十一月(月)兼近江權介。同九年七月廿四日左少將。同閏九月十七日兼近江權介。同十年正月七日正五下(少將勞)同十一年正月廿七日兼近江介。同四月廿五日遷右少將(父顯忠卿任左大將也)天德二年正月七日從四下。同閏七月廿八日左中將八月廿七日昇殿。同三年七月十七日兼播磨權守。應和三年正月七日從四上。同四年正月廿二日兼讚岐權守。同三月廿七日兼備中權守。康保四年正月廿日左中將。六月十日昇殿(踐祚初)同五年六月十四日兼美作守。安和元年九月廿三日藏人頭。安和二年十月十四日昇殿。天祿三年壬二月廿九日任參議。元頭左(右)中將。四年廿八日兼美乃權守。三月廿八日兼治部卿。天延二年十一月十八日正四下(朔旦)三年十月十七日卒、年六十。(頭五年、參木四年)

(五) 源 惟正(一五六六—一六四〇)

文德源氏。故中納言從三位當時卿孫。故左大辨從四位下相職三男。母從五位上源當平女。延喜六年戊子生。天慶八年四月十八日昇殿。同九年三月七日左兵衛權少尉(殿上勞)天曆元年十月廿三日大尉。同四年七月補東宮藏人。同七年正月



廿九日左兵衛權少尉。同九年二月廿七日藏人。同十月七日大尉。同十年正月七日從五下(外衛勞、藏人)同九月八日備中。天德五年正月七日從五上(備中功)同廿五日任信乃守。康保三、正月廿七日播磨介。同四年九月一日兼春宮大進。同十一月二日昇殿。安和元、十一月廿七日叙正五位下(大嘗祭主基)同二年八月十三日昇殿(踐祚初)同九月廿三日從四下(先坊大進)同廿七日昇殿。同十一月十一日兼春宮亮(播磨介如元)天祿元八月六日藏人頭。同九月廿日右中將(亮如元)同十一月廿日從四上(播磨功)同二年三月廿日兼近江權守。同三年壬二月廿九日兼修理大夫。同四年七月廿六日辭修理大夫。即以惟章申任右兵衛佐(或右少將)天延二年二月七日任參議。元藏人頭、春宮亮(亮如元)四月七日止亮。十一月廿八日正四下(朔旦)五月甲辰亥時着座。天延三年正月廿六日兼備前守。四年正月廿六日辭備前守、次男遠理申任右衛門權少尉(左兵衛權尉)貞元二年八月二日從三位(造宮功)三年二月三日兼大和權守。天元二年正月廿六日上表辭參木。以男遠古朝臣申任伊與介。同月廿八日請停任。二月四日勅復。兼官如元。天元三年四月廿九日薨、年五十二。(頭五年、參議七年)生年延喜六年戊子(トアルニ依レバ七十五歲歟)

(四) 藤原朝光(一六一一—一六五五)

父關白太政大臣兼通公四男。母三品兵部卿有明親女王。從二位昭子女王。天曆五年辛亥生。應和元年月日昇殿(十一)同三年正月七日從五下(中宮御給)康保二年正月十七日昇殿。同三年九月十七日侍從。安和三年閏五月十日昇殿。同廿七日右兵衛權佐。同八月十三日昇殿(代始)天祿元年十二月十日右少將。同二年正月廿九日兼備中權介。同三年正月七日從五上(廿二)同四年正月八日藏人。同三月廿日兼近江權介。同七月一日中宮權亮。同七月正五下(女御嬪子日來坐內大臣堀川第。即登后位、今日移御內裏。師輔卿例所叙)同廿六日任左中將。亮兼國介如元。天延二年正月七日從四下(一品宮御給)同二月七日兼近江守。同八日藏人頭。天延二年四月十日任參議、左中將如元。三年正月廿六日叙從三位。任權中納言(超五人)四年七月廿六日兼春宮大夫。貞元二年四月廿四日任權大納言。同廿五日宣旨春宮大夫如元。十二月九日兼左大將。天元二年四月十九日卯已刻着座。永觀二年正月七日叙正二位。八月廿七日止大夫。十月十日可叙從一位而十四日讓男登

叙從五位下。寬和二年七月日又兼之(左近大將、春宮大夫)永延二年正月廿九日兼按察使。三年六月廿七日依重病辭大將大夫。不許。六月廿七日重辭大將、並大夫等。依病也。被優許。大納言按察使如元帶之。正曆四年正月日止按察使。六年三月廿日薨于枇杷第、年四十五。五月廿五日薨奏。(頭勞三ヶ月、參木二年、中納言三年、大納言十九年、大將十三年)號閑院大將。

(四) 源 伊陟(一五九八—一六五五)

父二品中務卿兼明親王一男。母從四下伊勢守衆望女。天曆六年正月七日從五位下(氏、延木御給)九年十月侍從。十年九月八日任左兵衛權佐。天德二年壬七月廿八日左近少將。同年八月廿七日昇殿。四年正月廿五日兼近江權介。五年正月七日從五上。同年三月爲神寶使。參向宇佐之間。途中煩病、稽留備後國、不達前途。(壬三月廿一下部方生注事由言上。其後同廿三日已以參上)同年八月八日停左近少將(猶帶近江介)應和三年九月九日任近江權介。四年三月廿七日民部少輔。天祿三年三月廿日右少辨。十二月十五轉左少辨。同三年正月七日正五位下(辨勞)四年七月廿六日右中辨。天延二正月七日從四下(辨勞)三月廿八日昇殿(花宴次)同四月十日補藏人頭。三年正月廿六日任左兵衛督(停辨)四年正月廿八日兼周防權守。貞元二年四月廿四日任參議(四十)元藏人頭左兵衛督。三年二月三日兼備後權守。天元二年三月廿八日可叙從四位上。而以男賴之申叙從五位下。三年正月七日叙從四位上。四年十二月四日正四位下(造宮行事賞)六年正月廿七日兼備中權守。十一月十一日兼近江權守。永觀三年十一月卅日叙從三位(悠紀國司)寬和二年三月五日兼播磨守。八月十三日兼近江守、十一月十八日正三位(悠紀國司賞)。永延二年二月廿七日兼右衛門督。三年二月廿三日任權中納言、止右衛門督。十一月廿八日兼太皇太后宮權大夫。永祚二年正月廿九日兼右兵衛督。權大夫如元。二月十日丙辰着座。正曆五年九月八日兼右衛門督。六年正月廿三日轉中納言。大皇太后宮大夫、右衛門督等如元。五月廿二日薨、年五十八、廿五日薨奏。(頭四年、參木十二年、中納言七年)

(四) 藤原道隆(一六一三—一六五五)



父右大臣正二位兼家公一男。母從四位上攝津守藤中正女(贈正一位時姬)天曆七年癸丑生。康保四年十月十一日叙從五下(中宮御給、御即位、十五)同年十一月日昇殿。五年正月十三日任侍從。十二月十八日左兵衛佐。天祿二年十二月十五日遷右衛門佐。四年正月七叙從五位上(廿一)天延二年正月八日補藏人。同年二月七日兼伊與權介。同年十月十二日(十一)任右(左)少將。三年正月七日叙正五位下。(一品內親王給廿三)四年正月廿八日兼備後權介。貞元二年正月七叙從四下。(少將廿五)同日備中權守(停少將昇殿)同三年十月十七日右近權中將。天元二年正月廿九日兼備中權守。同四年正月七日(從四位上廿九)同五年正月七日叙正四位下(冷泉院御給)。永觀二年正月七日叙從三位。(臨時、超右中將源正清)右中將如元。八月廿七日春宮權大夫。寬和二年七月五日任權中納言、元三位中將、右中將如元。同日皇太后宮大夫、同九月九日正三位(皇后宮御產後入內賞)十三日中將。七月二日任權中納言。同廿二日從二位(前坊大夫勞)同廿七日正二位(女叙位次)三年十月十四日可叙從一位而讓男伊周叙正五位下。永延二年正月七日可叙從一位而讓男伊周叙從四位下。三年二月廿三日任內大臣(三十七)七月十三日兼左近衛大將。永祚二年五月八日詔攝政關白。十三日氏長者。同廿六日更令攝政。卅日辭大將。六月一日給隨身內舍人二人、左右衛府、生番長名一人近衛各四人、聽牛車。正曆四年四月日上表辭職。同月廿二日辭攝政。勅令關白万機。除目、官奏、於御前行之(年四十一)。正曆六年二月廿六日抗表辭遁。無勅許。但陳病不出仕。三月廿九日(九日紀略)宣旨云關白煩病仍巨細雜事、先觸內大臣伊周可奉行者。四月三日依病危急重辭關白返隨身、渡長者即於右大臣。六日出家入道。十(十一紀略)日薨於南院第。年四十三。廿四日葬、(此日吉田祭也)生年天曆七年癸丑(攝政三年關白三年)號中關白。又號後入道關白。

(四) 源 忠清(一六〇三一—一六四八)

醍醐天皇御孫三品有明親王一男。母左大臣正二位仲平公女。天慶六年癸卯生。天曆二年正月七日從四下(孫王)同四年正月十一日侍從。應和元年十月三日右馬頭。同四年正月廿三日兼紀伊權守、康保四年六月十日昇殿(踐祚初)同十月七日春宮亮。同十七日從四上(御即位頭勞)安和二年正月廿七兼備前守。同八月十三日昇殿(踐祚初)同九月廿一日正四上(御即

位前頭勞、二階叙之)同三年正月廿八右近中將。天祿元年十二月廿三昇殿。同二月廿九兼尾張權守。同三月二月廿九日遷左中將。天祿四三月廿一任參議、元右(左)中將。天延二、正月七從三位。同卅日兼大和權守。十月廿八日兼伊與守。三年正月廿六日兼右衛門督。伊與守如元。貞元三年十月十七日兼近江守。永觀三年正月廿八日備中權守(五十六)十二月廿四兼皇太后宮權大夫。寬和二年十一月十日正三位(主基)十二月日太皇太后宮權大夫。永延二年二月廿一日薨、年五十九(四十六歟)。(在官十六年)

(四) 藤原懷忠(一五九五—一六八〇)

故正三位、大納言兼民部卿元方九男、母故大納言兼右近衛大將道明卿第六女。天曆四年正月七日叙從五位下(氏十六)八年三月十三日任阿波權守。天德二年閏七月廿八日任侍從。應和元年八月七日任左衛門佐。四年三月廿七日任左近衛少將。康保二年正月廿五日兼備中權介。三年九月十七日兼伊與權介。天祿元年八月五日遷左近衛少將。同十二月廿二(廿五)日任讚岐權守。二年閏二月廿九日叙從四位下。任右近衛中將。四年正月廿八日遷右近衛權中將。貞元元年十二月廿二日遷左近衛權中將(貞元以下无)天延二年正月廿八日兼備中守。三年十月十七日任權左中辨。天元四年四月四日轉左中辨。五年正月三十日兼備後權守。寬和二年二月廿八日轉右大辨(從四下)同年九月廿一日兼播磨權守。永延元年十一月十一日轉左大辨。二年二月廿七日補藏人頭。三年正月四日兼近江權守。同三年七月十三日任參議。左大辨近江權守等如元(五十五)十月五日從三位(去三月春日行幸事賞追所叙也)。正曆二年四月廿六日兼勘解由長官。四年十一月十五日叙正三位(朔旦大辨勞、超時光)五年八月廿八日任權中納言。六年六月十九日轉中納言。八月廿八日兼右衛門督。長德三年七月五日任權大納言。長保三年八月廿三日轉大納言。民部卿如元。五年正月七日叙從二位。寬弘六年三月四日辭。以男重尹申任從四下右中辨。不去民部卿。寬仁四年十一月一日出家、薨年八十六(頭二年參木六年中四年大十二年官十二年)

(四) 藤原安親(一五八二—一六五六)

中納言山陰卿孫。從四上攝津守中正三男、母伊勢守源友時女。延喜廿二年生。天慶八年三月日任木工少允(陽成院御



給、昇殿勞)天曆年月日補朱雀院藏人。七年閏正月四日補內藏人(廿二)同年九月日任主殿權助。同十年正月日任式部少丞。十一年正月七日叙從五位下(藏人)同月廿七日任攝津守。天德二年十一月廿九日昇殿。應和元年十月十三日民部少輔。同二年正月七日叙從五位上(治國三十一)同年八月廿八日任大和守。九月十六日昇殿。十月一日補次侍從。康保四年五月日晏駕。停昇殿。十一月日東宮昇殿。同五年正月十三日任左衛門佐(使)同月十五日昇殿。安和元年十一月十四日兼播磨少掾(男清通讓之)同月廿三日正五位下(大嘗會主基)同二年壬五月廿一日兼春宮權大進。同年九月廿三日叙從四位下(御即位先坊進)十月十九日任相模守(治國)天祿三年正月廿四日任伊勢守(受領)天元三年正月十三日昇殿。永觀二年八月廿七日任春宮亮(宮初)寬和元年月日昇殿。同年十二月廿四日叙從四位上(治國)同二年六月廿三日補藏人頭(禪讓之日)同年七月五日任修理權大夫。同廿三日叙正四位上(先坊亮、越階)三年十一月十一日任參議。元藏人頭、修理權大夫、權大夫如元。永延三年四月五日叙從三位(春日行幸行事賞、六十八)正曆二年修理權大夫、備中權守。正月七日叙正三位(超二人)。三年正月廿日勅授帶劔。四年正月日兼備前守。長德二年三月六(五日紀略)日薨年七十五。

(四) 藤原伊周(一六三四—一六七〇)

攝政內大臣道隆公二男、母從三位高階成忠女(從三位貴子)天延二年甲戌生。寬和元年十一月廿(七)日叙從五位下(大嘗會奉宮御給)同二年七月廿二日昇殿。八月十三日任侍從。十月十五日右(左)兵衛佐。同三年正月七日從五位上(皇太后宮御給)永延元年九月四日任左近衛權少將。十月四日正五位下(今日行幸攝政亭、仍有此賞)同月十七日補藏人。二年正月七日從四位下(以父卿舊加階所讓與也)同月十五日聽禁色、同年月日昇殿。同三年二月廿七日兼備中權介。同日禁色(同日以下无)三月廿五日從四位上(攝政六十賀、仍子息等如此賞)四月五日任右中辨。七月十三日兼右近衛少將。辨如元。永祚二年七月十日任右近衛中將(止辨)九月一日補藏人頭。十月十五日正四位下(今月新本宮、仍有此賞)正曆二年正月廿七日任參議(十八)右中將如元。元藏人頭。三月廿八日丁卯已時着座。七月廿七日從三位。九月七日任權中納言。三年八月廿八日任權大納言(十九)十二月七日正三位(今日中宮遷行二條新宮賞也、上首五人)五年八月廿八日任內大臣(超三人)。六年

三月廿九日宣旨云。關白病間可行公事云々。四月五日給隨身。左右兵衛各四人、十日服解(父)五月日(止內覽)八月廿八日兼東宮傳(三條院)。長德二年四月廿四日坐事左降太宰權帥。進發之間爲遁罪科出家入道云々。依病留播磨國。而以十一月日以俗形密々入京、仍差右衛門尉半維時、追遣太宰府。同三年三月廿三日給官符召返。十二月入洛、長保三年閏二月十六日復本位。正三位。同五年九月廿二叙從二位。寬弘二年二月五日宣旨云。列大臣下、大納言上。朝參者十一月十三日宣旨預朝儀(于時太宰權帥)。五年正月十六日准大臣給封戶。同六年正月七日叙正二位。同年二月廿日宣旨。無召不參大內(依呪咀事也)同年六月十九日宣旨、更聽朝參被恩免。同七年正月廿八日已卯薨、年三十七。號帥內大臣。又儀同三司。

(四) 藤原時光(一六〇八—一六七五)

父太政大臣兼通公二男。母中納言從三位大江維時卿女(典侍從四位下皎子)。應和四……東宮昇殿。康保二五、十一日右兵衛尉(東宮御給殿上勞)同四、九五(四)日昇殿。安和元、十二月十八日左近將監。天祿元年十一月廿日從五位下(大嘗會)同三年正月廿四日美作介。二月十九日甲斐守。同四年正月廿九日昇殿。二月十九日春宮大進。八月十九日兼少納言。天延二年正月七日從五位上(少納言勞)同十一月十一日春宮亮。十一月十八日正五下(春宮御給朝旦)同三年正月七日從四位下(中宮御給)即日還昇。同十一月廿七日右權中將。同廿八日藏人頭。同四年正廿八日兼備前守。同十二月十一日任參議(二十九)元藏人頭、右中將備前守(兩官去之)。貞元二年正月廿八日伊與權守。三月廿六日從四位上(閑院行幸日)四月廿四日任左兵衛督(伊陟替)。天元五年正月卅日兼周防權守。永觀二年十月十日叙正四下(御即位日)右中將如元。寬和三年七月廿七日任大藏卿。永延三年三月七日叙從三位(超安親)。永祚二、正月廿九兼大和權守。長德二年正月廿五日兼備前權守。同三年七月五日轉中納言。長保三年正月廿四叙正三位(納言勞)。同六年八月廿九日兼彈正尹。寬弘七年十一月廿八日勅授帶劔(依供奉御竈神勅授也)彈正尹。長和二年正月七日叙從二位。四年十月十四日薨、年六十八(未薨奏已前任替)

(四) 藤原齊信(一六二七—一六九五)



故太政大臣爲光卿二男。母左少將敦敏女。天元四年正月七日叙從五下(冷泉院御給)八月廿八日東宮昇殿。永觀二年七月廿六日聽禁色。九月廿三日任侍從。十月十日叙從五位上(又御讓)寬和元年六月廿二日昇殿。十二月廿四日任右兵衛佐。二年正月廿八日任左近衛少將。六月廿三日昇殿(踐祚)七月廿二日叙正五位下(惠子女王給)八月廿三日兼播磨介。十一月廿八日叙從四下(兄誠信讓之)少將如元。同日昇殿。永延元年九月四日左京大夫(致忠不任替)同三年三月四日右中將。永祿二年正月廿九日美作守。七月一日左中將。同二年四月廿六日從四上(中將勞)同五年八月廿八日藏入頭。同六年正月兼備中權守。長德元年九月廿八日兼播磨權守。同二年四月廿四日任參議(三十)左中將如元。五年月日正四位下左近中將。壬三月廿九日兼勘解由長官。長保二年正月廿四日兼伊與守。二月廿七日兼中宮權大夫。十月廿一日叙從三位(造宮行事賞、超忠輔)。同三年八月廿五日任權中納言、權大夫如元(超懷平、輔正、誠信等)十月三日兼右衛門督。同月十日正三位(東三條院御賀)十二月十日補使別當。四年二月卅日轉權中納言、兼中宮大夫。六年六月四日丁卯子刻着座。十月廿一日從二位(松尾平野行幸事實、超時光、公任)。寬弘三年六月廿八日辭別當。五年十月十六日叙正二位(行幸中宮次、超大納言懷忠)同六年三月四日任權大納言。七年二月廿六日丙午着座。八年六月十三日兼春宮大夫。長和五年正月十六日兼按察使。同月廿九日停春宮大夫、勅授如元。寬仁二年十月日兼中宮大夫。四年十一月廿九日任大納言、中宮大夫如元。五年二月一日丙午刻着座。萬壽五年二月十九日兼民部卿。長元八年三月日薨、年六十九。

(四) 藤原忠輔(一六〇四—一六七三)

左大臣在衡公孫、治部卿正四下國光朝臣二男、母從五下右馬助藤有好女。康保元月日給料。安和元年十二月廿五日文章得業生。二年壬五月廿五日任播磨權少掾。天祿二八月廿五課試。十月九日判。三年正月廿四日任兵部少丞。天延二年正月廿九日轉大丞(臨時無替)。同年十一月十八日叙從五位下(朔旦)同月廿八日任相模權守。四年六月十六日任兵部少輔(懷忠遷左少將替)天元三年正月七日叙從五位上(策)永觀二八月廿七兼東宮學士。寬和二年六月日止學士。(踐祚)即日昇殿七月十六(十二)日又兼東宮學士。同月廿七(廿二)日叙從四位下。(御即位叙二階)八月十三日兼大學頭。永延元年七月十

一日任權左中辨。學士如元。永祿二年正月廿九日兼紀伊權守。正曆四年正月七日叙從四位上(策)十一月廿五日叙正四位下(臨時)五年正月十三日更任紀伊權守。九月八日轉左中辨。長德二年七月十九日任參議(五十三)在中辨九年今日宣命之後賜御衣一襲。八月五日右大辨(抽侍讀功也)同三年正月廿八日兼播磨守。四年十月廿三日任左大辨。長保三年八月廿五日兼勘解由長官、十月十日叙從三位(臨時)。四年二月卅日兼備中守(五十九)十一月日辭長官依病也。五年十一月五日叙正三位(造宮行事賞)。寬弘二年正月日兼播磨守。六月十九日任權中納言。五年十月卅日兼兵部卿。長和二年六月四日中時薨、年七十。十七日薨。

(四) 菅原輔正(一五八五—一六六九)

右中辨正五位淳茂孫。從四位上勘解由長官在躬朝臣一男。母從五位上常陸介菅景行女。天曆年月日給料。四年月日補文章得業生(廿六)五年正月三十日任播磨權少掾。八年十月廿七日課試。九月正月判(卅一)。同年閏九月任刑部少丞。十一年正月廿七日任式部少丞(三十三)(十一)已下无)天德二閏七、廿八日(廿二)轉大丞(弘觀死替)四年正月七日從五下(策六)二月十九日任但馬權守。四月廿二日任民部少輔。應和元年十月十三日任式部少輔。三年正月廿八日任左衛門權佐(二月宣旨倫寧任河內守替)四年四月一日補次侍從。康保二年正月十七日止次侍從(依國府前使也)三年正月七日從五位上(策四十二)同廿七日任權右少辨。四年九月二日東宮昇殿。五年二月五日轉右少辨。安和元年十二月十八日兼大學頭。二年六月廿三日轉左少辨。八月十三日兼東宮學士。九月一日昇殿。天祿元年八月五日兼文章博士。十一(七)月廿日叙正五位下(辨勞)二年正月廿九日兼越前介。十二月十五日轉右中辨。三年正月七日叙從四下(辨勞)壬二月九日兼美作權守。四年七月廿二日轉權左中辨。學士博士等如元。貞元二年八月二日叙從四位上(造宮行事)十二月十日兼周防權守。三年十月十七日左中辨。天元二年十月十七日昇殿(石清水行幸行事以下加階聽昇殿)。四年正月廿九日任太宰大貳。二月十七日昇殿。五年正月七日叙正四下(辨勞)三月五日兼式部權大輔。永觀二年八月廿七日以本宮侍臣昇殿。(但身在任所)同年九月四日(十四)聽雜袍。寬和二年六月廿二日停昇殿(依讓位也)正曆二年四月廿六日兼丹波權介。五月二日昇殿。九月廿一日轉式



部大輔。同三年二月十五日叙從三位。(持朱雀院御骨賞)大輔如元。長德二年四月廿四日任參議(七十二)式部大輔、越前權守。五年壬三月五日兼太皇太后宮權大夫。十二月七日止權大夫(依宮崩也)。長保二年正月十七日兼近江守。同五年正月卅日兼備中權守(七十九)十一月五日叙正三位(臨時)。寬弘四年辭參議請以男爲理、任因幡守。五年正月日任三河守。二月七日停參議。式部大輔如元。六年十二月廿四日薨、年八十五(參議十三年前官二年)壽永三年三月日贈正二位(現神北野宰相殿是也)

(七) 藤原正光(一六一七—一六七四)

故關白太政大臣忠義(兼通)公六男。母左馬頭從四位上藤有年朝臣女。安和二年八月十三日昇殿(元東宮小舍人)天祿元年九月四任近江少掾(父卿加二合代)同年十一月廿日叙從五位下(大嘗會悠紀)四年三月廿日任侍從。天延二年十月十一日任左近衛少將。同月十七日昇殿。三年正月七日叙從五位上(十九)四年正月廿八日兼近江介。貞元二年正月七日叙正五位下(少將勞)同年三月廿六日叙從四位下(今日行事大相國第、以家司有此賞)同年四月四日還昇。年月日止少將。天元三年正月廿九日任左馬頭。六年正月廿七日兼讚岐權守。永觀二年八月廿八日(廿九)東宮昇殿。寬和二年六月廿六日以本宮侍臣昇殿。七月五日兼皇太后宮權亮(新立)廿二日叙從四位上(頭勞)永祿二年正月七日叙從四位下(造馬寮功)正曆二年九月十六日止亮(御出家)同三年八月廿八日任左近衛中將。四年正月十三日兼讚岐權守。長德二年三月日遷備中權守(四十)四月十四日補藏人頭。四年十月廿二日任大藏卿。長保二年二月廿五日兼中宮亮。五年正月三十日兼尾張權守。同年十二月日遷兼備前守。同六年二月廿日權守。六年二月廿六日任參議(四十八)大藏卿如元。十月廿一日從三位(松尾、平野北野行幸行事賞)寬弘六年正月日兼越前權守。七年二月卅日改兼美作權守。長和二年二月廿九日薨、年五十八。

(八) 平 親信(一六〇五—一六七六)

故中納言時望卿孫、故從四位下行伊世守兼以朝臣二男。母從五位下越後守藤定尙女。康保四年月日補東宮雜色(宮初)安和二年八月日爲內雜色(踐祚)天祿二年九月廿六日補文章生(字平音)。三年正月廿六日補藏人。四年十一月廿九日任左衛門

少尉。四月十七(十一)日遷右衛門少尉。天延二年二月二日補檢非違使。三年正月七日叙從五位下(藏人)同月廿六日任筑後權守。貞元二年正月廿日任阿波守。八月二日叙從五位上(造宮功)永觀二年十月廿日任右衛門權佐。十一月日使宣旨。三年二月日爲防河使。寬和元年九月十四日。任近江權介(受領)防河使如元。十一月叙正五位下(悠紀國司)二年十一月十八日敘從四位下(悠紀國司)永延二年十月四日辭退、三年正月廿八日敘從四位上(造勢多橋賞)正曆三(二)年六月一日任越前守。(乘方辭替)長保元年壬三月五日任修理大夫。同年同月昇殿。同九月日兼皇太后宮權亮、二年十月十一日敘正四位下(造宮賞)三年七月十三日兼山城守(宣)定)孝卒替)十月十日敘從三位(東三條御賀院司賞)(五十七)五年十一月五日正三位(造宮賞)寬弘二年正月廿七日備中權守(六十一)。四年正月廿日從二位(造宮賞)。長和四年十月廿八日任參議(七十一)五年五月廿八日上表辭之、七(六九)月十日勅許六(七九)月十日依病出家、十二日薨、年七十二。

(九) 藤原實成(一七三五—一七〇四)

內大臣公季公一男、母三品兵部卿有親親王女、永延二年正月七日(五)敘五下(冷泉院御給)三年正月七日敘從五位上。(一品ノ子內親王給)三月四日任侍從。永祿二年二月昇殿。七月十日右兵衛佐。正曆二年正月廿日任少納言。同日聽禁色(年十八)四年二月廿五日叙正五位下。長德元年正月七日叙從四位下。十三日任兵部大輔。四年十月廿二日任右近衛權中將。長保元年正月卅日兼美作權守。三年正月廿四(廿三)日從四位上。八月廿五日兼備中權守。十月十日叙正四下(東三條院御賀院司賞)六年正月廿四日兼尾張權守。同二月廿六日補藏人頭。寬弘四年正月廿八日兼中宮權亮。五年正月廿八日任參議(二十四)右中將、中宮權亮如元。元藏人頭、七月廿八日兼侍從。權亮如元。十月十六日從三位(行事本宮次以權亮叙之)。六年正月廿八日兼美作權守。三月四日左兵衛督、侍從如元(去侍從之由見侍從補任)。七年八月廿八日改兼美作守。長和二年九月十六日叙正三位(行幸中宮次賞)(左大臣讓)長和三年十一月七日爲使別當。四年十月十八日任權中納言(父內大臣公季辭左大將申任權中納言越上藤兼隆)十一月四日使別當如元。五年十一月日服解。七月十七日辭別當。六年正月廿四日復任、四月三日轉右衛門督。寬仁二年三月十三日酉二點着座、七月十一日叙從二位(造宮行事賞)治安三



年十二月十五日轉中納言。右衛門督如元。四年十二月廿八日叙正二位(中宮權大夫能信讓、松尾北野行幸行事賞)。長元三年正月日辭督以男公成任左兵衛督。六年四月九日勅授帶劔。十二月日兼太宰權帥。長曆二年五月日坐事除名(六十四)同四年復本位(六十六)寬德元年十二月日入道薨、年七十。

(四) 藤原兼隆(一六四五—一七一三)

贈太政大臣右大臣(故關白)正二位道兼公二男、母、正曆六年正月七日叙從五位上(贈太政大臣息、仍所叙也)長德二年正月十日叙正五下(臨時)同月廿五日任阿波權守。同廿九日聽禁色(見信經記)同年八月日任右兵衛佐。三年正月廿八日任右(左)近衛少將。四年正月廿五日兼伊與權介。長保元年正月七日叙從四位下(少將勞)昇殿如元。三年正月廿四日任兵部大輔(依夢想辭少將所任大輔也)。同年十月十日叙從四位上(東三條院御賀之時叙之)四年五(正)月卅日任右近衛中將(成房出家替)同日叙從三位(東三條院御骨荷持當越階)(十八)。六年正月廿四日近江權守。寬弘五年正月廿八日任參議(廿四)六年正月廿八日兼備中守(廿五)。長和二年正月廿四日叙正三位。四年二月廿八日兼伊與權守。十月廿一日叙從二位(造宮行事賞)五年正月日辭中將。寬仁三年十二月廿一日任權中納言。五年八月廿九日(廿五)兼左衛門督。治安三年十二月十五日轉中納言。四年十二月廿八日叙正二位(左大臣讓、坊官(之時)賞)。長元二年十二月廿七日辭退督。長元八年正月廿日辭中納言、以男正四位下兼房朝臣申任備中守。正月廿九日辭退、二月十日停任宣旨。准致仕減半給職封、十六(十八)日停任。寬德三年月日出家。天喜元年十月日薨、年六十九。

(四) 源 道方(一六二九—一七〇四)

左大臣贈正一位重信公五男、母前大宰權帥高明公女。寬和二年七月廿二日叙從五位下(冷泉院御給)永延元年九月四日任侍從。二年正月廿九日任右兵衛權佐。正曆元年八月卅日任少納言。同年正月七日叙從五位上(少納言勞)同十三日兼紀伊權介。長德元年正月十一日補五位藏人。四年正月七日叙正五位下(少納言勞)十月廿三日任左少辨。長保元年正月卅日轉右中辨。二年正月廿四日叙從四位下。廿七日遷昇。十月廿一日叙從四位上(造宮行事)三年正月日兼信乃權守。同八月

日轉權左中辨。四年九月日兼宮內卿。寬弘元年十月廿一日叙正四位下(行幸行事)二年六月日轉左中辨。四年四月日兼備中權守。五月廿八日補藏人頭。同七月廿八日叙正四位上(造宮行事)六年三月四日轉右大辨、宮內卿如元。同月廿日兼播磨守。八年六月十三日補新帝頭。同年十月五日兼勘解由長官。九年八月十一日轉左大辨。九年十二月十六日任參議(四十五)左大辨宮內卿如元、元藏人頭、勘長官。播磨守等如元。長和二年五(正)月七日叙從三位(造一條院行事賞、追載之)。十二月十九日正三位(八幡加茂行幸行事賞)。三年正月廿四日兼美作守。六月二日丙辰午時着座。長和六年正月日辭長官。寬仁二年七月十一(七)日叙從二位(造宮南殿賞)。三年正月(廿二)日兼伊與權守。四年十一月廿九日任權中納言。宮內卿如元。壬十二月廿三日兼皇太后宮權大夫。五年二月一日丙午丑時着座。萬壽四年九月十四止大夫。依本宮崩也。長元二年正月廿四日兼太宰權帥。八月十八日正二位(赴任賞)。六年十二月日辭太宰權帥。八年十月十六日遷民部卿。長久四年正月廿四日辭職、以男正四位下經親朝臣任備前守。同五年九月廿六日薨、年七十六。

(五) 藤原賴宗(一六五三—一七二五)

左大臣道長第二男、母四品上總太守盛明親王女(從三位明子女王)寬弘元年十二月廿六日叙從五位上(元服日)二年正月日任侍從。六月日任右兵衛權佐(年十三)三年三月四日。叙正五位下(自東三條第還御一條院賞)四年四(正)月任右近衛少將五月七日叙從四位下(一品)子內親王御給)同月遷任右(左)近衛權少將、同日兼美作權介。六年三月日任右近衛權中將。十二月廿六日叙從四上(東宮年來御枇杷第今日移御他所次賞)七年十一月廿八日叙正四位下(自東三條第還御一條院次賞)八年八月十一日叙從三位(十九)(主上自東三條第入御內裏次賞)同日中將如元。九年四月廿七日正三位(中宮初入內日依御傍親賞)長和二年兼備中權守(二十一)九月十六日從二位(行幸中宮次賞)。三年三月廿八日任權中納言。五年正月廿九日勅授、四月廿八日兼右衛門督。七月十七日爲別當。六年四月六(三)日轉左衛門督。八月卅日兼皇太后宮權大夫。寬仁二年十一月十六日爲大皇太后宮權大夫。十一月廿二日叙正二位(行幸上東門院次賞)四年四月七日辭別當。五年七月廿五日任權大納言。萬壽四年十二月四日服解。五年二月十九日兼按察使。長元九年四月日止春宮大夫。十年八月十七日兼春



宮大夫(册立日)。寬德二年十一月廿二日兼右大將。永承二年八月一日任內大臣。同月九日右大將如元。七月廿二日蒙宣旨。四年七月廿二日服解。十月十九日復任。天喜五年十一月十五日聽輦車。六年正月六日(七)叙從一位。同日輦車。康平三年七月十七日轉任右大臣、右大將如元。七年十二月十九日辭大將。以男藏人頭左中將能季申任參議。八年正月五日出家。二月三日薨、年七十三。

(庚) 藤原朝經(一六三三—一六八九)

故大納言正二位朝光卿男、母寬和二年十一月廿日叙從五下。(一品宮御給)永延二年正月廿九日任右馬助。正曆二年九月廿一日任左衛門佐。四年正月七日叙從五上(佐勢)五年九月八日任右近權少將。長德元年九月廿八日(廿日)任伊與介。同三年正月廿八日任右少辨。同四月一日補次侍從、長保元年正月日任左少辨、二年正月廿四日叙正五位下(辨)正月廿九(廿七)日補藏人、三年八月日轉右中辨。五年正月七日叙從四下(辨)十一月五日叙從四上(造宮行事)十二月日兼彈正大弼。寬弘二年六月日轉權左中辨。四年正月日兼但馬守。同六年三月四日右中辨。七年八月廿八日停弼。同八年二月一日兼備中權守(卅九)九年正月廿七日兼近江介。八月十一日轉右大辨。十一月廿一日叙正四位下(悠紀國司)十二月廿日補藏人頭。長和三年三月日兼大藏卿。四年二月廿八日任參議(四十三)右大辨大藏卿如元。五年三月廿三日丁卯巳時着座。六年正月廿四日兼備前守。寬仁二年正月日兼勘解由長官。七月十一日叙從三位(造宮行事)四年十一月轉左大辨、辭卿並長官。治安二年正月卅日兼伊與守。三年正月六日正三位(臨時)十二月十五日任權中納言。長元二年正月廿四日辭中納言。以從四位上基房申任阿波守。七月三日出家、七月四日薨、年五十七。

(辛) 源 賴定(一六三七—一六八〇)

一品式部卿爲平親王二男、母左大臣源高明公女。永祚二年正月七日叙從四下(氏天曆)年月日賜姓列臣、正曆三年八月廿八日任彈正大弼。同四年十一月十五日昇殿。長德四年十月廿二日任左近中將。長保元年正月卅日兼備前守。三年正月廿四日叙從四位上。同年八月廿五日轉左近衛權中將。六年正月廿四日兼大和權守。寬弘二年六月十九日補藏人頭。三年正月廿八日兼美作守。五年正月七日叙從四位下(中將勢、臨時)。六年三月廿日任參議(三十三)左中將如元。七年二月十六日兼伊與權守。十一月七日服解。長和五年二月六日叙從三位。十月十日兼備中權守(四十)十一月十四日叙正三位(主基國司)。六年正月廿四日兼勘解由長官。四月二日兼左兵衛督。寬仁二年正月日辭退長官、左兵衛督、備中權守如元。四年四月廿二日補使別當(賴宗卿替)六月八日患腫出家。同十四(十一)日薨、年四十四。

(壬) 藤原公信(一六三七—一六八六)

太政大臣恒德公(爲光)第六男、母一條攝政謙德公第二女。長德元年正月八日叙從五下(太政大臣息)二年正月日任讚岐介。九月十九日任侍從。四年十月廿三日任右兵衛佐。長保元年正月七日叙從五上(一品)子親王給(閏三月日任少納言。九月日任右近衛少將。二年正月日兼備後介。三年正月廿四日叙正五位下(少將勢)四年二月卅日補五位藏人。五年正月七日叙從四下(少將勢)六年正月(同六月)日兼美作(權)守。寬弘五年正月七日叙從四位上(少)將(中)將(六)年三月廿日補藏人頭。七年十一月廿日任左近衛中將。同日兼內藏頭。八年正月七日叙正四位下。十二月廿五日補新帝頭。長和二年十月廿三日任參議(三十七)三年正月日兼美作權守。四年十二月廿七日叙從三位(造宮行事賞追叙)六年八月九日兼春宮權大夫。卅日兼右兵衛督。十二月二日叙正三位(行幸八幡賀茂行事賞)。四年九月四日爲使別當。右兵衛督、春宮權大夫、兼備中權守如元。五年八月廿九日遷兼左兵衛督、大夫如元。十一月三日叙從二位(春日行幸事賞上卿齊信讓)治安三年十二月十五日任權中納言。四年二月十三日其使別當。萬壽三年五月十五日薨、年五十。

(癸) 源 朝任(一六四九—一六九四)

故致仕大納言從二位時中卿三(七)男、母故三木藤安親卿女。永祚元乙(巳)丑生。長保五年五月七日叙從五位下。(前東三條院御給)同月三十日侍從。十二月日任左(右)兵衛權佐。寬弘三年正月七日叙從五上(佐勢)。同月十八日任少納言。四年八月日服解。九月日復任。七年正月九日藏人。二月日任右近衛權少將。十一月廿五日遷左近衛權少將。八年十月十二日正五位下(東宮御給)九年正月廿七日兼美作權介。廿八日補新帝藏人。長和二年正月七(六)日從四位下(少將勢)少將如



元。月日還昇。三年三月廿八日右中將。五年正月六日叙從四位上、中將如元。六月二日叙正四位下。(車駕自上東門院還御一條院次。有此賞。御傍親)六年正月日兼備前權守。三月十五日左中將。寬仁二年正月廿五日備後(前)權守。三年十二月廿一日補藏人頭。治安三年十二月十五日任參議(卅五)四年正月廿六日兼備中權守(卅六)。萬壽三年十月廿六日兼右兵衛督長元二年正月七日叙從三位(參木勞)同月廿四日兼備前守。月日爲使別當。長元七年九月十六日薨、年四十六。

(三) 藤原兼賴 (一六七四—一七二三)

權大納言賴宗卿一男。母故前內大臣伊周公女。萬壽三年十月十九日叙正五位下(元服日前太政大臣息)同月廿六日侍從。十二月廿七日任右少將。四年正月七日叙正五位上(東宮御給)萬壽四年二月九日聽禁色。同十日聽雜袍宣旨。長元二年正月六日叙從四位下。廿四日任右中將。三月十一日遷左中將。十二月三十日叙從四上(臨時)三年正月五日叙正四位下(後一條院御給)同三月八日叙從三位(父卿先年行幸行事追賞)(十七)左中將如元。四年十二月廿六日任參議(十八)羽林如元。五年二月八日兼備中權守(十九)。七年正月七日叙正三位(春宮大夫讓、行幸上東門院賞)九年七月十日叙從二位(右大臣讓傳賞)十年正月兼讚岐權守。長久三年正月廿九日任權中納言。十月廿七日叙正二位(父賴宗卿讓)康平二年十月廿二日任春宮權大夫。六年正月十一日薨、年五十。

(二) 藤原經任 (一六六〇—一七二六)

大納言齊信卿男(實右衛門督懷平三男)母前太宰大貳佐理卿女。寬弘九年十一月廿一日叙從五下(大皇太后宮御給)年月日權守(、)長和六年正月六日叙從五上。同十四日任侍從(東宮御給)十月廿三日任右衛門佐。寬仁三年正月廿四日左近衛權少將。四年正月五日叙正五下(皇后宮御給)二月日兼備後介。十一月十三日叙從四下(皇后宮御給)月日任侍從。治安三年正月六日叙從四上。長久二年正月廿四日任權左中辨。三年十月日補藏人頭。四年正月七日叙正四下(臨時)二月十七日兼備後權守。八年十月十六日任參議(卅六)九年正月七日叙從三位(造圓教寺行幸賞)十月日兼侍從。十年(月日)侍從、備中權守(卅八)長曆三、修理大夫、侍從、備中權守。四年月日辭大夫長。久二年正月日兼播磨權守。四年九月十九日兼

左兵衛督。五年七月十九日爲別當。寬德三年二月十一日兼備前權守。使別當、九月九日補御襖裝束使長官。十月廿八日叙正三位(造宮行事賞)永承三年十二月七日任權中納言。五年八月廿九日辭別當、十一月十三日叙從二位(臨時朔旦)六年二月十三日兼皇后宮權大夫。十一月五日兼治部卿。七年十二月日爲勸解由檢校。天喜二年九月廿三日叙正二位(天皇自四條宮遷御上東門院賞)康平三年三月(廿三)日辭左兵衛督。四年九月十九日勅授帶劔。八年十二月八日任權大納言。治曆二年二月十六日薨、年六十七。

(三) 藤原信長 (一六八二—一七五四)

內大臣教通三男、母同信家卿。長元五年十一月廿六日叙從五位下(上東門院御給)六年正月日叙從五位上(禎子內親王給)同月十日昇殿。十月廿三日任侍從。八年正月卅日任左兵衛佐。九年正月六日叙正五位下(馨子內親王給)同年四月十七日補藏人。七月十日叙從四位下(從一位倫子給)十二月廿二日任侍從。長曆二年正月五日叙從四位上(中宮御給)同月廿九日兼備中介(十七)三年正月廿六日任右近衛權中將。十二月十六日補藏人頭。四年正月六日叙正四位下。長久二年十二月九日叙從三位(天皇自二條第入御新造內裏家子賞)三年九月廿一日叙正三位(權大納言長家卿讓之)四年正月廿四日任參議(廿二)右中近將如元。九月日兼侍從。五年任權中納言。寬德二年四月廿八日叙從二位(女叙位次、內大臣讓。坊傳實)三年十月八日叙正二位(今日自內大臣二條第入御內裏家子賞)天喜三年二月二日兼左衛門督。康平四年十二月八日任權大納言。五年正月七日勅授。八年六月三日轉任大納言(宣命)治曆四年四月十七日兼皇后宮大夫。五年八月廿二日任內大臣。承保二年十二月十四日復任。同十五日任右近衛大將。同十九日參內奏慶賀。承曆四年八月十四日任太政大臣、十月日宣旨、可列關白左大臣(藤師實)下者。寬治二年十一月十七日叙從一位(朔旦)同月廿日致仕。寬治八年九月五日薨年七十三。

(三) 源 基平 (一六八六—一七二四)

三條天皇一世源氏。小一條院(前皇太子敦明)男、母賴宗卿女。長久二年十二月八日從四位上(元服日、一世源氏十五)同三年四月三日侍從。同四年正月七日正四位下(小一條院御給)寬德二年正月十六日東宮殿上(二年已下尤)同三年二月十



一日兼備中權守(廿一)十月十三日任(叙)從三位(主基國司)侍從如元。永承五年十一月廿五日任參議(廿五)六年正月八日服解。——復任六月十七日叙正三位(內大臣讓)天喜四年二月三日兼伊與權守。五年正月五日叙從二位(內大臣讓)康平五年正月卅日兼備中權守(三十七)六月日服解。母十一月廿日復任。七年五月十五日薨、年卅九。

(當) 源 資綱(一六八〇—一七四二)

入道權中納言、顯基卿一男、母前中納言藤實成卿女。長元四年正月五(七)日叙從五位下(氏)同年十一月(十六)日叙從五位上(朔旦)皇子內親王御給(同五年二月(八)日任侍從。同六年正月廿九日任右近少將。七年正月(廿九)日兼備中守(十五)(介)九年正月五日叙正五位下。同年二月廿七日叙從四位下(民部卿道方讓之)(實成卿讓)長久二年正月七日叙從四位上(少將勞)三年十月廿三日兼美作介、同日叙正四位下(能信卿讓造宮賞)四年九月十九日任右近中將。寬德二年四月廿六日兼春宮權亮。永承元年九月廿三日兼右京大夫。二年八月十一日補藏人頭(九月服解)(父)十一月復任。三年正月日播磨權介。六年十一月六日任參議(卅二)十二月七日右京大夫如元。七年二月廿六日兼伊與權守。八年十一月廿八日兼皇后宮權大夫(去右京大夫)天喜三年十二月十九日壬寅寅時着座。天喜五年正月五日叙從三位、二月卅日備前權守。康平五年正月卅日兼備後權守。十一月廿八日改兼周防權守。治曆二年十一月辭之。三年二月六日任右兵衛督、止右京大夫。四年七月十九日叙正三位(御即位臨時)九月十三日御禊後次第司長官、十二月廿九日任權中納言(太皇太后宮大夫勞)五年正月廿七日兼太皇太后宮權大夫如元。二月十七日止大夫(止后職、號陽明門院故也)八月十六日從二位(行幸同院院司賞)延久二年十二月廿六日叙正二位(供養圓明寺行事賞)六年六月廿日兼中宮大夫(册命日)承曆三年十一月日辭大夫。四年八月十四日任中納言、永保二年正月二日薨(先是一日出家)年六十三。

(當) 源 經季(一六七〇—一七四二出家)

權中納言經通卿二男、母近江守源高雅女。萬壽四年正月五日叙從五位下(春宮御給)同年三月十六日任美作權守(介)長元二年正月廿四日任右兵衛佐。同年三月十一日任左近少將。三年正月五日叙從五位上(少將勞)同月廿六日兼伊與守、四

年三月廿八日(二月十七日)補藏人、六年正月五日叙正五下。八年正月五日叙從四位下(少將)同九日還昇、同九年正月廿九日兼播磨權介、長曆二年正月五日叙從四位上(上東門院御給)長久二年正月廿三日兼周防權守。三月廿七日兼近江權介八月廿七日叙正四位下(父經通卿讓。大原野松尾行幸行事賞)三年正月廿九日任左近衛中將。寬德二年十月廿六日補藏人頭。三年九月廿三日兼修理權大夫。永承二年八月一日任參議(卅八)修理大夫、右中將如元。十一月十三(十二)日從三位(造宮賞)三年正月廿八日兼美作權守。六年八月十六服解(父卿)十一月五日復任。八年正月廿七日兼備中權守(四十四)十一月廿八日兼備前權守。天喜六年正月卅日兼備中權守(四十九)康平三年十二月十六日兼右兵衛督。康平五年七月十三日叙正三位(石清水賀茂行幸行事賞)六年二月十七日兼備後權守。治曆三年二月六日轉左兵衛督。四年十二月廿九日任權中納言(年勞)五年十二月十七日叙從二位。延久三年十月廿九日叙正二位(行幸日吉社行事賞)承保三年十二月五日兼治部卿承曆四年八月十四日轉中納言、治部卿如元。永保二年正月廿一日辭職、以男從四位下兼中任出雲守、六月一日出家(時年七十三)

(當) 藤原道雅(一七五三—一七一四)

父母不詳、長和五年月日叙從三位(年廿五)左中將如元、伊與權守。治安四年正月廿六日兼伊與權守。萬壽三年四月遷右京權大夫。寬德二年十月廿三日左京大夫。永承六年左京大夫備中權守(五十八)天喜二年七月十日出家同廿日薨、年六十二。

(當) 藤原經家(一六七九—一七二九)

故入道賴中納言定賴卿一男。母從三位源濟政卿女。長元四年二月廿八(廿九)日叙從五下(從一位源倫子給)五年十一月廿八日任侍從。六年正月七日叙從五位上、同月廿八日(廿九)任少納言、八年正月卅日兼祀伊權守。九年正月七日叙正五位下(皇子內親王給)二月廿七日遷右少辨(同十年三月五日造大安寺長官)長曆二年正月十四日補藏人。四月八日兼齋院長官(止大安寺)同四年正月七(六)日叙從四位下(辨勞)(十二日還昇)長元元年月日(四年正月七日)叙從四上(祐子內親王御



給)四年九月十九日任右中辨(寬德二年正月十六日春宮殿上)十月十八日叙正四位下(天皇自內大臣二條亭入御內裏賞)三年十二月七日轉權左中辨、同月十六(十二)日補藏人頭。四年二月五日兼伊與介(裝束使勞)五年九月日轉右大辨(超左中辨平定親朝臣)六年二月十三日兼皇后宮權亮、七年十一月(三)日兼內藏頭。天喜二年二月廿二日兼備中權守(卅七)權內藏頭)四年正月七日叙從三位(三十九)(去天喜二年行幸皇后宮賞)右大辨如元。六年四月廿四日左大辨。康平五年正月卅日參議兼播磨權守。六年正月五日叙正三位(中辨之時行幸行賞)八年十二月八日任權中納言。治曆四年五月廿五日薨、年五十一。

(六) 藤原師成(一六六九—一七四一)

故中納言通任卿一男、母從三位藤永賴女(或本播磨守信理女)寬仁五年正月七日從五位下(皇后宮御給)……美乃權守。萬壽元年十月十七日侍從、同三年十一月廿七日右兵衛佐。同五年二月十九日從五位上(佐勞)同日左少將。長元二年正月廿四日兼伊與權介。同四年十月十七日兼加賀權守(受領小一條院分)十一月十九日正五位下(少將勞、朔旦)同六年正月七日從四位下(少將勞)長曆二年正月廿日從四上(加賀治國)長久二年十二月十九日正四位下(行幸內大臣二條亭入御內裏賞)同三年十月廿七日兵部權大夫。寬德二年四月十二日備中守(卅七)(任中公文一)永承四年二月五日去任。天喜四年十月廿九日丹後守。康平三年二月廿五(廿一)日去任。同五年正月卅日近江守(丹後功)同六年二月廿七日太宰大貳。七月廿六日叙從三位(五十五)(永承大嘗會主基)八月十九日叙正三位(赴任賞)太宰大貳如元。治曆三年二月十二日辭大貳。四年正月七日叙從二位(造天台御願實相院賞)四月十七日任皇后宮權大夫(册命日)延久五年四月卅日叙正二位(行幸院賞、關白讓)承保二年十二月十五日任參議。承曆四年十月日辭狀辭退。永保元年八月依病出家。九月一日入滅、年七十三。

(七) 藤原資仲(一六八一—一七四七)

故權大納言資平卿二男、母同資房卿。長元六年正月五(七)日叙從五下(章子內親王御給)同年十月日任讚岐權守。九年二月廿七日任侍從。十二月八日任右近少將。十年正月五日叙從五位上(少將)同月廿三日兼備中權介(十七)長曆四年正月

五(七)日叙正五下(少將)同月廿五日遷右少辨。長久二年十二月九日轉左少辨。三年二月十六日爲氏院別當。五年正月十一日補藏人。寬德二年正月十六日止藏人(讓位日)永承二年正月十三日更補藏人、同月廿二日爲造興福寺長官。三年三月二日叙從四位下(興福寺供養賞)左少辨如元(遷昇)同年十二月七日轉右中辨、四年正月五(七)日叙從四位上(牟朝行幸平野北野社行事賞)五年九月十七日轉權左中辨。六年正月廿七日兼播磨權守。七年二月廿六日兼春宮權亮。天喜五年正月五(七)日叙正四位下(造宮行事)二月卅日近江權介。六年四月廿五日轉左中辨。康平三年二月廿一日兼美作權介。五年三月日爲造興福寺長官。同十二月遷修理大夫(亮如元)治曆四年三月五日復任(于時修理大夫)四月十九日止春宮權亮(受禪日)同年八月十二日補藏人頭。同十二月廿九日任參議(四十八)修理大夫如元。五年正月五日叙從三位(先坊權亮)同廿七日兼右兵衛督、二月廿六日如元兼修理大夫。五月十七日爲別當。八月十六日叙正三位(行幸院司賞)延久二年正月廿九日兼播磨權守四月日辭修理大夫。十二月廿六日叙從二位(供養圓明寺陽明門院之司)四年七月廿四日遷兼左兵衛督、十二月二日任權中納言、同八月日兼春宮權大夫。五年二月日辭別當。四月十七日遷右衛門督、同月卅日叙正二位(行幸院司賞)承保二年正月廿八日遷兼左衛門督。承曆三年正月廿七日辭左衛門督、以散位藤兼實申任右馬頭。四年正月廿八日罷職、任太宰權帥。永保四年月日出家、寬治元年十一月日入滅、年六十七。

(八) 藤原能季(一六九九—一七三七)

右大臣賴宗五男、母相模守從五下藤親時女。永正三(七)年正月五日從五下(祐修)子內親王御給)七年二月廿日任侍從……昇殿、天喜二年正月五(六)日從五上(中宮御給)二月廿二日任少納言、三年正月五(七)日正五下(皇后宮御給)四年正月七日從四下(中宮御給)少納言如元。聽昇殿。五年二月卅日兼紀伊權守。四月日東宮殿上。康平二年正月五(七)日從四上(少納言)二月八日正四下(行幸上東門院御傍親賞)四年三月十一日補藏人頭。六年二月(廿一)日遷左中將(四位侍從補藏人頭後遷任左中將例)七年三月四日兼近江介。十二月廿六日任參議(廿六)同日遷兼右(權)中將。八年二月八日從三位(前右大臣讓)二月三日服解、三月廿九日復任。治曆二年二月八日兼近江權守。三年二月六日遷左近中將。四年十二月廿五日正



三位(悠紀)五年八月九日叙從二位(石清水賀茂行幸賞)延久三年正月廿八日兼備中權守(三十三)四年十二月二日任權中納言。五年二月廿日甲午午二點着座。承保四年正月六日叙正二位(臨時)八月一日薨(痲瘡)年三十九。九月五日薨奏。

(三) 藤原實季(一六九五—一七五一)

故權中納言公成卿男。母故淡路守藤定佐女。永承元年八月日叙從五下(東宮御給)同六月日任侍從。天喜六年正月六日叙從五位上(侍從勞)康平四年二月日任左近權少將。同五年正月日任備前權介。同七年正月五日叙正五下(少將)治曆二年正月五日叙從四下(少將)同四年十一月九日兼備中(卅四)(前少將)同廿九日叙從四位上(悠紀國司)延久元年三月廿日任左近權中將(元前少將)六月十五日補藏人頭。十二月十七日兼左京大夫。同二年正月六日叙正四位下(臨時)同廿九日兼美作權守。二月十七日遷右近中將(大夫如元)同年七月廿四日遷左兵衛督。四年十二月二日任參議(卅八)右兵衛督、左京大夫如元。五年三月九日爲檢非違使別當。四月十四日遷任左兵衛督、同卅日叙從三位(行幸院司賞)八月廿一日遭母喪、月日復任。六年十月十四日兼中宮權大夫。十二月十六日兼近江權守。同月十九日叙正三位(悠紀)十二月六日任權中納言承保二年正月十九日叙從二位(行幸日中宮權大夫賞)同廿八日遷任右衛門督、十二月日叙正二位(春日行幸行事賞)承保四年二月廿九日辭中宮權大夫、男公實申任權亮。承曆三年正月廿七日遷左衛門督、三月日辭別當。四年八月十四日任權大納言。同廿二日兼春日大夫。永保三年正月廿六日轉大納言、春宮大夫如元。應德二年十一月八日止大夫(太子薨日)十二月八日兼按察使。五年十二月廿四日薨、年五十七。

(三) 藤原伊房(一六九〇—一七五六)

故參議行經卿一男。母前土佐守源貞亮女。長元四年正月六日叙從五下(東宮御給)年月日任但馬權守。寬德二年十二月廿五日任侍從。永承元年十一月十三日叙從五上(殿上)同二年十一月十三日任左兵衛佐。同三年正月廿八日遷少納言、同四年二月五日兼紀伊權守。同七年正月五日叙正五下。天喜四年十一月日補藏人。同六年四月廿五日遷右少辨、同十一月八日轉左少辨、康平五年十一月日兼木工頭。治曆元年十二月日轉權左中辨、木工頭如元。同二年正月五日叙從四下(辨)

同廿八日氏院別當。三月廿二日任造與福寺長官。同三年二月六日任安藝介。廿五日叙從四上(與福寺供養日)四月十六日叙正四位下(丈六畫像御佛供養行事)延久元年六月十九日補藏人頭。十二月十七日任左中辨。同三年三月廿七日爲修理左宮城使。同四年二月一日叙正四位上(臨時)同十二月二日轉任右大辨。十二月二日任參議(四十三)右大辨如元。同日爲氏院別當。延久五年正月卅日兼備中權守(四十四)四月卅日叙從三位(行幸院司賞)承保二年正月五日叙正三位(造大極殿行現辨賞)六月十三日轉左大辨。十二月十五日任勘解由長官。三月廿五日丁巳子冠着座。四年正月六日叙從二位(平野大原野行幸行事賞)承曆四年八月十四日任權中納言(大辨勞五十一)十二月六日兼大皇太后宮權大夫。五年十二月十日卯未二點着座。永保二年正月廿一日叙正二位(爲中辨之時行幸行事賞)十二月廿八日兼治部卿。三年二月一日兼大皇太后宮大夫。寬治二年八月廿九日兼太宰權帥。停治部卿。三年三月六日辭大夫。五年七月日入洛。八年二月廿五日坐事降位、停職、貶一級爲從二位、停中納言。嘉保三年八月日復正二位。九月十六日出家。同日薨、年六十七。

(三) 源 師忠(一七一四—一七七四)

右大臣源師房四男、母入道右大臣賴宗公女。康平七年三月十日叙從五下(元服日年十一)同十月廿六日任侍從、治曆二年正月五日叙從五位上(譽子內親王給)二月八日任左近權少將。同三年正月五日叙從五下(皇后宮御給)閏二月六日轉權中將。同日兼美作介。同四年正月六日叙從四下。同四月十七日叙從四上(祐子內親王給)十一月九日兼近江介。同廿一日叙正四位下(悠紀)延久元年四月廿八日兼春宮權亮。同四年十二月八日補藏人頭(踐祚日)同五年正月卅日兼備後權守。六年十二月廿六日任參議(廿一)左中將如元。承保二年左近權中將、備中權守(廿二)正月五日叙從三位(先坊權亮)閏四月六日叙正三位(造大極殿行事賞、右大臣讓)十二月十五日遷左近權中將。承保三年十月廿四日叙從二位(行幸大井川次、右大臣讓)承曆二年正月廿日兼美作權守。四年八月十四日任權中納言。五年正月廿六日叙正二位。十二月十七日兼皇太后宮大夫應德三年二月三日爲別當。十一月廿日任權大納言。寬治七年二月廿二日兼中宮大夫(立后日)承德三年十二月日兼按察使康和二年七月十七日轉大納言(宣命)中宮大夫、按察使如元。長治三年十二月日辭大納言。永久二年九月廿九日薨、年六



十一。號壬生大納言。

(高) 源 家賢(一七〇八一—一七五五)

權中納言資綱卿一男、母民部卿源道方卿女。康平三年三月四日叙從五位下(皇太后宮臨時御給、本名師信)同四年十二月日任越中權守。同六年十一月日任右衛門佐。同八年正月五日叙從五位上(佐勞)治曆三年二月日遷右近權少將。同五年正月廿七日叙正五位下(計前歷)同日兼美作介。八月十六日叙從四位下(行幸閑院院司賞)延久二年十二月廿八日叙從四位上(供養圓明寺日陽明門院院司賞)同四年十二月廿九日叙正四位下(御即位院御給)同六年正月廿八日兼備中(廿七)承保元年十二月廿六日轉權中將。同二年正月廿八日遷右兵衛督。同日從三位(父資綱卿讓、行幸中宮大夫賞)同四年正月十一日叙正三位(行幸陽明門院院司時遷東三條第)承曆三年十一月七日轉左兵衛督。四年八月十四日任參議(三十三)左兵衛督如元。永保四年正月廿九日兼備中權守(卅七)應德三年十一月廿日任權中納言、左兵衛督如元。寬治二年正月十九日叙從二位(院行幸別當賞)三年正月廿八日遷右衛門督(月日叙正二位歟)五年正月日遷左衛門督。八年十二月日兼宮內卿。嘉保二年八月日薨、年四十八。

(高) 源 俊明(一七〇四—一七七四)

前大納言隆國卿三男、母同故隆俊卿。天喜元年四月廿四日叙從五位下(皇后宮臨時御給)同五年二月卅日任侍從。康平四年正月五日叙從五位上(殿上一)同二月廿八日任加賀守(親父權中納言隆國卿辭取職申任之。侍從如元、不幾程蒙重任宣旨)同年十二月八日兼左近衛權少將。同六年四月卅日遷右少將。同七年正月六日叙正五下(少將)治曆二年正月五日叙從四下(少將加賀守等如元)同四年十一月廿一日叙從四上(大會會、上東門院御給)同五年二月廿六日遷左近少將。延久二年四月十四日兼皇后宮亮。同三年正月日兼播磨介。同四年四月廿六日叙正四位下(上東門院御給)承保元年十二月廿六日轉左近中將補藏人頭。二年六月十三日任參議(卅二)十一月日着座。十二月五日兼侍從。三年正月廿二日兼周防權守。七月十四日叙從三位(爲加賀守時造宮賞)四年正月十一日叙正三位(行幸東三條第賞)二月廿六日叙從二位(日吉行幸行事賞)同廿

九日兼中宮權大夫。承曆三年正月廿七日兼右衛門督、止侍從。三月十四日兼使別當。五年正月廿六日兼備中權守(卅八)永保二年正月廿一日任權中納言。右衛門督、別當、中宮權大夫如元。三年二月一日轉大夫、正月六日叙正二位。四年九月日止大夫、十一月日辭別當。寬治二年八月廿九日兼治部卿、十二月廿八日辭右衛門督。三年三月六日兼大皇太后宮大夫、八年六月遷民部卿。永長十二月任權大納言。民部卿、大皇太后宮大夫如元。康和二年七月十七日轉大納言(宣命)民部卿、大皇太后宮大夫如元。長治二年十二月日兼按察使。嘉承三年十月日辭按察使。永久二年十二月二日薨、年七十一

(高) 大江匡房(一七〇一—一七七二)

散位從四位上成衡朝臣男、母宮內大輔從四位下橘孝親朝臣女。天喜四年十二月廿九日補文章得業生(給料)同五年二月卅日任丹波掾。康平元年十二月廿九日策(年十九、十八歟)三年二月廿一日任治部大丞。二月廿日遷式部少丞。七月六日叙從五位下(策)治曆三年二月六日任東宮學士。四年四月十九日補藏人(後三條天皇受禪日先坊學士)七月八日任中務大輔同月十九日叙正五位下(御即位、學士勞)五年正月廿七日遷任左衛門權佐。延久元年四月廿八日兼東宮學士。十二月十七日兼右少辨。四年四月廿六日兼備中(卅二)同日爲防鴨川使。十二月八日補新帝藏人。同日兼東宮學士。延久六年正月廿八日任美作守(使介學士如元)同日叙從四下(策)承保二年正月五日叙正四位下(先坊學士)承曆四年八月廿二日遷權左中辨(止美作守)永保元年八月八日遷左中辨。三年二月一日兼備前權守。同日兼式部權大輔。應德元年六月廿三日轉左大辨(權大夫學士等如元)二年二月十五日兼勸解由長官。十一月八日停東宮學士。三年十一月廿一日(廿日)叙從三位。四年正月廿五日轉大輔。寬治二年正月十九日叙正三位(行幸院賞)廿五日兼周防權守。八月廿九日任參議(四十八)左大辨、勸解由長官、式部大輔、周防權守等如元。十一月廿二日甲午戌二點着座。六年正月日兼越前權守。八年六月日任權中納言。十二月十一日勅授(叙從二位歟)永長二年三月兼太宰權帥、勅授。承德二年九月日太宰權帥下向。康和四年正月五日叙正二位(赴任賞追叙)同月得解任。長治三年三月十一日遷任太宰權帥(第二度)去納言。天永二年七月廿九日任大藏卿。十一月五日薨、年七十一。



(七) 藤原能實(一七〇九—一七七七)

攝政師實四男、母同經實卿。永保二年正月叙從五位上(元服日)同月廿一日任侍從。同年二月廿八日任左近衛少將。永保三年正月日叙正五位下(勞)同年二月日遷右近權中將。同日美作介。同年四月日遷左近衛權中將。應德二年正月日叙從四位下(勞)同三年十二月八日補藏人頭。同月日叙從四位上(院御給、御即位)寬治元五月日叙正四下(大上皇御幸平等院日賞)同十一月十日兼備中權守(十八)同廿二日叙從三位(大嘗會、國司主基)止中將。備中權守如元。十二月十三日兼侍從。六年正月日兼周防權守。七年正月三日叙正三位。二月廿二日兼中宮權大夫(立后日)侍從如元。嘉保三年正月日任參議(廿七)永長二年二月日兼左兵衛督。月日兼丹波權守。承德三年十二月日任權中納言、左兵衛督、中宮權大夫如元。康和二年正月十七日叙從二位(春日行幸行事賞)三年二月十三日服解。三月十五日復任。四年三月廿日叙正二位(御賀日賞)六年十一月日爲使別當。嘉承三年九月十八日辭別當。十月十四日遷右衛門督。天永二年正月廿三日轉左衛門督。永久二年十月一日止大夫(依宮崩也)三年四月廿八日轉任中納言(宣命)兼官如元。保安三年十二月十七日任權大納言。天承二年八月十八日出家。九月九日薨、年六十三。

(八) 藤原實政(一六七九—一七五三)

從三位行式部大輔、資業卿三男、母加賀守源重文女。長元八年月日給穀倉院學問科。長曆元年十二月日補文章得業生。同二年正月日任美作權大掾。長久元年十二月廿一日(年廿二)同二年正月十二日補藏人。同四年正月日任式部少丞。同五年正月五日叙從五位下(策)十二月十四日任宮內權大輔。永承五年二月日任大內記。同年十一月十三日叙從五位上(朔旦)同月廿五日遷東宮學士。同七年二月廿六日兼美乃權介。天喜四年正月五日叙正五位下(策)同六年正月日兼加賀權守。康平四年正月五日叙從四位下(策)同七年三月四日兼任甲斐守(式部巡)治曆三年正月日叙從四位上(策)同四年四月十九日止學士(踐祚)同七月十九日叙正四位下(先坊學士)同五年正月廿七日任備中守(五十一)侍讀勞、册命日)同二月日兼文章博士。四月廿八日兼東宮學士。延久四年七月廿四日兼近江守。同年十二月日兼左中辨(文章博士、近江守)同五年四月廿日

叙正四位上(行幸一院院司賞)承保二年壬四月廿三日爲修理左宮城使。同年六月十三日轉右大辨。同三年正月廿日爲氏院別當。同四年正月廿九日補藏人頭(止受領)承曆元年十二月十三日兼右京大夫。同二年正月日兼但馬權守。三月日辭博士。四年八月十四日任參議(宣命)(六十二)同廿二日轉左大辨。十一月三日叙從三位(先坊學士勞)永保二年正月廿一日兼讚岐守。同日叙正三位(伊勢齋王御家賞)三月廿七日兼式部大輔、罷右京大夫。永保四年六月廿三日遷任太宰大貳。應德二年十二月十六日叙從二位(去年七月冬赴任追賞)寬治二年月日依八幡宮訴辭大貳上洛。十一月卅日配流伊豆國。三年月日於途中近江國出家、然而被遣下畢、七年月日於配所薨、年七十五。

(九) 源 雅俊(一七二六—一七八二)

右大臣顯房卿二男、母故美乃守藤良任朝臣女。延久五年十二月日叙從五位下、承保元年十二月日任侍從。承曆三年正月日叙從五位上。同月日兼備中權介。同年十月廿五日叙正五位下(中宮行啓賞)同四年正月廿八日任右近少將。同年十二月日遷中宮權亮。永保二年正月廿八日兼左近權中將同三年二月日兼備中權介(守)(二十)同四年正月日叙從四位上。應德元年八月日止中宮權亮(依后宮崩也)同年十二月日補藏人頭。同三年十一月廿六日補新帝藏人頭(今上踐祚日)同四年正月日叙正四位下。寬治二年十二月日遷左兵衛督(頭如元)五年正月廿日任參議(廿八)右兵衛督如元。六年四月日叙從三位。嘉保二年三月日叙正三位。永長二年正月日兼播磨權守。承德二年正月日任權中納言。十二月日任右衛門督。康和二年正月二日叙從二位(院行幸賞)七月日任左衛門督。三年正月二日叙正二位(行幸院院司賞)五年八月十七日兼春宮權大夫。嘉承二年七月十九日止權大夫(依受禪也)天永二年正月廿三日任權大納言。保安三年四月十三日薨、年五十七、數月重病。號京極大納言。

(十) 藤原仲實(……一七八一)

故大納言實季卿三男、母同公實、年月日叙從五位下。承保三年十二月日任侍從。承曆二年正月五日叙從五位上(侍從勞)同月日兼丹後守(別功)年月日重任。永保元年正月日叙從四位下(陽明門院治曆四年御給)同年二月日任備中守( )少將



如元。同三年十一月日任右近權中將(備中守如元)同四年正月日叙正四位下(院當年御給)寬治五年正月廿二日兼中宮權亮(立后日)同月廿八日補藏人頭(止備中守、中將、權亮如元)六年四月廿六日任參議、右中將如元。七年二月播磨權守。嘉保三年正月日叙從三位(去寬治元年大嘗會國司賞)備中守。永長二年四月廿四日叙正三位(祇園行幸事賞)承德二年正月日兼備中權守。康和四年正月日任權中納言。三月廿日叙從二位(御賀院司賞)五年正月二日叙正二位(行幸鳥羽院賞、院司)永久三年四月廿八日任權大納言(宣命)保安二年十二月四日依二禁辭職。同七日出家。同廿三日薨(年不明)

(二) 藤原季仲

故權中納言經季卿男、母備後守正四位下藤原恒女。天喜六年正月日叙從五位下。延久元年四月日任刑部少輔、同二年二月日遷少納言。同四年正月日叙從五位上(勞)同六年正月日任右少辨。永保三年十一月日叙正五位下(松尾北野行幸事賞)承曆元年十月日轉左少辨。同三年正月日叙從四位下(辨勞)同四年正月日叙從四位上(造六條院行幸事賞)同六月日轉左中辨。應德三年正月兼近江介。寬治元年十一月八日叙正四位下(大嘗會國司)同十二月八日補藏人頭。同六年正月日兼備中(勞)八年八月日任參議、今日轉左大辨。嘉保二年正月日兼越前權守。三年正月日叙從三位(石清水、賀茂行幸事賞)十月日兼興福寺長官。永長二年正月日兼太皇太后宮權大夫。承德二年十二月日任權中納言。康和二年七月廿三日叙從二位(先年山科寺、南園堂行幸事賞)四年三月廿日叙正二位(御賀日賞、院司)六月廿三日兼太宰權帥中納言(止大夫)五年六月下向(帥)長治二年十一月一日止權中納言、權帥、十二月廿八日配流周防國(依日吉社訴也)同三年二月日移配常陸國。

(三) 源 師賴(一七二八—一七九九)

左大臣源俊房一男、母年月日叙從五下。永保四年正月日任彈正少弼、應德三年正月十一日任左近少將。同四年正月日叙從五上(勞)寬治元年十一月日任備中權介(二十)同十一月日叙正五下(大嘗會國司)同二年正月五日叙從四下(陽明門院、去年御給、止少將)同月十九日叙從四位上(行幸太上天皇御所日賞)同三年正月日叙正四下(無品子媿內親王去朔且未給)同月廿八日任右中辨(備中、介如元)同八年八月日轉右中辨。同日補藏人頭。嘉保二年正月日兼備中。承德二年正月七日任參議(卅

一)十二月兼右兵衛督。三年正月五日叙從三位。同日兼近江權守。康和三年正月五日叙正三位(左大臣讓額賞)六年正月廿八日兼備中權守(卅七)天永四年十月廿九日止右兵衛督(依不仕也)保安五年正月廿二日兼備前權守。大治四年正月廿四日兼備後權守。二月十七日改任備前權守五年十月五日任權中納言。大治六年三月十九日叙從二位(行幸稻荷祇園行幸事賞)十二月廿二日任權大納言。長承二年正月五日叙正二位(先年行幸平野大原野行幸事賞)三年二月廿二日兼皇后宮大夫、三月十九日改大皇太后宮大夫。保延二年十二月九日任大納言、大皇太后宮大夫如元。五年七月十六日爲躰仁親王勅別當、八月三日辭大夫、同十七日兼春宮大夫。同日勅授帶劍。十二月四日薨、年七十二。先是出家。依侯所勞也。

(四) 源 能俊(一七三〇—一七九四)

大納言俊明卿一男、母、承曆四月六日叙從五下(中宮御給)永保二正月日任阿波權守同三年二月日任右衛門權佐。應德二年正月日叙從五上(勞)寬治元年十一月任備中(十八)同日叙正五下(大嘗會主基國司)同十二月日任右近衛少將(備中、介如元)同二年正月十一日補藏人。同三年正月日叙從四位下(勞)同六年正月日兼美作介。同八年正月日叙從四位上(少將勞)嘉保二年正月二日叙正四位下(院行幸賞)永長二年正月日兼讚岐介(少將勞)承德二年正月日遷右中辨。同年十二月(十七)日轉權左中辨。同三年四月日任修理左京城使。康和元年十二月日補藏人頭。二年七月十七日任參議(卅一)(宣命)同廿三日叙從三位(造宮行幸事賞)三年二月日兼美作權守。四年三月廿日叙正三位(御賀院司賞)長治三年三月十一日兼左近中將。同日兼備後權守。嘉承三年十月十四日遷左兵衛督、同日爲使別當。天永二年正月廿三日任權中納言、左兵衛督別當如元。四年三月日辭左兵衛督別當。永久二年十二月日遭父喪。五年正月十九日兼治部卿。元久二年七月卅日叙從二位(天仁二年石清水行幸事賞)三年十一月廿五日兼中宮大夫。保安三年十二月十七日任權大納言。治部卿、中宮大夫如元。五年十一月廿四日止大夫(依院號也)大治四年十一月日叙正二位(行幸平野大原野行幸事賞)六年十二月廿二日轉大納言、同廿四日兼中宮大夫、治部卿如元。長承二年十二月五日勅授帶劍。三年三月廿日依病齋出家。月日薨、年六十五。年來風病云々。



(四) 源 顯雅(一七三四—一七九六)

故右大臣顯房公男、母故信乃守藤伊綱女。年月日叙從五位下。應德二年十一月廿日任侍從。同四年正月五叙從五位上。寬治元年十月任近江權介。同十一月十八日叙正五位下(大嘗會近江權介)同十二月十三日任左近權少將(元侍從兼近江權介)同二年二月十七日五位藏人。同六月五叙從四位下(少將如元。無品令子內親王去應德二年未給。臨時除目次)同年十二月日任右近權少將(元左近)同三年正月十一日叙從四位上(天皇行幸、院無品內親王王別當賞)同五年十月十三日正四下。同月廿八日兼備中權介(十八)少將(勞)嘉保三年正月廿四日兼美作介(少將勞)康和元年十二月十四日任右近權中將(剩闕)同四年正月廿三日補藏人頭。六月任參議(廿九)右中將如元。七月廿一日叙從三位(尊勝寺供養賞、院別當)嘉承三年正月十三日兼備中權守(卅五)天永三年月日叙正三位敷。四年正月廿八日兼播磨權守。永久三年正月廿九日兼大宮權大夫。六年正月十一日(十八)兼備中權守(四十五)元久三年十二月日止大宮權大夫。保安三年十二月十七日任中納言。天承二年十二月廿五日任權大納言。長承二年正月五日叙從二位(行幸石清水、賀茂行事賞)四年正月五日正二位(去大治五年月日行幸日吉社行事賞)保延二年十月四日依病出家。同十三日薨、年六十三。號揚梅大納言。

(五) 藤原俊忠(一七三三—一七八三)

故入道大納言忠家卿男、母故入道大納言經輔卿女。年月日叙從五位下。應德三年十一月廿日任侍從。寬治二年正月五日叙從五位上(簡一)同月廿五日任左近權少將。同三年正月廿八日兼備前介。同日遷右近權少將。同七月廿五日補五位藏人同五年正月六日叙正五位下(少將勞)同年八月六日叙從四位下(臨時除目次)同六年十一月八日更任右近權少將。同七年正月五日叙從四位上(陽明門院御給)同八年二月廿五日兼近江介。康和四年正月廿三日轉右近權中將。同年二月一日遷左近權中將。同五年二月卅日兼備中介。同六年正月三日叙正四下(行幸院賞)長治三年三月十一日補藏人頭。嘉承二年正月日但馬權守。天永四年正月廿八日兼讚岐權守。永久二年正月五日叙從三位(勞)永久六年正月十八日兼備後權守。保安二年六月廿六日任太宰大貳。三年十二月十七日任權中納言。同廿一日轉任太宰權帥。保安四年七月九日薨、年五十一(五十三)

(六) 藤原爲房(一七〇九—一七七五)

故正四上行但馬守隆方朝臣一男、母故右衛門權佐平行親女。康平八三月廿九任縫殿權介。延久三正月十四藏人(廿三)同四年十二月二日任左近將監。同八日院判官代。同五、四月卅從五位下(行幸院賞判官代)承保二正月廿八日任遠江守。同四年正月廿九日兼中宮少進。永曆二年十二月十一日服解(父)承曆四正月五從五位上(治國)同四月八日正五下(自關白第行幸堀川院賞)永保元十二月廿七轉權大進。同三年二月一日左衛門權佐(卅五)同十二月十九日兼防鴨川使。同四年八月廿五日藏人(卅七歲)九月廿三日止大進(宮崩)應德三年十一月廿日任權左少辨。同廿六日更補藏人。寬治二年正月廿五日兼周防介。同三年二月廿八日轉左少辨。同四年六月五日任加賀守(便辨如元)同五月廿五日兼中宮大進。同六年五(九)廿止任。廿八日左遷阿波權守(日吉社神民並山僧等訴也)同七年六月廿六日被聽歸京。同八年八月一從四下(辨時春日行幸行事賞)嘉保元年十二月十七修理權大夫。同二年正月五日從四上(大夫勞)同三年三月廿三日叙正四下(上皇幸京極第賞)長治元年七月九日兼春宮亮。同二年六月十八日兼尾張守(亮、如元、舊吏)嘉承二、三月八日叙正四位上(行幸鳥羽殿賞、院別當)七月廿九止亮(踐祚)更昇殿。同十月十二日藏人頭(于時修理權大夫)同廿二日兼內藏頭。天仁二年正月廿二日越前權守。同十二月日辭內藏頭。天永二年正月廿三日任參議(六十三)修理權大夫、越前權守如元。三年正月廿六日兼大藏卿。四年正月廿八日兼備中權守(六十五)十一月廿六日叙從三位(稻荷祇園行幸行事賞)永仁二年十一月廿九日叙正三位(行幸白川阿彌陀堂供養、院別當賞)永久三年四月二日薨、年六十七。昨日出家云々(腫物)

(七) 源 雅定(一七五四—一八二二)

右大臣從一位源雅實二男、母、康和四年三月爲殿上小舍人。長治二正月廿一叙爵(元服日十二才)同七日任侍從、同三月十六日遷任右少將。同三年正月五日從五下(少將勞十四才)同三月十一兼周防介(同勞)嘉承二年正月三日五下(行幸院賞)天仁二正月六日從四下(少將勞)同六月十九日從四上(皇后從內大臣第入內賞)天永二正月廿三日兼美作權介。同九月廿日正四下(從內大臣第還御內裏賞)永久三年八月十三日遷右中將。同四年正月卅兼備中(廿三)元永二年二月六日任參議



(廿六)右中將如元(右府辭大將)三年正月廿八日美作權守。保安二年正月五日叙從三位(土御門內裏)三年十二月廿一日任權中納言。大治四年正月七日叙正三位(中納言勞八年)五年正月十八日兼右衛門督。六年五月廿九日補使別當。十二月廿二日轉中納言、別當右衛門督如元。天承二年正月廿二日轉左衛門督。長承二年十二月十八日辭別當。三年正月七日叙從二位(參議時日吉社行幸行事賞)保延二年三月廿三日叙正二位(鳥羽御堂供養行事賞)十一月四日任權中納言。十二月九日勅授。保延六年十月廿六日蒙任大將兼宣旨、十二月七日兼左大將。七年十二月廿七日兼皇后宮大夫。久安五年七月廿八日任內大臣、同廿九日左大將如元。六年八月廿一日任右大臣。同廿二日左大將如元。仁平四年五月廿八日出家。法名蓮如(年來之本意)應保二年五月廿七日入滅、年六十九。頓薨、號中院右大臣。

(㉙) 藤原伊通(一七五三一—一八二五)

故正二位行權大納言兼中宮大夫民部卿宗通卿二男、母正三位行修理大夫藤原顯季卿女。康和二年正月五日叙爵(齋宮給)同五年三月十五日從五上行幸高陽院賞。長治二年正月廿七日三川守(院分判官代、元散位)同四月十日侍從(兼守)嘉承元年正月七日叙正五下(中宮行啓右衛門督藤去朝臣宗通賞)十二月五日任備中守(十四)(兼侍從元三川守)同二年十二月廿日計。天永元年十月廿重任。天永元年正月廿三左少將(元侍從)同廿七遷右。永久二年正月辭備中守。同三年八月十三日權右中辨(廿三元右少將、備中守、公文)同四年正月五日叙從四下(辨勞)同十二月廿二從四上(院去天永二年御給)元永元年十二月十七日叙正四下(最勝寺供養行事賞)保安元年正月十三日補藏人頭、七月廿二日遭喪(父)同二年六月廿七日復任。三年正月廿三日任參議(三十)十二月廿一日兼右兵衛督。四年正月廿二日兼美作權守。同廿七日停督、五月日督如元。大治三年正月廿四日兼備中權守(卅六)四年正月七日叙從三位。五年二月日任中宮權大夫。長實卿任納言後辭所職籠居而。不被下辭書不許。六年十二月五日止三職(依不仕也)同十六日被辭狀。長承二年九月廿一日任權中納言、十二月五日勅授。四年正月廿八日叙正三位(參木時行幸松尾北野行事賞)保延二年十二月九日轉中納言、同廿七日兼右衛門督即爲檢別當。三年十二月十六日辭督別當。四年正月五日叙從二位(春日行幸行事賞)七年十二月二日任權大納言。康治二年正月三日叙

正二位(朝覲行幸院分別當)久安六年八月廿一日轉大納言、九月廿日服解(母)十一月三十日復任。久壽三年八月廿四日蒙宣旨、九月十三日任內大臣。保元二年八月十九日轉左大臣、十月廿六日聽輦車。平治二年七月廿七日蒙宣旨、八月十一日任太政大臣。長寬三年二月三日依病上表辭職、同十一日出家。十五日薨、年七十三。

(㉚) 源 師時(一七三七—一七九六)

故入道左大臣俊房公二男、母故參議從二位源基平女。寬治二年十一月十七日授爵(朔旦天曆御給)同七年三月十六日左兵衛佐。嘉保元正月七從五上(臨時)永長元年正月十一日叙正五下(左兵衛佐行幸院賞大殿御給)承德元正一補藏人(左兵衛佐)同廿九日右少將(藏人)同二年正月廿七兼周防權介。康和元年正月六日從四下(府勞)同四、三月廿日從四上(法皇御賀日中宮職事賞)同五年二月卅兼備中權介(廿七)嘉承元年三月十一日轉右中將。同二年正月廿六日兼播磨介。三月八日正四下(行幸鳥羽臨時賞)十二月五日兼皇后宮權亮。天永元年正月廿六兼備後權介。永久元年正月十九日兼周防介。保安二年十一月十三日服解(父)同三年正月廿三補藏人頭(四十六)十二月十七日任參議、右中將如元。同廿一日兼皇后宮權大夫、右中將。保安四年正月廿二日兼備中權守(四十七)大治三年正月日美作權守。五年十月五日任權中納言。長承三年三月十九日改太皇太后宮權大夫。四年正月廿八日叙正三位(中納言勞)保延二年四月六日出家、即日薨、年六十。

(㉛) 藤原忠宗(一七四七—一七九三)

右大臣正二位家忠公一男、母故正四下行播磨守定綱卿女。永長二年正月五日叙爵(父卿讓平野大原野行幸行事賞)康和二年七月廿四日任侍從。同四年九月廿五日叙從五上(天皇自高陽院還宮賞)同五年八月十七日東宮昇殿。長治元年正月十四日昇殿(十四)同廿八日讚岐介。嘉承元年十二月廿七日左近少將。同二年正月廿六日伊與介。七月十九日止昇殿。同日新帝昇殿。同十二月八日補藏人。天仁元年十一月十日兼丹波權介。同月廿日叙正五位下(主基廿一)天永三年正月五日叙從四下(少將如元)同四年正月廿八日加賀權介。永久五年正月五日叙從四位上(府)同六年正月日備中權介(卅二)元永二年二月十一日叙正四下(行幸院)同十一月十七日轉左中將。同三年正月廿八日美作介。保安二年二月十三日任右中將(依父右



大將轉左大將也。同三年二月八日聽禁色。同十二月十七日補藏人頭。同四年正月廿八日補新帝領。同年九月六日任中宮權亮。同十一月廿四日止權亮(依院號也)同五年正月日兼美作權亮。大治四年正月日播磨介。五年十月五日任參議(四十四)右中將如元。播磨介(頭勞九年)十一月五日叙從三位(松尾北野行事賞)六年正月廿二日兼丹波權守。十二月廿二日任權中納言。同廿四日兼中宮權大夫。長承二年九月一日薨、年四十七。

(三) 藤原宗能(一七四四—一八三〇)

內大臣正二位源有仁一男、母前美乃守正四下行房朝臣女。永長二年正月五日叙爵(中宮御給本名家隆)康和二年十二月日越前守。同三年二月九日昇殿(十八)同四年正月廿三日任左兵衛佐。同五年正月六日叙從五位上(簡一)同十二月廿三日叙正五位下(東宮行啓高陽院賞)長治元年二月日聽東宮殿上。同二年正月十六日補藏人。同三年三月十一日任右少將(廿三)嘉承二年正月十六日近江權介。同七月十九日止藏人(天皇晏駕)同十月十三日補新帝藏人。十一月廿九日叙從四下(御即位)十二月九日還昇、天仁元年十一月廿一日叙從四上(大嘗會國司)永久二年正月廿二日備中權介(三十一)元永三年正月廿八日近江介。保安三年正月廿三日轉右中將。同四年正月廿八日近江權介。同廿八日御讓位、昇殿。同十一月十七日叙正四位下(大嘗會國司)大治三年正月廿四日備中(前)介同五年十月五日藏人頭。大治六年十二月廿二日任參議(四十八)元藏人頭(勞二ヶ年)左中將備中介。同廿四日除目。中將如元。天承二年正月五日叙從三位(內大臣讓春日行幸行事賞)同廿五日兼丹波權守。長承二年九月廿一日兼中宮權大夫。三年二月廿二日任權中納言。中宮權大夫如元。四年三月十四日兼右兵衛督。保延二年十一月四日轉左。七月廿九日服解。三年十二月十六日轉右衛門督。五年正月五日叙正三位(中納言勞六年)十一月廿六日叙正二位(成勝寺供養行事)幸賞、中宮御給)六年七月三日辭督同日被返辭狀畢。十一月卅日辭督別當。七年四月廿日服解(父)九月廿五日復任。十二月二日轉大夫、同廿七日改任皇太后宮大夫。康治二年正月三日正二位(朝覲行幸賞、大夫)久安五年七月廿八日任權大納言。八月二日皇太后宮大夫如元。六年二月廿七日止大夫(院號)久壽二年九月廿三日春宮大夫。三年九月十三日轉大納言。保元三年八月十一日止大夫(依踐祚也)永曆二年九月十三日任內大臣。應保

二年九月八日蒙輦車宣旨。長寬二年閏十月十三日上表辭內大臣、以男宗家中叙正三位。仁安三年六月十二日出家(八十四)嘉應二年二月十一日薨(八十七)號中御門內大臣(參議四年、內大臣四年、中納言十六年、大十三年)

(四) 藤原實光(一七二九—一八〇四出家)

入道從三位資業卿曾孫、正四位下行式部大輔兼備中守實綱朝臣孫、故右中辨兼和泉守有信一男、母故前太宰大貳從二位藤原實政女。應德三年十一月廿五日給勸學院學問料(十八)寬治五年十二月廿九日補文章得業生(廿三)同六年正月廿五日因幡少掾。嘉保二年六月(八)日寓直院文殿。同十二月五日獻策(廿七)同廿四日補院藏人。同三年正月廿四日縫殿助。永長二年正月廿三日補藏人(廿九)承德三年正月廿二日任右衛門少尉。蒙使宣旨。康和二年正月五日叙從五下(策卅二)同五年十一月一日勘解由次官。長治二年三月十日任右衛門權佐。蒙使宣旨(卅七)同三年正月五日叙從五上(策)嘉承元年十二月廿七日任右少辨(佐如元)同三年三月日兼防鴨河使。天仁三年正月廿八日任左衛門權佐。同日兼周防介。天永二年正月六日叙正五下(佐勞)同十二月十三日昇殿。同廿四日爲尙復、永久三年八月十三日轉左少辨。同五年四月十九日補藏人(辨佐如元)保安元年十一月廿五日任近江守(辨如元止藏人佐)同二年三月補勸學院別當。同三年十二月廿三日任右中辨同四年正月六日叙從四下。二月六日還昇。同十一月十七日叙從四上(大嘗會國司)同十二月廿日任左中辨。同五年正月日得替。天治二年十一月日叙正四下(石清水行幸賞)大治二年十二月廿五日爲御侍讀、同五年十月五日轉右大辨、六年十二月廿二日任參議(六十三)同廿四日除目、兼左大辨勘解由長官。天承二年正月廿二日任美作權守。長承二年二月廿二日任大貳(去大辨)三年正月五日承從三位(行幸松尾北野行事賞)同廿二日兼太宰大貳(步大辨並長官)保延二年十一月四日任權中納言、同日兼太宰權帥。五年正月日得替、正月七日叙正三位(納言勞、先年行幸稻荷祇園行事賞)六年正月六日叙從二位(保安二年月日行幸春日行事賞)康治二年十二月(十一)日辭中納言、以男和泉守光盛、中替(重任然而不被下止納言宣旨)三年十月廿二日(廿三)出家法名西寂。年七十六。

(五) 藤原成通(一七五七—一八一九出家)



故正二位行權大納言兼民部卿中宮大夫宗通卿四男、母正三位行修理大夫顯季卿一女。長治三年正月五日叙爵(春宮御給  
 本名宗房)嘉承二年十二月八日侍從。天仁三年二月廿五日從五上(行幸院)天承二年正月日備後介。同八月廿日昇殿(十五)  
 同三年正月十日補藏人(十六歲)永久三年八月十三日任右近少將(十九)同四年正月五日叙正五位下(少將如元)同十一日還  
 昇、同卅日兼備前介。同六年正月七日叙從四下。保安元年十二月十四日復任(父)同二年正月廿四日任備中。同三年正  
 月六日叙從四位上(院御給)同月廿二日任左近中將(廿六)同四年正月日兼播磨介。同廿八日御讓位。新帝昇殿。大治二年  
 正月三日叙正四位下(行幸院賞)同十二月日聽禁色。同三年正月廿四日兼美作權介。六年十二月廿二日任參議(卅五)元左  
 中將美作權介。不經藏人頭。同廿四日除目、中將如元。天承二年正月廿二日任備中權守(卅六)長承三年二月十七日叙從  
 三位(於法勝寺金泥一切經供養行事賞)同廿四日轉左中將。保延二年十一月四日任權中納言。三年正月卅日兼侍從(剩闕)  
 七年十二月廿六日叙正三位(御即位叙位、納言勞)同廿七日兼皇后宮權大夫。永治二年二月三日從三位(本宮自大內出御權  
 大夫賞)康治二年正月三日正二位(朝覲行幸、權大夫賞超實光)久安五年七月廿八日任權大納言。六年九月廿日服解。十一  
 月卅日復任。久壽三年九月十三日轉大納言、侍從如元。同十七日辭侍從。申任養子泰通(爲通朝臣男)保元三年正月廿一日  
 辭退。二月廿一日被下辭狀。四年十月十五日出家法名栖蓮、年六十三。

(尚) 藤原公教(一七六三—一八二〇)

權大納言實行卿一男、母故修理大夫藤顯季卿三女。嘉承二年十一月廿九日叙爵。永久三年十二月十六日任侍從(十三歲)  
 同五年十二月三日昇殿(十五歲)同六年正月七日叙從五上(簡一)元永二年正月廿四日讚岐權介。保安二年四月五日右近權  
 少將(十九)同六月廿六日補藏人。同三年正月廿三日備前權介。同四年正月廿八日補新帝藏人(受禪日)同五年正月七日叙  
 正五下(府)天治三年正月七日叙從四下(府)同八月日還昇。大治二年正月十九日美作介。同四年正月廿日叙從四位上(御幸院  
 賞、新院御給)同五年四月三日轉左中將。同六年正月五日叙正四位下(女院御給)同十二月廿二日補藏人頭(廿九)天承二年  
 正月廿三日兼備中權介(三十)長承二年正月廿九日任參議(三十一)元藏人頭、左中將(頭勞三年)中將如元。三年二月廿二

日兼任伊與權守。四年正月二叙從三位(行幸院賞)保延二年十一月四任權中納言。三年十二月十九日兼左兵衛督。五年十  
 月九日服解(母)十二月十六日復任。六年十二月七日爲別當。七年正月廿九日轉左衛門督、十二月廿六日叙正三位(御即位  
 叙位、納言勞)永治二年十二月一日從二位(父大納言長承三五月右賀行幸行事賞)天養二年正月四日正二位(朝覲行幸、院分別  
 當)久安三十二年七月七日辭別當。五年七月廿八日轉權中納言。左衛門督如元。六年八月廿一任權大納言。久壽三年二月廿六  
 日蒙兼任大將宣旨、三月四日任左大將(內大臣讓)十月廿七日兼中宮大夫(立后)保元二年八月九日蒙任大臣兼宣旨。同十九  
 日任內大臣、同廿一日左大將如元(父公辭太政大臣申任之)平治二年七月七日辭大將(依所勞也)同九月日薨(赤痢)年五十八  
 (尚) 藤原重通(一七五九—一八二一)

故正二位行大納言兼民部卿宗通卿五男、母同成通卿(顯季卿女)天永元年十二月十三日叙爵(善子內親王未給、十二歲)  
 永久二年正月廿二日任備中守(院分判官代、十六)同二月十一日叙從五上(行幸院賞)同五年正月十九日任左兵衛佐。同六  
 年三月昇殿。同四月三日任右(左)少將(剩闕)元永三、二月十四轉左(右)少將(守如元)保安元年十二月十四日復任。同  
 三年正月六日叙從五下。同廿三日得替。同四年正月七日叙從四下(院御給)同八日昇殿。同月廿二日轉右中將(廿五)同廿  
 八日新帝昇殿。天治元年十一月廿四日初聽女院殿上。大治五年二月廿一日兼中宮權亮。同四月三日叙從四上(中宮還入內  
 賞)天承二年二月日(正月二日)叙正四下(行幸院賞)長承二年正月廿九日補藏人頭(卅五)三年二月廿二日任參議(卅六)右  
 中將如元。四年正月廿八日兼播磨權守。保延五年十月廿六日叙從三位(同賞同給)六年三月日兼讚岐權守。七年十二月二  
 日任權中納言。永治二年十一月十四日叙正三位(父)故宗通卿諸社(松尾、稻荷)行幸賞。天養二年正月四日從二位(朝覲行  
 幸賞、宮分)久安三年十二月廿二日爲使別當。四年七月十七日正二位攝政法性寺堂供養行幸賞)五年七月廿八日轉中納言  
 六年二月廿七日止權大夫。六月廿二日中宮大夫(立后日)八月三十日右衛門督。九月廿日服解。十一月卅日復任。仁平二  
 年正月廿八(廿九)日轉左衛門督。二月十二日辭別當。久壽三年正月廿七日辭督。以男家通申任左兵衛佐。兼按察使。九  
 月十三日任權大納言。同十七日中宮大夫按察使如元。十月廿七日爲皇后宮大夫(依本宮居上也)十二月九日補淳和幸別當



保元三年二月三日轉皇太后宮太夫(本宮)四年二月廿一日兼中宮大夫、辭皇太后宮大夫。平治二年八月十一日轉大納言。中宮大夫按察使如元。永曆二年三(五)月廿五(廿四)日出家。六月五日薨、年六十三。

(六) 藤原經忠(不明—一七九八)

故正二位行權大納言經輔卿孫。故正四位上行修理大夫兼內藏頭播磨守師信朝臣男、母法橋增守女。應德三年正月七日叙爵(令子內親王綏)寬治元十二月十三日任越前權守。同二年七月六日任左兵衛佐。同三年正月六日兼周防守(院分)同四年正月七日叙從五位上(佐勞)四月廿日叙正五位下(行幸鳥羽院賞)同五年七月廿九日昇殿。同七年正月五日叙從四下(佐勞)同十二月廿二(廿一)日還昇。嘉保三年正月七日叙從四上(院御分給)永長二年正月廿九日任兵部大輔(今日守得替)承德二年正月廿七日任安藝守。同七月廿七日叙正四下(行幸院賞)康和五年八月十七日東宮昇殿。長治三年三月十一日得替。嘉承二年七月十九日止昇殿(依帝崩也)同日新帝昇殿。天仁三年正月廿八日任右馬頭。天永二年正月廿三日兼皇后宮亮。四年正月廿八日但馬介。永久三年八月十三日任近江守。同十月十三日又還昇。頭亮如元。元永二年三月辭守。許之。保安二年六月廿六日辭右馬頭。以男忠能申任之。同四年正月廿八日止昇殿。五年正月五日叙從三位(行幸二條院賞。新院御給)十二月廿日任左京大夫。大治三年正月廿四日兼太宰大貳。長承二、十月廿六日任參議。三年二月廿二日兼大藏卿。同日兼備前權守。五月十九日叙正三位(行幸石清水加茂行事賞)保延二年大藏卿。備中權守。十一月四日任權中納言。十二月九日轉中納言。三年十二月十六日兼太皇太后宮權大夫。四年正月二日叙從二位(行幸院賞)四月十五日依病出家。七月十六日薨

(七) 藤原忠基(一七六一—一八一六)

正二位行權大納言兼民部卿中宮大夫忠教一男。母故參議從三位行春宮權大夫源季宗卿女。天永二、八月廿九叙爵(氏爵未給)同三年正月廿六日加賀權守。元永二年十一(十二)月九日昇殿(十九)保安二年正月七日叙從五位上(簡一)同三年正月廿三任侍從。同九月八日右近少將(廿二)同四年正月廿四日周防介。同廿八日新帝昇殿。同五年四月五日補藏人。天治二年正月六日叙正五下(府勞)大治元年十一月廿一日叙從四下(府勞、朔旦、叙位次、少將如元)同廿八日還昇。同二年正月廿一

日讚岐介。同六年正月五日叙從四上(府勞)天承二年正月廿六日美作權介。長承二正月五叙正四下(院御給)同三年二月廿三日權中將。同三月十九日皇后宮權亮。保延二年十二月四日補藏人頭。同十二月九日任參議(卅六)十二月廿一日兼左中將。三年正月卅日兼備中權守(卅七)四年月日兼太皇太后宮權大夫。七年十一月日服解(父)十二月二日復任。永治二年正月五日從三位(參議勞重服中)康治二年正月廿七日備後權守。三年四月廿一日止大夫(本宮崩)久安五年七月廿八日任權中納言。十月廿二日正三位(臨時)仁平三年閏十二月廿三日辭權中納言、任太宰權帥。四年正月日可列本座之由宣旨(經定上)久壽三年七月日薨、五十六(五十八)

(八) 藤原經定(一七六〇—一八一六)

故正二位行大納言經實卿男、母故從三位行權中納言藤通俊卿女。天仁二正月六(七)日叙爵(氏)永久四年一卅日加賀權介。保安三年八月廿七日昇殿(廿三)同九月八日右兵衛佐。同十二月廿二日右少將。同四年正月廿二日加賀權介。同廿八日昇殿(新帝受禪日)同十一月六日改備中(廿四)同十七日叙從五位上(大嘗會、叙位、國司賞)天治三年正月五日叙正五位下(府勞)大治三年正月五日叙從四下。同廿四日更任右近權中將。同四月七日遷左近權少將。同四年正月備後介。同五年正月還昇。四月廿四日兼肥後介。長承二年正月五日(七)叙從四上(府卅四)同三年二月廿二日備中權介(卅五)同三月七(六)日任右近權中將。同日兼中宮權亮。保延二年十一月四日叙正四下(臨時卅七)四年十一月十一日補藏人頭(卅九)同六年三月廿七兼美作權守(亮勞)七年十二月七日任參議(四十二)右中將、中宮權亮、美作權守如元。永治二正月廿三兼讚岐權守。久安三正月五從三位(勞)同廿八日兼伊與權守。五年三月廿八日兼伊與權守。十月廿二日正三位(日吉行幸行事賞、除目次)六年十月廿日任權中納言。久壽三年正月廿八日薨年五十七(五十五)先出家(頭四年、參十年、中七年)

(九) 藤原教長(一七六九—一八一六配流—一八二二召還)

故大納言忠教卿二男。母故大納言源俊明卿女。年月日聽童殿上(童名文殊)元永二年十二月廿五日叙位(元服日)保安三年六月廿日昇殿(十四)九月八日侍從。同四年正月廿二日任左少將(十五)同廿八日昇殿(新帝受禪日)同十一月六日兼備中



權介(十五)同十七日叙從五上(大嘗會、叙位、國司賞)天治三年正月五日叙正五下(府)大治元年十一月廿七日補藏人。同三年正月五(七)日叙從四下(府勞)八日還昇。同四年正月廿四日兼加賀權介。長承二年正月五(七)日叙從四位上(府)同三年二月廿二日近江權介。保延二年十一月四日叙正四位下(臨時)同十二月廿二日(廿一)轉右近權中將。同四年七月日除籍。十一月日還昇。同月十七日補藏人頭。同五年正月廿四日兼伊與(權)介。永治元年十一月日遭喪(父)同十二月二日復任(四十九日中)同十二月二日任參議(卅三)康治二年正月廿七日兼丹波權守。久安三年正月五日從三位(勞)四年正月廿八日丹波權守五年十一月廿五日正三位(稻荷祇園行幸行事賞)仁平三年正月廿一日阿波權守。久壽二年正月廿八日兼阿波權守。十二月廿二日辭之。三年正月廿七日辭兩官、遷左京大夫。七月十一日朝自新院御所退出。即出家、八月三日配流常陸國。應保二年三月七日召返(年五十四)

(二) 藤原顯業(一七五〇—一八〇八)

故右少辨俊信一男、母故前常陸介、正四下菅原是綱朝臣女。嘉承元年五月廿日給穀倉院料(十七)天永二年十二月卅日補文章得業生(廿二)同三年正月廿六日越前大掾。永久三年十月廿三(廿二)日昇殿。同十一月廿一日獻策。同十二月十八日木工助。同四年七月廿一日補藏人。同五年正月十九日左衛門少尉。同六年正月十八日蒙使宣旨。元永二年正月五日叙爵(藏人、卅)同廿四日筑前權守。同十一月廿七日宮內少輔。保安三年十二月廿二日勘解由長官(卅三)天治二年正月六日叙從五上(策)同廿八日丹後權介。大治五年十月九日補院判官代。同六年正月五日叙正五下(策)長承元年十二月廿五日左少辨。同三年二月廿二日任右中辨。同四月二日叙從四位下(策)同十一月廿六日兼文章博士。同四年正月廿八日越中權介保延三年十月六日轉左中辨。同四年正月五日叙從四上(中辨勞)同五月日補院別當。同十月十四日叙正四位下(行幸石清水賀茂行事賞)同五年正月廿四日兼備中權介(五十一)裝束使勞)同八月十七日兼東宮學士。永治元年十二月二日轉左大辨同七月停學士依受禪也。同十二月十三日任參議(五十二)坊學士勞)左大辨文章博士如元。同廿六日叙從三位(坊官賞)二年正月廿三日周防權守。康治三年十二月十八日兼式部大輔。久安二、正月廿三日更周防權守(大辨勞)三年七月十二日御

書始爲御侍讀。四年正月廿五日正三位(左大辨勞)五月十一日出家十四日薨、年五十九。

(三) 藤原顯輔(一七五〇—一八一五)

故從三位行修理大夫顯季卿三男、母同長實卿。康和二年正月日補一院判官代。同十四日補藏人(十一)同月廿八日叙爵同十二月廿六日備後權守。同三年四月廿五日叙從五位上(行幸鳥羽殿賞)同四年正月二日叙正五下(行幸院賞)同六年正月廿八日任越後守(院分)長治二年、廿七日叙從四下(東宮御着袴行幸院賞)天仁二年八月十六日叙從四上。天永二年十月廿五日遷加賀守。永久二年九月廿七日兼中務權大輔、元永元年十二月十七日叙正四下(最勝寺供養日院御給)同廿八日遷美作守。年月日辭權大輔。保安三年正月日昇殿。同廿八日御讓位。止昇殿。補新院別當。同七月五日新帝昇殿。同年九月六日服解(父)月日復任。大治二年正月得替、止昇殿。同五年二月廿一日中宮亮(立后日)同八月廿三日昇殿。同六年二月廿日近江守。保延元年十二月廿四日辭守。以男重家申任周防守。三年十月十六日叙從三位。中宮亮如元(四十八)五年正月廿四日兼左京大夫。七年正月廿九日兼近江權守(亮勞)十二月廿七日改爲皇太后宮亮。久安二年正月廿三日任備中權守(五十七)四年七月十七日正三位(法性寺塔供養、皇太后宮御給、或北政所分)六年二月廿七日止亮。久壽二年五月六日出家同七日薨、年六十六。

(四) 藤原經宗(一七七九—一八二〇配流)

故正二位行大納言經實卿四男、母從三位公子(公實卿女)元永二已亥生、保安四年二月十九日叙爵(中宮御給)大治四(三)正月廿四日左兵衛佐(十一)同十二月廿日昇殿。同五年正月五日從五上(勞)天承元十二月廿四日右少將。同二年正月廿二日備中(十四)長承二正月二日正五位下(行幸院賞)四月日聽禁色。同四年正月五日從四下(府)保延三年正月五日從四位上(院御給)同廿日美作介。九月廿五日正四下(行幸法金剛院賞)同四年十一月十七日右中將。永治元年十二月七日新帝昇殿。同二年正月七日藏人頭(廿四)同廿三日備前權介久安三年正月廿八日播磨介。五年七月廿八日任參議(三十一)八月五日右中將如元。六年正月廿九日兼備中權守(三十二)仁平二年二月八日從三位(院御賀日、美福門院別當)四年八月廿八日轉左中將。



久壽二年正月廿八日讚岐權守。九月廿三日春宮權大夫。三年四月六日任權中納言。九月十七日兼右衛門督。同日正三位(父經實卿日吉行幸行事賞)保元二年八月十九日轉中納言。四月二日爲檢非違使別當。三年正月十日叙從二位(行幸美福門院賞、春宮御給)二月廿一日權大納言。八月十一日止春宮權大夫(踐祚)十二月十七日正二位(御即位、叙位、坊權大夫勞)平治二年二月廿八日解官(去廿日有事)三月十二日配流阿波國(四十二)應保二年二月七日被請印即返官符(四十四)

(三)藤原資信(一七四二—一八一八)

故參議、從三位顯實卿一男。母宮內卿師仲女。嘉保三正廿四任諸陵助(本名資懷)康和四正月廿三式部丞(廿一)同十一月十四叙爵。同六年正月春宮昇殿(改名資信廿三)長治元年七月九日越後權守。同三年十二月五日中午務權大輔(廿五)嘉承二年七月十九日太子踐祚、即昇殿。同三年正月廿二日左衛門佐(廿七)天仁二正月七日從五上(簡一)永久二年正月五日正五下(佐卅三)同廿二日兵部權少輔。元永二年正月廿四日備後介。保安元年二月轉大輔。同四正月廿八日御讓位、止昇殿長承元年二月九日昇殿。同二年正月廿九藏人(五十二)同三年二月廿四右少辨(五十三)保延三年十月六日權右中辨(五十六)同四年正月五日從四下。同廿二日還昇。同六年閏五月從四上(臨時)永治元、十二月七日新帝昇殿。十二月十七日右(左)中辨。同二年正月七日藏人頭(六十一)同廿三(廿二)日正四下(臨時)同日備中介(六十一)六月廿八日修理右(左)宮城使。久安四年十月十五日右大辨。五年七月廿八日任參議(六十八)八月二日右大辨如元。十二月廿二日勘解由長官。同日辭阿波權守申任男信忠。六年正月廿九日周防權守、四月廿八日左大辨。十月四日勸學院別當。久壽二年正月七(六)日從三位(勞)同廿八日越前權守。三年九月十三日權中納言、十一月廿八日正三位(八幡賀茂行幸行事賞)同日兼治部卿。保元二年八月十九日任中納言。兵部卿。三年八月十日辭納言。以猶子資忠申任木工頭。兵部卿如元。十一月八日出家、同十八日薨、年七十七(七十八)。

(三)藤原朝隆(一七五七—一八一九)

故參議正三位行大藏卿修理權大夫爲房卿六男(爲隆卿爲子)母法橋隆尊女(殿下御乳母也)天仁三年三月十九日補文章生

(字藤器、十四)天永四正廿八修理亮。二月三日補藏人(十七)永久三正月廿九左近將監、同四月二日服解(父)永久四年七月廿七日叙爵(廿)保安四、十二月卅(四)彈正少弼、大治元、十一(十二)五刑部大輔、同五正七從五上。同十月五日勸次官長承二、正、三。左衛門權佐。同八月廿四日藏人。同三年三月十九皇后宮大進。同十月六日右少辨。同四年正月廿二日播磨介。同五正廿四日信乃守。止權佐。七月廿八止大進(院號)八月十七日內東宮昇殿。同七年五月十七日除籍(不依勤最勝講堂童子也)十月廿日還昇。永治元十二月二日御即位、新帝昇殿。即轉權右中辨。同二年正月七日從四下(辨勞)十一月十四日從四上(高陽院御給)康治二正月三日還昇。同廿七日辭信乃守。以男朝方申任淡路守。久安元年八造東大寺長官。同十一月廿一日正四下(高陽院御給)同三正月廿八右中辨、同四年十月十五日左中辨。同六正月廿九日藏人頭。同四月廿八日右大辨。六月廿二兼中宮亮。仁平元三—辭中宮亮。三年閏十二月廿三日任參議(五十七)右大辨如元。四年正月廿一(廿二、廿三)日兼備中權守(五十八)久壽三年二月二日叙從三位(去久安三年二月春日行幸行事賞)九月十三日任權中納言右大辨(依病不仕之間任之)保元二年八月廿一日正三位(臨時春日行幸行事賞、辨時)三年二月廿一日辭職、以男近江守朝方申任右少辨。四年十月三日薨年六十三。號冷泉中納言。此人家記號中納言記。又云朝記(頭四年、參議大辨四年、中納言三年、前官二年)

(三)藤原光賴(一八八四—一八三三)

權中納言民部卿顯賴卿一男。母、權中納言俊忠卿女。大治五、十月十日修理亮(侍賢門院未給)長承元、九月卅日藏人(九歲)保延二正廿二伯耆守。同五正廿四兼勸次官(年十六)同十二月(卅)備中守(十六)次官如元。同六十一日從五上(自小六條行幸土御門皇居日、暲子內親王職事)同七、廿一、正五下(歡喜光院供養日造作賞)同十二月二右少辨(元伯耆守年十八)天養元年三月昇殿。久安二年十二月廿七兼左衛門權佐(廿三歲)廿九日使宣旨。同三正廿八左少辨。同四年四月廿七、五位藏人(于時重服)同十月十三權右中辨。同五年八月廿二從四下(松尾北野行幸行事賞、權佐如元)同廿八日還昇。同十月十二日從四上(日吉行幸行事賞)同六四月廿八日右中辨。十月日辭左衛門權佐。同七正七正四下(院御給)仁平元年十月



十日修理右宮城使。同二月十二(十三)日兼內藏頭。同三年十二月廿三日藏人頭(越左中辨師能)同四年三月廿八日辭內藏頭。久壽元十二月廿八日轉左中辨。同二年七月廿四日補新帝頭。三年三月六日任。參議(三十三)九月十三日叙從三位(春宮大進惟方四條亭爲春宮御所之時賞惟方讓)九月十七日兼右兵衛督、保元二、正月廿四日近江權守。三年正月十三日正三位(行幸美福門院賞、院御給)二月廿一日任權中納言、四月二日轉左兵衛督、五月廿一日左衛門督、十一月廿六日左衛門督四年三月廿七日使別當。十月辭之。平治二年八月十一日任權大納言。九月二日帶劍。十月十一日從二位(行幸院別當超公通)永曆二年二月廿八日正二位(春日行幸行事)應保三年月日上辭狀、長寬二年正月廿一日被下辭書。八月十四日出家、法名光照(理光)承安三年正月五日薨(年五十)讓文書於成賴卿。

(三) 藤原實長(一七九〇—一八四二)

故參議右兵衛督公行卿一男。母播磨權守源顯親朝臣女。保延二(六)年正月六日從五下(無品禎子內親王當年御給)永治元年十一月廿六日從五上(簡一)康治三年正月廿四日右兵衛佐。天養二年正月四日叙正五下(朝觀行事賞、皇后宮御給)久安二年正月廿二日(廿三)備中權介。廿六日左少將。同三年正月五日叙從四下(勞)同五年十月十一日從四上(日吉行幸賞上卿公教卿讓)同六年正月廿日正四下(朝觀行幸賞、障子內親王給)仁平元二月二日兼備前權介。七月廿四日右權少將。同四年八月十八日左少將。久壽三年四月六日右權中將。保元元年九月十三(十五)日藏人頭。十一月廿八日見任。參議(廿七)(頭伴實任權中納言替)二年正月廿四日讚岐權守。十月廿二日叙從三位(臨時白川院保安三年未給)三年十一月廿六日正三位(春日行幸行事賞追叙)平治二年正月廿一日任權中納言。三月二日勅授帶劍。永曆二年九月十三日轉中納言。應保二年二月五日止權大夫。同月十九日更中宮權大夫。同廿三日從二位(日吉行幸行事賞)七月廿八日服解(祖父)九月十三日復任。長寬二閏十月廿三日任權大納言。十一月廿五轉中宮大夫。永万二年七月十五日辭退(實停任)大夫如元。仁安二年閏七月十九日本座。三年正月六日叙正二位(臨時)承安二二月十日皇后宮大夫(本宮居上)三年八月十五日止大夫(依本宮崩也)養和二年十月十一日(依所勞出家)十二月廿七日薨、年五十三。

(四) 源 定房(一七九〇—一八四八)

入道右大臣雅定公男(實入道權中納言雅兼卿四男)母大納言能俊卿女。保延三年正月五日叙從五位下(無品禎子內親王御給)康治二年正月六日從五上(簡一)同三年正月廿四日侍從。久安四年七月十七日正五下(皇后宮御給、法性寺行幸行事賞)同十一月十三日右權少將。同五年三月十八日讚岐權介兼。同四月十五日轉左近權少將(元右、可勤仕、賀茂祭使之所有假服事故遷之)同六年正月六日從四位下(左少將勞)仁平元七月廿四日轉右近少將。同二年正月三日從四上(行幸院賞女院御給)同四年正月廿三日備中權介(廿五)久壽二年正月六日正四下(美福門院御給)同九月廿三日春宮權亮兼。保元元年九月十七日轉左權中將。同十二月(十一月)月廿八日補藏人頭(兼中將)二年十月廿七日任參議(廿八)左中將春宮權亮如元。元藏人頭(公通任權中納言替)辛亥誕生。三年正月廿七日兼美作權守。八月廿一日止權亮(踐祚)十二月十七日叙從三位(御即位、叙位、坊權亮)四年四月二日解官(依朔日旬無故不參也)平治二年正月廿一日還任。永曆二年正月廿五任正三位(下名次臨時)應保二年五月廿七日服解(養父)九月十三日復任。長寬二、十一月廿五兼中宮權大夫。五月十九日帶劍。同三年正月廿三日從二位(關白坊官讓。超公保、光忠、隆季)永万二年七月十五日任權大納言。十一月十五日正二位(臨時)仁安三年八月十一日轉大納言(宣命)承安二、二月十日皇后宮權大夫。三年八月十五日止權大夫(依本宮崩也)文治四年六月十九日依病出家(飲水之上腫物所勞)七月十七日薨、年五十九。

(五) 藤原公保(一七九二—一八三六)

入道左大臣實能公三男、母權中納言通季卿女。保安二年正月六日從五下(統子內親王給、去年未給)同五(七)年正月廿四日侍從(元散位、八歲、加下名)康治三年正月五日從五上(簡一)久安五三月十三日正五下(院御給)同四月十五右權少將。(元侍從。剩闕。爲勤鴨祭使。右少將定房可勤之所叔父定海卒輕服。仍俄任之剩闕十九人始。廿二日癸酉加茂祭也)同六年正月廿九日備中權介(十九)(兼右少將勞)同三月十四日兼皇后宮權亮。七月廿七轉左近。權少將(元右)同二年正月三日從四上(行幸院賞、統子內親王給)同四年八月十八日轉左近權少將(元右)久壽二年正月六、正四下(新宮御給)保元元九月



十七日右權中將兼(元少)同十一月廿八日兼皇太后宮權大夫。同二、八月三日聽禁色。同二年十月廿七日叙從三位(臨時、于時重服)去左中將。但皇太后宮權大夫如元。保元三年二月三日轉大宮權大夫。十一月廿七日右兵衛督。十二月十七日正三位(御即位、叙位、臨時)平治二年二月廿八日任參議(廿九)永曆二年正月廿三日兼伊豫權守。應保二年十月廿八日轉右衛門督。長寬三年正月廿三日任權中納言(參議一)四月一日別當。八月十七日辭督別當以男實保任侍從。永万二年七月五日勅授。十月廿一日轉大夫。仁安二年正月廿八日叙從二位(行幸院賞)二月十一日任權大納言。大宮大夫如元。嘉應二年正月七日正二位(去永曆二年(應保元年二月)春日行幸行事賞。超公光、師仲等卿)安元二年月日辭退。八月十三日出家(依病也)九月廿七日薨(四十五)

(九)藤原光隆(一七八七—一八五八出家)

入道中納言清隆卿一男、母家政卿女從二位藤家子(鳥羽院御乳母)。長承二年十一月十九日藏人(元院判官代、七)十二月廿六日五位(前二條院承保二大嘗會未給同三閏十二卅淡路守。保延二年四月七日安藝守、同四年十二月卅日出雲守。同六年十月廿九從五位上(造春日御塔賞)(十四)永治元十二月二日兼左衛門佐(十五)同二年二月二日正五下(皇后宮入內父讓十六)康治二正月三日從四下(朝觀行幸、院判官代十七)久安二、十二月廿九日任但馬守。同三年正月二日從四上(朝觀行幸一院、廿一)同五年二月十三日正四下(朝觀行幸賞廿三)同六年正月廿九日越中守(兼卿卅)平治元年十二月廿八日兼內藏頭(廿八)保元二正月廿四治部卿兼備中守(三十)去內藏頭。同十二月廿九日越中守(兼卿卅)平治元年十二月廿七日解官(卿守。依信賴卿緣坐也)永曆元年四月三日還任治部卿。同八月十四日叙從三位(治部卿如元)(卅四)長寬二年正月廿一日美作權守。同廿六日止三位(行幸院司)永万二年八月廿七日任參議(四十)仁安二年八月一日任權中納言叙止三位力。治部卿如元。三年正月六日叙從二位(朝觀行幸院御給)同十一(十三)日辭退。承安五年正月四日正二位(朝觀行幸院司賞。超上藤公光宗家等)安元二年正月卅日止治部卿。以男家隆申任侍從。治承二年十一月日服解。建久三年十月廿六日任太宰權帥(六十六)同九年正月卅日止帥、五月七日出家(七十二)

(二)源 雅賴(一七八七—一八四七)

故入道中納言雅兼卿三男、母權大納言能知卿女(一品宮御乳母)天承元十二月廿四修理亮(雅兼卿二合五歲)廿七日遷大膳亮(下名次。修理亮依無其闕也)同二年正月廿二式部少丞。長承二年三月四日從五下(一品禎子內親王給、臨時、七)同四年正月廿八日治部大輔(九)保延七年正月七日從五上大輔勞、十五)久安五年三月廿日正五下(延勝寺供養、皇太后宮御給)久壽二年八月廿三藏人。同三年九月十七日左少辨(三十)保元二年八月廿一日權右中辨。同十月廿二日從四下(造宮行事卅一)同三年八月十日左中辨。同月日裝束使。同四年正月六日從四位上(父卿去天承三平野大原野行幸行事)正月廿九日兼伊勢權守(裝束使勞)永曆元年四月三日正四下(父卿、天承三、平野大原野行幸行事。兩度用一賞)八月廿四為齋內親王裝束司十月三右大辨。同日藏人頭(卅四)應保三年正月廿四遠江權守。長寬二年正月廿一日任。參議(三十八)三年八月十七日左大辨。十月二日勘長官(臨時)仁安二年正月卅日備中權守(四十一)二月十一日從三位(鳥羽院天養三年未給)三年三月十一日叙正三位(自閑院遷宮大內本家賞)四年正月十三日服解(母)五月十一日復任。十二月卅日任權中納言(參議左大辨六年)(超資賢成賴等二人)治承三年十一月十八日辭以男侍從兼忠申任右少辨。四年正月日被聽本座出仕。同五年正月五日叙從二位(臨時)壽永二年二月廿一日正二位(行幸院賞別當)文治三年七月五日出家、依室家之所勞危急也(年六十一)

(三)藤原實綱(一七八八—一八四〇)

內大臣公教公一男、母花園左府家女房。保延四年正月五日叙爵(統子內親王給、本名實經)久安三正五從五上(簡一、二十)同六正廿九、少納言(廿三)同七年正月七日正五下(太政大臣讓、永久元年稻荷、祇園行幸行事賞)仁平二正廿八兼土左權守(勞)保元二、十月廿七日從四下(勞)(廿九)十一月廿八日皇太后宮權亮。同三年二月三日為大宮權亮(宮轉)應保二年正月十日從四上(行幸院賞、女御琮子給、卅五)同廿七日兼備中權守(卅五)(亮勞)長寬元六月四日改實經為實綱。同二年正月廿六正四位下(行幸院御給)(三十七)仁安元十一月十八(十七)日補藏人頭(三十九)同二年二月十一日任參議(四十)元藏人頭、大宮權亮。同日權右大辨(直任)同三年正月十一日兼阿波權守。八月四日從三位(行幸院別當)嘉應二年正月十八日



轉右大辨。四月七日兼勘解由長官。承安三年正月廿一日伊與權守。四年正月五日正三位(大辨勞)五年十一月廿八日任權中納言(越上首六人)治承三年十一月十七日解官。四年八月日恩免勅勤事。十二月十九日夜頓死年五十三(五十四)

(二) 藤原定隆(一七九四—一八三〇)

入道權中納言正二位清隆卿男。母同光隆卿。保延七正月六日叙爵(春宮御給)永治元十二月二日備中守(父清隆朝臣辭伊與守申任八歲)久安四年七月十七日從五位上(十五法性寺御堂供養眞皇后宮)同六年正月廿九日但馬守。仁平二年十一月卅日加賀守。同三年正月二日正五下(行幸院)子內親王御給)久壽元十二月廿八日右兵衛權佐(廿二)同二年九月廿三日兼春宮權大進。保元二年正月廿四日從四下(去兩官廿四)同日皇后宮亮。守如元。十月廿二日從四位上(造凝花舍功)同三年二月三日皇太后宮亮(本宮轉)平治元十、廿六遷丹波守。亮如元(成行服解之間可勤大嘗會主基也)十一月廿二日正四下(主基廿六)永曆元七月七日遷三川守。亮如元。應保十年十月廿八兼右馬頭(廿九)長寬二正月廿一遷越中守。頭亮如元。永萬元年七月十八日遷伊與守。頭亮如元。同二年正月十二日左京大夫。亮守如元。六月廿二日備中守(三十三)大夫亮如元。仁安元十月廿一止備中守。十二月二日辭皇太后宮亮。同三年三月廿日兼皇太后亮大夫如元(立后)八月四日叙從三位(卅五)(行幸院々司)皇太后宮亮。左京大夫等如元。同四年正月十一日周防權守(大夫勞)四月十一日止亮(依院號也)嘉應二年十月二日俄。薨年三十七。

(三) 藤原重家(一七八七—一八三五)

故正三位行左京大夫顯輔卿男。母長承三年正月十一日藏人(元待賢門院判官代、七歲)同廿七叙爵(前大皇太后未給)二月廿二日尾張權守。同日改本名光輔、爲重家。保延元年十二月廿四周防守(父辭近江守申任之)同五年二月卅日重任。康治元十一月十四從五位上(父卿大嘗會、國司賞讓)同三年正月廿四日筑前守。天養元年正月五日正五下(皇太后宮春宮御塔造國司賞)久安三年二月一日左兵衛佐兼。同四年十一月五日攝津守佐如元。同五年二月十三日四位(行幸院從一位宗子給)九月十一日服解(母)同六(五)正月廿九日復任。仁平二年十二月卅日重任。同三年四月六日上野介。久壽二年五月七日喪(父)

十二月廿五從四上(皇嘉門院、去十月御即位御給)保元二年十月廿二日正四下(造日華門院賞)永曆二正月廿三若狹守。應保元十月十九日能登守。同二年正月七日解官。長寬二年十月二日昇殿(爲取內侍所御神樂拍子也)永萬元七月廿二刑部卿同二年四月六日兼中宮亮。仁安三年十月二日昇殿(內侍所御神樂)嘉應元年正月十一日辭中宮亮。讓弟季經朝臣。同二年正月三日叙從三位(行幸院賞、院別當)刑部卿如元。同十八日備中權守(四十三)月日辭卿。嘉應三年十二月八日太宰大貳安元二年六月廿五日出家、年四十九。

(二) 藤原兼房(一八六〇—一八七七)

故入道關白。四男、母同內大臣兼實。應保二年二月十九日元服(十歲)廿一日從五上。同日昇殿。廿五日正五下(中宮入內賞立后給)閏二月八日禁色。四月七日侍從。同三正廿四日右少將(剩闕)長寬二正月五日從四下。同廿一日中宮權亮。同日近江介。即轉左中將。二月十九服解(父)三月廿九日復任。永萬元年七月廿五從四上。同十二、卅日正四下。二年正月十二日叙從三位(臨時、十四)左中將如元。仁安二正月廿日正三位(東宮行啓賞)同卅日播磨權守。承安二、正月廿三日備中權守(廿)四年正月廿一日從二位(除目次、臨時)治承三、正月十九日正二位。壽永二年八月廿五日任權中納言。元曆二年正月廿日任權大納言。文治五、七月十日轉大納言。六年七月十七任內大臣。建久二年三月廿八日任太政大臣(卅九)五年正月六日從一位。七年十一月廿八日上表辭。十年六月十八日出家。依菩提心也、法名定眞、建保五年二月廿六入滅于高野別業(六十六歟)年六十八歲。

(二) 藤原實守(一八〇七—一八四五)

故右大臣公能公三男、母同實定卿。保元二、九月八日五位(皇后宮當年御給)同日美作守。十七日兼侍從(十)同二年十月廿二日從五位上(造宣耀殿賞)同三年五月廿一日左少將。守如元。八月一日兼皇后宮權亮、同四年正月三日正五下(行幸院中宮御給)二月十三日止權亮(院號)永曆元十月十一從四下(行幸院皇后宮御給)應保元十、十九右中將。守如元(服之間也、十五)同二年正月五日從四上(上西門院、十六)長寬元十二月廿止守。同三年正月廿三日正四下(故左大臣實能公坊官賞。十



九)仁安元十七禁色(廿)同十日兼春宮權亮。同三年二月十九日止權亮(踐祚)八月十日藏人頭(廿二)嘉應二年十二月卅日任參議(廿四)元藏人頭、右中將如元。三年正月十八日播磨權守。四月七日從三位(臨時)承安三年正月六(五)日正三位(坊官勞、先坊權亮、超實綱)安元二、正月卅日兼備中權守(卅)養和二年三月八日任權中納言。八月十四日兼皇后宮權大夫(立后日)十月十三日叙從二位(始入內賞)壽永二年十二月廿一日兼左兵衛督。三年八月日辭納言並督(依所勞云々)元曆二年四月廿五日薨(此三ヶ年所惱。大略不食脚氣)年三十九。

(二)藤原親房(一七九三—一八五七)

故權中納言經忠卿孫、入道前右京大夫信輔朝臣四男。母故伯耆守橘家光朝臣女。久安四正月七叙爵(氏爵、本名實輔)仁平三年三月一院昇殿。保元二——昇殿。永曆元年二月廿八日右兵衛佐。應保元正月五日從五上。同二年正月十日正五下(行幸院賞、院御給)同四月七備中守(廿六)永萬元正五從四位下(佐勞)仁安元六月廿二右馬頭(止守)同二正月五日從四上(鳥羽院大治二年未給)同三年正月六日正四位下(春日行幸院賞、院御給)同八月十二日伊與守(院分)嘉應二年十二月卅日兼內藏頭。安元二、十二月五日任大貳。同八日下名。賜內藏頭、右馬頭兼字。去守。同三正月廿四日以男散位從五上定輔申任右馬頭。同日叙從三位(拔出叙位次)太宰大貳如元(年四十一)(治承二親信<sup>四</sup>太宰大貳、親房改名歟如何ト見エ已後、親信トアリ)治承三、十一月十七日解官。四年正月廿四日被聽朝參(去年十一月以後依勅勅止大貳也<sup>早</sup>)壽永二年正月五日叙正三位。八月十六日修理大夫、廿五日參議(四十七)同三年三月廿七日兼備前權守。十二月卅日復任(父)文治三年五月四日辭大夫。申任男左少將定輔。四年正月六日叙從二位。五年正月十八日兼美作權守。七月十日任權中納言。六年八月七日叙正二位(七條院入內賞)建久二年三月廿八日轉中納言。同八年七月八日出家。同十二日薨(六十一)

(二)平 經盛(一七八四—一八四三解官)

故正四上行刑部卿忠盛朝臣男、母皇后宮亮源信雅朝臣女。久安六年六月廿五日叙爵(前大宮康治元年未給)保元元九月十七日安藝守(兄清盛朝臣申任之)壬九月廿二日遷常陸介。同二年十月廿二日從五上(造淑景舍)同三、八月十日辭介。平

治元十二月廿七日伊賀守(勳功)永曆元年四月三日正五位下(皇嘉門院御給)同七日兼大宮權大進。八月十四日從四下(上西門院御給)應保元年九月十五日左馬權頭。十月八日從四位上(自東三條遷御高倉第賞)同十九日若狹守、權頭如元。同二年七月十七日轉大宮亮、權頭守如元。長寬元年十二月廿日正四下(上西門院未給)永萬元十二(元十廿一)以左馬權頭、讓男經正。同二月十二日重任。仁安三年八月十二日內藏頭、亮守如元。嘉應二年正月十八日守秩滿、猶子經光申任之。同十二月卅日叙從三位。太皇太后宮亮如元、元內藏頭。三年正月十八日讚岐權守。安元二年二月五日止大宮亮。三年正月廿四日正三位(拔出叙位次)治承二年正月廿八日任大宮權大夫。同三年十一月十七兼修理大夫。五年十二月四日任參議(五十八)大皇太后宮權大夫、修理大夫如元。養和二年三月八日兼備中權守(五十九)壽永二年八月六日解官(大宮權大夫、修理大夫、備中權守)依赴西國也。

(二)藤原兼光(一八〇五—一八五六)

入道民部卿資長卿男、母木工頭源季兼女。保元元年八月廿七日給勸學院學問料(年十二)三年四月九日補文章得業生。同四年正月廿七(廿九)日但馬掾。永曆元年正月廿日猷策(次序師友、分別綾羅)問文章博士長光朝臣、廿一日判。及第。正月廿二日修理亮(前文章得業生、年十六)六月廿日右衛門少尉(元修理亮、藏人)七月廿七日蒙使宣旨。九月十五日從五位下。應保三年正月廿四日治部少輔(元散位)長寬二年十一月廿一日昇殿。永方二年正月十二日從五位上(策)仁安元年十二月二日兼東宮學士。二年正月廿八日正五下(朝觀行事賞)三年正月十一日兼備中權介(學士勞)二月十九日止學士(依踐祚也)三月十七日補藏人。嘉應二年正月十八日右少辨(藏人如元、无兼字。元治部少輔。備中權介、年廿五、先坊學士)承安二年二月廿三日轉左少辨(藏人)治承三年十月九日轉權右中辨。即從四下。廿一日兼造東大寺長官。十一月十七日轉右中辨。月日氏院別當。五年正月五日從四位上(仁安三年大嘗會國司賞)六月十五日造興福寺長官。養和元年十二月四日轉左中辨(長官如元)同日爲率分勾當並裝束使。二年三月八日兼近衛權介(裝束使)壽永元十一月廿三日正四下(大嘗會國司賞)二年七月三日補藏人頭。八月廿四日更補新帝藏人頭。十二月十日任參議(卅九)今日轉左大辨。同三年三月廿七兼遠江權守。七



月廿四叙從三位(去承安二松尾行幸行事賞)九月八日轉左大辨。元曆二年十二、廿四日勘解由長官(俊經出家替)文治二、(三月)日去氏院別當並寺長官、依長者令替也)十二月十五任權中納言(元第六參議)五年正月六日叙正三位。六年七月十八日兼右兵衛督(能保轉任左兵衛督替)建久二年十二月廿八日補檢非違使別當。四年四月十四日遷任左。十二月九日轉右衛門督。五年八月十一日去督別當等。六年三月十二日從二位(東大寺供養行事賞)十一月五日喪(父)七年三月廿日進辭狀、依腫物病也。四月十二日出家。廿三日薨(五十一歲)(五十二)

(二)源 雅賢(生時不明—一八五三)

入道前大納言資賢孫、故右少將通家朝臣男、母皇嘉門院雜任(真木屋)永曆元年十二月廿九日叙爵(前無品聰子內親王令爵)同日任上總介。應保二年六月十五日解官。永万二年八月廿四任土佐守(止家光任之)仁安二、八月十八日復任。同三年十一月廿日從五上(資賢卿大嘗會國司近江權守賞)同十二月十三日任右兵衛權佐(兼土佐守)嘉應二年七月廿六日任右少將(兼土佐守)同三年正月十三日正五位下(朝觀行幸賞院御給)同四月七日土左守(重任宣旨)同廿一日遷備中守( )承安三正月五日從四下(少將守如元)同五年正月廿二日備中守(重任)安元二年十二月五日從四位上(除目次)治承三年十一月十七日解官。同十八日出境外。同五年五月廿六日還任右少將。養和二年三月八日正四位下(臨時)同日轉右近中將(祖父資賢卿辭權大納言、申任之)壽永二年八月十六日播磨守(院分)同十月廿八日解官。同三年四月七日還任右中將。元曆二年六月十日補藏人頭。十二月廿九日任參議(平親宗朝臣解官替)文治二年二月卅日兼讚岐權守。三年十一月八日從三位(朝觀行幸賞)六年十一月廿四日辭退。建久四年三月十五日出家、本病之上依法皇御事也。九月日逝去。

(三)源 兼忠(生年不明—一八六九)

入道前權中納言正二位源雅賴卿二男、母正二位行中納言藤原家成卿女。長寬二年十月廿日叙爵(前美福門院保元元年未給)仁安三年十一月廿日從五位上(父卿大嘗會、國司、備中權守、賞)承安二年十月廿六日侍從(養父俊定讓)安元二年正月卅日備中權介。治承三年四月五日正五下(中宮去年御給)十一月十八日任右少辨(父權中納言雅賴辭職申任之)同四年六月廿

九日兼大和守。養和二年四月九日修理右宮城使。壽永二年十二月十日轉左少辨(大和守、无兼字)元曆元年九月十八日轉權右中辨。十一月七日任近江權介(修理右宮城使)同十七日從四下(大嘗會國司、越左少辨基親右少辨定長)文治元年十月十日兼近江守(兼權右中辨、元權介)十二月廿九日轉右中辨、同日補藏人頭(去守)二年四月六日叙從四上(上西門院去年御給)十二月十五日轉左中辨。三年九月十五日爲修理左宮城使。十二月四日叙正四下。四年十月十四日任參議。五年正月十八日兼加賀權守。六年十月九日復任(父入道中納言去八月逝去)建久二年十月九日復任(父喪也)四年十二月九日從三位。五年正月卅日兼周防權守。九年八月廿一日補大嘗會檢校(宗賴辭替)十一月九日備中權守。同廿一日正三位(大嘗會國司賞)建仁二、七月廿三日任權中納言。三年四月廿五日辭退。承元三年三月日薨(出家)

(三)藤原公時(一八一八—一八八〇)

故權大納言實國卿二男、母中納言藤原家成卿女。保元三年十二月十七日叙爵(御即位叙位、女御琮子給、本名公雅年二)仁平三年三月十一日叙從五上(天皇自攝政閑院第遷幸內裡、本家賞、改名公輔)嘉應二年七月廿六日侍從(十五人例始之)承安三年正月十三日叙正五位下(朝觀行幸賞、建春門院御給)同十一月二日復任侍從(服解母)安元元年正月廿二日兼備中權介。同十二月八日任右近少將(元侍從御賀舞人賞、近衛次將及廿八人例)同二年正月卅日兼備中權介。同三年正月廿四日從四下(右少將勞、拔出叙位)養和元年正月五日從四上(臨時)三月廿六日兼備中權介。壽永二年二月十日復任(右少將、備中權介、父中陰內)同廿一日叙正四位下(朝觀行幸次臨時、父服五旬中叙之)同十二月廿一日任左近權中將。文治元年正月廿日兼伊與介。四年十月十四日藏人頭。五年七月十一日任。右中將如元、元藏人頭、月日從三位。六年正月廿四日兼備前權守。建久四年十一月十一日正三位(日吉行幸行事賞)建久六年二月二日兼近江權守。四月七日辭參議并中將。以子息侍從實宣申任左少將。九年十一月廿一日從二位(大嘗會國司賞)承元三年八月十九日出家。承久二年四月廿三日薨(六十四)

(三)藤原公繼(一八三五—一八八七)

前左大臣三男、母上西門院女房。壽永二年十二月十三日叙爵(上西門院令爵、本名字公嗣。九)同十九日任侍從。同三



年正月六日叙從五上(上西門院、治承四年御給)文治二年正月五日正五位下(皇后宮當年御給)同三年正月廿三日兼備前介(侍從兼國)同日任右近衛權少將(年十三、改名字公繼)二月廿六日(十六)聽禁色。同四年三月廿二日從四下(臨時)同五年七月十日從四位上。同十二月十三日任右近中將。六年七月十七日任參議(十六)(左大臣辭職申任之)同十八日右中將如元十月廿六日叙正四位下。建久二年二月一日備中權守(十七)十二月廿日從三位。壬十二月十七日服解(父)六年四月七日叙正三位(東大寺供養行事賞)十一月十一(十二)日兼中宮大夫。七年正月廿二日兼伊與權守。九年正月卅日任權中納言。三月十四日帶劍。十年正月五日從二位(去建長七年石清水、賀茂兩社行幸賞)正治二年正月廿二日兼左衛門督爲檢別當。六月廿五日辭(解)督別當(止衆徒訴)建仁二年正月廿七日叙正二位(承明門院初入內)十月廿九日兼春宮權大夫。壬十月廿日轉中納言、春宮權大夫。三年八月廿一日更兼右衛門督、補檢別當、十月廿(十)四日復任(母)同日轉左衛門督。十一月廿三日辭督并別當。四年正月十三日任權大納言。元久三年三月廿八日轉大納言。四月三日兼春宮大夫。建永二年四月十日兼右近衛大將。承元三年四月十日任內大臣。四年正月十二(十四)日辭大將。五年十月四日轉右大臣。建曆三年壬九月十六日上表。十二月廿七日返給表。建保三年十月九日上表(頻辭退、勅許之)承久三年壬十月十日更任本官(右大臣)貞應三年十月廿二日爲一上。十二月廿五日轉左大臣。元仁二年正月五日叙從一位。嘉祿三年正月廿三日依病上表、卅日薨(年五十三)往生人云云。號野宮左大臣。

(三) 藤原兼宗 (一八二三一—一九〇二)

故入道前內大臣忠親公一男、母故權右中辨藤原光房女。仁安二年正月五日叙爵(皇太后宮當年御給)嘉應三年四月七日侍從。承安二年正月五日從五上(殿上簡二)安元二年正月卅日兼阿波介。三年正月廿四日正五下(臨時)治承三年正月廿九日任左近少將(父卿辭右衛門督申任之)同四年正月廿八日兼伊與權介。壽永元年十一月廿三日從四下(府勞、少將、如元)同三年正月六日從四上(勞)文治二年二月卅日兼播磨權介。同三年十二月四日遷任右近權中將(超少將上薦四人)同四年十月十六日遷左中將。同十二月十九日正四下(內大臣亭法皇御幸賞、亭主讓叙之)同六年正月廿四日兼備中權介(廿八)建久四

年十二月九日補藏人頭。同六年二月二日兼美濃介。同三月十二日服解(父)同五月四日復任。同七月十六日任參議(卅三)八年正月卅日兼加賀權守。同日從三位。九年九月十二日補大嘗會御禊次第司御後長官。十年十一月廿七日叙正三位(行幸院司賞)正治二年三月六日任權中納言。三年正月六(七)日叙從二位(加叙)四月五日勅授帶劍。建仁四年正月五日叙正二位(臨時)元久二年十一月廿四日任權大納言。承元五年九月廿日辭退。十月四日還任。建保六年正月十三日辭退。以男忠定申任參議。嘉祿二、三月十日許本座。安貞二年十月日寔勝講出仕。三年正月卅日任按察使。文曆二年十月八日辭按察賜大隅國。仁治三年九月三日薨(年八十)號中山。

(三) 藤原宗賴 (一八一四—一八六三)

故入道權大納言光賴卿四男、母同光雅卿。長寬十年廿六日叙爵(八條院令爵、十一)仁安二年八月一日任三川守(兄光雅今日補五位藏人替)同三年十一月廿日從五上(大嘗會、新院御給)同四年正月十一日任伯耆守。嘉應三年正月六日正五下(春日御幸行事賞、參議成賴卿賞讓叙之)承安二年正月廿二日(廿六)得替。同二月十日中午權大進(册命日)同四月廿三日兼勸解由次官(平親宗今日任右少辨替)治承四年正月廿四日轉大進。養和元年十一月廿五日止大進(依院號也)同二年三月八日從四下(去次官)壽永二正月五日從四位上(臨時)元曆二年正月廿日正四位下(治國賞)文治元年十二月廿九日任大藏卿(高階泰經停任替)同三年正月廿三日兼備中權守(卿勞)(卅四)同五年七月十日補藏人頭(藤定長任參議替)建久元四月廿八兼中宮亮(册命日)同四年正月廿九日任右大辨(不經中少辨)同五年正月卅日兼越前權守(亮勞)六年七月十六日叙從三位。十一月十二日去亮十二月九日任參議(四十二)七年二月一日爲造東大寺長官、越前權守。九年正月卅日兼讚岐權守。四月廿二(廿三)日補大嘗會檢校。十二月九日任權中納言。十年正月五日叙正三位(臨時)六月廿二(廿三)日兼左衛門督、爲檢別當。十一月廿七日叙從二位(行幸賞院別當)十二月十六日爲守成親王勅別當。正治二年正月廿二日辭別當、督。四月一日兼大宰權帥。同十五日兼春宮權大夫。六月十日勅授。正治三、三月十一日(廿一、十五)日辭權帥。以猶子皇后宮、權大進顯俊申任出雲守。建仁二年七月廿三日任權大納言。十月廿九止權大夫。壬十月養父成賴卿薨。不服解着服。先年光賴公



薨時又爲孫不着服。三年正月廿一日出家廿九(卅)日薨、年五十。

(三) 藤原公國(一八二三—一八七八)

故正二位行權大納言藤實家卿一男、母藏人頭刑部藤憲方朝臣女。安元元年十一月八日叙從五位下(皇后宮令爵)安元以下作仁安二二一五位(禎子內親王令爵)同二年正月卅日任侍從(十四)治承二年正月五日叙從五位上(殷富門院當年御給)同四正廿八出雲介。壽永元年十一月廿三日叙正五位下(皇后宮當年御給)同二年八月廿五日任左近衛權少將。同三年三月廿七日兼任伊與權介。元曆二年正月六日叙從四下(少將如元)(十月廿四復任)文治四年三月廿二日叙從四上(府勞、臨時)同五年正月十八兼任備中(廿七)同年十一月十五日轉任權中將(廿七)建久二年正月七日叙正四下(臨時、廿九)同二月一日兼任近江權介。同四年三月十六日服解。同八年正月三十日兼任備中權介(卅五)同九年新帝昇殿。同年十一月十四日補藏人頭。十年十二月九日任參議(卅七)同廿九日更任左近權中將。正治二年正月廿二日兼讚岐權守。三年正月六日叙從三位(建久九年大嘗會國司賞)建仁三年正月五日叙正三位。四年二月十三日任播磨權守。四月十二日任權中納言。勅授帶劔。元久三年正月十七日叙從二位。承元二年正月五日叙正二位(右大將藤朝臣、元久元年八幡加茂行幸行事實讓之)三年四月十日轉中納言。同四年十二月十七日辭、以男實重申任左近少將。建保六九月五日出家。十日薨、年五十六。

(三) 源 通具(一八三一—一八八七)

內大臣源通親次男、母修理大夫通盛女。母高倉院女房尾張(伊勢國人)元曆元年十一月十七日叙爵(大嘗會)文治元年十二月廿九日任因幡守。建久元正月廿四重任。同二年正月五日叙從五位上(觀子內親王給)同四年十二月九日兼右近權少將(廿三、父卿辭左衛門督申任之)同五年正月卅日延任一年。十月廿三日叙正五位下(造與福寺國司賞)(即日止位記)同六年二月(十二)月二日止守。同八年正月五(六)日叙從四下(祖父內大臣仁安三年朝觀行幸賞)六月十三(十二)日兼伊與權守。同九年十二月九(十三)日遷權右中辨(守如元)正治元年十一月廿七日叙從四位上(父內大臣院司賞)同二年三月六日遷左近衛權中將。同日補藏人頭。四月十五日春宮昇殿。十二月廿九日叙正四下。正治三年八月十九日任參議(卅一)建仁二年正月

廿一日兼備中權守(卅二)十月廿一服解。廿九日叙從三位。壬十月廿四日復任(父)建仁三年十一月廿三日兼右衛門督。爲檢別當。十二月廿日叙正三位。元久二年四月十日任權中納言。三年二月日辭督別當。四月三日叙從二位。五月十七日勅授帶劔。承元二年十二月九日叙正二位。四年正月十七日兼中宮權大夫。三月十九日止之(依院號也)五年十月四日轉中納言。建曆二年六月廿九日任權大納言。承久三年八月廿一日爲獎學院別當。四年八月十三日轉大納言。嘉祿三年九月二日薨、年五十七歲、號堀川大納言。詩歌。

(三) 藤原教成(一八三七—一八九九)

皇后宮大夫實教卿猶子。實相模守平業房子、母從二位高階榮子(宣陽門院母儀)文治三年正月廿八日叙位。即任中務少輔(今日元服)同四年正月廿三日叙從五位上。任右兵衛佐。五年正月五日(七)叙正四下。建久二年十一月五日左近少將。同三年正月五(七)日叙從四下(少將如元)同廿七(廿一)日兼備前介。同五年正月廿(廿八)日辭少將。同七年正月五(六)日叙從四上(宣陽門院御給)同八年十月一(十)日還任少將。同九年正月十一日聽新帝昇殿。卅日兼備中(廿四)十一月廿一(十二)日叙正四下(大嘗會國司賞)正治二年四月廿四日聽春宮昇殿。三年正月廿九日轉少將。建仁二年正月廿一日任右兵衛督、同三年正月廿(十)三日遷左督。四年正月十三日(五)叙從三位。左兵衛督如元(卅)承元二年正月五(七)日叙正三位(宣陽門院御給)三年四月十日任參議(卅五)五年正月十八日爲使別當。九月八日任權中納言(去督別當)建曆二年正月五日叙從二位(宣陽門院)建保二年正月十三日辭退。三年四月十二日正二位。四年二月廿二(廿一)日服解(母)七年十月九日聽本座。三年七月廿日恐懼、十月許出仕。嘉祿三年四月三日服解(父)曆仁二年四月十三日子刻頓死、年六十三。

(三) 藤原仲經(一八二七—一八九六)

故中納言正二位藤親信卿二男、母同定輔卿(女力)承安四年正月五日叙爵(氏)壽永元年十月七日叙從五位上。同二年正月廿二日任右兵衛權佐。元曆元年七月廿四(廿七)日叙正五位下(臨時)文治三年正月五日叙從四下。同四年十月十四任備前守。建久元年正月廿四叙從四上。同二年壬十二月四日遷丹後守。同三年正月廿七止任。同六年正月五日叙正四下(七



條院御給)同七年十二月廿五(廿四)日任伯耆守。同八年九月廿日復任(父)正治元年正月廿日任內藏頭(守如元)六月廿三日辭守。以濟基申任之。同三年正月六日叙從三位。建仁四年正月五日叙正三位(院御給)元久二年正月廿九日任修理大夫。四月十日任參議(卅九)同三年正月十三兼備中權守(四十)承元二年七月九日辭大夫、任越中守。四年十二月十七日任權中納言。五年三月廿三日從二位。九月八日辭職。叙正二位。建保七年十一月廿四(十二月)聽本座。承久二年六月十五日出家(五十四)嘉禎二年十二月廿七日薨、年七十歲。

(三)藤原高通(一八三〇—一八八二)

入道左京大夫(從三位)清通卿一男、母前大納言藤公通卿女(皇后宮育子女房坊門)承安元年正月六日叙位(九條院御給)養和元年十一月廿八日叙從五位上(皇嘉門院未給)壽永二年十二月廿一日任侍從(父讓)文治三年正月五(七)日叙正五位下(祖父太政大臣久安五年松尾北野行幸行賞)同廿三日兼出雲介。同四年十月十四日任左近少將(父清通卿辭左京大夫申任之)同五年正月十八日兼備中權介(廿一)建久元正月五日叙從四位下(少將如元)同五年正月卅日兼備中(廿六)同六年正月六日叙從四位上。同九年十一月廿一(廿六)日叙正四位下(加叙)正治元十二月九日轉權中將。同二年正月廿五(廿二)日兼美作介。元久二年正月廿九日兼備後介。承元元年十月廿九日補藏人頭。同二年七月九日叙從三位、任侍從(四十)四年正月六日叙正三位(修明門院御給)建曆二年正月十三日安藝權守。建保五年六月廿九日從二位(修明門院當年御給)去侍從。承久四年二月八日出家(中風)八月十六日薨、年五十三。

(三)藤原資賴(一八〇八—一八七三出家)

故參議賴定卿(一)男、母長寬元年正月廿四日叙位任丹後(波)守。永萬元年六月廿四日任伊與守。七月十八日遷越中守仁安元年八月廿七日止任。十月廿一(廿六)日備中守。同三年十一月廿一日(廿日)叙從五位上(大嘗會國司賞)嘉應二年正月十八日重任。承安元年四月廿一日任土佐守。十月昇殿。安元元除籍(不仕)壽永二年八月十六日更任土佐守。文治三年十一月八日叙正五位下(朝觀行幸、院司卅一)建久二年二月一日延任一ヶ年。十二月十三日叙從四位下(賴實卿、松尾北野行

幸行事賞讓)同四年五月廿九日兼齋宮頭(五正卅得替。建仁三年四月廿五信乃守)元久元年三月六日任皇太后宮權大夫。建永元年正月六日叙從四位上(宜秋門院御給)承元元年正月五日叙正四位下(中宮御給、六十二)承元四年正月五日叙從三位(六十四)建曆三年十一月日出家(年六十六)

(三)藤原家良(一八五二—一九二四)

前大納言忠良卿二男、母入道大納言定能卿女。正治二年四月三日叙位。建仁元年正月廿九侍從。同二年正月五日從五位上(十一、十八禁色)同三年十月廿九正五下。元久元年四月十二日左(右)少將。同二月廿九日兼越前權介。建永元正月五從四下(少將如元)同十三右中將。承元元年正月(二從四上)(三年正月)十三兼甲斐權介(四月十日中將)同三(一)十二月九日正四下。承元五正月五日叙從三位。右中將如元(外祖父定能卿、東大寺供養行事賞)元右中將如元由無其沙汰不去也)建曆三年正月十三日兼備中權守(廿二)建保二正月三日正三位(朝觀行幸賞)七年十二月十七日從二位。承久四年正月六日叙正二位(院御給)貞應三年十二月廿五日任中納言(不經權)元仁二年三月八日勅授。正月十六日服解(父)嘉祿三年四月九日任權大納言。嘉禎三年十二月廿五日轉大納言。延應二年十月九日兼宣旨、同廿日任內大臣。仁治二年四月五日上表。辭任。弘長四年九月十日薨、年七十三。

(三)藤原公氏(一八四二—一八九七)

入道左大臣實房三男、母同公房卿。建久二正五叙位(女御琮子當年)建久三年十月廿六左兵衛佐。同六正六(五)從五位上(勞)正治元正五正五下(勞)正治二正廿二(右少將)建仁元正廿九周防權介。十二月廿二從四下(少將如元)同三(一)正五從四位上(臨時)十月三(十月三)又作十三日)轉中將。元久元年十一月一正四位下。同二正廿九播磨權介。承元三年正月十三日越前權介。同四年十二月十七日藏人頭。五年十月二日(十二力)任參議(卅)建曆二年正月十三土左權守。十二月廿(卅)日從三位。建保五正月六正三位。正月廿八日兼備中權守(卅六)承久二正月廿二日任權中納言。三年十二月十二日從二位(承久元稻荷祇園行幸行事賞)四年七月廿九日勅授帶劔。貞應二年二月廿五日中宮權大夫。十二月十七日正二位。元仁二



年十一(五)月日辭中宮權大夫、七月六日更任大夫。八月十七服解(父)十二月廿二日復任。嘉祿二年七月廿九日皇后宮大夫(本宮轉)三年二月廿日止大夫(院號)四月九日任權大納言。寬喜三年三月廿五日任權大納言。十月十二日辭退(實停任)嘉禎三年九月十五日薨、年五十六。號三條大納言。

(三) 藤原國通(一八三六一一九一九)

故入道按察使泰通卿二男、母高倉院女房新中納言(中務少輔敦良朝臣女)壽永二年正月五日從五下(氏)建久五正卅侍從同六年十二月九日從五上(鳥羽院仁平三御給)同九正卅兼阿波介。正治三正卅三正五下(七條院新給)建仁元十二月廿二日右少將。同二十廿一(廿)日備中權介(廿七)同十一月十九日從四下。同廿二日右少將如元。元久二正五從四上(權大納言兼良東大寺供養行事賞讓)同三正卅三正四下(故大納言師賴卿寬治八興福寺北圓堂供養行事賞讓)建永二正月十三美乃介重兼國、同日左中將(承元四年九月卅日服解)建曆元閏正月復任。建保二正卅三藏人頭。同十八日聽禁色。六年正月十三任參議(四十三)七年正月五日從三位(臨時)正月廿二日美乃權守。十二月廿四日服解(母)承久二、九月十五復任(母)美濃權守。四年八月十六日正三位。元仁二年正月廿三日播磨權守。七月六日任權中納言。嘉祿三年十二月十日勅授。安貞二年二月七日從二位。寬喜三、四月廿六日轉中納言。四年正月卅日辭退讓實有卿。八月廿六日出家。正元元年四月日薨、年八十四。

(三) 藤原伊時(一八三八—一八九七)

入道右兵衛督(作止三位)伊輔卿二(一)男、母法勝寺執行章女法印女。養和二、三、八從五下。文治三、十二月四侍從(十)同六年正廿六從五上(十三)建久二年二月一日兼伊與介。同六年十二月十日正五下(高松院永萬元御給)建仁二正月廿一右少將(父卿辭右兵衛督申任之)同八月十三日遷左少將。同三正三(五)從四下。同十三備中(廿五)元久二正五從四上(七條院當年御給)承元元十月廿九左中將。同二年正廿日讚岐介同三正月五正四下(殷富門院建仁二朔旦御給)建曆元十月十七日(七)美乃守兼(院分)同二、十二月十止守。建保六正月十三藏人頭(四十一)同三月日服解(父、母)同五月十八日復

任。建保七正月廿二叙從三位(四十二)承久三(恐懼、十月廿三日免出仕)嘉祿三、十一月日依病出家。嘉禎三年四月日薨年六十。

(三) 藤原信能(生年不明—一八八一)

故入道前中納言能保卿二男、母江口遊女(慈氏)建久四正月廿六日叙爵(太皇太后宮文治二御給)同六三(一)三侍從。同七年正六從五上(七條院當年御給)同八年十二月十五日復任(父)正治元三月廿三日遠江介。元久二、年四月廿左少將。同十二月六日正五下。建永元正十三備後權介。同二年正月五日從四位下。承元四年正月十四日從四上(殷富門院當年御給)建曆元正月十八日美乃介。同日左中將。閏正月廿八日中宮權亮。同八月十六日解官。同十二月還任。建保元十二月十四日播磨守。同二年正月五日正四下(中宮御給)同七年正月廿二日藏人頭。承久二年正月廿二日任參議( )三年正月七日從三位(花山左大臣兼雅治承三年八幡賀茂行幸)同十三日備中權守。六月廿四日武士申請。八月十四日於美濃國就斬(六月以下諸本作七月日被誅今從)

(三) 源 雅清(一八四二—一八九〇)

故大納言通資卿二男、母同雅親卿。年月日從五下。建久七、三、廿侍從。同八正(九)六(四)從五上(八條院當年御給)正治二年正月廿二備中權介(年十九)同三正月六日正五下(八條院當年御給)同廿九日備後守兼。建仁二年正月廿一右少將同三年正月十三近江介。元久元年正月五日從四下(未公文備後)同日叙留(右少將)同(一)八月十六日復任(父)承元二年十月十日服解。母、十二月廿八復任。同三年正月十三從四上。同十月卅(廿)日右中將。同四正十三能登介。建曆三、四月廿六日(廿五)正四下(法勝寺九重塔供養、院御給)建保三正(五)十三播磨權介。承久二年正月廿二日藏人頭。三年四月十六日任參議(四十)十一月十六日從三位(臨時朔旦叙位)四年正月廿四備中權守(四十一)十月廿四日轉左中將。十一月廿二日正三位(主基)貞應三年十二月八日出家。寬喜二年四月二日薨、年四十九。

(三) 藤原成實(一八五一—一九一六出家)



故正三位太宰大貳親實卿一男、母建仁三年十月廿四日五位(皇太后宮)元久二年正月五日從五位上(父治國)承久元年十月廿九日右兵衛佐。同三年正月十七日正五位下。建曆元十二月卅日復任(父)建保元年正月六日四位(勞)承久正廿六從四位上五月三日丹後守。八月四日遷備中守(卅九)同九月廿日兼左馬權頭。同三年正月十三正四下(止權頭)嘉祿二年正月廿三宮內卿。四月十九叙從三位(卅八)安貞三年十月五正三位(臨時)同九日任大貳(下名)寬喜三年三月廿五日遷兼兵部卿。四月十四日辭大貳。以舍弟右少將親氏兼因幡守。嘉祿二年七月廿日辭卿。以男成基任侍從。建長六年三月八日叙從二位。八年九月十九日出家。年六十六。

(三)源 師季(一八四五—一九〇〇)(五十六以後不見)

大納言定房卿孫、入道左少將定忠一男。母大納言定能卿女。建久七年正月六日叙爵(八條院、臨時、內給)正治元十二月九日侍從。建仁三年四月廿五近江守。十月廿四止守。同日從五位上。元久二正廿右少將。十月——解任。承久三年四月十四還任右少將。建曆元正月十四兼備中權介(廿四)(府勞)同二年四月九日正五下。建保二年正月五日從四位下。同五月廿八日左少將。同六月十三日兼播磨介(府勞)承久元正月五日從四位上(宣陽門院御給)同廿二日轉中將。同三年正月十三日正四下(臨時)嘉祿元正廿三兼美作守(府勞)寬喜四年正月卅日叙從三位(四十五)嘉祿二年二月卅日侍從。四年十一月廿三日正三位。延應二年正月廿二周防權守(五十六)

(三)菅原淳高(一八三六—一九一〇)

從二位在高卿一男。母、壽永元十二月廿六文章生(六歲)文治四正月廿三日越前大掾。同六——補今宮侍者。建久六年五月廿七穀倉院學問料(廿)同九年三月十二藏人。六月八日文章得業生。正治元年正月三日獻策。同五日叙爵(藏人)三月廿三日尾張權守。建仁元丹後守(範光讓)同三年正月十三日得替解任。元久二正五從五位上(策)承元二年十月廿七院昇殿。同五年正月五日正五下(策)同十八日式部少輔。建曆二正十三兼下總權守。二月二新院昇殿。建保二正月五從四位下(策)同四年正月十九日治部大輔。同六年正月五日從四位上(權中納言親經卿與福寺供養行事賞讓)十二月十二日豐前守(治國勞)

承久元正廿六正四位下。四月廿八日文章博士。同二年正月廿二兼越中權介。同三年十一月——院昇殿。貞應二年正月——御侍讀。元仁二年四月廿六日兼左京權大夫。十二月廿二遷刑部卿(父卿罷兵部卿)寬喜三年正月廿九日兼備中(介)五十六(歟)三月廿五改任。出雲權守。十月廿八日兼東宮學士。天福元七月五日復任(父)寬喜四年二月廿七日叙從三位(五十七)(父喪內未復)刑部卿、東宮學士、出雲權守如元。十二月四日止學士(受禪)嘉祿二年六月十三日叙正三位。曆仁二年正月廿四日安藝權守。十一月六日從二位。仁治三年三月七日辭權大輔、以男在章申任修理權大夫。寬元四年四月十日兼式部大輔。寶治三年四月十八日服解(母)十二月十三日復任。建長二年五月廿四日逝去、年七十五。

(四)平 有親(一八五三—一九二一)

故從三位親國卿二男、母入道太宰權帥光隆卿女。建仁元正月六日叙位(女御琮子御給)十二月廿二日皇后宮少進。同二年四月十五日轉權大進。同三年十二月廿八日復任。建保三年四月十一中宮權大進。同四年正月五日從五位上(簡一)三月廿八日辭權大進。承久三、八月廿九勸次官。閏十月——藏人。貞應元年四月十三日正五下。同三正廿三但馬介(次官勞)嘉祿元七月六日右少辨。十二月日權右中辨。同二年正月五日從四位下。同三年十月四日左中辨。十二月廿五日從四位上。安貞二年二月一日武藏介(裝束使勞)同七日左宮城使。寬喜二年二月廿三日正四下。同三年三月廿五日遷內藏頭補藏人頭。十月廿八日兼春宮亮。四年十二月十五日任參議(卅九)元藏人頭內藏頭、本名知親。貞永二年正月廿四日備中權守(四十)十二月十五叙從三位。文曆二年十一月十九叙正三位。曆仁元年正月廿二日備中權守。閏二月廿七日辭職。以男右衛門佐時繼申補五位藏人。六月廿日從二位。延應二年六月十四日出家、法名眞淨。文應二正月四日薨、年六十九。

(四)藤原實持(一八四九—一九一六)

故民部卿公定卿一男、母權大納言藤原成親卿女(典侍)建久九年二月廿六日叙爵(女御琮子給)建仁三年三月二日侍從。建永二年正月十三日土佐權介。承元元年十二月十三日右少將。同三年正月五日從五位上(府勞)貞應二年正月六日從五位下(皇后御給)廿七日備中權介(卅五)元仁二年二月五日從四位下(府勞)廿三日還任少將。寬喜二年正月五日從四位上。同



廿四日左中將。同三年正月廿九日兼播磨權介。貞永元年十二月二日正四位下。天福二年十二月廿一日叙從三位(四十六)元左中將。今日任皇后宮權大夫。嘉禎二年六月九日任參議(四十八)三年正月五日正三位。廿四日備中權守(四十九)同廿九兼左中將。四年七月廿日任權中納言。九月日勅授。曆仁二年五月五日從二位。延應二年十月廿日轉中納言。同廿四日右衛門督。別當。仁治二年十月十七日正二位。九月廿四日止督別當。依山門訴也。十月十三日任權大納言。三年三月七日辭。四年四月廿一日本座。建長五年九月十二日出家。八年五月八(五)日逝。年六十八。

(四三) 藤原隆綱(一八四九—一九一三出家)

入道按察使隆衡卿一男。母、元久二年六月十二日叙爵(去壽永二氏)承元四年三月十九信乃守。建曆二年正月六從五位上(新院御給)同十三日得替。建保四年十月(十二)廿八日民部少甫。承久元年正月五日正五位下(承明門院御給)同二年正月十六日阿波權守。貞應元四月十三日從四位下。嘉祿元年四月廿日從四位上。寬喜元七月十三日內藏頭。同三年二月十九日正四位下。同三月廿日宮內卿。去頭。貞永元年正月廿日去卿。同八月廿一日備中守(四十四)同二年四月八日得替。天福元年十二月十五日治部卿。嘉禎元年正月廿三日叙從三位(四十七)今日去治部卿。同四年二月十七日正三位。仁治四年月日從二位。建長元年六月十四日任右京大夫。五年正(二)月十三日止右京大夫。讓任男隆賴。二月日出家(年六十五)

(四四) 藤原隆盛(一八七一—一九一一)

入道按察使隆衡卿三男。母入道內大臣信清公女。建曆三年正月六日叙爵(肅子內親王給)承久元年十月三日侍從(于時隆宣)同三年十一月廿九日從五位上(于時隆成)貞應二年正月六日正五位下(北白川院御給)同廿六日備前介。嘉祿二年正月廿三日左少將。同三年正月五日從四位下(臨時、少將如元)同廿六日備中權介(十七)六月廿六日進意狀(去十九日行幸、還御、不供奉)故也)八月二日返給意狀。寬喜元年四月十八日還任右少將。同三年正月六日從四位上。同四年正月廿九日越前介(少將重兼國)貞永二年正月廿七日任美乃守。天福二年正月廿八日正四位下(今日守得替)文曆二年九月十日內藏頭。嘉禎二年十二月十八日叙從三位(廿六)建長三年八月十三日薨。年四十一。

(四五) 藤原親季(一八六一—一九一二出家)

故入道正二位定季卿男(實故大膳大夫家綱朝臣男)母、建保四年七月廿五叙爵(肅子內親王給)承久三年十月十八日侍從。貞應二年正月六日從五位上(東一條院給)元仁二年正月廿三日信乃權介。嘉祿三年正月廿六日左馬頭。安貞三年正月十八日正五位下(東一條院承久三御即位未給)寬喜二年正月廿三士左權介。閏二月八日右少將。三月廿日轉、左。同三年正月五日從四位下。同廿九日更左少將。十月十二日兼備中守(卅一)貞永元八、廿一得替。天福元年四月十九日從四位上(漢壁門院入內院司賞)文曆二年正月廿三日復任(養父定季卿逝去年)八月卅日播磨守。嘉禎元年九月廿五日右中將(播磨守如元)同二年二月卅日正四位下。同三(或四歟)正月廿九日得替。同閏二月(三月職補)廿七日補藏人頭。同廿九日禁色。四年四月十八日任參議(卅八)七月廿日從三位。曆仁二年正月廿四讚岐權守。九月九日正三位。仁治二年二月一日任權中納言。三年三月七日辭。叙從二位。建長四年二月廿二日出家。年五十二。

(四六) 藤原兼高(生年月不明—一八九九)

故權中納言長方卿四男。母、江口遊女、木姬(隱岐守師高朝臣女)建久五年正月廿二叙爵(太皇太后宮建久三未給)同九年四月廿從五位上(皇后宮御入內賞)建仁四年正月五日正五位下(皇后宮御給)承元二年十二月九宮內權大輔。同四年七月廿一轉大輔。同五年正月廿二中宮大進。建保二年十二月廿九於殿上與勸解由次官宗宣有鬪諍事。同卅日配流土佐國。依打宗宣之科也。寬喜元十二月廿九日復本位。同三年三月廿五日更任宮內權大輔。補藏人。同廿八日禁色。十月卅日兼中宮大進。貞永元年十二月四日更補藏人(受禪日)文曆元年十二月廿二日權右少辨。同二年六月十七日左少辨。八月廿日從四位下。嘉禎二年二月卅日權右中辨。同十二月十八日從四位上。同十九日辭權辨。以男勸解由次官顯嗣申補藏人。同三年九月十五日正四位下。同十月廿七日叙從三位。同四年四月廿日正三位。七月廿日任參議。曆仁二年正月廿四日備中權守。十一月六日薨(中風)

(四七) 藤原實蔭(一八五九—一九〇一)



故前大納言公氏卿一男。母、按察使泰通卿女。年月日叙爵。建保三年二月十五日侍從。同七年正月廿二日遠江權介。承久三年八月廿九從五位上。十二月十二日右少將。貞應元年十一月廿二正五下(宣陽門院當年御給)元仁元年正月廿三從四下(府勞)嘉祿三年正月廿六日右中將。安貞二年正月五日從四上(安嘉門院當年御給)貞永元年正月五日正四位下(安嘉門院當年御給)同二年正月廿四日相模介。嘉禎四年正月廿二復任(父)同四月廿日藏人頭(服假中)延應元年正月廿四任參議(四十一)十月廿八日叙從三位。仁治元年正月廿日備中權守(四十二)同二年五月五日薨、年四十三。

(四)藤原定嗣(一八六八—一九一〇)

故按察使光親卿二男。母入道參議藤原定經女。建保二年七月十三日叙爵(于時光嗣)同五年十一月十三日俱馬守(于時高嗣)同六年正月十六日遷美乃守。安貞三年二月三日從五位上(皇嘉門院、康治元年未給)寬喜二年十月廿日中宮權大進。同三年四月十四日正五位下。天福二年正月廿一日得替。四月二日右衛門權佐。同十二月廿一日補藏人。嘉禎二年四月十四日左權佐。同三年正月廿四日右少辨。三年二月廿八日正五位上。今日去權佐。同四年二月廿七日左少辨。四月廿日權右中辨叙從四下。同七月廿日右(左)中辨。曆仁元年十二月廿五日從四上。延應元四月廿八正四下(行幸東山亭家司賞)仁治二、二月一轉左中辨。補藏人頭(于時改名定嗣)同十八日補修理左宮城使。同三年三月七日任參議(卅五)十一月四日備中權守。同十二月叙從三位(大嘗會國司賞)(年三十五)寬元四年四月十日兼大藏卿。五年十二月八日兼左兵衛督、補使別當。寶治二年七月十三日叙正三位。十月十九日任權中納言。建長二年正月十三日辭退。以男右衛門權佐、高雅申任右少辨聽本座八月十四日於葉室別業出家。法名定然、年四十三。

(四)藤原家時(一八五六—一九四二)

按察使保家卿二男。母、經仲卿女(同基保卿)建仁四年正月十三日叙爵。元久二年五月廿四日得替。承久元八月七日若狹守。同三年八月廿九日從五位上。貞應元年十二月廿一日右馬頭。同二月六日正五位下。嘉祿二年七月廿四從四位下、頭如元。安貞二年三月廿日從四位上(朝親行幸院司賞)寬喜四年正月七日正四位下(北白川院御給)嘉禎元年十月十七日叙

從三位。三年十月廿七日侍從。四年閏二月廿七日正三位。仁治二年二月一日備中權守(四十六)三年十一月四日止權守。

正元元年閏十月十三日叙從二位(按公卿補任。明年文應元年至弘安五年家時卒年爲正三位。要記之文可疑)弘安五、七月廿卒。薨(八十九)年八十七歲。

(四)平 時高(一八五六—一九一四)

故入道從三位治部卿親輔卿三男。母、故入道中納言藤實教卿女。承元三年六月日補藏人。九月十八叙爵(藏人)建保三年十二月十五日刑部權大輔(于時範實)同六年正月五日從五位上(于時紀時)貞應三年四月七日中宮權大進(于時時高)嘉祿二年正月五日正五下。廿三日轉大進。貞永二年四月八日備中守(卅八)嘉禎三年十二月廿八日皇后宮大進。同藏人。同四年閏二月廿七日右少辨。四月廿日左少辨。七月廿日權左中辨。同日從四位下。曆仁二年正月廿七日從四上。延應元年十月廿八日正四位下。仁治二年二月一日右中辨。十八日兼修理右宮城使。同三年三月七日左中辨。四月九藏人頭。寬元元年閏七月廿七日左宮城使。八月九日兼中宮亮、同三年正月十三兼美作權守。六月廿六日叙從三位(五十)建長元年四月七日叙正三位。六年正月五日叙從二位。三月廿六日卒、年五十九。

(五)平 惟忠(一八四七—一九二三)

故從三位親國卿男。母——叙爵。承久四年正月廿九從五位上(嘉陽門院當年御給)貞應元年八月廿八日少納言。嘉祿三年正月五日正五位下。寬喜元年九月五日齋宮寮頭。天福元年六月廿日皇后宮權大進。嘉禎二年十二月廿九日轉大進。同四年三月七日從四下。曆仁元十二月卅日備中守(五十二)同二年正月五日從四上(嘉陽門院、曆仁元年御給)仁治元年十月廿四日任修理權大夫。同二年正月五日正四下(式乾門院當年御給)同三年三月七日內藏頭。十二月廿五日兼攝津守。寬元四年二月廿三日遷任太宰大貳。同十一月廿三日叙從三位(院御給)(年六十)建長三年正月廿二日任參議(六十五)四年十二月四日辭之、以男親繼申任左衛門權佐(正三位)六年正月五日任從二位。八月九日大藏卿。正嘉元年九月八日叙正二位。弘長三年正月廿一日薨、年七十七。